

ppm

長編推理小説　書下ろし

目撃

ある愛のはじまり

夏樹静子

KOBUNSHA

人はだれも、何らかの秘密を抱えて生きている。その人が、ある日突然、殺人事件の目撃者の立場に置かれたとしたら？——目撃者として名乗り出れば、自分の抜きさしならぬ秘密が暴露され、口をつぐんでいれば、純真な子どもの生命が危険に晒されるとしたら……あなたなら、どんな道を選ぶだろうか。私は、そうした限界状況に立って自らの愛を貫こうとする、一人の若い人妻の行動を通して、複雑非情な現代社会の中の、より人間らしい生き方を、追求してみたかった。

「著者のことば」

デザイン　伊藤憲治

長編推理小説・書下ろし

目撃（もくげき）

ある愛のはじまり

夏樹静子（なつきしずこ）



カッパ・ノベルス

目次

一章　善福寺池　5
二章　小さな証人　28
三章　仮の宿り　58
四章　サンガーデンの女　85
五章　脅迫者　123
六章　待つ恐怖　158
七章　二つの棺　187
八章　決断のとき　213
九章　再会　233
十章　港へ　253

本文のイラストレーション

澤田（さわだ）弘（ひろし）

一章　善福寺池

1

朝靄がうすくたちこめている桜並木の道路を一気に走りおり、まだひっそりとした家々の先に善福寺公園の入口の柵が見えたところで、久藤恭太はブレーキにかけていた指にグッと力をこめた。それで自転車のタイアは小気味のいい摩擦音を響かせながら、弧を描いて柵の間へすべりこんだ。

刺子の稽古着の衿元や袖口から、十月の朝の冷んやりとした風が流れこんで、汗ばんだ肌の表面をかすめていく。

公園の内部に入ると、少しうす暗い感じになった。一昨日から降り続いていた雨はようやく上がったらしいが、まだ空全体が白っぽい雨雲に被われている。恭太がここを通るのは、いつも六時二十分前後で、天気のいい日なら、もう朝陽が梢の上で光っているのだが。

公園内が外の道路より多少暗いのは、広い敷地の外周を囲んでいる杉や雑木の林が、高くて深いせいでもあった。この一帯は「風致地区」に指定されていて、やたらに木を伐ったり、家を建てたりはできないのだと、恭太もいつか社会の時間に聞いた憶えがある。

彼がさっきよりやや緩やかにペダルを踏んでいる右手には、善福寺池を縁取りしている低い植込みが続いていた。紅葉、柳、躑躅、紫陽花……かすかに黄ばんだ葉の間に、白い靄が漂っている。

細長い池の水面は、曇り空を映したように灰色がかった碧で、どんよりと静止していた。水際はたくさんの葦で埋まっている。と……葦の間から、早起きの鴨が一羽ゆっくりと泳ぎ出てきた。続いて二羽の子鴨が追ってくる。それを見ると恭太の唇が自然にほころび、彼は湿った空気の中に短い口笛を吹いた。

恭太はなおしばらく走り、やがて左側の雑木林が一部切れて、小さな崖と、細い道が岐れ出ている手前で、自転車を寄せて停めた。苔むした岩組みの奥で、上の谷川

から流れ落ちる細い滝が、ふだんよりだいぶ威勢のいい水音を響かせている。降り続いた雨で増水しているのだろう。

恭太は袴の裾をひっかけないように気をつけながら、自転車を降り、荷台にくくりつけてきた竹刀と、防具一式を入れたズダ袋を外した。小学三年生の彼は、毎週三回、登校前の六時半から約一時間、この上にある道場へ剣道の稽古に通っている。谷川と、蕪蔵寺という古いお寺の生垣に挟まれた道は、かなり急な上り坂なので、自転車はいつも下に置いていく。

竹刀と袋を右肩に担ぐと、彼は濡れた枯れ葉の上にズック靴を踏みしめながら、大股にのぼっていった。のぼるにつれて谷川は深くなり、水音が下の方から響いてくる。空が少しずつ輝きを増してきている。恭太の家は、こことは青梅街道を挟んだ北側の関町にあり、近所には道場に通っている友だちも二、三人いるのだが、彼らはたいていもう少し東の住宅街から早道を抜けてくるので、この道はいつも恭太一人だった。母親は何事につけ、友だちと行動を共にすることを奨励するが、彼はほとんど人気のない早朝の公園から谷川沿いの坂道を一人で通る気分がなんともいえず満足で、一度それを味わってからは、母親の忠告に従ったためしがなかった。

それと、彼にはこの坂道を好きな理由が、ひそかにもう一つあった。ここを歩くたびになぜか決まって、ありありと父を思い出すからだ。吉祥寺の小料理屋で板前をやっていた恭太の父親は、恭太が小学校へ入る直前に、母親と彼を残して家を出てしまったから、もう三年近く会っていない勘定になる。顔も今ではぼんやりとしか思い出すことができない。

それでいて、木の枝が庇みたいにのびているこの小径を通ると、ふと、汗と煙草と、それに何かおとなっぽい香料とが混じりあった父親の体臭が匂ってくるようにさえ感じられるのだ。いつかずっと昔の早い朝、こんな道を父に手を引かれて散歩したことがある、これだけは確かな記憶が残っているせいかもしれない。

お父さんはなぜ、どこかへ行ってしまったのだろう？

母のいうように、大事な仕事があって、しばらく遠くへ出かけているのだろうか。だが、それが嘘らしいことを、恭太は直感的に見抜いている。第一それなら、時々手紙ぐらいくれてもいいはずだ。

いつか近所のおばさんたちが、久藤さんのご主人は大阪の方で女の人といっしょに暮らしているらしいと噂し

ているのを小耳に挟んだことがある。——すると父は、その女の人と結婚したのだろうか……？

ふいに、恭太の思考から父親が消え、もっと身近な対象に、彼の丸い目が輝いた。右手の谷川へ切れこんでいる叢の途中に、白い球形のものがひっかかっている。恭太は思わず足をとめて、その方へ眸を凝らした。

やはりボールだった。それも小さな子供が遊ぶような代物ではなく、ギザギザが刻まれた上等の野球ボールらしい。暗い緑の中で光るほど白いのは、まだ新しい証拠だし、どこかが裂けているようでもない。誰かが誤って転がし、あんなところまで落ちてしまったので、あきらめて置いていったのではないだろうか。

確かに、問題はボールが落ちている位置であった。道路から一メートル半はある。そのまたかなり下に谷川が見え、濁った流れが底力のある水音を響かせている。しかもその斜面は相当な急勾配で、羊歯や笹の繁る間に、ところどころ濡れた土が露出していた。

だが、道とボールとの間に、ちょうど足場になるような大きめの石が一つ顔を出しているのに気がつくと、恭太の心から迷いが消えた。

彼は肩の道具を足許に置いた。それから、斜面に向かって腹這いになる恰好で、そっと、石の上に右足をかけた。続いて左足もおろした。

次に彼は、もう一度思いきり腰を落とし、右足を下げると、ズックの爪先にボールをすくい取った。その足を斜面に沿ってそろそろと持ちあげていった。

もう少しで右手がボールに届くと思った時、「あっ」と小さな叫びが恭太の口をついた。土手の一部にしっかりとはりついていたつもりの左手がズルッと滑り、身体が傾いだ拍子に、ボールは足から外れ、真っ直ぐに谷川の上に落ちた。迅い流れが、見る間にボールをさらっていく。

一瞬、恭太は泣きそうになった。が、すぐにその唇がひきしまった。泣いているどころではなかった。宙ぶらりんになった右足を足場の石に戻した途端、今度はその石がグラッと動いたのである。咄嗟に両手が笹をつかんだ。それから急いでもっと確かな足場を探ろうとした。ところが、ちょっと身体を動かすと、しなった笹は今にもちぎれかけ、ギザギザした葉で掌が切れそうになる。恭太は反射的に身動きをやめた。へたに動けば、そのまま谷川まで墜落する危険を感じとったからである。恭太の身体は、ぬるぬるした斜面に危うくへばりついている

恰好になった。
カッと頭に血がのぼるような狼狽の中で、ふと父親の面影が目の底を掠めた。彼のイメージにある父は、こんな時どこからかとび出してきて、逞しい腕で彼を救いあげてくれるはずなのだ。
（お父さん、早く来て……早く来てくれなきゃだめじゃないか！）
恭太の胸がそう叫んでいた。

××××

「愛しているよ」
「わかっているわ」
「離したくない……」
「私も、けっして――」
今しがた、別れ際、各務徹夫と交わした一語一語が、桂木麻子の胸の奥で、澄んだこだまのように反響していた。
思えば、これまでいくたび、そんな同じことばが二人の間で往復したことか。しかし、その先はない。互いの真情を、どれほど熱く受けとめていても、「だから――」という次の会話は生まれてこないのだ。代わりに、そのあとでは、ことばとは裏腹に、背を向けて別れていくしかない。相手の体温や体臭がうすれていく、身を切られるような寂しさに耐え、次にはいつ逢えるのか、その心許なさに頽れそうな足を踏みしめながら。
それが、互いに家庭や社会的立場を持つ男女の、宿命的な愛のかたちとは、痛いほど承知しているつもりなのだが……麻子は、各務と別れて一人で帰る道すがら、たいてい知らぬ間に歪んだ泣き顔をつくっている。
十月七日午前六時半――。
武蔵野台地が杉並区の西端にかかる丘陵の一帯には、都区内とはちょっと信じられないほど静かな、深い樹林に被われた区域がある。
そんな丘の中腹にある和風旅館芳鹿荘から、善福寺公園の中へくだっていく道には、両側から萩や雑草が生いしげっていて、朝露が麻子のストッキングの脚を濡らした。
左手の土手は意外に深い谷川へ切れこんでいるが、右側には野原がひろがり、靄がたちこめた先から湿った草の匂いをはらんだ風が流れてくる。心に屈託がなければ、さわやかな散歩道にちがいないのだが、今の麻子は、あと三十分後に同じこの道を各務の足が踏んでいくのだと

いう思いに、どうにか支えられていた。

群馬医科大学の助教授で、都内にも非常勤講師の勤めを持つ各務徹夫は、今朝は九時から大泉にある女子大で講義があり、そのためには遅くも七時半までには三鷹台の自宅へ帰る必要がある。すると七時には芳鹿荘を出なければならない。

麻子にしても、夫の桂木謙介が、昨日から会社の工場がある群馬県のE市へ出張して不在だったものの、今日は昼前に帰京する予定だから、丸の内の本社へ出る前に自宅へ立ち寄ったり、何か大事な電話がかかってこないとも限らない。この春ごろからE工場周辺の公害問題が紛争化しており、本社総務部次長と工場次長を兼任している桂木の身辺は、どこか不穏な緊張に包まれている。最近の頻繁なE市出張もそのためだった。——そんなふうだから、もとより麻子もゆっくりしていられる身体ではない。

「あとに残されるのは、いや。先に私を帰らせて」

麻子は各務にそういって、今朝は六時二十分に、短い一夜の宿を発ってきた。肩を並べて旅館に出入りするなど、とうてい許されない二人である。いやそれどころか、重い疲労を抱えて帰京するにちがいない夫が、もし麻子がその少し前まで別の男性と——それも人もあろうに群馬医大助教授の各務徹夫と二人だけの時間を過ごしていたと知ったら……！

想像しただけで、麻子はその事の重大さに目がくらむような気がする。いやこんなことになろうとは、夢にも思わなかったのだ。

とはいえ、では各務とめぐり遇わなければよかったかと思い返せば、衝動的に激しく首を横に振りたくなる麻子である。そんな相克が、いっそう胸の痛みを耐えがたいものにした。

空を被った雨雲を通して、うすい朝の光が滲み出しているが、麻子の視界は、こみあげてくる涙のために、すぐにぼんやりとかすんでしまうのだ。

仕方なく彼女は足をとめ、バッグからハンカチを取り出した。

と、草を踏みしめる足音が急に身近に聞こえ、黒っぽい背広を着た背の高い男が、ふいに道のすぐ先に姿を現わした。ふいにと麻子が感じたのは、野原が濃い朝靄に包まれていて遠見がきかなかったのと、若い男の足運びが早かったせいでもあるだろう。

その青年にとっても、麻子がそこに立っていたことは、

相当に意外だったようである。

彼は一瞬吃驚したように目を凝らした。出勤の早いサラリーマンという印象で、長めの髪を後ろの方からグッと前にときおろしている感じが特徴的だった。

麻子はあわてて顔をそむけた。それで青年は彼女の前を横切り、谷川に沿った叢を麻子が来た方向へ大股に歩いていった。そちらにバス道路へ出る早道があるのかもしれない。

麻子はなんとなくホッとして、少し足を早めた。逢引きのあとでは、行きずりの人にも心が怯える。怯える自分が、ふと浅ましくも感じられる。

野原はやがてお寺の高い生垣でさえぎられ、道が急な下り坂にかかった。左手の谷川が接近して、水音が耳についた。

麻子の足が、今度はピタリと止まった。道の縁に何か白っぽい布袋が置かれ、そこから少し下の急な斜面にぶらさがるような恰好で、細い二本の腕が見えたからである。男の子が土手にへばりついているのだ。

少年はなんとかして道へ這いあがろうとするが、ますますずり落ちそうになって、またジッとしがみついている。激しい困惑と必死な気持ちが、蒼ざめた横顔に貼りついている。麻子はわれを忘れて駆け寄ろうとした。

この時——右手から突然一人の男がとび出してきた。うす茶のレインコート。一見四十代ぐらいのがっしりした体軀の男だった。お寺の境内から生垣をくぐり抜けて出てきたらしい。先を急いでいることが、そのせわしい身のこなしから一目で察しられる。だが、男がとび出した場所は、ちょうど子供が落ちかけている鼻先だった。

足許の小石を転ませて坂の下の方へ向きをかえようとした男の動きが、つと止まった。彼は身体を戻して少年を見おろした。なぜかこの時、男の浅黒い贅肉のある横顔に、一瞬の躊躇がかすめたように、麻子には感じられた。だが、次には彼は、左手にさげていた黒い鞄を地面に置き、路肩ギリギリにしゃがんだ。腰を落とし、重心を失わないように気をつけながら、右腕をのばした。やがてその手が少年を捉えたようである。少年の身体が引きあげられるまで、二、三分もかかっただろうか。

少年が自分で路上に立つと、男は相手の手首を握っていた手をはなした。それから——麻子があっと思うほどの敏捷さで、彼は鞄をとりあげ、坂の下へ向かって走り出していたのである。

子供が追いかけるように何か言った。たぶんお礼を言



いたかったのだろう。それに対して、男は背を向けたまま、軽く右手をあげた。そうするうちにも、彼の横幅のあるレインコートの後ろ姿はどんどん遠ざかり、坂をおりきって公園の道路に出ると、木立の影に見えなくなった。

それでもしばらく、少年は坂の下を見守っていた。が、やがてあきらめたように、黒い袴の膝についた泥をこすり落とし、足許の布袋をひきずりあげた。剣道か何かの稽古に行く途中らしい。

顔をあげた少年と、麻子の視線が、自然に重なった。そして、二人はなんとなく微笑を交わした。

だが少年がこちらへのぼってくる様子を感じると、麻子は思わず生垣へ身を寄せた。繁みの向こうに境内の石段が見えたので、背を屈めて中へ入った。

結局、誰とも関わりを持たずにすんだことに、麻子は安堵していた。

この小さな出来事が、彼女の内部でしだいに重い意味を持ちはじめるのは、まだ何時間か後のことだった。

2

杉並区善福寺五丁目に一人暮らしていた市中金融業者畑山欣造六十一歳の絞殺死体が、自宅の奥座敷で発見されたのは、十月七日午前十一時すぎのことである。

発見者は、上井草でアパートを経営している四十五歳の寡婦平野照子であった。

彼女は約半年前、アパートの補修費に畑山から百万円借り、月々返済していたが、その日も元金の一部に利子を添えた金を携えて、畑山の住居を訪れた。

家は蕪蔵寺という小さな寺の裏に当たり、杉林に囲まれていて、敷地内にも立木が鬱蒼としている。彼はもう四、五年前から妻と別居して、武家屋敷のような構えのその古い家に一人で住み、商売もそこでやっていた。

照子は玄関前の庇の下に立って、数回呼鈴を押したが応答がなかった。朝方にはあがっていた雨が九時ごろから再び降り出して、本降りになる気配である。また出直してくるのも億劫だ。

念のため、細かい格子戸に手をかけてみると、施錠がなく、するりと動いた。

家の中はうす暗く、静まり返っていたが、上がってすぐのところにある応接間のドアが三分の二ほど開いていて、窓のカーテンもあいているらしいのが、中の明るさ

から想像された。

が、のぞいてみると、無人であった。

照子は声をかけながら、応接間の横から真っ直ぐにのびている暗い廊下を、奥へ入っていった。後から思えば、ずいぶん無遠慮で大胆な行為のようだが、その時には、日ごろ戸締まりに厳重な畑山の家の玄関に鍵がかかっていない以上、彼は必ず在宅しており、呼鈴が壊れてでもいるのだろうと考えていた。それに彼女は、資産十億以上との噂もある金貸しの家の内部に、軽い好奇心を抱いてもいた。

廊下に沿って、二部屋ほどの襖が閉まっていた。突き当たりの一枚だけが開いて、電光が斜めにさしていた。その部屋の前に立った時、布団臭さのような匂いと混じって、なんともいえぬ異様な空気が、彼女の感覚を刺激した。

内部は——雨戸が閉ざされた十畳ほどの座敷に、一人分の夜具が敷かれ、掛布団が軽くまくられていた。枕上分の位置にある大型金庫の扉が開いて、書類がこぼれ出ている。布団や畳の上に散乱した幾枚かの紙を目で追った照子は、はじめて決定的な異変を発見した。

床の間の壁に向かって、黒っぽい着物を着た男が、俯せに倒れていた。茶色の細い紐が、男の頸に落ちかかっている乏しい半白の髪を巻きこんで首に絡みつき、その先は腹のあたりから床の間の畳の上に、蛇のようにのびていた。

平野照子は十一時十五分に、青梅街道に面した最寄りの派出所へ駆けこんでいる。

午後零時半——。

警視庁鑑識課係長が、現場十畳間の入口に立って、本庁と所轄署の主だった捜査官に、およその外様所見を報告した。

「古い絹の腰紐を二重に巻いて、喉仏の下で結んであります。相当な力で絞めていますね。表皮の剝脱や皮内出血が著しいですから」

畑山欣造の死体は、今は床の間の上に仰向けに寝かされている。身長一メートル六十五センチ前後。この年代としてはまず中肉中背であろう。引き締まった筋肉質の身体に、よれよれの大島の着物がまといついている。全体に灰色に近い蓬髪。顔面は絞殺死体特有の暗紫色にむくみ、微細な溢血点がソバカスのように散っている。着物の裾からのびている二本の脚にも、うっすらと死斑が

浮き出している。
「正面で絞めたとすれば、犯人は、馬乗りになったのかな」
本庁捜査一課の平井警部が、鑑識課員の肩越しに死体に目を注ぎながら、明快な口調で訊き返した。室内では紺色の出動服の上に白衣を羽織った数人の鑑識課員が、指紋や足跡の採取、現場写真の撮影などに、黙々と動きまわっている。
「馬乗りになったようです」と係長は強く頷いた。
「被害者の脇腹の両側に、犯人の足が当たったと思われる内出血が認められますから。完全に絞めてから、死体を俯せにしたらしい」
「抵抗した感じかね」
「ええ、まあ着衣は乱れていますが……それほど激しい抵抗というほどでもありませんね」
「というと？」
「たとえば二重の索条がわりにキチンとしているのと、こういった絞殺死体によく見られる、被害者が索条を外そうとしてもがいた、被害者自身の爪痕がほとんど認められませんし……」
「ほう……」
被害者は六十一歳だというが、まだ壮健そうな体軀である。その彼に馬乗りになり、ほとんど抵抗の余地を与えず正面から絞殺した犯人は——よほど敏捷で強い腕力の持ち主か、あるいはよくよく被害者が油断していたほど親しい間柄か、もう一つの可能性は、複数犯人——。
平井警部は素早く思いめぐらせてから、
「死体はまだ新しそうだね」
「死斑の褪色度などから、今のところ、死後六時間前後と見ています。ですから犯行は今朝の六時から六時半ぐらいでしょうか」
ようやく指紋採取などがほぼ終わり、鑑識班はまだほかの微細なもの——泥、毛髪、繊維などを拾い集める作業を続行しているが、平井警部をはじめ、所轄の西荻窪署刑事課長、係長などが室内へ足を踏み入れた。彼らもたいてい紺の帽子と出動服に身を固めている。本庁から急行した平井だけが、着替える暇がなくて、グレーの背広姿だった。
彼は、死体を一通り観察して、鑑識の報告を自分の目で確認すると、次に、扉が開いたままになっている金庫へ歩み寄った。高さ約八十センチ。黒光りした頑丈な金庫で、被害者は個人の金融業者だという、最初の通報を

改めて思い出させる。

しかし、金庫の中は、ほとんど空の状態だった。最下段に少しばかりの紙類が置かれているが、外に散乱した分と合わせても、厚さ五センチほどの書類やノートの束が残されているにすぎない。

警部は、それらにザッと目を通した。小額の借用証書が二、三枚、ほかは走り書きのメモや、白紙の証書用紙など。現金や重要書類は、犯人に持ち去られたものと思われる。

金庫の扉を閉めてみた。鍵をさしこんで、円型の文字盤のナンバーを合わせ、鍵を廻して開ける標準的な形式のようだが、鍵はさしこまれたままになっていた。

資産家の金融業者が、めったに他人に金庫のナンバーを教えるとは考えられない。とすれば、犯人は畑山を殺してから鍵を奪って金庫を開けたというより、彼を欺すか脅すかして、金庫を開けさせた直後を狙って襲いかかった可能性が強いのではあるまいか。

室内には、ほかに、箪笥、古い文机、本棚などが三隅に配置され、畑山がこの部屋を寝室兼書斎に利用していたことが察しられる。箪笥の足許に、ガーゼの寝巻が脱ぎすててある。

本棚には、商売柄、金融関係の専門書や法律書が数冊と、戦記ものなどが並んでいる。あいたスペースには高価らしい金時計も置かれていたが、手を触れた形跡はない。犯人は金庫以外、目もくれなかったようである。

犯行は今朝の六時から六時半と、係長はのべている。彼の鑑識のキャリアから推して、解剖の結果を待たなくても、ほぼまちがいあるまい。

そんな早朝に、畑山が寝巻を大島に着替えている点、いったん正面から絞殺された死体が俯せにされている点などを見て、流しの犯行より、犯人は被害者と面識のある人間で、〝敷鑑〟の濃い可能性が強いと、平井は判断した。被害者と顔見知りの犯人には、わが手で殺した死体の顔にわざわざ布団をかぶせたり、俯せにして、目をそむけるような反応を示すケースがしばしばある。そんな、一種分裂した人間心理の跡を目のあたりにつきつけられると、生来陽性で精力的な平井も、ふとなんともいえずもの悲しい憂鬱に捉えられるのである。

本庁の警部や署の刑事課長らが、まだ十畳に留まって検証を続けている間に、西荻窪署刑事一係長の和栗警部補は、二人の刑事を伴って、家の中のほかの部屋を点検

した。

ほかの部屋といえば、一番奥の凶行現場となった寝室の手前に、日本間が二間、廊下の反対側に台所、風呂場、納戸、それと玄関を入ってとっつきにある応接間らしい洋室ですべてである。二階はない。深い植込みを擁した敷地のわりには、建物は小ぢんまりしていた。

和栗はまず、寝室の手前に当たる襖を開けた。途端に黴臭さが鼻腔をついた。

電灯のスイッチをひねると、八畳と六畳のガランとした座敷が浮かびあがった。どちらの畳にも、一面に青黴が吹き出している。雨戸は固く閉ざされ、閂の部分にも厚く埃が積もっているのが、近づいてみて確かめられた。

「この部屋は全然使っていなかったみたいですね」と、若手の小野木刑事が言った。

「出や入りの痕跡もないな」

三カ月前に防犯課から異動してきたばかりの彼は、本で学んだことを、実地に照らして確認しているふうである。

「うむ」と和栗は、しばらくたってから、喉にからんだ声でひと言答えて、視線を変えた。

これらの座敷に比べて、台所は一応掃除が行き届いていた。時代がかって黒ずんだ床の上に、わりに新しいクリーム色のデコラ張りの食卓が置かれ、調味料の小瓶などがのせてあるから、畑山はここで食事をしていたと思われるが、朝食の形跡はなかった。

「老人の一人暮らしにしては、いやに可愛らしい食器が並んでますね」

ガラス戸棚の中をのぞきこんでいた小野木が、また意見をのべた。

「花模様のモーニングカップ、カラータンブラー……」

「被害者には、娘がいたんでしょうか」と、部長刑事の田口が和栗を顧みた。

「いや、細君はあったらしいが……数年前から別居している」

畑山は近所付合いもほとんどなく、人間嫌いの偏屈者といった評判だったようだ。一年ほど前までは西荻窪の方から五十年配の主婦が掃除などの手伝いに通っていたが、最近はそれも見かけないから、どうしていたか……。

畑山に関しては、派出所の巡査から、その程度の知識がひとまず和栗らに伝えられている。

「じゃあ、その細君でも時々世話を焼きに来ていたのか、

それとも……」

カラフルな食器は、妻の好みか、それともほかに若い女が出入りしていた証拠ではないかといった含みをこめて、田口が呟いた。

和栗はそれには答えず、無表情に勝手口の掛け金に視線を注いでいる。捜査畑一筋に十数年すごしてきた彼は、持って生まれた顔立ちのうえに、職業柄が定着してしまったような風貌だった。身体は痩せ型で背が高く、浅黒い顔には頬骨が突き出し、その奥に目尻がつり気味の、鋭い目が沈んでいる。目と目の間の鼻の部分に、一本深い横皺が通っていることも、狷介そうな印象を強めている。実際、彼は寡黙なうえ、両端が下向きに引きしまった唇がほころぶこともめったになかったから、全体に冷たく、とっつきにくいタイプに見えた。それが、取調べのさいには容疑者を畏怖させ、自白を促す効力を発揮することもあれば、逆に頑なに口を閉じさせてしまう場合もある。が、いずれにせよ、これは自分でもどうすることもできない。

彼は、勝手口も内側からキチンと掛け金がかかっていることを確かめて、台所を出た。

残った応接間は、畳六畳分ぐらいの狭い洋室で、旧式なマントルピースがあり、黄ばんだカバーをかけた応接セットで占められていた。

ここだけは、カーテンが全開されている。和栗は、螢光灯を点し、しだいに雨脚が強くなってきた戸外の白い光とで、すかすようにして、室内をくまなく検べた。テーブルや飾り棚の表面には、うっすらと埃がかぶってはいるが、さほど汚れている感じではない。日常、人の出入りがあったものと想像される。商売の来客は、ここへ通されていたのではあるまいか。

そして今朝は——おそらく、畑山が自分で玄関の鍵を外して犯人を請じ入れ、まずこの応接間で対座した。カーテンが開いていたのは、そのためであろう。

その後彼は、自発的にか、あるいは犯人に強制されて奥の寝室へ入り、金庫を開けた。その直後に犯人は彼に襲いかかって絞殺し、金庫の中身を奪って再び玄関から逃走したのではあるまいか。

それにしても——ここでも遺留品らしきものは何一つ見いだすことができなかった。こんなふうでは顕著な指紋も期待できないし、この雨で足跡も洗い流されてしまっただろう。殺人犯が残していったものは、死体の首にくいこんでいたうす汚れた腰紐一本きりか……？

うすい唇をひときわ尖ったへの字に結んだ和栗が廊下へ出たころには、玄関先が一段と騒々しくなっていた。各新聞社の記者たちがもう出揃っているのだろう。彼らは、現場検証のあと捜査課長から正式の発表があるまでは、それぞれ顔のきく刑事をつかまえて、少しでも情報を先取りしようとしている。

「和栗さん、和栗さん」

警官の制止を適当になだめながら、上がり框の下まで入ってきた記者が、和栗の上っ張りに軽く手をかけながら声をかけた。三十四、五歳の小柄な方で、白い額に柔らかそうな髪を乱した童顔である。「日本新報」の、今は警視庁クラブ詰めの小暮記者で、以前警察廻りをしていたころ、和栗と付き合いがあった。

「ヤマはどんなふうです?——被害者はここの主人ですか」

「ああ」

「金融業者だそうですね。すると物盗りですか」

「まだ、何ともいえないね。金庫の中は荒らされているが」

和栗は、いずれ発表のある事柄を洩らした。

「犯人は一人なんですか。それとも複数——?」

「それもはっきりしないね」

「被害者には家族はいなかったんですか」

「一人暮らしだった」

「一人暮らしの金貸しか……。すると、事件の目撃者もまったくいないわけですか」

「今のところはね」

「ほかに何か有力な手懸かりは?」

「大してなさそうだ」

これは本音に近い。

「ではますます目撃者がほしいところですね」

和栗は思わず小暮を見返した。彼の黒い眸の奥には、いつもなんとなく人の視線をひきつけるような輝きがこもっている。それに、和栗もたまたま同じ瞬間に同じことを考えていたのだ。今度の事件は、被害者が金融業者だけに、容疑圏は広域にわたるだろう。ところが、犯人の遺留品は乏しく、金庫の中身もあらかた持ち去られている。ほかに期待できる手懸かりといえば……?

「そうだね」と和栗は、相手の光っている眸を凝視しながら答えた。

「目撃者——目撃者を見つけたいね」

3

「また金貸しが殺されている。今度は善福寺か」

その夜十一時すぎに帰宅した桂木譲介が、疲れて帰った時の習慣で、麻子に水割りをつくらせ、自分は夕刊に目を通しながら独り言のように呟いた。

茶の間のテーブルの上でグラスに氷を入れていた麻子の手が、それでつと止まった。この時彼女の指先を思わず強張らせたのは、殺人事件のことではなく、「善福寺か」と何気なさそうにつけ加えた夫のことばだった。

各務徹夫との一夜の逢引きは、つい、昨夜のことである。子供のいない夫婦二人の家庭なので、桂木が出張でもすれば、麻子には孤独な自由がもたらされる。それでも夜夫が何か用事で電話をかけてくる場合の用心に、昨夜は短大の同級生の家へ遊びにいったことにしてあり、今朝は八時まえには家に帰り着いておいたのだが……そんな晩に、夫の口から「善福寺」という地名が出ただけに、麻子は神経の先がビクリと慄えるような気がした。

「いやですわね」と、彼女は一呼吸遅れて、低い声で相槌を打った。

桂木は、眼鏡の奥から、鋭利な感じの眸で妻のうつむいた顔を一瞥し、また新聞へ視線を戻した。

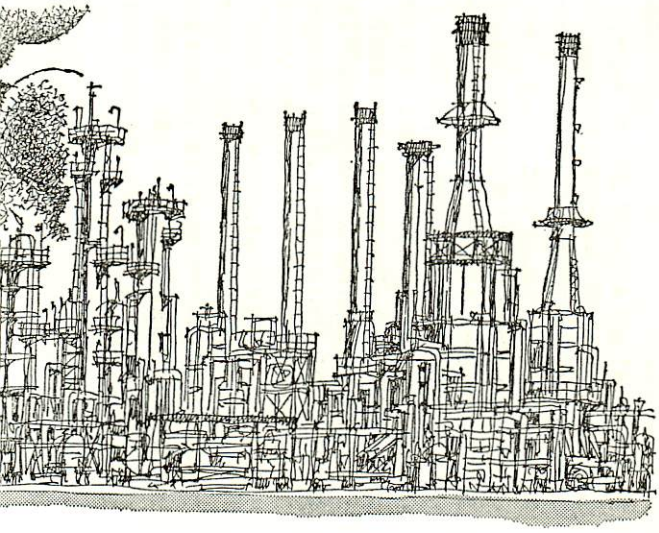
「最近はこんな事件が多いね。不景気で銀行が金を貸さなくなったせいかもしれないが、金融業者も、金を貸したうえに殺されてはたまらんなあ」

桂木は四角い腮をひき、厚い唇を苦笑するように歪めた。が、その顔色にどこか精彩がないのは、春以来のE市の工場の公害紛争をめぐる心労が影を落としているからにちがいない。

麻子は話題を、とにかく関わりのない方向へ持っていきたかった。

「暴力団の資金源になっていた悪質金融業者が手入れを受けたというニュースも、二、三日前にのっていましたわね」

「ああ。この事件でも、そういった線も追及すると書いてあるね。——しかし、いずれにせよ、金を借りる方だって、その時は切羽詰まって、高利も承知で頭をさげて借りるんだろう。それが返済の段になって金がつくれないと、貸した側が鬼のようにいわれる。何事でも似たようなものだな。自分が利用する時には下へも置かぬくせに、いったん迷惑になってくれば、手の裏を返した態度



に出る。人間なんて、まったく勝手なものだ」

彼はどこか虚ろに響く、低い笑いを洩らした。

麻子は黙ってグラスをさし出した。話題をそらすつもりが、かえって痛烈なことばを誘い出してしまった。いや、現在の彼なら、どんな話題でも、自分自身が直面している問題に結びつけてしまうかもしれない。今のことばも、明らかに、E工場周辺の住民を指していったものなのだ。

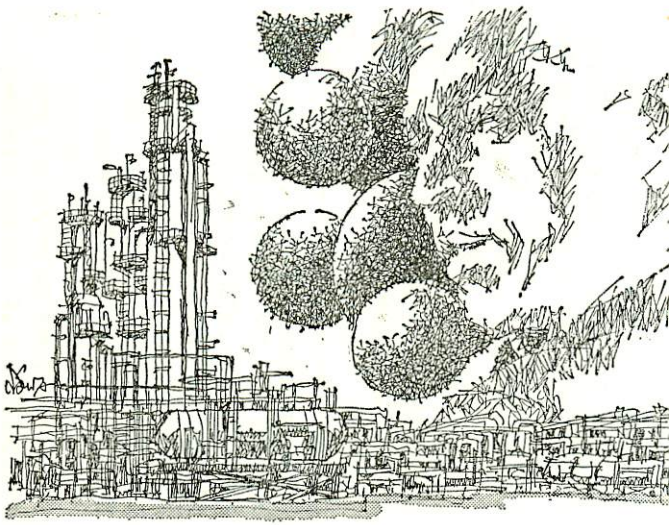
「連絡協議会の方たちとは、その後話し合いはつきそうなのですか」

連絡協議会とは、桂木が本社総務部次長を勤めている共立電化工業株式会社E市工場の周辺住民約五百人が結成している「農業公害対策連絡協議会」のことである。彼らは今年の二月ごろから急激にひろがりはじめた農作物被害に対する莫大な補償を、共立電化に要求している。E工場次長をも兼任している桂木は、その交渉で会社側代表の役割をつとめていた。

「話し合いも何もあったものではない」

彼は水割りを一口飲むと、音をたててグラスを置いた。

「五月に、県の衛生部を通して群馬医大の公衆衛生学講



座へ、工場周辺の地下水の分析を依頼したことは知っているだろう」

「ええ……」

群馬医大の名が出て、麻子の心はまたひそかにざわめいた。

「その結果、二月以降の著しい農作物被害は、うちの工場排水も原因の一つとは考えられるが、ほかにも小さな化学工場が近辺に五カ所あるから、それらの廃棄物全体によって発生した複合公害と見るのが妥当だという報告が出たわけだ」

「ええ」

「ところが、連絡協議会の奴らは、自分たちから県に働きかけて、大学に分析を依頼しておきながら、その報告を頭から受けつけないのだ。つまり、複合公害という結論になってしまうと、最終的な責任の所在がはっきりしないから、補償の請求がやりにくい。ことにうちの近くにあるほかの化学工場はごく小規模なところばかりで、とても満足な補償金など払えないだろうからね。奴らは何が何でも、うち一つを犯人と決めつけたいのだ」

再びグラスを口に運ぶと、桂木のがっしりした謹厳そうな横顔に、赤黒い血の気がひろがった。

「でも、あの人たちの言い分では、うちの工場がシクロを誤って流失した直後から、急に被害がひどくなったからと、そこを問題にしているわけでしょう?」

シクロ——正確にいえばシクロヘキシルアミンは、共立電化E工場で生産している化学薬品の一つである。以前は主に人工甘味料チクロの原料として使用されていたが、アメリカでチクロには染色体分裂を促す「催畸型性」があるという発見が認められて以来、その生産は禁止になった。が、シクロヘキシルアミンには、ほかにもゴムの老化防止や染料、プラスチックの安定剤など用途が広いため、共立電化でもE工場の主製品として生産が続行されていた。

今度の公害問題は、今年の二月の連休あけに、プラントの操作ミスで、シクロを多量に含んだ排液が工場周辺に流出した事故から端を発し、見るまに激しい紛争の炎を燃え立たせたかたちだった。

桂木は一瞬けわしい視線を麻子に向けたが、すぐに冷淡な笑いを目尻に漂わせた。

「冗談じゃない。シクロは、今度のこととは無関係なのだ。すぐにプラントを再点検し、流出を止めてからも作物被害は続いているんだからね。大体あの辺の農作物の生育不良は数年前から指摘されていたことでね。もともと土壌に問題があるのだ。それでもこっちは住民感情を考慮して、毎年相当な見舞金を支払ってきた。農民たちの中にはそれをいいことにして、最初から農耕にはあまり精を出さず、作物の成長より、工場の見舞金をどうやって釣り上げるか、そればかり考えているような連中もいる。そんな奴らが、シクロの流出ミスをもっけの幸いにして騒ぎ立てているのだ」

しだいに語気が昂ぶってきた。本来は頭のいい冷静な人だが、いったん何か固い信念を抱き、それを押し進めようとする時には、他人のことばなど耳にはいらなくなる。そんな夫の性格を知っているだけに、麻子はもう黙って目を伏せていたが、

「でも、……それでは、連絡協議会の人たちは、これからどうするつもりなのでしょう?」

「昨日は別の大学にもう一度分析を依頼するようなことを匂わせていたよ。どこへ持ちこんだって、気に入るような報告が出るわけはないがね。いや、群馬医大の見解でさえ、こちらとしても大いに不満があるくらいだ。各務助教授は、シクロも主要な原因物質の一つと決めつけているようだが、多量の流出は一時的な事故で、長年の

農作不振とは関わりのないことだ」

桂木の口から各務の名が出ると、麻子はかすかに身じろぎした。群馬医大の公衆衛生学講座は、現在教授が欠員で、問題の地下水分析の依頼を受け、報告を出した責任者は、各務徹夫助教授であったのだ。

麻子にしてみれば、彼がこんな形で夫の仕事と関わりを持つなどとは、なんという皮肉なめぐり合わせだろうか。彼女が幼馴染みの各務と偶然再会し、急速に親しくなった昨年の秋には、まだ工場公害の問題がこれほどの紛争に発展しようなどとは、誰も想像していなかったのだから。

しかし——あの当時、夫と自分との間には、すでに何かが発生していた。いや、もっと正確にいえば、桂木との十一年間の結婚生活には、大切な何かが欠けていたと、はっきり気がつきはじめたころではなかっただろうか。そのやり場のない悔恨の思いが、心の奥に、鈍く痛み続ける空洞のような部分をつくり出していた……。

今から十二年前の春、麻子は二十一歳で、九歳年上の桂木謙介と見合い結婚した。彼は当時すでに、中堅の総合化学工業会社である共立電化工業の技術部の主任研究員だった。一流の国立大学工学部を卒業して入社し、勤務成績もきわ立って優秀な彼は、出世コースの筆頭を走っていると、麻子は父から聞かされた憶えがある。

麻子の方は、通産省化学工業局の課長補佐をしていた父と、母、兄との四人家族で、地味な雰囲気の家庭に育った。短大を出たあと、服飾関係の学校の事務に勤めたが、華美でどこかうわついた職場の雰囲気に、とけこめない違和感を抱いていた。

そんな矢先、父と共立電化重役との間で持ちあがった縁談が、スピーディに見合いへと発展したのである。

三十歳の桂木謙介は、現在の彼よりだいぶ痩せていたが、背が高くて胸が厚く、麻子の目には「頼りになる安定したおとな」に見えた。顔立ちも男らしく整っており、ただ切れ長な目の眸が小さくて白目の部分が多いせいか、時として情味に乏しい冷たい印象を与えるが、それも当時の麻子には、むしろシャープな陰影として映った。

桂木の方でも、最初会った時から、麻子を気に入ったように見えた。それも若い男が異性に熱をあげるような単純な感じではなく、十分に相手を吟味した末、妻にしてもよい女性と認めたうえで好意を示した、といった姿勢であった。

三ヵ月ほどの短い付合い期間の後、麻子は、縁談を承

諾した。桂木となら、落ち着いて充実した家庭が築けそうな気がした。頼りがいのある、価値ある男性として、彼を夫に選んだのだ。そして——それだけの目安で決断したことは、麻子の結婚に対する認識がやや稚かった、ともいわなければならないかもしれない。

とはいえ、彼女は新婚早々から惨澹たる幻滅を味わったというわけではなかった。

とくに資産らしいものを持たない二人の結婚生活は、赤羽の団地でスタートした。桂木は朝早く出勤し、帰宅はたいてい九時をすぎた。会社の仕事について妻に話すことはほとんどなく、代わりに、留守中の彼女の生活を詮索したり、家事に関して、小言をいったりもしなかった。それは、昼間一日檻のような団地の部屋にとり残される麻子にとっては、いささか物足りなく、寂しくもあったが、不平として訴えることはできなかった。見合い結婚だけに最初は遠慮があり、それが思いがけず長く尾を引いて、いつか、思ったことをすぐ気軽に口に出せないような硬さが、夫婦の間に定着してしまっていた。だが麻子は、結婚生活とは、たぶんこんなものだろうという、比較のすべのない認識で、漠然とした不満をのみくだしていた。性生活も、平凡な代わり問題はなかった。

二年目の春、群馬県のE市に大規模な新工場建設が決定し、桂木は生産技術課長として赴任することになった。これは異例の抜擢といえる。工場長は本社重役の兼任だが、高齢のうえずっと経理畑にいた人で、会社としては実動面のトップクラスに、化学に強い桂木を据えたようである。

また、当時の昭和三十年代後期といえば、企業の地方進出が目立ち、地元でも工場誘致に積極的な時代であった。公害に対する警戒はまだ稀薄で、それよりも工場ができれば、税収入が増大し、若い労働力が吸収され、地元に金が落ちるなどの利点から、地方自治体では、税の減免や用地の斡旋などさまざまな優遇措置を講じて、工場を歓迎する姿勢を示した。

桂木は、建設工事の段階から、麻子を連れて現地に赴任した。一年半で工場は無事完成し、操業も軌道に乗った。

だが——まる十年間のE市での生活は、麻子には、厳しく孤独な日々だったといわねばならない。

桂木は人一倍仕事熱心な男である。彼にとっては、明らかに仕事が第一で、家庭は「従」であることを、麻子は間もなくはっきりと悟らされた。東京で生まれ育った

麻子が、親戚も友人も誰一人いない田舎で暮らす不便や寂しさを、思いやる気持ちも、その余裕も彼は持たないようだった。夫が仕事で奮闘している以上、妻は、その間どんな生活にも甘んじて耐えるべきだと心得ていた。

もちろん麻子にしても、それを当然の義務と考えるような教育を受けていた。ただ麻子は、忍耐や努力の代償として、わずかでも夫の労りと感謝の気持ちが欲しかったのだ。

それでも彼女は、最初の数年間は何の疑いも抱かず、ひたすら夫に尽くしたといえるだろう。夫が社業に打ちこみ、それが価値ある仕事である以上、家庭を守る妻の献身もまた、価値あるものにちがいない。社宅の近所の住民たちの、感謝の混じった好意の眼差しも、麻子の気持ちをひき立てた。共立電化では、工場進出と同時に、近辺の道路や橋などを補修し、一帯は見ちがえるほど整備されていたし、市民の約三割は、何らかの形で会社と関わりを持ち、恩恵に浴していたからである。

しかし……五年ほど前から、麻子を取り囲んでいる空気は、微妙に変わりはじめた。工場周辺に、ボツボツ農作物被害が発生し出したからである。やがて農民たちは組合を結成し、工場に補償を要求した。そこで会社側は、その都度「見舞金」を支払って、表面的にはともかく円満に解決してきた。だが、それもたび重なるにつれ、金額の問題で険悪な対立に発展することもあり、その状態は敏感に麻子たちの周囲の雰囲気に反映した。

全国的に見ても、昭和四十五年、アメリカの環境保全運動の影響もあって、公害に対する住民の意識は急速に高まってきていた。麻子たち工場関係者に好意的だった人たちも、いつか、あるいは将来自分たちの生命をも脅かしかねぬ無気味な怪物に向けるような、茫漠とした恐怖と敵意の目で、銀色のパイプを絡ませた化学工場の巨大なプラントを見上げていたのである。

同じころから工場次長に昇進していた桂木は、昨年秋、それは兼任のまま、本社総務部次長に就任し、住居をここ練馬区石神井の社宅に移した。

十年ぶりの帰京である。

麻子の内部には、生活の疲れと、凝縮した寂しさみたいなものが、澱になって沈んでいた。夫の性格も考え方も、もう知りつくしたといわねばならない。彼の心はいつも仕事で占められていて、家庭は自分を肉体的に望ましい状態で仕事の場へ送り出すための塒にすぎない。妻は、その塒を管理するのに必要な存在というだけで、彼

の心が麻子の愛を需め、あるいは麻子の心情を思いやることなどは、ついぞないのである。

桂木の側の肉体的な理由で子供に恵まれなかったことも、三十をすぎた麻子の意識の底に、今さらながら、どうしようもない空虚を漂わせていた。

そんなさまざまな心の隙間に、各務徹夫との邂逅が、運命的な作用をもたらしたのだろうか——？

いや、運命はもっと皮肉な罠を仕掛けていたのかもしれない。二人がほぼ十一年ぶりに偶然めぐり逢った昨年秋には、その四カ月後、プラントミスを発火点にした急激な農作物被害がきびしい対立に発展し、そのうえ各務の講座に地下水の分析が持ちこまれようなどとは、夢にも想像できなかったのだから。

このさき紛争が複雑化するにつれて、桂木と各務の関係も、どんなふうに変化してくるかわからない……。

そこに思いが戻ると、麻子はまた胸の奥が疼くのを覚えた。

虚に目を落としたまま、身じろぎもせず物思いにとらわれている麻子を、桂木はしばらく、かすかに眉をひそめた鋭い眼差しで見守っていたが、つと表情を変えて立ち上がった。

「風呂に入る」と、喉にからんだ不機嫌な声を出した。

「はい」

麻子もわれに返って、湯加減を見るために、夫の先に立った。今年は秋の深まりが早くて、夜更けるともう肌寒いほどである。

居間に戻ると、まだテーブルの上にひろげられたままの日本新報の夕刊が目に入った。夫がさっき何気なく話題にした善福寺の殺人事件が、急に意識にのぼった。

麻子はすわって、新聞を手にとった。

事件は社会面の上の方に、四、五段抜きの見出しで報道されていた。

《金融業者絞殺さる——早朝一人暮らしの自宅で》

見出しの横には、被害者の写真がのっている。眉と目が近接した、気むずかしそうな老人の顔である。

記事の内容は——

十月七日（今日）午前十一時ごろ、杉並区善福寺五丁目の金融業者畑山欣造六十一歳が、自宅の寝室で首を絞められて殺されているのを、近くの主婦が発見した。

検屍の結果、死亡は同日朝六時から六時半の間と推定された。

寝室では主に金庫が荒らされており、現金や借用証書

類がほとんど見当たらないため、犯人に持ち去られたものと考えられる。西荻窪署捜査本部では、強盗殺人事件と断定して、物盗り、怨恨の両面から捜査を開始し、暴力団などとの繋がりも追及している。

畑山は五年前、妻と離婚して以来一人住まいのため、日ごろから戸締まりは厳重だったらしいが、発見当時玄関の鍵がかかっていなかったこと、畑山が寝巻ではなく着物に着替えていたことなどから、顔見知りの犯行ではないかとの見方が強まっている。また犯人が一人か複数かは、今のところはっきりしない。

現場は善福寺公園そばの蕪蔵寺の裏手に当たる杉林に囲まれた寂しい区域で、そのうえ被害者が一人暮らしであったため、警察では当面目撃者の発見に力を注いでいる……。

新聞を離しかけていた麻子の指が、最後の数行を読んだ途端に、ハッと硬直した。

警察では目撃者の発見に……。

目撃者——その一語が、迂闊にもそれまで読み流していたいくつかの要素を、一挙に繋ぎ合わせたのだ。

事件は今朝の六時から六時半の間に発生している。現場は善福寺町蕪蔵寺の裏。

一方、麻子が一人で芳鹿荘を出て、公園の上のお寺の横の坂道にさしかかったのが、六時半前後ではなかっただろうか。そのお寺が「蕪蔵寺」であったことも、記憶に残っている。芳鹿荘を予約した各務が、彼女に電話でその位置を教える時、「蕪蔵寺の横の坂をのぼった丘の中腹」と説明したからである。

もし犯人が畑山を殺害し、金庫の中身を奪ったあと、蕪蔵寺の境内を通って逃げたとしたら——？

あっと、麻子は声を立てそうになった。坂道の途中で出くわした情景が、いきなり眼前に甦ったのである。

谷川に落ちかけていた子供と、ふいにとび出してきたがっしりした体格の男——。

そういえば、あの男の様子には、どこか追われるものの切迫感が漲っていはしなかったか。境内から坂道に出てきたのも、植込みをかき分ける感じで、正規の出入口ではなかった。せわしく身体の向きを変えかけて、ふと眼下の少年に気づき、それから次の動作に移る前に、確かに一瞬の躊躇が感じられた。しかも彼は、少年を助けあげておきながら、ろくにことばも交わさず、ほとんど逃げるように坂道を走り去っていった……。

茶色のレインコートに包まれた身体つきは太り気味で横幅があり、腭のあたりにもやや贅肉が見えたが、それでいて、うす靄の中の青黒い横顔には、ほんの二、三分間の印象ながら、犯罪を連想できるほどの、濃い陰影が滲み出ていたように思われる……。

それにあの男は、黒い鞄をさげていた。

もし彼が犯人だったとしたら、麻子は紛れもなく「目撃者」ではないか。警察が捜しもとめている貴重な目撃者。しかし——決して出頭できない証人！

自分の立場を思いめぐらせた時、かすかな眩暈と、続いて鉛のような重みが胸底へ沈んでいくのを麻子は覚えた。

だが、目撃者は麻子一人ではない。

走り去っていく男を見送っていた八、九歳の少年の、少し寂しそうな剌子の稽古着の後ろ姿が、麻子の瞼に浮かんだ。——が、その光景は、なぜか彼女の心に、淡い予感に似た恐怖を湧きあがらせたのである。

二章　小さな証人

1

久藤恭太が、自宅の前で見知らぬ二人連れの男に呼びとめられたのは、善福寺で殺人事件が発生した十月七日の夕方五時すぎだった。

午前中から降り続いていた雨が、恭太が学校から帰ってきた三時ごろにはようやく上がりかけ、それで彼はいったん家にランドセルを置いてから、近所の仲間と空地で野球をして帰ってきたところだった。

「ちょっと……君が久藤恭太君か」

グローブの中に拳を叩きこみながら、家に入りかけていた恭太は、その声で振り返った。もううす暗くなった路地の端から、男たちが歩み寄ってきた。一人は黒っぽ

い背広、もう一人はグレーのレインコートを羽織っていて背が高い。

恭太が「はい……」と頷くと、彼らは、表札の出ていない戸口のあたりを改めて眺めてから、恭太の顔に視線を戻した。

「おじさんたちは西荻窪警察署の者なんだけどね――」

レインコートの背の高い方の男が喉で押えつけたような声で言って、今度は小柄な恭太の全身を遠慮のない目つきで観察した。頬骨が尖り、唇の端が引きしまった痩せぎすな顔は、笑う時など想像もできないくらい、無愛想で鋭い感じがした。

「……？」

「君は、週に三回、善福寺公園の上にある剣道の道場へ通っているだろう」

「はい」

「道場で聞いてきたんだが、いつも一人で、公園の中から蕪蔵寺の横の坂をのぼっていくんだそうだね」

「そうです」

「今朝あの坂道を通ったのは、何時ごろだった？」

問答が続くと、それぞれの家に散りかけていた友だちが、足をとめて聞き耳を立てはじめた。練馬区の西南端、関町のこの界隈も、起伏の多い地形で、青梅街道の北側の傾斜地に、古い住宅が多く建ち並んでいる。恭太の家もだいぶ時代がかったモルタルのアパートで、土間の奥に二間続きという家が、長屋式に数軒並んだものだ。遊ぶ仲間は、たいていその長屋か、路地の奥にある家々の子供たちだった。

「六時半ごろと……帰りは七時四十分ぐらい……」

「うむ」と刑事が満足したふうに頷いた。

この時、家の戸が開いて、恭太の母親がソバカスの浮いた顔をのぞかせた。恭太に何か言いかけたが、すぐ前の男たちに気がつくと、吃驚したように見比べた。

背の高い刑事が内ポケットから黒い手帳を取り出して彼女に示しながら、

「西荻窪署刑事係長の和栗です」と低い早口で名乗った。黒い背広を着たもう少し若い男は、黙って軽く頭をさげた。

「あの、この子が何か……？」

「いえ、今朝剣道へ行かれた途中のことで、少々お尋ねしたいことがあるものですから。――よろしいでしょうか」

和栗と名乗った刑事が、目で土間を示した。

「はい、あの……どうぞ」
母親はあわててそこに脱ぎ散らされているサンダルや長靴を隅へ寄せた。
恭太が先に畳へ上がり、和栗は上がり框に腰をおろした。若い刑事は、並んですわるだけのスペースがないので、土間に立ったままで、後ろ手にドアを閉めた。
和栗が、目尻の上がった光る目を恭太に当てた。
「大事なことだから、よく思い出してもらいたいんだが、今朝道場へ行く途中、無蔵寺の近くで、誰かに会わなかっただろうか」
もちろん恭太はすぐにあのことを思い浮かべた。今日一日中何度か思い返し、時には誰かに喋りたい衝動にかられたのだが、結局自分だけの胸にしまっていた。
だが、れっきとした刑事に尋ねられれば、話すしかないだろう。
「会いました」と恭太は頷いた。和栗の目が一段と鋭い光を帯びた。
「どこで、どんな人に会ったんだね？」
「男の人で……あの坂の途中で、ぼくが川に落ちそうになったのを、助けてくれたんです」
「知っている人か」
「ううん」
「その人はどっちの方から来た？」
「たぶん無蔵寺の中から出てきたんだと思うけど……」
あの後に続いたほんの二、三分間の展開が、恭太の胸裡をまた熱っぽい空気のように流れすぎた。——「ありがとう」と言ったのに、軽く片手をあげて走り去ってしまったことだけが不満だけれど、でもそのほかは申し分なかった。必死に笹を握っていた両手が痺れはじめ、もうだめかと思った時、突然目の前にとび出してきて、左腕と、次には右腕もしっかりと支えてくれた逞しいおとなの手。奥まった眸をむいて、力づけるように恭太をのぞきこんだ肉の厚い浅黒い顔。煙草と背広の匂いが混じった、ほの温かい懐かしい体臭……。
ただ、あの男の手は「お父さんの手」というには冷たすぎた。なぜかハッとするほど冷たい手だった。それに、なぜあんなに、顔中流れるほどの汗をかいていたのだろう？
いや、もちろんあの男が父とは似ても似つかないことを、恭太は知っている。彼のおぼろな記憶に残る父は、縮れ髪で、もう少し小造りな人の良さそうな顔をしていた。

それでもやっぱり、あの出現はすばらしかった。彼の手が恭太の腕に届いた瞬間、彼は恭太にとって「お父さん」にほかならなかった。いや、面影だけの父親より、もっと確かで頼もしい存在だったかもしれない。

それだけに、恭太はあの短い出来事を、誰かに話したいと思う反面、なぜか強い抑制が働いて、今まで一度も口に出さなかったのだ。剣道の稽古を終えて帰り、その間に起きて朝食を拵えておいてくれる母と顔を合わせた時にも。

恭太の母親の久藤初江は、父親が家を出ていって以来、新宿でビルの雑役婦をしている。恭太を学校へ送り出してから出勤して、帰宅は、恭太より遅い六時前後になった。そのうえ夜は十二時ごろまで縫いものをやっているらしい。そのせいか、三十八歳の彼女は、恭太の目にさえももっと年寄りに見えるくらい、始終疲れきった仕種をしていた。少したるみはじめた瞼に囲まれた黄ばんだ目の奥には、優しい光がこもってはいるのだが、そのやつれた、いつも少し物思わしげな顔を見ると、恭太は何か言いかけてもつい口をつぐんでしまうのだ。それと、恭太もそろそろ、家の外の出来事を逐一母親に報告することに、ちょっと馬鹿らしいような照れ臭さを覚える年代にさしかかっていたのかもしれない。

案の定、初江は軽い驚きと不満をこめた眼差しで恭太を見つめたが、その視線を和栗に向けて、

「あのう、それは何か今朝の事件と関係が……？」

「ええ」

和栗は口を挟まれて少し煩わしそうに眉根を寄せ、鼻の上に刻まれた横皺を深くした。

「犯人は六時半前後に現場から逃げ去った可能性が強いものですから、その時刻に付近を通った人から聞き込みしているのです」

早口に説明した。

ふいに、恭太は視界が、グラリと揺れたような気がした。犯人！——刑事は犯人を捜しているらしい。今朝早く、善福寺で殺人事件が発生したことは、夕方、近所の中学生たちが話していたので、恭太も知っていた。するとこの刑事は、あの男を人殺しの犯人だというのだろうか？

「それで、君は六時半ごろ、蕪蔵寺の境内から出てきた男と会ったわけだね」

和栗はすぐに恭太に向き直り、微笑の真似事みたいな表情で口許を歪めた。

「その人のことを、おじさんにくわしく話してもらいたいんだが……」
今度はレインコートの腕が重そうに動いて、恭太の肩に手をかけるつもりだったらしいが、その前に恭太は身体をずらせて、彼の手が届かないようにした。
「若い男かね」
恭太は黙ったままうつむいて首を傾げた。
「大体でいいんだよ」
「はじめは年寄りかと思ったけど、もしかしたら若かったのかもしれない……」
「三十ぐらいか」
「えーと……二十歳ぐらいかもしれない」
実のところ恭太にも、あの男が三十代なのか五十代なのか、本当にまだ意外に若かったのか、判然としないのである。
「二十歳なら若いわけだな。しかし最初は年寄りと感じたんだろう？」
「はい……」
「ではやっぱり三十ぐらいか」
「そうかもしれません」
和栗は唇を引き結び、鼻から息を吐いた。苛々してくるのを懸命にこらえている顔である。
「背は高かった、低かった？」
「中くらいかな」
「出会った時、急いでいるような感じはしなかったか」
そうだ、急いでいたんだと、恭太は今さらのように納得した。恭太のお礼のことばも振り切るように走り去ってしまったのは、きっと急用を抱えていたからにちがいない。
だが、次には彼は、自分でも驚くほど平静な口調で答えていた。
「そんなことはなかったと思います。急いでいたら、わざわざぼくを助けてくれるわけがないし」
「うむ」
それで刑事は、改めて恭太が土手から助けあげられた経緯を細かく訊いた。恭太はほぼありのままを答えたが、あっという間のことだったので、相手の顔かたちなどはほとんど憶えていないとつけ加えた。実際、いざ具体的に質問されると、恭太は自分の記憶が実に漠然としていることに気がつくのだ。たとえば、男が何色の、どんな服を着ていたかなど、どうしても思い出すことができない。

和栗は不満そうに、腭をこすりながら恭太を睨んでいたが、雑然とした六畳の間をひとわたり見まわし、背後の刑事とチラと視線を合わせてから、眉をあげてまた恭太を見直した。

「その男のほかには、誰とも会わなかったの」

「もう一人、女の人が通りました」

話題が変わったので、恭太はホッとして即座に答えた。

「ほう……？」

「そのあと坂をのぼりかけたら、向こうから女の人がきて……でもすれちがう前に、その人はお寺の生垣の中に入ってしまったけど」

すれちがいはしなかったが、視線が合った時、なんとなく微笑を交わした。その相手の笑顔が、恭太の眼底に、意外にくっきりと定着している。

和栗は新たな緊張を漲らせ、油断のない目で恭太を見据えながら、質問を連発した。まさかその女も犯人かと疑っているわけでもないだろうに、なんでも聞きたがる刑事だと、恭太は内心呆れた。それでも今度は素直に思い出す努力をした。あの男について、答えを濁した埋め合わせみたいな心理も働いていた。

結局、和栗が恭太の記憶からひき出したイメージは、——ブルーの服を着て、ハンドバッグをさげたほっそりした女性。二十代後半から三十代。彼女は坂の途中から蕪蔵寺の植込みに紛れこんでしまったような恰好だが、そのとき一番近くで見た横顔は、色白で、優しそうだった……。

「最初の男の人と、今の女の人と、もしもう一度会ったらわかるかね」

手に持っていたボールペンを内ポケットにしまいながら、最後に和栗は尋ねた。

「きっと、わかると思います」

正直な気持ちが、思わず恭太の唇をついた。

2

西荻窪署に設置された金融業者強殺事件捜査本部では、もちろん、現場付近の目撃者だけを捜査の手懸かりにしようとしたわけではない。

個人の金融業者が殺された事件の場合、まず容疑の対象になるのは被害者の融資先であり、それを示す借用証書やメモ類は有力な手懸かりである。

続いて、担保物件であろう。市中金融業者が融資先か

ら預かる担保は、不動産と宝石が大部分のようである。宝石の場合には、業者はたいてい懇意の宝石屋に鑑定を頼むから、その方を当たればある程度の情報を得ることができる。不動産の方は、その物件所在の登記所へ、抵当権設定の申請がなされている場合が多い。だから、登記所で調べれば、誰がどんな不動産を担保として提供していたか、判明する仕組みである。もっともこれは、被害者の側にメモなどが残っていればいいが、そうした目安がまったくないと、捜査側はどこの登記所を調べたらいいかわからないので、非常に能率が悪い。登記所は東京都内でも各区にほぼ一つあり、日本中の登記所に当たることはまず不可能といわなければならない。

融資先以外の出入り、人間関係などを知るには、家族や近所の聞き込みに頼るが、これは一般の事件と同様である。

従来の例を見ると、金融業者が被害にあった場合、犯人は、金を借りていて利子が払えない者、どうにか利子は払っているが、そのために相当な無理を強いられている者、あるいは当分元金返済の見込みがなく、一生借金と利子に苦しまなければならないと思いつめた人間などが多い。やはり、被害者の融資先に犯人のいるケースが圧倒的なのである。

そうでない流しの場合だと、金融業者の許には金があると睨んだ人間が、主に月末か月初めを狙って押し入っている。

今度の畑山欣造殺害事件の場合には、発生は十月七日で月初めともいえるが、現場の状況から、流しより、顔見知りの犯行という見方が、捜査本部の大勢を占めていた。

ところが、金庫の中身はほとんど持ち去られており、現金、宝石類はまったく見当たらず、ごく少額の借用証書三枚ほどと、あまり意味をなしそうもないメモ類少々が残っていただけである。

しかしながら、同じ寝室の文机の抽出しから、古い大学ノートが一冊発見され、ここには約十五名の人名と、住所、融資金額、担保、融資のいきさつなどが、メモされていた。日付を見ると、今年の三月ぐらいまでに金を貸した相手のようだから、融資先がこれで全部とは考えられないまでも、有力な手懸かりとはいえる。

一方、畑山の以前の妻が、大塚のアパートで暮らしていることが間もなく判明したが、この方からはさして収穫は得られなかった。別居したのが五年前で、一昨年正

式に離婚して籍を抜いている。それで最近の畑山の人間関係など皆目わからないというし、彼が正確にどれくらいの資産を持っていたかも、知らない様子だった。五十二歳で、畑山との間に子供もなく、今は保険会社の集金人をやっている彼女は、気むずかしくていつも何を考えているのかわからない畑山とは、最初から性格が合わなかったとのべている。

念のため彼女のアリバイを調べたが、これもほとんど問題なく証明された。

結局、寝室の机から発見された大学ノートのメモと、近所の聞き込みを主な手懸かりにして、約二十人の参考人がリストアップされた。暴力団などとの繋がりは、今のところ浮かんでいない。

事件の翌日の昼まえ——。

西荻窪署の小野木刑事と、警視庁捜査一課の露口刑事の若手二人組は、杉並区天沼のパチンコ店〝ホープ〟を訪れた。その店主土倉茂男五十五歳も、例の大学ノートに記入されていた一人なのだ。

額の禿げ上がった赭ら顔の土倉は、刑事の来訪を多少は予期していたような落ち着いた態度で、二人を店の奥の狭い応接室へ導いた。四列に台を並べた店内にはまだ客は疎らで、雨上がりの陽光が通路にさしこんでいる。

「——去年の暮、機械の入れ換えをやりまして、それの手形を切ったところが、ちょっと手ちがいができて落とせなくなりましてね。それで一時的に五百万円融通してもらったんですよ」

小野木が畑山との付き合いについて尋ねると、土倉はまず金のことから喋り出した。やはりその辺は神経を尖らせているらしい。

「でも利子は月々キチンと届けていたし、三百万円はもう六月に返済したんですよ。残りは今年一杯の約束だったんです。三百万返した時の領収書はとってありますから、お見せしますよ」

「畑山さんとは、いつごろからのお知合いだったのですか」

「六年ぐらいになりますね。ここの土地を買った時に抵当権のことで、売り手とちょっとゴタゴタがありましてね。不動産屋の紹介で畑山さんに会ったんです。金を借りたのは、今度がはじめてですが」

「なるほど。しかし六年も前からの知合いなら、相当親しかったんじゃないですか」

やんわり訊くと、相手は大袈裟に手を振って、
「親しいってことはありませんでしたねえ。別にいっしょに酒をのんだことがあるわけじゃなし、無口な人で、あんまり人付合いのいい方でもなかったですしね」
それからちょっと言いすぎたと思ったのか、
「しかしまた、案外気のやさしいところもあったみたいでね。殺されるほどの恨みを受けていたとは思われませんがねえ」
最後のことばには、しぜんな実感も混じっているようだ。
「気がやさしいというのは、どういった点でですか」
「そうねえ……」
土倉は雑多なものがのせてあるテーブルの上から、セブンスターの袋を取りあげながら、
「去年の暮に、小さな三毛猫を一匹飼ってましてね。とても可愛がっていたみたいでしたが、次に行った時には姿が見えないので尋ねてみたら、つい最近自動車に轢かれてしまったとかで、ずいぶんがっかりしているんですよ。ちょっと意外な感じがしましたね」
「ははあ」
「それに……」
土倉は一服吸いこんでから、煙草の先に目を落として、どこか含みのある微笑を洩らした。そのまま黙っていたが、刑事たちの四つの目がジッと注がれているのに気がつくと、
「これには甘かったらしいですね」
右手の小指を立てて笑った。
「女があったんですか」
小野木は驚いたように訊き返す。が実は、畑山に情婦がいた形跡は、昨日の聞き込みで、すでに濃厚に浮かんでいたのだ。近所の主婦が、約一年前から、水商売ふうの若い女が畑山の家の私道を出入りするのを時折り見かけたとのべているし、同様の女が、善福寺公園と青梅街道の間にある商店街で買物をすることもあったらしい。しかし、その女の身許はまだつかめていなかった。
「私は玄関先で一度顔を合わせただけですがね。その時の感じでは、まちがいないみたいでしたよ」
「というと、どんなふうだったんです？」
「私が入っていった時、女は帰るところだったようですが、玄関まで送ってきた畑山さんに〝パパ〟とかいって、何か耳元で喋ってましたよ。畑山さんは私の手前ちょっと困った様子だったが、それでもニヤニヤしてましたか

らね」

「それはいつごろのことです？」

「今年の春先だったかなあ」

畑山の近所の主婦は、水商売ふうの女を見かけるようになったのは、昨年の秋ごろからだとのべている。一方、やはり昨年十月まで、西荻窪から五十歳の主婦が掃除などに通っていたことが確認されているが、以後お手伝いの出入りはない。

すると、問題の女は、約一年前から畑山と関係を持ち出したわけだろうか……？

小野木は、一人暮らしの老人にしてはきれいに片づいていた台所と、ガラス戸棚の中のカラータンブラーを思い浮かべた。

「どこの女なんでしょうか」と露口が訊いた。土倉は彼の方へ少し考えこむ表情を向けて、

「畑山さんから聞いたわけじゃありませんがね。案外この近くに住んでるらしいんですよ。というのが、私がそんなふうに玄関ですれちがったあと、間もなく、その女がここへパチンコをやりに来たことがあるんですよ。それでちょっと声をかけてみたんです。向こうも吃驚(びっくり)してましたがね。その時、わりに近所のアパートに住んでるようなことを言ってましたからね」

小野木は女の年恰好などを尋ねた。二十五、六のすらりとした女で、特に美人でもないが、女っぽいムードがあり、化粧の感じなど水商売ふうであったと、土倉ものべた。

「柄もののズボンにサンダルばきでね。人差指に、人造石の大きな指輪をはめてましたね」

人差指にはめていたことが印象に残ったようだ。

「名前はわかりませんか」

「ああ……そうそ、〝ナッちゃん〟とか呼ばれてましたよ」

「畑山さんがそう呼んでいたんですか」

「いや、ここへ来た時は、若い男といっしょだったんです。その男が帰りがけにそう呼んでいるのを聞いた憶えがあるんですよ」

その男の人相までは記憶がないという。

土倉から聞き出せたのは、この程度だった。が、これだけでも予想外の収穫といえる。

二人は、土倉が提示した三百万円と月々の利子の領収書を確認し、最後に事件当時の彼のアリバイを尋ねた。自分はここ数年、午前八時より早く起きたことはないと

彼は答えた。

〝畑山の女〟について、近所の人や彼の付合い関係から聞き集めた情報、それに、この土倉の話などを総合すると——。

女は二十代半ば、身長百六十センチ前後ですらりとした感じ。髪は茶で、肩くらいまでとき流している。化粧が濃く水商売ふう。畑山の家の近くで買物した時には、松茸やキャビアなど高価なものを買っていたから、金は潤沢に与えられていたと想像される。住居は、天沼の土倉の店からさほど遠くないアパート。男友だちに〝ナッちゃん〟と呼ばれていた……。

これらのデータに基づいて、午後からは約三十人の刑事が、天沼を中心とした一帯のアパートおよびバー、キャバレーなどを軒並みに聞き込みして歩いた。被害者の情婦は重大な存在である。それ自身容疑の対象になるのはもちろん、今度のような事件の場合、被害者の身近にいて内部事情に明るい人間が犯人の手引きをするといったケースも少なくない。そうでなくても、被害者の人間関係についてくわしい知識が期待できるのだ。

中央線荻窪駅裏にあったスタンドバー〝ボンボン〟で昨年の暮まで働いていた林奈津実という女の存在を突きとめたのも、小野木、露口のコンビであった。

ボンボンは、北口商店街の、大きな喫茶店と天麩羅屋に挟まれた、小ぎれいな店だった。

ママとバーテンの話によれば、林奈津実は約一年半そこに勤めていたが、客扱いが巧みで、最屓の客も少なくなかった。中に、奈津実が辞める三ヵ月ほど前から頻繁に通ってきた初老の男があり、その男の人相を訊いてみると、畑山欣造に似ていた。ママたちは彼の名をはっきり知らされてなかったが、彼は奈津実が辞めたのと同時に姿を見せなくなっている。

林奈津実の年配、背恰好も、小野木たちのデータとほぼ一致した。おまけに彼女は、左の人差指に指輪をはめる癖があったというのだ。

彼女がボンボンに通っていた当時の住所は、杉並区阿佐谷南のアパート寿荘で、この位置は、何度か車で送ってやったことのあるバーテンが憶えていた。阿佐谷南から天沼なら、サンダルばきでパチンコに出かけてもおかしくない距離である。

奈津実は九州宮崎の出身で、姉がアメリカ人と結婚してロスアンゼルスに住んでいたという。その影響か、金をためて将来はハワイかアメリカ本土で自分の店を持つ

のが夢だと、口癖のように話していたそうである。
小野木と露口は、その足で阿佐谷南へ向かった。バーテンに書いてもらった略図によれば、寿荘は、中央線阿佐谷駅と青梅街道との間に当たる。
「アメリカへ渡る金をためるには、畑山みたいな金持ちの年寄りの妾になるのが一番手っ取り早いと考えたのかもしれませんね」
逆コースですいた国電を降り、阿佐谷南口の欅並木の道を歩きだしながら、小野木が話しかけた。
「そうですね。しかし、バー勤めの方は、全然やめていたんでしょうかねぇ」
露口が、高い梢を見あげながら応じた。美しい黄色に染まった葉が、商店街の灯火を受けて、キラキラしている。夜風がもう肌に冷たくなっている。
「さあ……畑山の家で寝起きしていたようでもありませんしね。時々通ってきていたという感じだ」
「うむ……」
それからまたしばらく黙って歩き、やがて二人はどちらからともなく住宅街の方へ曲がった。警視庁と西荻窪署と、ふだんは勤務のちがう二人がコンビを組んだのは、捜査本部が設置された昨日以来だから、まだ少し固い雰囲気が残っている。年配は露口の方がやや上のようだが、彼は口が重いたちらしく、聞き込みは主に小野木に任せた恰好だった。
「畑山以外にも、男があったとも考えられますね」
やがて露口がポツリと呟いた。それで小野木は、今朝土倉が、彼の店に女が若い男といっしょに来たと話していたのを思い出した。
寿荘は間もなく見つかった。幅四、五メートルのアスファルト道路に面し、住宅に挟まれたモルタルの二階建てで、クリーム色の壁面に目につきやすい看板が出ていた。すでに午後九時半をすぎ、暗い道路には通勤帰りらしい人影が時折り通りすぎるだけだった。
寿荘の狭い玄関もひっそりとしていた。水商売勤めの住人が多いとすれば、今は留守になる時間帯である。
土間の傍らに、玩具みたいな郵便箱が十個ほど取りつけてあって、それぞれ名札が貼られていた。
二人は目を走らせた。
うす汚れた紙片にマジックの貧弱な文字で「林」と記されたのを見つけると、思わず顔を見合わせた。林奈津実が今もこのアパートに住んでいる可能性が急に濃厚になったのだ。

郵便箱のナンバーは103で、ほかの半分は二百台の番号なのを見れば、「林」の部屋は一階と想像される。

露口が先に立って、玄関から左へのびている廊下へ一歩踏みこんだあと、すぐにその身体をひっこめた。目顔で小野木に廊下の先を示した。

小野木がそっとのぞいてみた。うす暗い廊下の奥でドアが一つ開いていて、明かりがさしている。その中に、ジャンパーを羽織った背の高い男が横顔を見せて立っていた。ドアの内部には女がいるらしい。その方から聞こえてくる低い話し声で察しられるのだ。男は黙っていて、女が喋っているようだ。

やがて、男は軽く片手をあげ、それから一度こちらを向いたが、刑事たちの目には気づかなかった様子で、反対の方向に歩き出した。

女の手がのびて、ドアを閉めた。そのどちらも日常的な素っ気なさが、かえって男女の間柄を暗示するようでもある。しかも、刑事たちを緊張させたのは、そのドアの位置が、ちょうど廊下の中ほど、103号室の見当だったからである。

長身の男は、細い廊下を玄関とは逆の方へ、大股に歩いていった。突き当たりにも出入り口があるらしい。

男が外に出て、ドアを閉めたところで、小野木と露口は足早やに、今彼が立ち話していたドアの前へ歩み寄った。ニスのはげかけた柱の上部に、案の定、郵便受けに見られたと同じ字体で「林」と書かれた紙が貼りつけてある。

二人はもう一度顔を見合わせた。このドアの内部に、畑山欣造の情婦であった林奈津実がいる可能性が強い！

立ち去った男は、彼女とはどのような関係であろう？

小野木の思考がすぐそっちへ動いたのは、ここへ来る道すがら露口と交わした会話の反映だった。

「あの男にも、ちょっと当たってみましょうか」

「そうですね」

露口が即座に頷いた。奈津実に会うのは彼一人でも十分である。

露口のノックが静かな廊下に響くのを背後に聞きながら、小野木は裏口をすべり出た。

路上はちょうど人通りが途絶え、それで彼の視野の中で動くものは、先刻の男の後ろ姿だけだった。男は二、三十メートル先を、大股だがさほど急がない様子で歩いている。焦茶のジャンパーに細いズボン。長い足を外股に開き、肩を揺すって歩く仕種に、どこか無頼な雰囲気

を漂わせている。

駅前の商店街へ通じる四つ角に出たところで、彼は立ち止まり、ちょっと右を向いた。街灯の青白い光が、頭髪と横顔を照らしだした。

この時、小野木はもう十メートルほどの背後に近づいていたから、そこで男の顔を素早く観察することができた。

一見では、小野木より多少若く、だから二十六、七歳。面長で鷲鼻。やや出歯の感じ。だが、どこかにもっと彼を特徴づけている点がありそうだ。小野木はほとんど無意識にそれを捜し、すぐに気がついた。男は前髪を長く額に垂らしているのだが、その分け方が一風変わっていた。つむじの後ろからやや不自然にグッと前にときつけたようなスタイルなのだ。

男の前を車が一台横切り、それをやりすごした感じで、彼は商店街とは反対の左へ曲がった。

小野木は急に足を早めた。四つ角の先で彼に追いつき、林奈津実（おそらく）のことや彼女との間柄について、事情聴取するつもりである。

街灯の下まできて視線を転じた途端、小野木は思わず「あっ」と小さな声を洩らした。しまった、という思いに、一瞬胸を衝かれた。

数メートル先で、タクシーのドアが閉まった直後だった。背を丸めてバックシートに凭れこんだ男の後頭部が見えた。さっき車が彼の前を横切ったが、それはタクシーの空車で、彼は小野木からは死角になっていた左手を上げるかして合図したものと思われる。それでタクシーは角の先で停車したのであろう。

続いてまた空車が来るような好運も望めなかった。

小野木はしばらく、見るまに遠ざかっていくテールランプを睨んで立ちつくしていたが、やがて気をとり直して、寿荘の方へ踵を返した。あの103号室に住む女が、畑山の情婦であったという確証はまだないのだから、今の男もまったく事件とは無関係な存在かもしれない。それに、彼がいち早く刑事の接近を察知し、まんまと逃げられたという感じでもなかったのだ……。

だが——。

103号室の調査を一通り終え、露口と共に十一時すぎに署に戻った小野木は、和栗係長から、新たに重要な手懸かりの一端を聞かされて、再びハッと緊張した。

手懸かりとは、科学警察研究所から、署の鑑識課に送られてきた報告の内容であった。

「現場の寝室で拾い集めた毛髪の中に、円形脱毛症にかかっている頭髪が三本見つかったそうだよ」

露口から、寿荘103号室に住む女に関する報告を聞いたあと、和栗がいつもの喉にからんだ抑揚のない声で話してくれた。それは、明朝の合同会議で、捜査員全員に伝達されるはずのデータである。

「円形脱毛症？」

小野木が訊き返した。

「名前のとおり、髪の毛が円く禿げてくる一種の皮膚病だ。男に多いらしい。皮膚科で女性ホルモンを打ってもらえばたいてい治るそうだが、病気が進行している間にその患部の毛を検査すれば、一目瞭然らしいね」

事件現場から指紋が採取されることは一般にも知れ渡っているが、近年指紋と同じくらいに重要な手懸かりにされているのが、毛髪である。

健康人でも一日平均三十本から百本の脱毛があるといわれるくらいだから、事件現場にも、当然相当数の毛髪が落ちている。それらは注意深く拾い集められ、東京都内ならおもに九段の科学警察研究所へ送られて検査される。

最近の科学捜査では、この鑑別が著しく進歩している。一本の毛髪から、まずそれが身体のどこに生えていたかがわかる。次にそれを落とした人間の血液型、栄養状態。パーマがあればその質の良し悪しを判別して生活程度を推測できるし、断面を顕微鏡で調べれば、抜け方が見分けられる。自然脱毛か、無理に引き抜かれたのか、あるいは病気のための脱落か、などである。だから、たとえば情交の形跡のある現場に陰毛が落ちていたりすると、その抜け方によって、強姦か和姦か、およそ見当がつくといわれるほどである。

毛髪に病気があれば、ほぼ確実に発見される。

「その円形脱毛症の頭髪は、被害者自身のものではないわけですか」

「もちろん。血液型もちがうし、畑山にはまったくそんな形跡もないからね」

「すると、その病気にかかっている人間が最近現場に出入りしたということですね」

「うむ。——これまで調べた付合い関係の中には、まだそれらしい者は見つかってない。それだけに、有力な証拠になるかもわからないね」

「円形脱毛症か……つまり、小さな禿げですね。男にせよ女にせよ、なるべく隠そうとするでしょうが……」

露口が独り言めいた呟きを洩らした。それが、ふいに小野木の瞼に、町角のうす青い街灯の光を浮かびあがらせたのである。その光の下で何秒間か立ち止まった若い男は、つむじの後ろの髪まで額の方向へなでおろしていた。

あのやや不自然な髪型は、もしかしたら禿げを隠すためではなかったのか？

あの男が思いがけぬ素早さでタクシーを停めて走り去ったのも、偶然ではなく、刑事の追跡に気づいて逃げたのではなかっただろうか……？

しまった、という思いが、今度は熱い焦燥感を伴って、彼の頬を上気させた。

3

久藤恭太は、いつもの朝と同じに、細い滝が落ちている岩組みのそばへ、自転車を寄せて停めた。

それから車輪をスタンドに乗せて固定しようとしたが、小柄な彼には少し高すぎる車体がぐらついて、危うく倒れかけたのを、傍らで見守っていた日本新報の記者が、素早く手をのばして支えてくれた。

ありがとう、と恭太は喉元まで出かかったが、タイミングを逸して声にならず、代わりに会釈みたいに首を傾かせた。

ようやく安定した自転車の荷台から、竹刀と防具の入ったズダ袋を外した。

それらを担いだ恭太が、精一杯大股に坂道をのぼりはじめると、記者も歩調を合わせて歩きだした。

今日はいいお天気になるらしく、梢の先の空がうす青く澄んで光っている。代わりに、一昨日の朝と比べて、一段と空気が冷えこんでいるみたいだ。

いや、今朝は石神井西の信号からずっと、自転車に乗らないで、押して歩いてきたので、血の循環が悪いせいだろうか。

自転車をとばせなかったのは、信号を渡ったところで、今横を歩いている「日本新報の小暮」という記者に声をかけられたためだった。

「君が関町から善福寺まで剣道に通っている久藤恭太君だろう？——ちょっと話がしたいんだけれど……」

そんな切り出し方は、一昨日の晩、家に訪ねてきた無愛想な感じの二人連れの刑事や、昨日やはり家の近くで話しかけてきた新聞記者らしい男と同様だった。それで

恭太は、少しうんざりしたのだが、おとなが並んで歩きだしているのに、自転車に乗ってしまうわけにもいかない。幸か不幸か、今朝は十分ほど早目に家を出たので、急がなくても稽古には間にあう状況でもあった。

しかし、しばらく歩いていくうちに、恭太は、今朝の男はどこかしら今まで会ったおとなたちとはちがうと感じはじめた。第一、恭太が恭太であることを確かめたあと、彼は自分も「日本新報の警視庁クラブ詰め記者、小暮究」と名乗った。そんなふうに、恭太に対してキチンと自己紹介したのは、彼がはじめてだった。いわば彼だけが、恭太の人格を尊重する態度を示したわけだ。

それから彼は、案の定、一昨日の朝の事件に関連した質問を開始した。蕪蔵寺の近くで誰かに会っただろう？——それはどんな人だった？……。

だが、ここでもほかの人たちとちがって感じられたのは、その尋ね方である。質問の口ぶりが、どこかさっぱりしていた。熱意がないというのではない。いや、恭太から何かを聞き出したいという意欲は、その眸の光にありありとうかがわれるのだが、といって、恭太が喋りたくないことまで、無理に口を割って引き出そうとはしない。どうしても気が進まなかったり、記憶に自信がないのなら、それもいたしかたないといった優しい諦めみたいなムードが、時々途切れる質問の合間に漂っていた。

それにしても、この人は道場までついてくるつもりだろうか……？

恭太は、ようやくうっすらと汗ばんできた顔を、そっと小暮の方へ向けた。

彼はしげった木立の先を見上げるようにして歩いている。おとなとしてはさほど背が高くなく、白い額にやわらかそうな茶色い髪をなびかせている。

「あ……石榴がなっている」

ふいに彼が言ったので、恭太も思わずその視線を追った。なるほど椿の葉の向こうから別の高い枝がのび出していて、うすく赤らんだ石榴の実が驚くほどたくさんついていた。

「君は石榴を食べたことあるかい？」

小暮が振り向いて訊いた。

「うん」と恭太はすぐに頷いたが、その時のことを思い出すと、急に笑いがこみあげてきた。

「何がおかしいんだ？」

小暮も笑った目でのぞきこんだ。特別大きくはないが、なんとなくこちらを惹きつけるような、快活で人懐こい

輝きをたたえた眸だった。

「学校の帰りに、よその家の庭になっていたやつを、友だちといっしょにとって食べたんです」

恭太はちょっと照れた口調で答えた。

「そしたら、翌る日朝礼の時、校長先生が、最近近所の家から、石榴を盗む者があるという文句が出ているが、そんなことは絶対しないようになんて……」

小暮は、今度はさもおかしそうに声を立てて笑いだした。

「君もそうか。実はぼくも、子供のころ、よくよその家の石榴をとって食べたものだ。石榴という果物は、買うものじゃなくて、盗んでくるものだと信じていたくらいだよ」

しばらくして、彼が今度は少し真剣な口調で尋ねた。

「君は、お父さんやお母さんに叱られて、家へ帰れなかったことはないか」

恭太はそれで父親の姿を心に浮かべた。父にひどく叱られたような記憶はない。第一物心ついてからの父は、朝、恭太が起きる時にはたいていまだ布団にもぐっていて、夕方遊びから帰ってきたころには勤めに出てしまっていた。休みの日には、上機嫌で散歩や縁日に連れていってくれた優しい父である。

「お母さんは時々おこるけど、それはぼくが遊びすぎて暗くなってから帰ったりした時で……叱られて帰れないなんてことはない」

「そうだろうな」と小暮は小さく頷いた。

「最近の家庭はみんなそんなふうだ」

やはり過保護の風潮だろうなどと、小暮は内心で思いながら、

「ぼくはね、長野県の田舎で育ったんだが、何か悪いことをして親父にこっぴどく叱られて家を逃げ出すと、怖くてなかなか帰れないことがあったよ。だんだん暗くなって、お腹がすいてくる。そういう時、石榴やグミはちょうどいい食い物だった。そんなふうに山道を一人でうろついている時には、自然は本当に友だちなんだ。今の子供たちが、遠足やレジャーで接するような、他人行儀な付き合いじゃなくて、自然が本当に生活の一部だという感じで……」

恭太は黙っていたが、小暮の話はなんとなく聞いていて愉しい気がした。

小暮が足を止めた。いつか左手には、蕪蔵寺の槇の生垣が続いている。

「この辺で、お寺から出てきた男の人に遇ったんだね」
「はい……」と恭太はかすかに重い声になって答えた。
「なるほど」
小暮は、生垣の隙間をのぞきこんでみたりしたが、しかし、もうその男について恭太から聞き出すことは断念していた。
彼が恭太に接することになったのは、警察と別個に現場付近の聞き込みに廻っていたさい、この坂の上の方にある剣道の道場で少年たちが恭太の噂をしているのを小耳に挟んだからであった。事件以来、恭太の家には、ちょくちょく刑事が訪ねてくる……。その事実をつかんだうえで、記者仲間では〝檀家〟と呼ぶ本庁捜査一課の中で日ごろから懇意にしている刑事に尋ねると、「目撃者」としての恭太の存在を打ちあけてくれたのだった。
他社でもそれぞれに檀家を持っているから、その方から聞き出して、たぶん恭太と接触を試みているだろう。
だが、今まで歩きながら尋ねた限りでは、肝腎の恭太の反応は、もう一つ釈然としない。記憶に自信がないのか、いやそれより、あの朝自分が出遇った男について喋ることが、どことなく気が進まないという印象の方が強い。質問を重ねると、彼は「憶えていない」と答える代わりに、なぜかちょっと辛そうに目を凝らして、沈黙してしまうからだ。
恭太は、坂の途中から現われた男に、谷川に落ちかけていたところを救けあげてもらったらしいから、それで彼を庇いたい心理が働いているのかもしれない。
あるいはそれは勘ぐりすぎかもわからないが、ともかく、少年の内部の記憶を、無理矢理ことばにさせる資格は、こちらにはないのだと小暮は考えている。
「もう一人、女の人が通りかかったといっていたね」
彼は質問の矛先を変えた。
「はい」
「どっちの方から来たの」
恭太は坂の上を指さし、それから小暮の問いに答えて、その女性が少しの間立ち止まって恭太たちの様子を見守った後、境内へ入っていった地点などを説明した。
「どんな感じの人だった？」
「青っぽい服を着て……痩せて、色の白い人だったと思います」
先の男と比べて、接触は少なかったにもかかわらず、この女性に関する方が、はるかに歯切れのよい応答だった。

「その人は、どこから来たのか、想像がつかないだろうか」
恭太は首をひねったが、やがて頭に浮かんだことがあった。考えてみれば、この「現場」に立って質問されたのは今朝が最初だから、それを思い出したのも、はじめてだったのだ。
「どこから来たかはわからないけど、その女の人のスカートの裾に、少し泥がはねていて、濡れた葉っぱなんかもついてたみたいだった」
「そうか……」
小暮は眸を光らせて頷いた。
二人は再び歩きだし、道場の方へ行く岐れ道で、今度は恭太が足を止めた。
「いろいろありがとう。稽古に遅れたんじゃないか」
「大丈夫です」
「それじゃあ、また会おう」
小暮は同年配の友人にするように、軽くあげた右手を勢いよく横に振った。
彼は少年の後ろ姿を見送ってから、坂道を真っ直ぐのぼっていった。
蕪蔵寺の生垣が切れると、その近辺に散在する高級住宅の私道がいくつか岐れていて、それもすぎると、意外にひろやかな野原に出る。野原の中の細い土道には、両側からススキやキリン草などの雑草が道を隠すように生い繁っていて、草の先はまだ重い朝露に濡れている。
恭太が最後に思い出してくれた事柄は、問題の女性がこの野原を歩いてきたことを暗示しているのではないかと、小暮は確信を深めた。手入れの行き届いた高級住宅の私道から出てきたのであれば、スカートに泥や木の葉がつくことはないだろう。
捜査はどこまで進展しているのだろうかと、濡れた草の匂う道を歩き続けながら、小暮は考えた。社の警察廻りの記者が、昨夜遅くまで西荻窪署の本部に粘ってつかんできた情報によれば、畑山の情婦だった林奈津実という女がようやく見つかったらしい。が、彼女はふだん阿佐谷南のアパートで寝起きしていて、週に二回ぐらい畑山の家に通っていただけで、彼の商売や人間関係についてはほとんど知らないと主張しているそうだ。また、事件当時の彼女のアリバイは一応成立しているという。
林奈津実の線は、今朝からは警察廻りともう一人のクラブ詰め記者とが追いかけている。
やがて野原がつき、疎い杉林の区域にかかった。木立

の間に、住宅や旅館らしい建物の屋根がひっそりと隠見される。

小暮はひとわたり見当をつけてから、まず「芳鹿荘」と看板の出ている和風旅館の小粋な門をくぐった。門から玄関まで砂利敷の小径が続き、紅葉などの低い植込みと、離れが散在している。なかなか高級旅館のようであった。

玄関のガラス戸は開放されていたが、朝早いために内部はシンとしている。

声をかけると、五十年配の地味な紬をきちんと着た大柄な女性が現われた。

小暮は名刺を出し、

「失礼ですが、女将さんでしょうか」

相手は名刺に視点を落としながら、

「はあ」と頷いた。

「朝から恐縮ですが、一昨日の事件のことで、少しお話を聞かせていただけませんか」

「はあ……」

女将は造作のはっきりした顔に渋い表情を浮かべて見返していたが、ちょうどこの時、帳場の方からお発ちらしい男女の客が出てくるのに気がつくと、

「では、ちょっとこちらへ」と玄関脇の応接セットへ小暮を請じ入れた。

彼女はもう一人の若い女中といっしょに客を送り出してから、小暮の前に戻ってきて浅く腰をおろした。

「ずいぶん早く帰るお客さんがあるんですね」

「ええ、それはいろいろ……」

「一昨日の朝はどんなふうだったんでしょうか。午前六時から六時半ぐらいの間に帰った客はいなかったでしょうか」

「七時すぎにお発ちになったのが最初なのですが……」

女将は小暮の顔を眺めながら、妙に落ち着いた口調で答えた。すでに刑事の聞き込みを受けているなと、小暮は判断した。

「七時ごろ発ったというのは……アベックですか」

「いえ……実は、七時に殿方がお勘定をなさってお出ましになったのですが、お連れの女性は、もっと早く、庭伝いにお帰りになった様子だったのです」

「七時より早く？　すると六時半前後にここを出たかもしれないのですね」

「ええ……でも時間ははっきりわからないのですよ。警察からもたびたび尋ねられたんですけど、うちは離れが

多いのと、人手不足で、なかなかそこまで注意が廻らないものですから……」

やはりもう警察の問合わせがあったのだ。そして、七時に発った男の連れの女性が問題になった模様である。確かに、もしその女が六時二十分ごろ、ここを出発したとすれば、六時半前後に蕪蔵寺付近を通り、重大な目撃者になっているかもしれないのだ。恭太が出遇ったのがその女性である可能性も強い。

小暮は、その男女について質問を続けた。これも一度は警察に喋ったことのようで、女将はしっかり者らしい要領のいいことば使いで答えてくれた。

彼らは、事件の前日の十月六日、夕方六時ごろ、先に女が着き、十分ほど遅れて男が入ってきたという。その三日前に、男の電話で離れの一室が予約されていた。

二人は芳鹿荘にははじめての客で、滞在中変わった様子もなく、つまり平凡なアベックの印象であった。

「すると二人の身許はわからないわけですか」

「ええ。宿帳に一応お名前と住所を書いていただいたんですが、そこには該当者がいなかったそうです」

女将はどこか癇性らしくも感じられる、よく透る声で答える。警察に口止めされているふうにも見えない。

「いくつくらいの人でした？」

「殿方は四十まえという感じで……女の方は、私は直接お顔を見てないのです」

「では係の女中さんは……？」

「ええ、係の女中の話では、良い家の奥さまふうだったそうですけど、なんとなく顔を隠していらっしゃるみたいだったとか……」

良家の人妻の情事であったのなら、それももっともかもしれない。

「できたらその女中さんに、直接話を聞かせていただけないでしょうか」

女将はくっきりした眉を寄せて、迷惑そうな表情を浮かべた。が、少ししてから、帳場の方へ顔を向けて、

「ミカちゃんいるかしら」とかん高い声で呼んだ。

「はい……」

気重い返事が聞こえ、出てきたのは、さっき女将と並んで客を送り出していた紺のワンピースを着た女中だった。まだ二十歳ぐらいの、色の白い娘である。

彼女は女将に促されて、うつむきがちにその隣りに膝をおろした。

小暮はミカと呼ばれたその女中にも、新聞社と自分の

名を名乗った。それから、問題の女客の印象を尋ねた。
「――よく見なかったから、あんまり憶えてないんです。離れへご案内したときは、私が先に歩いてましたし……」
女中の低い声には、どこかの地方訛りが感じられた。
「しかし、夕食を運んだのもあなたでしょう？」
「ええ。でもその時も、女の方は庭を眺めていらしたし……」
ミカは上目使いに時折り小暮を見るが、ほとんどうつむいたままで答える。ひどく固くなっているみたいなのは、女将がボリュームのある上体を捩るようにして横顔を見守っているためかもしれない。
「では、良い家の奥さんふうと感じたのは……たとえばダイアの指輪でもはめていたからですか」
小暮は具体的な訊き方をした。相手の口がほぐれにくい時、よく試みる方法である。すると彼女は、これには即座に首を振った。
「いいえ、ダイアははめてなかったけど」
「それなら、着ていた服が非常に上質だったとか？」
「いいえ、別にそんなことも……」
具体的な質問に対しては、答えは意外にしっかりしていた。
「すると、良家の、それも奥さんらしいと思ったのは、どんなことからなのかな」
ミカは膝の上で指を組んだりほぐしたりしていたが、
「なんとなく、落ち着いた感じで、上品そうだったし……奥さんだと思ったのは、左の薬指にパールの指輪をはめてらっしゃるのがチラッと見えたから……」
なぜか躊躇のからんだ、重苦しい答え方だった。年齢は三十すぎ、痩せ型で、ブルーのスーツを着ていたという。
「でも、たいてい顔を伏せてらしたし、私はあまりよく見なかったから……」
ミカは女将の方に一度視線を走らせてから、最初のことばをくり返した。
男女の年配や印象はこれでどうにか見当がついたが、肝腎の身許は探りようがなかった。
小暮は礼をのべて、ひとまず芳鹿荘を出た。
続いてもう少し奥まった位置の、割烹旅館と連れ込みふうのホテルに、同様の問合わせを試みた。だがどちらも、事件の朝出入りした者はいないという、はっきりした回答であった。

斜面の一帯には、ほかに高級住宅が三軒ほど散らばっているだけで、やがて丘は下りにかかる。その辺からなら、たいていどこへ行くにも、善福寺公園を廻るより、逆に青梅街道へ出た方が早道のはずだ。

となると、最初の芳鹿荘で聞いた、事件の朝七時以前に帰った女客が、蕪蔵寺の横で恭太たちと出くわした可能性はいよいよ大きくなってくる。年齢、体格、服の色なども、女中と恭太の話は一致している。

すると彼女は、恭太を土手から助けあげて立ち去った男を憶えているだろうし、事件発生直後に現場付近を歩いたわけだから、もっとほかにも重大な手懸かりになる事実を目撃しているかもわからない。しかも、良家の人妻の情事を想像させるムードだけに、今後彼女が自分から名乗り出て証言することはまず期待できないだろう。

その女の身許を知りたいと、小暮は強く思った。警察も芳鹿荘で足踏み状態なのではあるまいか。

彼がゆるい坂を戻って、再び芳鹿荘の門の前を通りかかったころには、透明度を増した陽光が杉木立の間にさしこんでいた。が、あたりはまだ早朝の静寂に包まれている。

丸木を磨いた円柱のすぐ内側に、一人の女の姿が見えた。ウェーブをつけて顔の両側に垂らした髪、プレーンな紺のワンピース……さっきのミカと呼ばれた女中だと一目でわかった。

彼女が何のためにそこに佇んでいたのかは、見ただけではわからない。庭掃除をするつもりか、客を送り出した後でもあったのか。しかし——視線がぶつかった瞬間、小暮はふと、彼女が自分が戻ってくるのを予期して、そこに立っていたような気がした。相手の内気らしい茶色い眸の奥に、何かの表情が動いたからである。と同時に、それまで彼の意識の隅にわだかまっていた漠然とした不審感が、ふいにはっきりした形をとった。ミカは、問題の女客について、尋ねてみれば、案外細かな観察をしていたことがうかがわれる。それなのに、自分はよく見ていなかったと、しきりに強調するのはなぜか……？

小暮は門をくぐってミカに近づいた。彼女はどこかうろたえた様子で、砂利敷の奥の玄関へ、憚るような視線を投げた。

小暮は「ちょっと」と囁き、肩を押して門の外へ出た。

玄関から見通せない場所で、そばに立つと、ミカは目を伏せた。

「ねえ……あなたは、さっき話に出た女性のことを、案外注意深く見ていたんじゃないの」
「別に、そんなでも……」
「そうかな。でも服がそれほど高級品ではなかったとか、左の薬指にパールの指輪をはめていたなんて答えられるのは、よく観察していた証拠でしょう？」
ミカはまだうつむいたまま、
「私、ほんとに、よく見てたわけじゃないんです」と呟いた。
「どうしてあなたはそのことを、そんなに繰り返しているのかなあ。——例の女性はね、一昨日の殺人事件に関わる重大な目撃者かもしれないんだ。事件の鍵を握っているかもわからない。だから、もしあなたが何か知っているなら……」
ミカがひょいと顔をあげて、まじまじと小暮を見つめた。そのまだ稚さを残した偏平な顔全体に、今しがた彼と視線を合わせた時と同じ、何か強い反応が浮かび出ていた。
「そんなに大事なんですか、あの女のこと……？」
「その可能性は大いにありますね」
「あの……」
二、三度瞬きしてから、
「あの女のことは本当に知らないんですけど、連れの男の方は……」
「知っているの？」
「いえ……その連れのことを知っているらしい男の人が、二人がうちへ着いたあとで、少しの間休憩していったんです」
ミカはようやく決心した表情で、小暮の背後の叢に目を凝らした。
「その男が、あなたに何か喋ったんですか」
「ええ。……お二人が離れに落ち着いたあと、続いていらしたお客さん——男の人一人だったんですが、その方を別のお部屋にお通ししたら、いきなり、今しがた着いたアベックのことをいろいろ尋ねるんです。はじめてのお客さんだからと答えると、女のほうの身許がわからないだろうかって……」
「うむ」
「たまに私立探偵社の人がそんなことを聞きにくるんですが……男の方とは少しは話をするけど、女のほうは全然わからないといったんです。そしたら、男はいいんだ。女について、とにかくできるだけ探ってみてくれと

……」

その客は、くたびれた背広を着た三十五、六の男だったそうで、アベックが着いた直後の午後六時ごろから二時間ほど、一人でビールを飲んで粘っていたが、アベックが離れの外に出る気配がまったくないので、あきらめたように腰をあげた。ミカに、二人が一泊の予定だと聞いて、翌朝もう一度来るから、それまでに女を観察しておいてほしい。女の素性や身許を暗示する事柄があれば何でもいいから教えてくれと、念を押して帰っていった。

「で、その男は翌朝も来たんですか」

「いいえ、八時半ごろ私に電話をかけてきました。それで、二人ともう帰られたといったら、残念そうに舌打ちしてたけど、でももしまた二人が来たら、その時はすぐ自分に知らせてほしいといって……」

「では相手の連絡先はわかるんですか」

「名刺をもらったから……」

小暮は少し黙っていたが、

「あなたは、その話を、どうして警察に言わなかったわけ？」

穏やかに尋ねたが、ミカは急にまた顔を伏せた。それが癖らしく、ふっくらした指を組んだりほぐしたりしている。

「その男から、金を受け取ったのですか」

「帰りがけに、名刺といっしょに五千円……返そうとしたんですけど、無理矢理押しつけるみたいにして……」

「なるほど」

「でもうちの女将さんは、そういうことにすごくやかましいし……刑事さんに話したら、なんだか大事になりそうで……」

ミカは一段と訛りの強い口調で呟いて、ホッと溜息をついた。

「よくわかりました。あなたの名は絶対に出さないようにするから――」

それから彼は、問題の男の連絡先を尋ねた。

「それが、やっぱり新聞記者みたいなんです。でも、あんまり聞いたことない新聞だけど……」

ミカはワンピースのポケットから名刺をとり出した。やはり彼女は、小暮に相談してみようかと迷いながら、門のそばまで出ていたらしい。

名刺には《新化学通信記者、波多野勇七》とあり、左下に東大久保の会社の住所と電話番号が印刷されている。

「新化学通信……」

小暮が思わず呟いたのは、意外だったからで、その新聞の名を知らなかったわけではない。新化学通信は、化学工業関係の業界紙だが、その中では伝統も浅いし、強力なスポンサーがついているわけでもなく、まず二流か三流の小新聞である。

小暮は昨年警視庁クラブ詰めになるまでは、三年間遊軍をやっていて、その時代には食品公害の問題などで、化学業界紙の記者とも接触する機会を持った。が、名刺の男には直接会った憶えはない。それにしても、業界紙の記者が追跡する人妻の情事――？

小暮は、何か鮮烈な対象に行き当たる前の、予感に似た昂ぶりを覚えた。

4

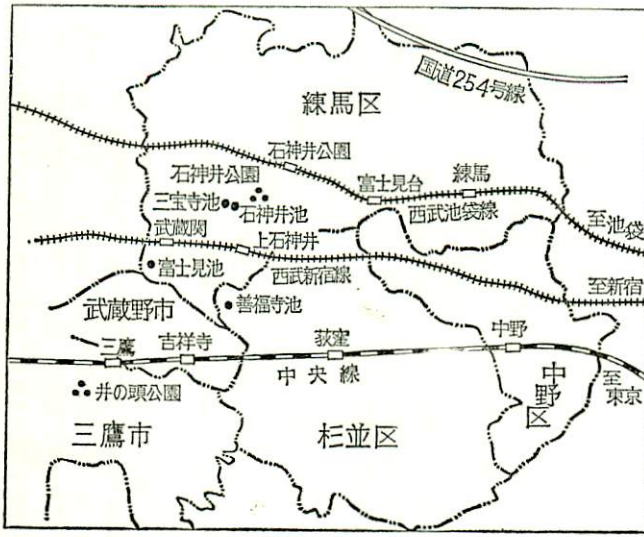
お腹がグーグー鳴る音が聞こえるたびに、恭太の足運びは自然に早まって、二本の腕が力一杯ハンドルを前に押し出す。遅くも七時五十分には家に帰り着かないと、学校へ行く前に朝ご飯を食べる暇がないのだ。恭太は、クラスの友だちがもう何人かは持っている腕時計を、まだ買ってもらっていないが、さっき道場を出ぎわに時間を見たから、およその見当がつく。もう七時四十五分になるころだろう。

今朝は早めに家を出たのだが、途中で日本新報の記者につかまって、結局稽古が終わった時はふだんより少し遅くなってしまっていた。

近所から同じ道場に通っている友だちとは、往きの道がちがい、恭太は蕪蔵寺の下に自転車を置いてくるので、自然と帰りも一人になる。

青梅街道はフルスピードで走り、この富士見池までも一気にとばしてきたのだが、高い石垣で固められている細長い瓢箪形の池のふちだけは、自転車を降りて歩かなければならない。石垣の上の道は細くて、ところどころ大きな穴があいたりしているから、ひとつまちがうと池に転落する危険があるのだ。

練馬区、杉並区の西端部が都下の保谷市や武蔵野市に接している南北にかけての一帯には、かなり大きな池がいくつかある。北から石神井池、三宝寺池、少し西にずれて富士見池、それから善福寺池、井の頭公園と分布している。その地形は社会の時間に地図で習ったし、恭太は友だちとよくサイクリングに出かけるので、わりにく



わしく知っている。どの池も周辺にはまだきれいな深い緑の樹林が残されていて、朝夕などは都内とは信じられないほど人気の絶えた静かさに包まれる。

この富士見池にしても、恭太は週に三回道場の往き帰りに通るわけだけれども、時間が早いせいもあってか、めったに人に出遇ったことがない。池の周囲は車の通れる道幅ではないし、そこだけ窪地のために、駅へ歩いていく通勤者の早道にもならないのかもしれない。

だが、どういうものか、恭太はあまり人の通らない道を、一人で歩くのが好きなたちだった。

富士見池は善福寺池とちがって、水ぎわに植込みなどはほとんどなく、代わりに白い石垣でぐるりと縁取りされている。それで全体にちょっと素っ気ない感じがする。外周の高い林の外側を走る西武線の電車の音だけが、ほとんど絶えまなく響いてくる。

またお腹が鳴って、その底から空腹感が湧きあがってくると、恭太はいよいよハンドルを押す手に力をこめた。この池を通り抜けて、再び上りになる道をひと頑張りすれば、まもなく、からっぽの胃の腑へ、熱いご飯と味噌汁を流しこむことができるのだ。

本来なら、もう今時分にそれができていたはずなのだ

が……といって、恭太はあの小暮と名乗った新聞記者に往きの時間を少し潰されたことを、不思議に忌々しいとは感じていなかった。むしろ「おとなと対等に話をした」あとの充実感みたいなものが、自分ではさほど意識していないつもりでも、なんとなくさわやかに胸底に漂っていた。

細長い池の中ほどに渡された白い鉄の橋が近づいてきた時、池とは反対側の雑木林の方向から、ザワザワといった葉ずれの音が聞こえた。池縁の道と林の間には、ぬかるみと叢が帯のように続いている。葉ずれはそのどこかから聞こえたようだ。

恭太はちょっと身体が固くなった。犬は苦手の方だ。案の定、野良犬だった。茶色い毛がうす汚れた大きな犬が、すぐ先で道にあがると、獰猛そうな眼光をたたえて、恭太のそばをすれちがった。

それを横目に見て、ホッとして顔を戻した彼は、今度は十メートルほど先の橋の手前に、サングラスをかけた背の高い男が立っているのに気がついた。

恭太は一瞬ひどく意外な気がした。男が橋を渡ってきたのなら、もっと早く気がついていたはずなのに。犬に注意を奪われていたからか？……いや、やはり男は橋の上を歩いてきたのではなく、雑木林から叢をまたいで、いきなり道に出てきたらしい感じだった。

恭太が進んでいくと、男もこちらへ向かって歩きだした。グレーのハンチングをかぶり、焦茶のジャンパーを羽織っている。その肩を揺すって、ちょっと不良っぽい歩き方をした。

男は恭太の前まできて、足をとめた。それで恭太は道を訊かれるのかと思ったが、いやに間近に立ったので、少し戸惑ったほどである。彼はジッとこちらを見おろしているようだが、濃いサングラスをかけているので、目の表情がわからない。ハンチングを深めにかぶり、その下から前髪を額に垂らしていることも、顔全体の印象を不明瞭にしていた。

道を訊く代わりに、男は尖った腰を動かして、恭太から自転車、荷台にくくりつけた竹刀などを眺めまわしたようである。

「君、善福寺公園の上の道場に通ってるんだろう？」

男は鼻にかかったような、どこか不安定な声を出した。関西弁の訛りが、かすかに感じられた。

「そうです」

「今は、帰り？」

「はい」
「急ぐのかい？」
「学校があるから……」
また新聞記者かと、恭太が歩きだしかけると、男はハンドルを押えるように手をかけた。
「実はちょっと頼みたいことがあるんだ。いや、大して時間はかからないよ」
急に少し早口になり、返事の暇を与えずに、
「今そこで、変なものを見つけたもんだからね」
林の方を指さした。
「警察に届けた方がいいと思うんだが、俺が巡査を呼んでくる間、番をしていてくれないか」
「変なものって……？」
「うむ……運ぶにはちょっと重いんでね」
言いながら、彼はもう叢に足を踏み入れている。
仕方なく、恭太は自転車のスタンドをおろした。朝ご飯を我慢することにして、ギリギリに帰ればいい。一体どんなものを男が見つけたのか。空腹感より好奇心の方が強くなっていた。
男は一度恭太を振り返ってから、ずんずん林の奥へ入っていく。さほど深い林ではないが、密集した高い木立に朝の光が遮られ、急に暗い感じになる。足許にはたくさんの枯れ葉が濡れた土にはりついていた。
男はひときわ太い銀杏の木のそばまで行って、恭太を手招きした。それから木の向こう側の根元をのぞきこんでいる。恭太はしだいに緊張を覚えながら歩み寄った。
恭太が、男の後ろから首をのばしかけた時、彼はくるりと振り返った。と、やにわに骨ばった掌が恭太の口を塞いだ。あっと思う間に、恭太は枯れ葉の上に押し倒された。ズックの踵がぬるりとした土を蹴り、木の根に突き当たった。
男の身体が押しかぶさってきた。恭太は必死でもがいているつもりだが、相手の膝や肱ががむしゃらな力で押えつけてくる。しっかりと口を塞がれているので、声も出ない。息苦しさが一層の恐怖を煽った。窒息しそうだ！
もう一度死物狂いで頭を振ると、その掌が外れ、代わりに両手の指が恭太の首をつかんだ。身体は押えつけられたまま、どうにも動けない。青黒く濁った肌が眼前にひろがった。サングラスの奥で異様に見開いた目、荒々しい息——そうだ、この男が、人殺しの犯人にちがいない！

直感が脳裡を走り、はじめてかすれた悲鳴が恭太の喉をついたが、その声はちょうど林の外を通過した電車の響きにかき消された。

三章　仮の宿り

1

「慄えているね」

各務徹夫が麻子の耳許で囁いた。

麻子はかすかに首を横に振ったが、自分でも彼の胸の中に埋めた上半身が細かく慄えているのに気がつくと、相手の背中に廻した両手に力をこめ、いっそう強く、白いワイシャツに顔を押しつけた。するとほのかに彼の匂いが漂った。清潔な男の体臭と、どこかくちなしに似た、シェービングローションの懐かしい香り……。

各務も、そんな麻子を、もう一度包みこむように抱きしめた。

頭の中が真空になり、いっさいの現実から隔離された

陶酔のいっときが、二人の上に流れた。

ようやく身体を離した時、麻子の目には知らぬ間に涙があふれていた。

各務は麻子の顔をのぞきこむと、指先でそっと、白い頬にこぼれた涙を拭ってやった。逢引きのたびにしばしば涙を流す麻子だから、それほど驚くことではなかったが、今日の彼女は顔色が蒼ざめ、いつになく屈託ありげに見えるのが、彼の不安をそそった。

井の頭公園に隣接した小さな旅館の一室には、レースのカーテンを通して、赤味の強い秋の西陽がさしこんでいる。窓の外で、時折り乾いた風の音が鳴った。

善福寺の芳鹿荘で一夜をあかしてから、まだ六日目である。各務の大学の日程と麻子の都合を合わせると、二人が逢えるのは、ふつうせいぜい十日に一度ぐらいだった。が、今日は麻子の方から前橋の大学に電話をかけてきて、土曜日で、早目に帰ってきた各務と落ち合っている。

その時のめずらしくやや強引な口調を思い出すと、各務はいっそう気がかりになった。

「何かあったんじゃないですか」

麻子は瞼を伏せて、息をつめていたが、

「私、こわいの」

縋るように各務を見あげた。

「なんだか、主人に何もかも見透かされているみたいで……」

「ご主人に、何か言われたんですか」

「いえ、そういうわけじゃないけど……でも、このごろ私を見る目が、どことなく、冷たく観察しているような……」

麻子は口に出して訴えると、そのことが改めて実感として胸に迫ってきた。夫の桂木謙介は、目下群馬のE工場の公害紛争に精力を集中している。本社総務部次長と工場次長兼任の立場では、その種の問題には真っ先に矢面に立たなければならないのだろう。

また彼自身としても、工場は用地買収の段階から手塩にかけたものである。公害問題にも、おそらく社内の誰よりも鋭敏に神経を尖らせていたかもしれない。それだけに、プラントの操作ミスをきっかけにして紛争が激化しはじめた今年の二月以来、彼は帰宅してからでさえ、まるで敵に対して身構えるように表情を引き締め、鋭い目の底に異様な熱気さえたたえていた。

しかし、そんな夫の目が、時折り自分の上にジッと、

不自然なほど長く留まっていることに、麻子は最近気がつきはじめている。そして、ほかの時には、たとえばテレビを見ていても、狭い庭の植木を眺めていても、彼の心は会社の問題に占められているのに、麻子を凝視している時だけは、彼の思考も麻子に絞られているように感じられる。それも、もしかしたら、特定の疑惑にもとづいて——？

考えてみれば、皮肉な話である。以前麻子が、ひたすら夫に尽くし、代わりにわずかでも感謝や労りのことばがほしいと願ったころ、夫の視線はいつも無関心に麻子の上を通過していた。ところが、いったん麻子の心が離れ、ひそかな世界を泳ぎはじめると、まるでその詮議の下準備をするかのような細心さで、彼はこちらを観察しているみたいだ……。

曇った眼差しをまた畳に落としている麻子を、各務はしばらく黙って見守っていたが、やがて、

「ははは」と強いて朗かな声をたてて笑った。

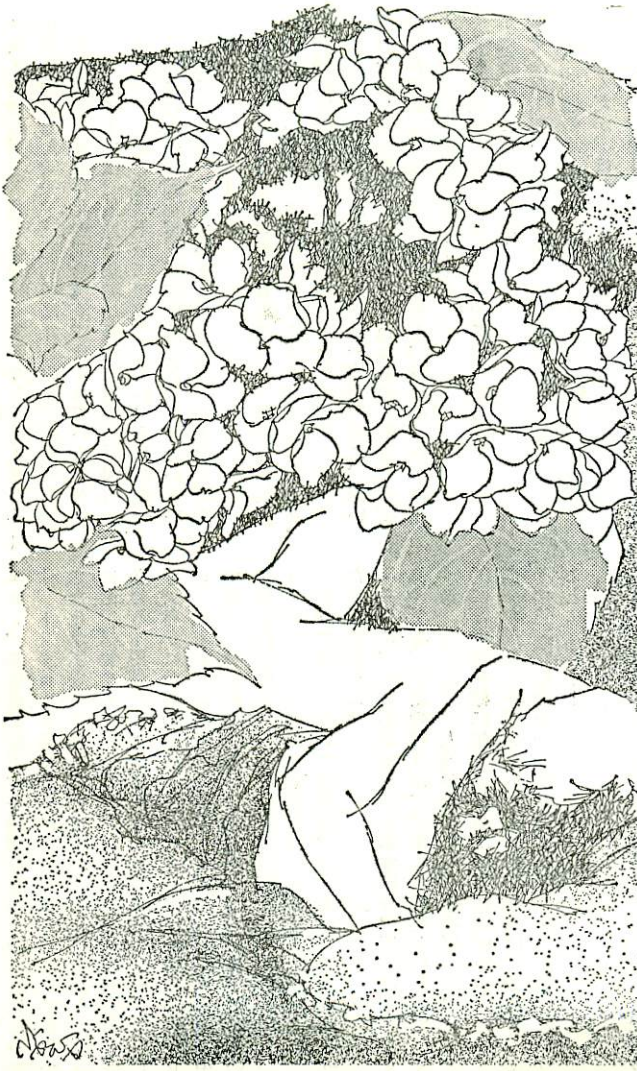
「あなたは心配性だからなあ。——気のせいですよ。お互いにこれだけ注意しているんだ。めったに人に感づかれるはずはないですよ。それにご主人は今……」

とても妻の様子にまで気を配っている余裕はないはずだと言いかけて、彼も思わず口をつぐんだ。麻子の秘かな恋人が、同じ公害紛争の中で一つの重要な役割を受け持っている各務であることは、万一露顕した場合には、問題を数倍も深刻で複雑なものにするだろう。それはそのまま、各務自身の身にふりかかってくる問題でもあるのだ。

各務の講座へ、県の衛生部を通して、共立電化の工場周辺の地下水分析の依頼が持ちこまれた当初、彼は正直なところ、できるなら、断わりたいほどの戸惑いを覚えた。それは今年の五月だったが、すでに彼と麻子の間は、引き返せないところまできていた。しかも麻子の夫が、今度の問題ではいわば会社側代表の立場にあることも知っていたからである。

しかし、群馬医大は地元では唯一の国立医科大学であり、公衆衛生学講座は、現在は教授欠員ながら、全国的にも長い実績を評価されている。各務の立場として分析依頼を断わる表向きの理由は何一つなかったし、彼自身、麻子との関係を切り離せば、やらねばならないという責任感も働いた。

彼は講座の助手と研究補助員の四名のスタッフで、ガスクロマトグラフィーによる地下水の分析、およびアミ



ソ系化合物に関する過去の研究例を手に入る限り集めて慎重に検討した結果、三週間後に報告をまとめた。

結論は——共立電化の工場排液に含まれているシクロヘキシルアミンは、最近の急激な農作物被害の原因の一つとなっていることは十分に想像されるが、それが唯一あるいは最大の原因物質と断定することはできないという内容になった。一口でいえば「複合公害」との見解である。

これは、共立電化を攻撃の対象に絞り、高額な補償金を要求している被害者連絡協議会には不利な報告となり、会社側には好都合なものであったといえる。

この報告が公表された後、麻子は一度だけ彼に、深い恐れを含んだ婉曲な言い廻しで尋ねたものである。今度の報告の内容には、ほんの少しでも、麻子の存在が作用していなかったかどうか……？

その時彼は、女の眸を真っ直ぐにのぞきこんで、穏やかに答えることができた。

「そんな気遣いは無用ですよ。心配ならくわしく話しますが、問題の地下水からは、シクロの塩酸塩、炭酸塩はもちろんだが、ほかにも、酢酸、カプロン酸などの酸類、それにトリクロールエチレン、一一一一トリクロールエタン、各種農薬など、多種類な薬物が検出されたのです。トリクロール類や農薬は、共立電化の近くにある小さな化学工場が生産していますね。そしてそれらの薬品にも、植物や人体に対して、シクロと同様の被害を想像させる作用がある。こうなると量の問題になるわけです。確かに分析の結果では、シクロの塩が約二〇〇ppmで最も多量に出てはいるんですが、一方シクロは土中で非常に分解が早いという特性を持っている。これらの条件を総合的に考察した結果、結局全体の複合公害という見解が一番適切だと考えられたわけなんです」

各務の噛みくだいた説明は、ひとまず麻子を安堵させたように見えた。

「一体に、生物がある反応を示す場合、原因はさまざまあっても、反応の様式は、非常に単純だといわれていますね。たとえば、人間が咳をする。その原因は、病理学的には多種多様に想像されるが、人体は咳を出すという同一の反応しか示さない。これを裏返せば、咳によって、その正確な原因を一つ割り出すのは、実に困難だということになる……」

「……」

「まあ、今度の報告は、被害者団体にはもちろんだろう

が、ジャーナリズムにも食い足りなかったでしょうね。彼らは何事にせよ、黒か白かはっきりさせたがる。その方が世間に訴えやすいですからね。それに公害の問題は、厳しすぎるほど厳しくてもいいのだとも考えられるわけですが……しかし、学究の立場に返れば、やはり純粋に対象だけに目を当て、確証のない表現はすこしでも避けたい。それがわれわれの良心だと思わずにはいられないのです……」

この時麻子に語ったことばに、偽りはなかったのだ。しかし、世間やマスコミが、彼の報告を必ずしも白紙な気持ちで受け取ってくれているとは限らないだろう。現に、群馬医大は共立電化と癒着していると、被害者側は攻撃しているし、そんな疑いを向けている第三者も少なくないのかもしれない。

連絡協議会は各務らの報告を不満として、東京の大学に再度分析を依頼する手はずだという。

こんな矢先、もし万一、各務と麻子との関係が世間に洩れたら?——そのスキャンダルは、おそらく、二人とそして桂木謙介を、それぞれ決定的な形で破滅へ追いこむにちがいない。

ふと、そんな日がいつか来るような予感が胸裡をかすめ、各務は麻子の肩を抱いたまま、かすかに身じろぎした。

薄氷を踏む思いとは、まさに、こんなものかもしれない。それなら麻子と別れればいいのだと百も承知していながら、己れの心がどうにもならないという人間の不可思議を、彼は三十七歳の今日になって、はじめて身に染みて経験した。麻子を抜きにした生活など、今の彼にはもう想像もつかないのだ。三十歳の時、恩師の姪と淡い好意を抱きあって結婚したが、生来病弱だった妻は、二年後に子供も残さずあっけなく他界してしまった。それ以後彼は独身で、東京の大学を助教授で定年退職した父と母との三人暮らしを続けてきた。

この先麻子のいない生活が想像できないのは、幼馴染みの彼女と離れ離れにすごしてきた過去の約二十年間が、まるで虚で、非現実的にすら感じられるのとも似ていた。自分の人生は、目に見えない自然の絆で固く麻子と結ばれていたのではないかと、最近各務は心から思うこともある。

無理にまた麻子と別れでもしたら、それはかえって、元も子もないほど自分を破壊してしまうだろう。そう考えることで、彼は自分の行動を正当化しようとする。気

をつければいいのだ、これからも。細心の注意を払えば……！

「さあ、もうそんな話はやめて」

各務は麻子の腭に指をそえて、こちらへ向かせた。

「せめてこうして逢っている時ぐらい、お互いに苦しむのはやめよう」

唇で麻子の鼻先に触れ、次にはまた長い接吻を交わした。そのまま畳の上に抱き倒した。麻子はされるままになりながらも、まだどこか翳った眼差しで、彼の胸のあたりを見つめていた。

「どうしたの。今日はなんだかおかしいな」

「……」

「また何か心配の種を見つけたんですか」

返事を予期せず、むしろ揶揄い半分の口調で訊いてみたが、麻子は意外に、

「ええ」

「――？」

「この間電話でお話しした事件のことなんですけど…」

ああ、と各務はようやく思い出した。芳鹿荘で別れた翌日、麻子は大学へ電話してきて、善福寺で発生した殺人事件と、彼女が無蔵寺横の坂道で出くわした出来事について話した。その時の男は、もしかしたら犯人ではなかったかと、心細い声で訴えた。

が、各務は「まさか」と笑い流した。事件は新聞で知っていたが、そんな偶然がザラにあるものではないといった単純な常識と、いずれにせよ無関係ですます以外にないのだという気持ちが、煩わしいものに蓋をするように、彼を強いて笑わせたのかもしれなかった。

そのまま忘れ去っていたのだ。

麻子は身体を起こして、真剣な目を彼に注いだ。

「やっぱり、あの男は事件に関係があるんじゃないかと思うんです」

「どうしてまた――？」

「あの時の子供が、狙われているんです」

「え？」

麻子はハンドバッグをたぐり寄せると、中から折りたたんだ新聞を取り出してひろげた。彼女の家でとっている日本新報の十月九日、つまり三日前の夕刊だった。

《小学生襲わる――剣道の稽古帰り》

各務は指さされた一段見出しの小さな記事を読んだ。内容は――九日朝七時五十分ごろ、剣道の道場から自宅へ帰る途中の小学三年生の少年が、練馬区関町の富士見

池のそばで、二十五、六歳のハンチングをかぶりサングラスをかけた背の高い男に林へ連れこまれ、乱暴されかかったが、折りよく池のそばをパトロール中の警官が通りかかったため、男は少年を離して逃げ去った、というものである。

《――K君は、「会ったことのない男だったが、殺されるかと思った」と怯えていた。現場付近は、この夏には一人歩きの女性が痴漢に襲われたこともあり、石神井署では一応変質者の犯行と見て捜査を開始している……》

「そのK君というのは、あの朝私が出遇った子供なんです。私、この記事を読んで、もしやと思ったものだから、それらしい剣道の道場に問い合わせてみたんです。そしたらやっぱり普福寺公園から蕪蔵寺の横を通ってくるのは、その久藤君という子一人だそうですわ。それにその子は、金融業者殺しが起きた後、警察からいろいろ訊かれたらしいなんてことも、チラッと話してました」

「それで？」と各務は努めて平静な声で先を促した。

「私があの境内からとび出してきた男を目撃したように――いえ、あの子はもっと間近に男の顔を見たはずです。私、これを読んでもしやと思ったというのは、あの男が殺人事件の犯人で、犯人はあの子の口を封じるために殺そうとしたのじゃないでしょうか」

「しかし……この記事では、少年を襲ったのは二十五、六の背の高い男で、少年は会ったことがないと言っている。あなたが見た男は、もう少し年配で、そんなに背も高くなかったという話でしたね」

「ええ、この間はそう申しましたけれど……はっきり断定できないわ。あの子供にしても、どこまで憶えていたか……ハンチングとサングラスでごまかされていたかもしれないし……それにもし別人としても、少年を襲ったのは仲間の仕業かもしれません」

「うむ……が、いずれにせよ、そういうことなら、警察がこの子の話を聞いて、すぐに手配しているでしょう」

「でもここには、変質者の犯行と見て……」

「それは、この間の事件とは所轄署もちがうし、最初はそんな解釈を下したのかもしれない。しかし関連があれば、当然すぐに気がつきますよ。警察ではわれわれ以上に神経を尖らせているはずなんだから。それに、捜査の都合上、新聞には細かいことを伏せておく場合もあるだろうし」

「そうでしょうか」
麻子は何かに怯えた時の癖で、長い上下の睫を寄せて、慄えるように瞬きした。
「私、なんだか心配でたまらないの。殺人事件から二日もたってこんなことが起こるなんて……」
「というと？」
「もし事件直後にあの子が警察から訊かれた時、男の人相なんかをはっきり申し立てて、警察でもそれを取りあげていたら、こんな目にあう前に何かのかたちであの子を保護していたでしょう。犯人だって、あんな危険な行動に出るはずはないと思えるんですけど……」
「するとあなたは、この少年の話が、警察であまり重視されていないと考えるわけですか」
「そうじゃないでしょうか」
「さあ……」
各務は、陽が衰えてきた窓外へ目を移した。
子供の証言能力をどこまで認めるかは、犯罪捜査でも、裁判の段階でも、しばしば争点になるようだ。各務には畑ちがいの問題だが、一般に近年では、ずいぶん年少の幼児の証言でも、証拠として採用される例が増えているように思われる。二、三年前、幼稚園の通園バスが降りたばかりの園児を轢き殺した事件で、最高裁が、その場に居合わせた四歳と五歳の子供の証言だけを決め手として、バスの運転手に有罪判決を下したニュースは、当時大きく取りあげられた。それ以後にも、ある殺人事件で、わずか二歳の幼児のことばが、重要証拠の一つと認められたケースが、記憶に残っている。
が、これもあくまでケース・バイ・ケースであろう。たとえ小学三年生でも、証言があやふやなら、当然証拠能力は軽減し、その結果、警察が目撃者としての子供の身の安全まで顧慮しなかったという場合も想像される……。
「でも今度みたいな事件があれば、もう警察も放っておくことはないですよ」
「そうかしら……」
麻子はまだ自分の爪先に目を凝らしている。そのか細い横顔が、ふと各務に小学生のころの彼女を思い出させた。ふだんは無口でもの静かな少女だったが、時たま、いったん言い出したら決して後へ退かない芯の強さをのぞかせた……。
「私、悪い方にばかり考えるのかもしれませんけど……富士見池では夏にも痴漢が出たと書いてありますし、警察でも案外簡単にその種の事件と考えて、そのうえ犯人

が畑山事件の朝の男とは年恰好もちがうとなると、無関係として見すごされてしまうのではないでしょうか」

「……」

「一方犯人側は、またあの子に顔を見られたわけですから、二つの事件が結びつかないうちに、今度こそ確実にあの子の口を封じてしまおうと考えるのではないかしら」

「うむ……」

各務も知らぬまに腕を組んでいた。麻子の懸念を、最初は一笑に付したつもりだったが、いつかその真剣さにひきずられていた。心配性の麻子らしい杞憂ならいいのだが、女の直感は時には思いもかけぬ洞察を生むことがある。臭いものに蓋をする態度ですり抜けられる問題ではないような胸騒ぎが起こりはじめている。

麻子の方が先に顔をあげた。一段とつきつめた眼差しになっている。

「徹夫さん、もし――もし私が警察に出頭して、あの朝の出来事を証言したら……おとなの私なら、警察でも信用してくれるでしょう。男の横顔の感じなんか、私、わりによく憶えていますから。そうすれば、もしあの男があやしい場合、あの子の話とあわせてモンタージュ写真なんかも作れるかもしれないし、とにかくその前に、あの子は安全に保護されるにちがいありません」

「しかし、それでは……」

それではいっさいが白日に晒される危険性が大きい。もし麻子が出頭すれば、重大な目撃者だけに、警察としてもその話の裏付けを得るために、前後の行動もくわしく確認しようとするだろう。芳鹿荘の一夜が明るみに出れば――もちろん麻子が個人の秘密は公表しないでほしいと頼むとしても、それがどのくらい守られるものか、ジャーナリズムに嗅ぎつけられずにすむかどうか、……各務には悲観的な予測の方が強い。そればかりか警察では、七時すぎに芳鹿荘を出た彼自身も何か手懸かりをつかんでいないかと、彼の出頭まで要請しないとも限らない。

そして、二人の関係がいったん世間に洩れたが最後……たちまちその事実は、共立電化と群馬医大の癒着に置き換えられ、桂木も各務もそれぞれの社会的地位を失墜するだろう。そしておそらく二度と、各務と麻子がこんなふうに逢うことは望めまい……。

麻子にも、それは痛いほどわかっている。

彼女はまたうつむいてしまった。やがて、かすれた声で、

「あなたのお考えどおりにしますわ。私はまだ、何も決めてないの。あなたに相談してからと思って……」

二人はしばらく沈黙していた。

麻子の目尻にまた涙が滲み出したのを見ると、各務は断ち切るように言った。

「もうしばらく、様子を見てみましょう」

「でも、もしその間にあの子の身に取り返しのつかないことが……」

「十中八九、そんな心配はありませんよ。何度もいうように、警察だって新聞に手のうち全部を晒すわけじゃない。ちゃんと打つ手は打っていますよ。——ね、この問題はぼくにあずけてください。あなたはもう何も心配しないで」

確かに、麻子の苦悩を肩替わりするつもりで、各務は結論を下したのだ。だが、結局は臭いものに蓋をしようというのではないか？ ——呵責の針が、彼の胸を刺した。

2

このまま自分たちが沈黙していたら、あの少年は殺されはしないだろうか——？

考えすぎだ、自分はノイローゼになりかかっているのかもしれないと、別の声が自制するのを聞きながらも、麻子はほとんど本能的な恐怖にますます息苦しく追いつめられるのをどうすることもできなかった。

各務の身近にいる時には、いっさいを彼の判断に任せ、忘れてしまえそうな気がしたのに、タクシーの中で一人になった途端、焦りと自責も、以前に増して強く湧きあがってきた。自責は、人知れずすごした時間の陶酔のために、なおのこと、その反動のように麻子を苛むのである。

なんといっても、目撃者は麻子自身なのだ。あの状況と雰囲気を、正確に知っているのも麻子一人であり、そこから何かを判断するのも、やはり麻子の仕事といわねばならない。各務は間接的に聞いたにすぎない。その彼が事を簡単に考えるのは無理ないかもしれない。それに彼は学者らしく、俗離れしているというのか、世事にうとく、悠長な面もあることを認めないわけにはいかなかった。

万一あの子の身に変事が起きた時、自分に責任がないと言い切れるか？

そう考えつめてくると、ジッとしていられなくなる。今にもタクシーを止めて、最寄りの派出所へ駆けこみたいような衝動にかられた。

だが、そんな思いとだぶって、各務や夫の顔が眼前にちらつき、するとまた打ちのめされたように、身体をシートに沈めた。

窓外を、バス道路に沿った住宅街が流れていた。学校や、教会の尖塔のような高い建物も時折り現われ、その背後にうすいピンクの夕映えを留めた空がひろがっている。

上石神井の交差点をすぎると、家々の間に樹木が目立ってくる。畑もところどころにある。どこかで落葉でも焚く煙が、黄ばんだ木々の葉をぼかしながら、夕暮空に溶けこんでいく眺めは、いかにも秋を感じさせる。東京も西端部にくると、まだどこかに昔の武蔵野の影が残っていた。

各務とも、もう一年になる……。

麻子はふと現在を忘れて感慨にとらわれた。

いや、正確にいえば、彼女がはじめて各務徹夫を知ったのは、三十年近くも昔の、二人が幼稚園と小学校に通っていたころなのである。当時、二人の家は戦災に焼け残った芝の西久保巴町にあり、近所に子供が少なかったせいか、四歳はなれていたのに、毎日いっしょに遊んでいた。

幼馴染みの付き合いは十年近く続いたが、やがて徹夫の父が新潟の大学の助教授に転勤することになって、離ればなれになった。

次に二人がめぐり逢ったのは、今から十二年前、麻子が桂木謙介と結婚式を挙げた夜であった。都内のホテルで披露宴をすませたあと、麻子が母とロビーにいた時、各務たちに声をかけられたのだ。たちというのは、その夜各務も知人のパーティで偶々父親といっしょに同じホテルへ来ていて、最初に彼の父が麻子の母を見つけたからである。昔は親しく付き合っていた隣人同士で、おとなはそれほど顔が変わらないので、気がついたのであろう。親たちが挨拶を交わしてはじめて、徹夫と麻子は互いに、すっかり成人した相手を認めあった。各務たちはもうだいぶ前に東京へ戻ってきて、三鷹台に住んでいるという話だった。

もしあの時、どちらかが一人でいたら、きっと互いにそれとわからず、したがって二人の人生はいったん離れたまま交わることもなく終わっていたかもしれないと、

麻子は今も運命的な感慨に捉われることがある。

そして、再び訪れた邂逅が、昨年の九月であった。

桂木謙介の本社総務部次長就任は十月一日付だったが、麻子はそれより半月ほど早く、一人で石神井の社宅へ移ってきて、家の手入れの依頼や、整理などをしていた。

そんな一日、最寄りの石神井公園駅から西武線に乗って池袋へ買物に出た。

午後二時ごろ、試験期の学生で混みあった帰りの電車に乗った時には、麻子の両手はデパートの包装紙につつまれた日用品でいっぱいになっていた。

駅へ入る手前の踏切で、電車が、なぜか急制動をかけた瞬間、よろめいた麻子の胸元から包みのいくつかが転げ落ちて床に散らばった。

傍らで吊革につかまって本を読んでいたグレーの背広を着た男が、屈んで拾ってくれた。それが各務徹夫だった。

この時には、二人はすぐ、ほとんど同時に互いを認めあった。各務は、十一年前にホテルのロビーで会った時と、ほとんど変わっていなかった。焦茶色の太縁の眼鏡の形も同じで、ただその奥の温和な目のふちに、三すじほどの皺が生まれかけていたくらいで。

初秋の午後の陽光がふり注ぐ、石神井公園駅のフォームのベンチに腰をおろして、二人は、三十分ほど話をした。

各務は前橋の群馬医大の助教授になっていて、住居はやはり三鷹台にある。この一つ先の大泉学園にある私立大学の非常勤講師も勤めているので、週に二回はここを通るなどのことを話した。

彼が前橋に通っていると聞いて、麻子もつい先月まで約十年間群馬県のE市で暮らしていたことを語った。

講義の時間が迫り、電車に乗る時、彼は群馬医大と自宅の住所が刷りこまれた名刺を麻子に渡した。それで麻子も、社宅までの道順を説明し、いつでも寄ってほしいと言い添えた。

それから一週間ほどたった午後、麻子が外から家に帰ってくると、駅とは反対の方向から鞄をさげて歩いてくる各務と行き会った。

「ぼくが非常勤で通っている大学は、正確には大泉学園と石神井公園の中間あたりになるんですよ。今日は天気がいいので、石神井公園まで歩いてみようかと思っていたんですが……」

各務は微笑した目を伏せて、そこを歩いていた理由を

説明した。が、麻子はふと、彼が麻子の家を捜していたような気がして、かすかに胸が波立つのを覚えた。それから彼を、まだすっかり片づいていない家の中へ請じ入れた。

二日後の日曜日には、各務は約束どおり、カーデガンの軽装でやってきて、庭の手入れや物置きの補修などを手伝ってくれた。そのあとで、二人は石神井から三宝寺池の周辺を散歩した。彼が一度結婚して二年後に妻に死なれて以後ずっと独身なことを、麻子はこの時聞いた。

翌日の月曜日に、桂木はE市から引っ越してきた。その時すぐ、麻子は、幼馴染みの各務との再会を夫に報告すべきだったかもしれない。もしそうしていれば、麻子と各務とのその後の発展は、もう少しちがった形になっていたかもわからない。だが、本社復帰直後の夫は、とりわけ忙しそうで、家では取りつくしまもないようなむずかしい表情を浮かべていたので、つい言いそびれた。

今でなくてもいつでも話せる、と思いながら、結局各務の名はその後も一度も麻子の唇をついて出なかった。一つには、各務が現在独身だという事実が、無意識のうちに麻子の心に拘泥りをつくっていた。それはまた、ある予感の変形だったかもしれない。

桂木が東京へ移ってきてからも、各務はしばしば、午後、麻子の家に立ち寄った。十月末には、はじめて新宿の喫茶店で待ち合わせて、彼の友人の画家の個展を見に行った。が、この時ぐらいまで、麻子にはまだ二人が逢い引きしているという意識はなかった。したがって罪悪感は稀薄で、さほど人目をはばかる配慮も生まれていなかった。思えば迂闊な話だが、桂木と見合い結婚する以前にも、とりたてて恋愛経験のなかった麻子は、そうした面では稚かったともいえるだろう。

麻子が各務との間に「罪」を意識しはじめた時、二人の心はもう引き返せないところまで来てしまっていた。いや、引き返せないと気がついたことが、にわかに罪悪感を芽生えさせたのかもしれない。

新座市の平林寺まで散策した帰り、小料理屋の一室ではじめて唇を重ねたのは、各務の冬休みがはじまる日だった。

それから、正月あけに逢って……麻子は今日も利用した井の頭公園の旅館で、各務のものになった。

彼とこうした関係に陥る前に、麻子に抵抗がなかったというのでは決してない。それどころか、彼に対して抱きはじめた思慕の感情が「愛」にちがいないと自覚した

最初の瞬間、麻子はむしろ目の前が黯ずむような、絶望に似たためまいに襲われたほどである。夫以外の男と愛情を分かちあうなど、それまでの麻子にはとても自分の現実では想像もつかない、空恐ろしい世界に思われた。

だから、各務との情事には、いつも絶望と恍惚が交錯していた。が、それでいて、麻子はしだいに、心の深部に、十二年間の結婚生活では決して経験したことのない不思議な安らぎが生まれているのにも気づきはじめていた。自分が最も自然な、そうあるべき人生に、ようやく辿り着いたという、本能的な安らぎ……。

それならば、これまでの、そしてこの先も続こうとしている桂木との家庭は、一体何であろう？　自分の真の人生とはちがう、うつろな仮の棲家なのか……？

思春期のころ親しんだ平安、鎌倉時代の古典、平家物語や徒然草の中で出あった「仮の宿り」ということばを、麻子は時折り心に浮かべるようになった。現世を仮の宿りと悟り、来世に浄土を願う仏教思想がこめられているのだろう。「此の世はかりのやどりなり。恥ぢても恥ぢても何ならむ……」と平家の祇王にあったのはなぜか印象深いし、西行の歌にも同じことばが詠いこめられていたと思う。

各務との愛に自分の人生の真の燃焼を発見した日から、麻子にとって、家庭は「仮の宿り」になったのかもしれない。

だがまた、もうこれからはこの愛を守り抜こうと決意したのと同時に、麻子は、夫との家庭も今まで以上にきちんと維持しなければいけないと心に誓っていた。

夫が断じて離婚を承諾しないことは、目に見えているのだ。それほど麻子を愛しているというより、彼の社会的面子や日常生活のために、麻子は必要な存在だからである。

とすれば、こちらの一方的な我儘で家庭を放り出すことは、夫に対して二重の罪を犯す結果になるだろう。たとえ心は各務に占められていても、これまでと同様忠実に、夫に尽くさなければいけない。その努力で、せめて麻子は、絶えまない心の呵責から逃れようともしたのだ。

しかし、そんな考え自体が、実は虫のいい方便だったのにちがいない。

麻子がそれを思い知らされたのは、この五月に問題の工場周辺の地下水分析の依頼が、各務の講座に持ちこまれたと聞いた時だった。何か抗いがたい運命が、罰のよ

うに陥穽を仕かけてくるのではないか？……麻子はふと身体が冷たくなるような怯えを感じた。

しかし、分析の結果は、中立かむしろ工場側に有利なものとなり、桂木と各務が真正面から対立する事態は避けられた。それで麻子はひとまず安堵の胸をなでおろしたものだった。

ところが、早くも、第二の陥穽が待ち受けていたのだ……。

麻子は、いつか残照があせて、昏いブルーに変わっている空にうろたえた視線を向けた。

今度はいっそう事は切迫している。殺人事件と、罪もない少年の生命がかかっているかもしれないのだ。

もしあの子が犯人の手で殺されるようなことがあれば、自分に責任がないと言い切れるか？

再び鋭い声が聞こえるような気がして、麻子は思わず低い呻きを洩らした。今こうしている間にも、第二の危険が少年の身に迫っているかもしれないのだ！

「石神井はどの辺ですか」

西武線の踏切りを渡っても何もいわない麻子に、運転手が問いかけてきた。

「ああ、あの先の石垣のそばで停めてください」

麻子はあわてて答えた。各務と別れて帰る時、麻子はたいてい電車かバスを利用しているが、タクシーを使う場合にも、決して、密会の現場となったホテルなどのそばで車を拾うことはせず、また家の前まで乗りつけたりもしない。大都会の中とはいえ、誰に見られているかわからないからだ。タクシーの運転手にも目や耳はある。今、反射的に口をついた返事にも、そうした配慮が働いていた。

だが——バッグを開けかけた麻子の脳裡に、突然一つの考えが閃めいた。それはたぶん、タクシーの乗り方に注意している自分の思考経路を、逆にたどった時生まれた思いつきだったかもしれない。

そうだ。こちらの身分を明かさず、しかも目撃した事実を警察に報せる方法がある！

3

《私ハ、去ル十月七日午前六時半ゴロ、善福寺公園ノ上ノ、蕪蔵寺横ノ坂道ヲ通ッタ者デス。ソノ際、剣道着ヲツケタ少年ト、一人ノ男ヲ見カケマシタ。男ハ四十歳代クライ、薄茶ノレインコートヲ着テ、黒ノカバンヲサゲ

テイマシタ。蕪蔵寺境内カラ生垣ヲカキワケテ出テキタラシク、トテモ急イダ様子デシタ。

私ハ理由アッテ、出頭シタリ、姓名ヲ明ラカニスルコトハ控エサセテイタダキマスガ、アノ朝ノ殺人事件ト考エアワセ、ゴ参考ニナレバト思イ、オ知ラセスルシダイデス。

マタ、場合ニヨッテハ、ソノ時ノ少年ガ犯人側カラ狙ワレルコトモ考エラレルト思イマスノデ、少年ノ安全ニツイテ、ドウカ十分ナゴ配慮ヲイタダキマスヨウ、オ願イ申シアゲマス》

西荻窪署の住所と「捜査課長殿」と書かれた速達の封書が、畑山事件捜査本部の平井警部に届けられたのは、十月十三日の昼まえであった。

平井は封筒の両面にまずザッと目を通した。裏面に差出人の名は記されていない。捜査課長という宛名も不正確である。警視庁以外の都内の警察署には「捜査課」というものはなく、それに当たるのが「刑事課」だから、手紙はひとまず警視庁捜査一課から出動している彼の許に届けられたわけだが、この宛名の書き方は、差出人が警察の内部にさほど明るくないことを物語っているようだ。

が、インクの文字は読みやすく、しっかりした筆跡である。

平井はすぐ封を切った。隣りの席から、田口部長刑事が手元を見守っている。朝の打合わせ会議が終わり、捜査員の大部分は各方面に散って、本部に充てられた広い部屋がひっそりとなっている。

平井は、二度丹念に読み返してから、黙って田口に渡した。

田口が読んでいる間、あらためて封筒を手に取った。どこにでもある白い長方形の封筒で、特徴がないのは便箋も同様だった。文字はかなり角張ったペン書きなので、大変読みやすい代わり、筆跡を隠したい気持ちもかすかに感じられる。それは本文で片仮名を使っている点でもうかがわれることだ。

消印は「石神井10・12・18―24」と打たれている。これは石神井局管内、つまり谷原あたりを境いにして練馬区の西半分に含まれるポストに、昨十月十二日のおそらく午後六時から九時ぐらいの間に投函されたことを示しているはずである。

差出人の名前も住所も書かれてないので、裏は白紙に

近いが、ただ、しっかりと糊付けされた上蓋に、押えつけた筆致で「封」と記してあるのが、差出人の真剣さをあらわしているかのようだ。

手紙を読み終わった田口が、意見を求めるふうに、額の禿げた好人物らしい顔を、一廻りも体格のいい平井警部の方へ向けた。

「イタズラではなさそうですね」

平井は、独特の歯切れのいい陽性な声で言った。

「文字や文章に、知性が感じられる」

「ええ」と田口も同意して、

「これは女文字でしょうか」

「うむ……わざと角張って書いたみたいだが、全体の印象から、ぼくも女のような気がしますね」

「すると例の、久藤恭太が見かけたという女ですか。六時半ごろ通ったというのだから、時間も合う。それにこっちも剣道着の少年を見かけたと書いてありますし」

「少年の身をしきりに心配していますね。事情があって、今までは静観していたものの……あるいは久藤恭太が襲われた事件を知って、こんな投書をよこしたのかもしれない」

捜査本部にこの種の投書や電話が入るのは、さしてめずらしいことではないが、これは意外に重大な手懸かりになるのではないか？

久藤恭太が自宅近くの富士見池で若い男に襲われ、首をしめられそうになったという事件が、石神井署から連絡された時、西狭窪署の捜査本部では、即座に金融業者殺しとの関連を考慮した。

畑山事件以後、恭太の家や通学区域の派出所には、パトロールを強化して、それとなく恭太の身辺を警戒するよう要請してあったのだが、わずかな隙を衝かれた恰好だった。

が、恭太の証言によれば、富士見池の犯人は、蕪蔵寺横の坂道で出遇った男とは別人であるという。それで、報道関係には、一応変質者の犯行を匂わせ、畑山事件との関係の可能性などはいっさい伏せておいた。

それだけに、もし少しでも恭太の立場を知った者が、富士見池の事件の記事を読めば、警察が恭太の安全について、配慮を怠っていると考えたかもしれない。

投書の主は、やはり十中八九、恭太の話に出てきた女性であろうと、平井は手紙を眺めているうちに、しだいに強い期待が湧きあがってくるのを覚えた。事件以来、現場付近の聞き込みは徹底的に行なったはずだが、寂し

い場所のうえ、早朝だったのが禍いして、結局不審な人物として浮かびあがったのは、恭太が出遇ったという男一人だけだった。

もう一人の女の方は、身許が不明なものの、芳鹿荘を六時二十分ごろ出たアベックの一方とまではわかり、犯行とは直接関係ないものと思われる。問題の男だけが、どこから出て、どこへ去ったのか、謎のままなのだ。当然犯人である疑いも強い。

ところが、肝腎の恭太少年の話は、何度聞いてももう一つ要領を得なかった。となると、その男を同時に目撃しているはずの女性の証言が、残された手懸かりとして期待されるわけである。

一方、この投書の主は、問題の男の印象を、かなり自信をもって語っているが、具体的な内容は、これでは不足だ。こちらとしては、ぜひ直接話を聞きたいところである。

「この差出人が見つかれば、有力な証言が得られるかもしれませんね」

田口も同じことを考えていた顔で、平井を見た。

「練馬区か杉並区のあたりの居住者ではないですかね」

彼は消印をのぞきこみ、その郵便局が練馬区にあるこ

とと、事件現場の杉並区とをあわせて推測したようである。

「うむ……」

平井は頷いた。

差出人は、出頭できないと断わっている。事件後六日もたってこんな投書をするというのは、よくよくの事情があるにはちがいない。しかし、捜せるものなら捜し出して、彼女（おそらく）の協力を求めたい。客観的に考えても、殺人事件より重大な事情が、そうザラにあろうとは思われないのだ。

あの朝、芳鹿荘を出た女に絞って、もう一度入念な調査を試みるということで、二人の意見は一致した。

田口が封筒を持って立ちあがった時、日本新報の警察廻りの記者が、さりげない様子で歩み寄ってきた。捜査本部の部屋には、ふつう、記者の出入りは許されないのだが、会議中などでない時、たまに慣れた者が入ってきても、さほどとがめられることはなかった。

「お早うございます」と中年の記者は日灼けした顔を愛想よくほころばしてから、田口の手元に油断のない視線を注いだ。

「タレコミがあったんですか」と声だけは何気ないふう

に訊く。
「うむ……いや……」
田口は眉をしかめて、封筒をポケットに押しこんだ。

同じころ、小野木、露口刑事の若手コンビは、阿佐谷南のアパート寿荘103号室で、林奈津実と向かいあっていた。
六畳と三畳の二間続きには、洋服箪笥、鏡台、灯油ストーブなどが雑然と並べられていて、狭苦しい。家具はどれも古びているので、部屋全体に色彩感がなかった。
小野木は、畑山の家の台所で見たまだ新しくてきれいな食器や、彼女があの近くの商店街で、松茸やキャビアなど高価なものを買っていたという話を、また思い浮かべていた。
ハワイかロスアンゼルスでスナックを持つことが夢だという奈津実は、自分の生活は切りつめて、ひたすら金を貯めているのであろうか。
「あの男のことは、ほんとに何も知らないんですよ。何度訊かれてもおんなじよ」
奈津実はたびたびの刑事の来訪に、露骨に辟易した表情をつくって横を向いた。「あの男」とは、五日前の夜二人がはじめてこのアパートを捜し当てたとき、入れちがいに奈津実の部屋から出ていった、前髪を垂らした若い男のことである。
「あの晩はじめて会っただけで、名前も聞いてないんだから」
奈津実は上唇をまくりあげるようにして、ハスキーな声で喋る。あまりよく櫛が通ってないうす赤い髪がからみついた横顔は、二重瞼の目がキリッと大きく、鼻先がちょっと上を向いている。
美人というより、ややきつい個性的な顔立ちだが、全体にサラリとした女っぽさを感じさせもする。爪を尖らせた左手の人差指に、ガラス玉をいくつも寄せ集めた大きな指輪をはめていた。
「どこで会ったといったかな」
これももう何度か試みた質問を、小野木は生真面目な顔で繰り返す。
「だからさ、あんた方が来た一時間ほど前に、駅の向こうの楽陽軒に一人でラーメン食べに行ってさ、あの男と相席になったのよ。どこかに勤めてるのかって訊かれたから、フリーよって答えたら、何か勘ちがいしたらしくて……」

その男は、あるいは奈津実を街娼と誤解したのか、店を出てからも何かと話しかけながらついてきて、寿荘の部屋の前まできたが、奈津実が拒絶すると、ちょっと未練そうに、また遊びにくるからといって帰ったというのである。彼女の話によれば、露口刑事がノックしたのはその直後で、小野木が立ち去った男を追いかけて、うっかり逃げられてしまったということになる。

「でも、あれっきり来ないから、もう顔見たってわからないくらいですよ」

奈津実は大袈裟に溜息をつき、テーブルの上からセブンスターの袋をつまみ取った。

「しかし、楽陽軒では、あの日あんた方を見た憶えはないというんだがね」

「そりゃあ夕食時で、混んでましたからね。いちいち憶えているわけないわよ」

露口が渋い表情で、自分も煙草を取り出して火をつけた。

楽陽軒の聞き込みでは、じつは確答が得られていない。奈津実は週に二、三回は顔を見せる常連だから、あの日も来ていたかもしれないが、はっきりとはわからない。問題の男についてはなおのこと、いたともいなかったとも、まったく不明なのであった。

だから、ラーメン屋に関して、奈津実がまるで嘘をついていると決めつけることもできないのだが……小野木のカンとしては、廊下で立ち話していた男が、奈津実ともう少し深い間柄であったように思われてならない。しかしこれも、今のところは何の証拠もないのだから、攻め入る術がなかった。

「畑山さんとは荻窪の〝ボンボン〟で知り合って、去年の暮れから付き合いだしたという話だったね」

これも復習にすぎない。奈津実は答える代わりに、睫の長い上瞼を一度ゆっくりと瞬いた。

畑山欣造の情婦だった事実は、最初に露口が訪れたさい、彼女はわりにあっさりと認めている。これは隠しきれないと観念したのだろう。畑山に望まれ、店を辞め、週に平均三回彼の家を訪れて、身の廻りの世話をしたり、夜は、まだなかなか旺盛な男の欲望を満たしてやったという。が、畑山は孤独癖の強い変わり者といわれるだけあって、自分の家でいっしょに暮らそうとは決して言わなかった。奈津実にしても、週に三回通うだけで、バー勤め以上の金がもらえたのだから、それが一番気楽でよかったようだ。



「畑山の家に出入りしていた人間を、もう少し思い出せないかな」

「会っていないんだから仕方ないじゃありませんか。パパはあれで案外世間体を気にしててね。商売のお客が来ると、かえってあたしに奥へひっこんでろといって、お茶も出させなかったのよ」

顔を知っているのは、玄関先で偶然鉢合わせしたパチンコ屋の土倉くらいだと、奈津実の答えは変わらない。また、畑山は、案外やさしい性格で、金の面でも鷹揚だったが、無口で、商売の話を奈津実に洩らすことはなかった。それで彼女は、畑山の仕事や資産の内容についてなど、想像もつかないというのである。

最初、小野木も露口も、このあたりまで奈津実の話をわりにストレートに信用していた。全体にカラリとした感じの心証に加えて、事件当時の彼女のアリバイがほぼ問題なく成立したからである。

十月七日午前六時から七時の間——気ままな一人暮らしの女にはアリバイなど証明しにくい時間帯のはずだが、彼女にとっては幸運（？）にも、その日は前夜から同じ寿荘の住人など男女の友だち三人が遊びにきて、徹夜麻雀をやっていたというのだった。夜十時ごろからはじめて、朝八時まえに終わったが、女友だちの一人はそのまま昼すぎまで、奈津実といっしょにここで眠っていたという。

この話は、当の三人によって、まもなく裏付けられた。もちろん三人が奈津実に頼まれて口裏を合わせるという可能性もあるわけだが、彼らの証言は細部まで一致しており、作為の気配は認められなかった。

一方、現場の状況からも、女の犯行とは考えにくい。畑山殺害に関して、奈津実は少なくとも直接手を下してはいないと判断されたのだ。

ところが、現場に落ちていた毛髪の中から、円形脱毛症の頭髪が発見されたことと、寿荘から出ていった男の髪型の特徴とを、小野木が結びつけて考えはじめてから、奈津実に対する見方が変わってきた。

奈津実と懇意の男が、殺人現場に出入りしたとすれば——？

奈津実が若い情夫を手引きして、犯行させたという想像も生まれてくる。畑山の家の内部は、彼女が十分に知悉していたわけなのだから。

だが、何度攻略を試みても、奈津実は予想以上に頑強だった。

「あんたは、畑山さん以外には、若い恋人はいないのかね」

煙草を消した露口が、思い出したように室内を見廻しながら呟いた。

「もちろんですよ。パパはあれで齢が信じられないくらい盛んでしたからね。そのうえ若い男なんて、こっちの身が保たないわよ」

奈津実はニコリともせずに答えた。相手が刑事のせいもあるだろうが、彼女はあまり愛嬌をふりまくたちではなさそうだ。それがかえって畑山のような男を安心させたのかもしれない。

「今はどこにも勤めてないんですか」

「ええ。でもまた〝ボンボン〟で働かせてもらおうかと思っているの。いつまでもブラブラしてるわけにもいきませんからねえ」

奈津実はパンタロンの埃を払いながら、重そうに腰をあげて、真昼の陽が射している窓の外を眺めた。駅の方向から国電の響きが伝わってくる。

小野木が露口に視線を投げた。そろそろ退散しようという合図である。今日もこれ以上粘ったところで、収穫は望めそうにない。

といって、署へ引き揚げるわけではない。今から夕方まで小野木がひそかに張り込みして、夜は露口と交代することになっていた。

畑山欣造殺害事件の捜査は、さまざまな角度から進められていたが、和栗刑事係長がおもに指揮をとっていた「円形脱毛症の頭髪」に関する調査が、最も着実な進展を見せていた。

円形脱毛症にかかった人間は、たいていいみな、すぐに皮膚科の病院へ行く。この病気は主に心因性で、ほとんどが時間がたてば自然に治癒するのだが、患者はそんなことは知らないから、放っておけば丸禿げになるような恐怖にかられて、専門医へ駆けこむのである。そこで定期的に女性ホルモンを注射してもらうと間もなく治る。

科学警察研究所からそうした知識も与えられた捜査本部では、杉並区を重点的に、都区内と武蔵野市、三鷹市にわたって、皮膚科医院と総合病院の皮膚科に協力を求め、約一カ月前から現在までに円形脱毛症の治療を受けた患者の氏名を提出してくれるよう要請した。

報告のあった約八百人のうち、捜査員が直接事情聴取したり内偵によって、畑山とは無関係と判断された者、

および事件当時明白なアリバイが認められた者は、どんどん削除していった。

その結果、三日後には十二人に絞られた。いずれも男性で、職業は会社員、商店経営者、建設労務者などさまざまである。

十二人のうちで、捜査員が直接会うことができた七人は、いずれも、畑山欣造など名前も知らないとのべ、それぞれアリバイを主張しているが、裏付けがなかった。残りの五人はまだ居所不明で、直接話を聞くことができない。

和栗警部補が、「松岡建設土工、中谷浩司二十六歳」の住所地へ足を運んだのは、十月十三日の午後四時すぎであった。

中谷浩司は、今年の九月初めから、畑山事件の五日前の十月二日まで、左前頭部に発生した十円玉大の禿げの治療のため、東中野の皮膚科医院へ通院していたことが同医院の届け出によって判明している。脱毛症はまだすっかり治っていなかったそうだが、彼は十月二日以後、顔を見せていない。

医院に提出されていた健康保険証によって、勤務先と住所がわかった。

松岡建設は新宿角筈にあり、中堅の総合建設会社の下請け会社で、中谷は約二年前から現場で働いていたそうである。職種は「土工」と呼ばれるもので、特別な技術は必要とせず、基礎工事の手伝いやミキサー車の誘導などの雑務が主で、出稼ぎの季節労働者などが多く携わる仕事である。中谷もまだ「臨時労務者」の扱いだったそうで、くわしい身上調書などは、会社に保管されていない。戸籍謄本を提出するように言ってあったが、それもまだ出ていない状態であった。また最近は、九月三十日に市谷のビル工事の作業が終わって以来、仕事に出てきていないという。

とにかく今朝ここまでの調べがついた時、和栗は匂うものを感じた。中谷が、事件の少し前からどこにも姿を見せていない点、加えて、医院と勤め先で聞いた彼の年齢や背恰好が、富士見池で恭太を襲った男と似ていたからである。

すぐに部下の刑事二人を、中谷浩司の住所、中野区本町八丁目「新橋荘アパート」へ出向かせた。

まもなく電話で報告が入り、中谷はアパートにおらず、どこへいったのかも不明だという。二人の刑事には、そのまま新橋荘の張り込みを続けさせてあった……。

中野区本町は、縦に細長い中野区の南端部にあたり、遊興地として名の通った「中野新橋」も含まれている。その区域には、黒塗りの塀をめぐらせた料理屋などが並んでいるが、そこを外れれば、別に特徴もない住宅街であった。

「新橋荘」は、子供たちがローラースケートなどやっていた細い路地の途中にあった。木造の二階建てで、外側に廊下と階段がついており、直接各部屋に出入りできるようになっている。その構造は最近のマンションなどとも同じだが、建物は老朽が目立ち、板壁のあちこちにうす黒い汚点が浮き出していた。

和栗が、西陽の当たっている路地に立ち止まっていると、張り込みをしていた長谷川刑事が後ろから歩み寄ってきた。おとなしいが信頼のおける、長身の刑事である。振り向いた和栗に、彼は細長い顔を横に振ってみせた。

「あの部屋なんですがね」

二階の左端の、閉じたドアを指さした。

「いつからいないんだ」

「それもはっきりしないんです。隣りの女に訊いてみたんですが、中谷は独り者で、ふだんから留守が多かったらしい。近所付合いはないし、部屋にいる時もわりに静かだったそうで、それでいつ出ていったかなんてことも全然わからないようです」

「家主はどこにいる？」

「この少し先の自分の家に住んでいます。二度ほど行ってみたんですが、中学生の子供が一人で留守番をしているだけで、要領を得ない……」

和栗は山野というアパートの持ち主の家を聞いて、一人で出かけてみた。

路地を通りすぎて三百メートルほど行った、これも古そうなモルタルの住宅だった。

主人の山野は帰宅していた。五十年配の、顔色の悪いおとなしそうな男である。

「中谷さんは、今年の四月から入ってもらってました。その前まで半年ほどいた人の友だちとかで、その人が新潟の郷里へ帰ることになって、入れ代わりに借りるようになったんです」

山野は玄関先に膝をついて和栗の質問にていねいに答えたが、中谷についてそれ以上くわしいことは知らないようであった。部屋は六畳一間で、月一万円の家賃は、ほぼ滞りなく払っていた。この種の小さなアパートでは、入居のさい二カ月か三カ月分ぐらいの敷金を納めれば、

保証人などはきびしく求めぬものらしい。
「保証人といえば、いつか、西武線の東長崎の方に兄さんがいるとか、ちょっと聞いたことがありましたよ。でも、行くと説教ばかりされるから、めったに寄りつかないんだなんて言ってましたけどねえ……」
「東長崎に、兄さんがね」
しかしその姓名も、山野は聞いていなかった。
和栗が新橋荘の前に戻った時も、中谷の部屋のドアは閉ざされたままだった。ミシミシいう階段をのぼり、そばまで行ってノブをねじってみたが、無論鍵がかかっている。反対側の窓にはカーテンが下がっているので、鍵穴からのぞいた室内には、うす暗い空間が見えるだけである。
ネームプレートは出ていない。郵便受けもカラのようだ。ただ、ドアの横の足許に、ラーメンか何かのプラスチックの器が一つ置かれていて、底に残った汁がもう乾いた脂の光をこびりつかせていた。
中谷浩司は、このまま帰ってこないのではないだろうか——？
ふとそんな予感が、和栗の胸裡をかすめた。
このまま帰らなければ、彼は逃げたのだ。
なぜ？
富士見池で恭太を襲ったのは中谷であり、あの事件はやはり単なるイタズラではなく、もっと重大な犯罪——畑山欣造殺害に起因していたのではないのか。
だが、その時の犯人と、蕪蔵寺の坂道で出遇った男とは別人だったと、恭太は明言している。
とすれば、中谷が恭太を襲った行為には、どんな意味が含まれているのか——？

四章　サンガーデンの女

1

日本新報の小暮究は、新宿歌舞伎町の裏通りにある飲み屋「壺坂」の小上がりで、「新化学通信」の記者波多野勇七と向かいあっていた。

テーブルの上には、鰺のたたきとかひじきの煮つけなど素朴な肴を盛った小鉢や、カラになった銚子も三、四本並んでいる。小上がりの横はほんの数坪の土間にコの字形のカウンターが渡され、止まり木はほとんど客で埋まっている。それで、女将もたった一人の若い女中も、彼らの応接に追われて、小上がりの方へは酒の追加もなかなか運んでこられない状況である。

午後九時から十時といえば、この種の飲み屋が最も繁盛する時間帯で、天井の低い店内は、おでんの湯気や干物を焼く匂いでムンムンしている。カウンターにいる数人のグループの特に声高な会話が、小暮と波多野の時折り交わすことばを、完全にそこだけのものにしていた。

この「壺坂」は、小暮が一度先輩の社会部記者に連れられてきて以来、数年来馴染みにしている店だった。

「どうしてそんなに、その男の名が知りたいんですか。だいぶ訳ありのようだなあ」

ようやく届いた熱燗の銚子を手酌で傾けながら、波多野が野太い声で呟いた。くたびれたグレーの背広に包まれた怒り肩が、不安定に前後に揺れている。七時に喫茶店で落ち合って、すぐここへ来てから、ほとんど休まずに飲んでいるのだから、さすがにだいぶ酔いがまわっている様子だった。

「いや、さっきからいっているように、こちらが知りたいのは、女性の方です。ただ、それを調べるのに、相手の男性の名がわかれば非常にやりやすくなるから、それでお尋ねしているんですよ」

小暮が説明を繰り返すと、波多野はちょっと混乱したような焦点のぼやけた目をあげた。

「だから、あなたがすでに女性の身許を突きとめている

のなら、それを教えてもらえれば一番ありがたいわけなんだが……」

波多野は、うす笑いの表情になって、ゆるく首を振った。

畑山事件の朝、現場に近い芳鹿荘を前後して出た一組の男女を、前日から追いかけていた男があったこと、その男――「新化学通信」の記者波多野勇七が、女中を買収してまで女の身許を探り出そうとしていた事実を、当の女中の口から聞いた小暮は、遊軍の時代に付き合いのあった「新化学通信」のデスクに頼んで、波多野と引き合わせてもらった。

「新化学通信」は、編集長と記者三人という小世帯の業界紙だが、デスクの菊池は業界出身で、頭も切れるし、誠実な人柄だった。

その菊池に、まず波多野について尋ねると、今年の春まで小規模な化学会社に勤めていたが、そこが潰れたあと、紹介があって、編集部に入ったという。そんなふうで、まだ日が浅いし、若いが一風変わった男で……と、波多野の人柄について、保証しきれないような口ぶりだった。

ともかく会わせてもらうことにして、今夜新宿駅東口の喫茶店で落ち合った。菊池は波多野を小暮に紹介すると、仕事があるからと、すぐ帰っていった。

波多野は小暮より二、三歳は若く見えるから、三十すぎ。青黒い顔色で、少しとび出した眼球の光が鋭い、ちょっととっつきにくい印象の男だった。が、よく飲むという話を菊池からチラリと聞いていた小暮は、波多野をすぐこの店に誘った。

銚子が二本ほどカラになったところで、本題を切り出した。芳鹿荘で例の男女を内偵したことを、波多野は最初否定していたが、小暮がやむをえずミカの名を出すと、ようやくあきらめたように、不機嫌な顔で頷いた。

「しかし、波多野さんこそ、どうしてあの男女にあんなに熱心だったんですか」

小暮も微笑して尋ねた。波多野の興味が、畑山事件とは関わりないことだけはわかっている。彼は事件の前日から二人を追いかけていたのだから。

波多野は頬杖をついて、盃の底に目を落としていたが、「誰だって、自分の多少知っている男が、きれいな女を連れて旅館へしけこむのを見かければ、覗き見の本能を刺激されるじゃないですか」

やや投げ遣りな、面倒臭そうな口調で答えた。

「男の方は何者なのか、やはり知ってるんですね」
波多野は黙っていたが、肯定と受け取られる顔つきである。
「女の身許は、その後わからないんですか」
「あれっきりですよ。ぼくもそう二人を追っかけてばかりもいられないからね」
「すると……男の方はあなたの知合いで、女はわからない。それなら、直接その男性に訊いてみることはできないんですか」
「はは」と波多野は鼻に抜けるような笑いを洩らした。
「あんたの浮気の相手は誰かねと訊かれて、正直に答える馬鹿がありますか。いや、それほど親しい間柄なら、こっちも金使って調べたりはしないさ。——それよりはっきりしてもらいたいな。あんたの魂胆はどこにあるんですか」
波多野は上体を起こして、少し大きな声を出した。酒を注いだままの盃には、もう手を出そうとはしなかった。
「あんたは、彼らのことを尋ねるためだけに、今夜ぼくを呼び出したんですか」
「そうですよ。それだけです。——といっても、ぼくが知りたいのは、主に女性の身許なのです。二人の関係には、特別興味はありません」
「……」
「あなたは、男の方は知合いだが、直接相手の女性について質問できるような間柄ではないといわれた。しかし、もしぼくにその男性の姓名と身許を教えてくだされば、ぼくには彼から女性の名を訊き出す手段があります」
「大新聞社の名において、というわけか」
波多野の赤らんだ目が、かすかな敵意を帯びた。
小暮はちょっと口をつぐみ、それから肚を決めてすわり直した。
これまでは、雑談にまぎらすか、それが無理でも何か全然別の口実を設けて、相手に喋らせられないものかと、内心で模索していたのだが、やはりある程度真実の事情を匂わせる以外、術はなさそうだ。幸い相手は、畑山事件と芳鹿荘との位置関係には、まだ気がついていないらしい。
「問題は、その女性の目下の立場なんですよ」と小暮は、相手の視線をすくいとるようにしながら話しかけた。
「目下の立場——？」
「ええ。実は、彼女はある犯罪事件と重大な関わりがあ

るんです」

はじめて少しもものものしい口調になった。が、必ずしもハッタリとはいえないと思う。昨日西荻窪署の捜査本部に匿名の投書があり、その差出人が、事件の朝、芳鹿荘を出た女性である可能性が強いという情報を、警察廻りの記者が昨夜刑事課長の自宅へ「夜討ち」をかけて聞き出している。

警察廻りの記者はクラブ詰めと比べて身体を縛られている時間が長いため、いわゆる、「夜討ち・朝駆け」をめったにやらないが、それだけに、たまに試みると意外な収穫をあげることがあった。

波多野は目を細めて、計るように、小暮を見返している。

「ぼくは警視庁のクラブ詰めですから、直接その事件の取材に当たっているんです。だから男性の方がわかれば、しかるべき方法で、その人に相手の女性の名を明かしてもらうことはできると思います。しかし、二人の関係はあくまでプライバシーの問題ですから、それを記事にしたりは絶対にしませんよ」

波多野はようやく思案する眼差しになって、傍らの壁を見つめた。

「くどいようですが、あなたが例の女性の身許を調べようとしたのは、興味だけですか」

「そうですよ。単なる覗き見趣味……」

呟きながら、また冷めた盃を口にはこんだ。

「では……やむを得ない。ちょっと取引をしませんか」

「……？」

「あなたがぼくに、問題の男性を教えてくれたら、ぼくは彼から相手の女を訊き出す。そして、その女性の名前と身許が判明ししだい、必ずあなたに報告しますよ」

しばらくの沈黙のあとで、波多野は、ゆっくりと盃を置き、背中をまるめるようにして首をつき出した。こもった声で、

「その場合、あんたが最初から言っているように、女性を取材の対象にするのはかまわないが、二人のスキャンダルは絶対に口外しないと約束してくれますね？」

それは自分一人のネタだと、彼の鋭く光った眸が宣言しているようだった。

波多野勇七の口からようやく聞き出した「群馬医大助教授各務徹夫」について、小暮は翌朝、社会部の遊軍で公害問題の囲み記事などを書いている記者に、くわしい

話を聞いた。

小暮がその記者を選んで尋ねたのは、小暮も群馬医大のある前橋に近いE市で最近発生している紛争を知っていて、各務徹夫とその関連に想像をめぐらせたからであった。化学工業の業界紙の記者が各務たちを追いかけていた事実も、その連想を促す要因となった。

一年後輩の都築記者が「各務助教授なら、公衆衛生学講座で――」とすぐに説明をはじめた時、小暮は自分の想像が的中した、かすかな興奮を覚えた。都築はちょうどその紛争も取材していたのだ。

「――しかし、各務さんの報告で被害者側が引き退るとは考えられない状況ですね。ことにここ二ヵ月ほどの間に、農作物被害ばかりでなく、工場の近くの住民で、軽い皮膚炎や吐き気を訴える人も出はじめているんです。それで被害者連絡協議会では、土壌の分析では権威のある東京のP大に、再度の調査を依頼する肚のようです」

「すると……もしその結果が、住民側の期待どおりの形で出たら、どう展開するだろうか」

「そうなれば、彼らは二度目の分析結果を押し出して共立電化に補償金を要求し、交渉が決裂すれば裁判でしょう」

「その場合には、会社側としては、最初の各務助教授の見解を楯にして戦うわけだろうね」

「当然そういう成り行きになるでしょうね」

「うむ……」

いずれにせよ、各務助教授は現在その事態の渦中で、非常に重要なポイントに立たされているわけだ。しかも軽度にせよ人体被害が出はじめているというのなら、問題はいよいよ深刻化が予想される。

続いて小暮は、各務徹夫の人柄や私生活について、知っていることを尋ねた。

「ぼくは一度だけ会ったことがありますが……齢は三十七、八かな。地味な学者肌の人で、学内の評判も悪くないようですね。確か奥さんと死に別れて、今は独身のはずです」

「独身か……」

「小暮さんといっしょですよ」

小暮は笑いながら礼をいって立ちあがった。波多野と掛け引きしている時には、小暮は、〝檀家〟の刑事に二人のスキャンダルを絶対に他社には洩らさない条件で各務の名を教え、捜査本部の力で各務に相手の女性を告白させる。代わりにその後の捜査の展開は、わが社にだけ

伝えてもらう、という方針を頭に浮かべていた。
しかし……しばらく独自で各務を追ってみたい欲求が、熱っぽく盛りあがってきた。
クラブのキャップと相談するために、彼は急いで社を出た。

2

十月十四日の日本新報の夕刊を見た時から、麻子の不安はほとんど恐怖に変わっていた。
一昨日、井の頭公園の旅館で各務と短い逢引きを持ち、タクシーで家に帰る途中、匿名の投書を考えついた。こちらの身分を明かさず、しかも久藤恭太の安全を計る、最良の方法と思われたのだ。
急いで夕食の下拵えをすませると、静かな家の中で、長い時間をかけて書きあげた。
片仮名を使って筆跡をまぎらす配慮もしたし、封筒には電話帳で調べた西荻窪署の住所を、これも強いて角張った字体で明記した。
発送は翌朝でもと思っていたが、夫の帰りがまた遅いようなので、八時ごろ石神井公園の駅前まで行って投函した。恭太の立場を考えれば、一刻も早く届いた方がいいにちがいない。
それまでは夢中だったものの、封筒がポストの底に当たるひそやかな音を聞いた直後から、また以前とは異質の、つかみどころのない不安に戦きはじめた麻子である。
もしかしたら、自分は取り返しのつかない行為をしてしまったのではないだろうか？　あの投書が、何か抜きさしならない方向へ、自分の運命を変えていくのではあるまいか……。
夕刊は、大体五時ごろ入る。日本新報と、もう一紙、経済新聞を取っている。
昨日から、これまでになくすぐに新聞に目を通しているのは、投書の反響を知りたいからである。いや、正確にいえば、あの投書が、表面的には何の波紋も生み出していないことを確認したかったからだ。手紙の内容だけが、捜査責任者の胸一つに納められることを麻子は願っている。先方では、こちらの立場を汲んで、投書の事実を公表したり、差出人を捜したりはしないはずだ。麻子はそう信じていた。
先に届いた経済新聞には、やはり直接投書に触れる記事は見当たらなかった。社会面には事件の続報がごく小

さく載っていたが、捜査の難航を匂わせる文章と、「目撃者の発見にもう一度力を注ぐ方針」といったことが書かれていた。

ところが——まもなく郵便受けから取り出した日本新報を茶の間で開き、斜めに走った麻子の視線が、ふいに止まった。ハッと息をつめた。もともと日本新報は、経済紙とちがい、畑山事件をかなり大きく扱っていたが、その社会面の左下に、

《金融業者殺しに進展——投書で重要な手懸かり》という見出しが浮きあがって見えたからである。

内容は——十三日昼ごろ、畑山事件の捜査本部のある西荻窪署の刑事課長宛てに匿名の投書が届き、事件の朝現場近くの道で犯人らしい男を目撃したと伝えてきた。また投書の内容から、事件の二日後に富士見池で剣道の稽古帰りの小学生が襲われたのも、関連があるのではないかという疑いが濃厚になっている。

捜査本部では、この投書を重視し、犯人の割出しを急ぐとともに、練馬区か杉並区に住む女性と思われる投書主の協力を強く求めている……。

麻子はしばらく呆然とすわりこんでいた。何よりもショックを受けたのは、警察が投書主を「練馬区か杉並区の女性」とまで見抜き、そのうえ「協力を強く求めている」とまで書かれていたことである。

確かに、恭太が襲われた事件と畑山事件との関連に触れているのを見れば、麻子の投書の目的は、一応達せられたといえる。しかしその中で、麻子は問題の男について、記憶にある限りくわしく伝えたつもりである。それでもなお協力を求めるとは、つまりこちらを捜し出そうということではないか。では麻子の立場など、少しも斟酌してくれないのか。

投書などするのではなかった！

鋭い後悔が、麻子の胸を引き裂いた。しかも各務にさえ無断で……。判断は彼に任せると約束したばかりだったのに。

各務まで裏切ってしまったような気持ちが、麻子をいっそう逃れようのない恐怖と孤独につき落としていた。警察はやがて麻子を見つけ出すのではないか。そして……刑事がこの家の玄関に立つ場面を想像しただけで、麻子は目の前が暗くなった。

夫の桂木謙介が、めずらしく八時前に帰宅した。最近も群馬出張が多く、始終眉根にこもった力が抜けないよ

うな、重苦しい表情を浮かべている。黙々と和服に着替えて、茶の間にすわった。

久しぶりに夫婦差し向かいの夕食になったが、二人とも寡黙だった。箸を使う音だけが小さく響いた。桂木は依然として、公害紛争の対策と、今後の工場運営に頭を悩ませているのであろう。以前、E市の社宅でも、黙りこくっている夫の気分にあれこれ心を砕きながら、食卓をはさんでいた静かな夜を、麻子はありありと思い出した。だが——今の麻子は、自分自身の問題に意識を占められている。夕刊の記事とこの先の成り行きが心配で、しかも夫に気取られてはならず、それでいっそう、砂をのみこむような苦痛な食事になっていた。

「ああ……木犀がよく匂うなあ」

箸を置いて、番茶を一口のんだ桂木が、暗い庭へ顔を向けながら呟いた。

「ええ。……そろそろ盛りをすぎるころでしょうけど」

「この辺はまだ緑が残っているね。しかし、いずれ家が建てこむだろうな」

「ええ……」

「そこのマンションはもう出来あがったのか」

思い出したように、表の方へ膝をしゃくった。去年の暮れごろから道路の斜め向かいで六階建てくらいのかなり大規模なマンションの工事が進んでいたのだ。

「とうに終わってますわ。まだそんなに人が入ってないので、わりに静かですけど」

「近ごろはどこへ行ってもマンションばかりだなあ」

「……」

麻子は夫の茶碗などをテーブルの端に寄せてから、遅れがちな自分の食事をすますために、また箸を取りあげた。

しばらく庭に目を注いでいた桂木が、つと振り返り、なぜか少しの間麻子を見守っていたが、

「お前、身体の具合でも悪いんじゃないのか」

あまり感情をあらわさない口調で訊いた。が、やや唐突な質問でもあり、麻子は思わず身体を強張らせた。

「いいえ……」

「そうかな。しかし最近顔色が冴えないようだね。ことにこの十日ばかり、お前はぼんやりしている」

十日ばかり、ということばが、また麻子の胸を冷たく刺した。夫に試されているような気がした。やはり各務との間をすでに感づいているのではないだろうか。何気ない問いにからませて、その反応を読んでいるのではあ

るまいか……？

二重の圧迫に、麻子はめまいに襲われ、今にも箸を置いて別の部屋に駆けこんでしまいたい衝動にかられた。だが、桂木はそのまま黙っていた。

ようやくテーブルを片づけて、麻子が食器を台所へ退くと、桂木は新聞をひろげた。早く帰宅した日には、小一時間かけて、丹念に新聞に目を通す習慣である。

麻子は、彼が日本新報を読む時が空恐ろしい。投書の主が麻子だと、夫の直感で見抜かれてしまいそうな気がするのだ。——だが、それこそ取り越し苦労というものだろう。

食後の洗いものは夫の入浴中と、これも長年の習慣で、今夜に限って早々に台所へひっこむのも、かえって不審を買うかもしれない。

麻子は懸命に気持ちを支えながら、夫の前にすわって、梨の皮をむいていた。

ふいに、桂木が新聞を離した。さっきよりいっそうどこか改まった気配で、麻子を見つめた。が——彼はふとことばを忘れてしまったかのように、ただジッと麻子を凝視していた。ナイフを持つ手が無意識に止まり、麻子は息をつめた。

この時、部屋の外で電話が鳴った。一瞬、桂木の注意がその方へ流れ、麻子は果物を置いた。

電話は茶の間を出てすぐの、廊下の角に引かれている。

麻子は立っていって、受話器を取りあげた。

「もしもし？」

時刻から推して、当然夫にかかったものと思い、軽く呼びかけた。受話器の中は沈黙している。もう一度息を吸いこんだ時、

「もしもし、桂木さんの奥さんですか」

聞き慣れない冷たい感じの男の声が流れてきた。同時に、すっと暗い予感が麻子の胸をくだった。

「はい、さようでございます」

「こちらは、西荻窪署の者ですが」

「……」

「もしもし……実は、昨日こちらに届いた投書の件なんですが、あれは奥さんが出してくださったものですね」

まだ若い、やや鼻にかかった声が、強いて感情を押し殺したような、ぎごちない喋り方をしている。麻子の耳には、それがよけい異様な圧力をもって響いた。麻子は立ちすくんだまま、返事が出ない。

「まあこちらとしても、秘密に調査して、ようやく突きとめたんですが、まちがいありませんね」
「はい……いえ、あの……」
麻子の動揺を読みとってか、相手ははじめて苦笑をからませた。
「いや、そちらの事情は、十分お察ししていますよ。決してご迷惑はかけませんから、安心してください」
「……」
「しかし、ぜひもう少しくわしいお話をうかがいたいものですから……これからちょっとお宅へお邪魔してもまいませんか」
「いえ、それは……」
麻子は頭がカッとしている。強く拒絶しかけて、茶の間で耳を傾けている夫の様子が目の先をかすめると、あやうく語気をゆるめて、
「それは、あんまり恐縮でございますから、明日にでも、私の方から……」
「いや、こちらは一分でも惜しいのですよ。お宅へうかがっては、ご迷惑でしょうか」
「はい、それは……」
「では、仕方ありません。代わりに、すみませんが、今われわれがいる場所まで、出てきていただけないでしょうか」
「はあ……」
麻子は狼狽した。が、あまり押問答を続けていて、夫が立ってきたりしたら困る。
「どちらまで……？」
「お宅からなら、車で十五分ぐらいですよ。谷原交差点に出て、そこからオリンピック道路に入り、次に川越街道へ左折していただきます。自衛隊基地がありますから、それをすぎてすぐ、右手にゴルフ用品の大きな広告塔が見えます。その反対側の、道路の左側にパトカーを停めておきますから」
「……」
「お宅の近くまで行ってもいいんですが、パトカーでは目立って、かえってご迷惑かもしれませんからね」
麻子は上の空で、道順だけを頭に刻んだ。
「わかりました」
「すみませんね。では、車の中でお話をうかがいます」
「……」
「お待ちしていますよ」
最後に念を押すと、先方から電話を切った。

麻子は腋の下にびっしょり汗をかいていた。
どうにか心を静めて、茶の間に戻った。
桂木は無関心な横顔を見せて、新聞を読みつづけていた。
「あの……今、鈴川さんの奥さまからお電話で――」
麻子は、夏から通いはじめた書道教室で知り合った夫人の名を口に出した。夫にも一、二度話したことのある名だが、彼が憶えているかどうかはわからない。
「ご主人が今日葉山の方へ釣りにいらして、鰺をたくさん釣っていらしたんですって」
饒舌な鈴川夫人に釣り好きの夫の話を始終聞かされていたのが頭に残っていたのだが、とっさにすらすらと嘘が出たことに、麻子は自分で不思議な気がするほどだった。
「食べきれないから新鮮なうちに差しあげたいとおっしゃって、今家の近くまで届けてくださるんだそうです」
桂木は新聞に目を落としたまま、
「明日でもよかろうに」
「私もそう申しあげたんですけど、何かついでがあって、この近くを通るからとおっしゃるものですから」
「……」
「でも家まではあんまり恐縮ですから、途中まで私がいただきに行くことにしましたの。それで……車でちょっと行ってきますから」
夢中で話し続けながら、麻子は夫が毎日通勤に使っているグレーのルーチェを運転していこうと決めていた。免許証は娘時代に取り、そのままペーパードライバーになっていたが、十年間の地方暮らしで、運転がすっかり身についていた。東京に戻ってからは、またしばらくハンドルを握ることもなくすごしていたのだったが。
麻子が話し終わったあとも、桂木はすぐには答えず、紙面に視線を這わせていた。ようやく顔をあげてチラリと麻子を見、次にはその目を柱時計に移した。
「九時半ごろ、会社の若い者が来るかもしれない」
「あら……」
会社関係の来客はめずらしくないが、今夜の予定は初耳である。それに九時半ならあと十分もない。
桂木は麻子の表情など無視して、
「出かけるなら、応接間に、お茶の支度をしておいてくれ」
「はい」
麻子はひとまずホッとして、台所へ入った。茶器やウ

イスキーなどを応接間のテーブルに揃え、カーデガンを羽織った彼女が、玄関脇からルーチェを出したのは、先刻の電話より十五分あまりすぎた時だった。

教えられた道順を思い出しながら、住宅がひっそりと建ちならぶ富士街道を通って、谷原交差点の五叉路に出た。

オリンピック道路に渡ると、にわかに交通量が多い。昼間のように明るい六車線の道路には、大型トラックなどもずいぶん走っていて、久しぶりにハンドルを握った麻子は、左端で硬くなって運転した。道路は途中で練馬区をすぎ、埼玉県和光市に入るはずである。

川越街道へ左折する地点は、標識が出ていてわかりやすかった。電話では家から十五分ぐらいといわれたが、運転が遅いせいもあって、スタートからすでに二十分あまり経過し、ダッシュボードの時計は十時五分をさしていた。

川越街道は四車線で、また少し暗い感じになった。すぐ、左側に自衛隊基地の高い塀が続く。

塀が切れて、演習場のような区域がすぎた先の右手に、なるほどゴルフクラブを振る男を描いた巨大な広告塔が、青白い照明を受けて夜空にそびえ立っていた。

麻子はブレーキに足をかけた。

この辺までくると、だいぶ車が減って、道路の両側は建物の間隔が広くなっている。住宅や小さな工場などの間に、木立の黒い影が横たわっていた。

広告塔の反対の左側には、きれいな石垣がはりめぐらされ、その上は電光を浴びた芝生の斜面で、手入れの行き届いた低い植込みが散らばっている。それは、道路の雰囲気とはどこか不釣り合いな感じだった。

石垣の前にパトカーの姿は見えなかった。パトカーばかりか、路上にはほとんど車が駐まっていない。考えてみれば、このあたりは駐車禁止のはずである。

麻子はなお三百メートルほど、低速で走ってみたが、パトカーはどこにも見当たらなかった。ところどころには路上駐車の車もあるが、どれも灯を消して、無人の様子である。道路に立つ人影も見えない。

いったん車を停めて、道の向こう側に目を配ってみた。やはり、それらしい気配はなかった。

場所をまちがえているのか？——だが、確かに電話で聞いたとおりの道路を走り、目印の広告塔の前まで来たのだ。

麻子はUターンして、塔の真下に当たる塀に寄せて停

車した。

こちら側から見てはじめて気がついたが、さっきそばを通った、周囲の環境には不似合いなほどきれいな石垣と芝生の斜面の上には、西洋のお城のセットみたいなモーテルが建っていたのだ。斜面をのぼっていく私道の入口に「サンガーデン」と標示したオレンジ色のネオンが点っている。

すると、刑事が指定した地点は、モーテルの真正面だったわけになる。

麻子は軽い戸惑いを覚えた。パトカーを駐めるにしても、もう少し別の場所はなかったものか。それも駐車禁止のはずなのに。

だが、刑事たち（たぶん先方は複数と思われる）は、何か捜査の必要があってこの近くへ来て、それで麻子をここまで呼び出したのかもしれない。とすれば、やはりこのあたりで待っているはずなのだが……？

人工的な緑の斜面が終わったところに、もう一本別の道が分かれ出ているのが認められた。その道は暗く、背後の住宅地へ入っていく感じである。

パトカーはあの先にいるのかもしれない。方向としてはやはり広告塔の真向かいに当たるわけだし、駐車も自由なはずである。

麻子はほとんどそう確信し、再びUターンして、モーテルの横の砂利道へ車を入れた。

しかし……数分後には、麻子のルーチェは同じ道をバックで戻り、また石垣のそばのオレンジ色のネオンの下まで来て停まった。

暗い道路は、家々と畑の間を縫ってのびていたが、その先にも麻子を待つ車は見当たらなかったのだ。

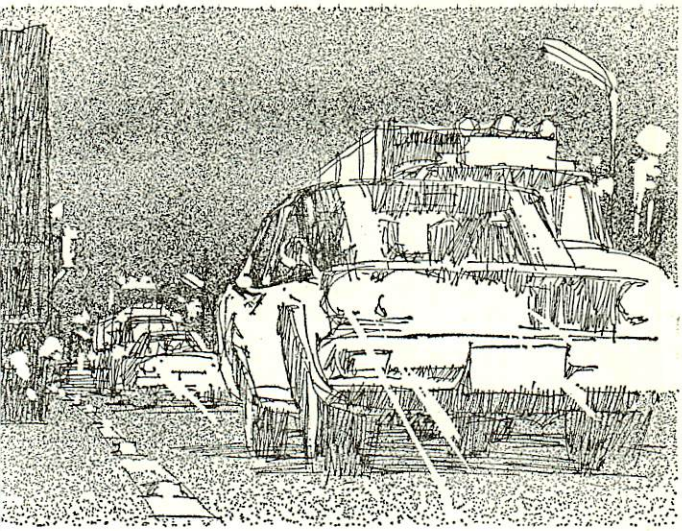
麻子はエンジンをかけたまま、思いあぐねた。時計は十時四十分をすぎている。あの電話から約一時間二十分が経過しているわけだ。

パトカーはもう帰ってしまったのではないか。そう考えざるを得なかった。これだけ捜したのだし、先方だって注意して待っているはずなのだから、気がつかぬわけがない。

では、なぜ帰ってしまったのか？　一分も惜しいといって、強引に呼び出しておきながら——。

彼らは、麻子を待ちかねて、もう来ないものと判断し、麻子の家へ向かったのではないだろうか？

そこに思い及ぶと、にわかに動悸が乱れた。もしそうなら、今ごろ刑事たちが、夫のいる家のベルを鳴らして



……。

そうだ。もしかしたらすでに彼らは、夫に投書の事実を告げ、みなで麻子の帰りを待ちかまえているのではないか。

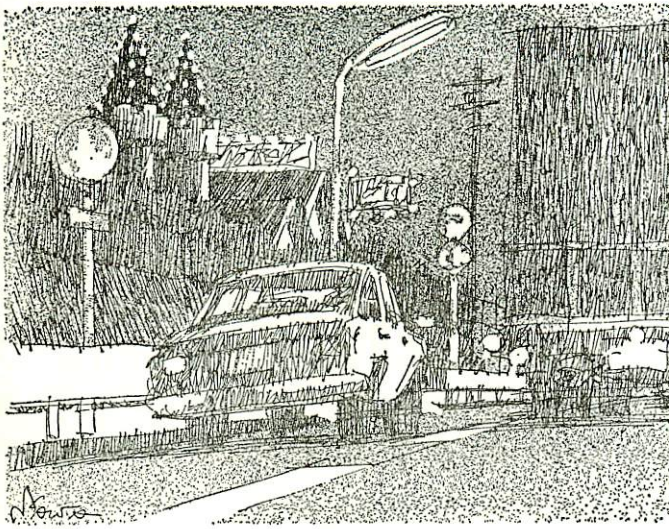
いや、まだ間にあうかもしれない。彼らだって、しばらくここで待っていたはずなのだ。それに、麻子の家の周囲は入りくんでいる。今からすぐ引き返せば、彼らより早く帰り着けるかもしれない。そして麻子がその場にいれば、夫の前を取り繕う方法は、またどうにか考え出せるだろう。

麻子はあわただしくギアをバックに入れ、モーテルの私道を借りてターンすると、東へ向かう車線へ流れこんだ。時刻も遅いし、逆コースに当たるので、車は疎らである。

麻子は来た時よりはるかに大胆に、アクセルを踏みこんでいた。

あの電話は、本当に警察からだったのだろうか——？

突然その疑惑がぽっかりと浮かび、続いて名状しがたい恐怖が胸中を走ったのは、「サンガーデン」のネオンがバックミラーの奥に消えた瞬間であった。



3

埼玉県の南部には、練馬区や板橋区と隣接して、新座、朝霞、和光市など、昭和四十年代に市制が敷かれ、東京都のベッドタウンの性格を有した市が並んでいる。

川越街道（新道）が朝霞市の南端を横切っている区域にあるモーテル・サンガーデンは、いわゆるワンガレージ・ワンルームシステムで、一階にガレージ、二階にベッドルームを設けてセットにしたものを、全部で十八室設備していた。

十月十五日午前十時——。

お城の尖塔を模した赤い円錐形の屋根の下にあるフロントルームには、フロントマネージャーの八代と、加藤という若い係の二人が詰めていた。フロントは三交代で、彼らは午前六時から勤めについている。

八代が腰をおろしている前には、デスクとテレビ受像器、それにインディケーターと呼ばれる大きな計器盤などが置かれ、レースのカーテンを通した朝日が埃っぽい表面を鈍く光らせている。インディケーターの盤面には客室のナンバーが示され、そのルームの状態——「在客」

「客待ち」「準備中」などを表わすランプが縦に並んでいる。

今は一日のうちで最も客の少ない時間帯で、十八室中、在客のランプが点っているのは六室だけだった。たいていは夜中からの客だが、その中には朝九時に入った一組もある。近ごろは、幼稚園へ子供を送りこんだ後、その足で男とモーテルへ直行する主婦もいるのだ。

「十四号はえらくごゆっくりだなあ」

煙草を喫い終わって、インディケーターに目を移した八代が呟いた。十四号室は「在客」が点灯している。

「そうですねえ。泊まりってことでしたが、入ったのは確か昨夜の十時すぎでしょう」

加藤がまだ睡そうな声で答え、伸びをしながらランプをのぞきこんだ。六室の客のうち、昨夜来の泊まりは四組だが、十四号室以外は、チェックインが午前三時とか四時とかで遅い。ここでは、三、四時間からせいぜい六時間ぐらいの休憩客が一番多いのである。

「十二時間か……」

八代は時計をのぞいてまた独り言のように呟き、十四号室のビルカードを引き抜いてみた。モーニングコールでも頼まれていて、うっかり忘れているのではないかと思ったからだ。

カードには、チェックインタイムが昨十四日の二十二時三十分、客は男女二名、それに練馬のカーナンバーが走り書きされているだけだった。それらは、この客が到着したさいフロントにいた係が記入したものである。

この種のモーテルでは、利用者が係とまったく顔を合わせなくてもすむ気楽さが売りものとされている。

サンガーデンでも、客の車が芝生の斜面をのぼってドライブウェイに進入してくると、自動的に入口のシャッターが開き、「点灯ルームへ入ってください」という表示が出る仕組みになっている。チェックアウトのさいの精算も、客は車に乗ったまま、カーテンのおりたキャッシャーの窓口へ金をさしこめばすむ。その他の連絡は、すべてフロントとの電話で、こと足りるという具合である。

が、営業上の建て前はそうなのだが、実は都道府県条例によって、フロント係は、客の性別と年齢、カーナンバー、そのほか目につくような特徴があればそれもメモしておくように、指示されているのである。

そこでサンガーデンでは、フロントの窓にうす茶のレースのカーテンをさげ、ドライブウェイを客の車が通過

する時に、カーテン越しに中の客を観察する。車が通過してしまうと、テレビ受像器に、ガレージへ入る車の後部が映し出されるので、ナンバーを読み取れる。カードの記入は、その結果であった。

新しい客が一組入り、入れちがいに一組がチェックアウトすると、フロントの時計は、十時二十分をさしていた。

十四号室は相変わらず在室のランプが点ったままである。

「ちょっと様子を尋ねてみようか」

八代は、キャッシャーの窓口から戻ってきた加藤の顔を見て言った。

彼はまず、十四号室へ電話をかけた。

何度ベルを鳴らしても、応答がなかった。彼の胸底にうっすらと湧き出していた不審が、急に濃度を増した。入室の時刻から推して、まだベルにも気づかぬほど眠りこんでいるとは考えにくいのだ。

八代は加藤に指示しかけ、考え直して自分で出向いてみることにした。

客室の出入りは、外部からは一階の車庫の奥にある階段を使うのだが、従業員用にはフロントの上から廊下が串のように二階の各室を繋いでいて、掃除やルームサービスなどに利用されている。

八代は階段をのぼって、二階の廊下に出た。廊下の窓はカーテンが開かれていて、眩しすぎるほどの陽光がさしこんでいた。川越街道の絶え間ない車の流れが、ネオンの消えたアーチの下に見えた。

十四号室のドアを、少し強くノックした。返事がないので、ドアの隙間に口を寄せて「もしもし」と声をかけたが、やはり室内は沈黙している。

八代はちょっと迷ったが、すぐに意を決した。そのつもりで用意してきたキイを、鍵穴にさしこんだ。

ドアを開けた途端、まず彼の知覚を刺激したのは、車の匂い——正確には排気ガスの臭気である。

ドアの内側一メートルほどの位置に、厚地のカーテンがかかっている。それに手をかけただけで、臭気はムッと激しくなり、八代は一瞬めまいに襲われた。

次の瞬間、彼は一年ほど前関西のモーテルで発生した排気ガスの中毒事故を連想した。咄嗟に息をつめると、うす暗い室内を突っ切り、正面のガラス窓を開けた。日ごろは汚染をかこっている街道沿いの空気が、この時ほど新鮮に感じられたことはなかった。

八代が室内へ視線を戻したのは、三、四分後であっただろう。

ダブルベッドのそばにテレビ、冷蔵庫、三点セットなどを配置した長方形の室内には、一見目立つほどの乱れはなかった。ただ、階下のガレージに通ずる階段に向かうドアが全開され、車のエンジンのひくい唸り[32]が聞こえている。排気ガスの臭気も、無論その方からのぼってくるのである。そして——ダブルベッドの上には、まだ若い痩せ形の男が、病的に鮮やかな紅色の斑点を浮かべた横顔を見せて、俯せに横たわっていた。ブルーの縞のスポーツシャツに、グレーのズボン。やや乱れた脂っぽい頭髪の間に、十円硬貨大の丸い地肌が露出しているのが、一瞬八代の目に異様なものに映った。

連れの女の姿は、どこにも見えなかった。バスルームも無人であった。スリッパにはきかえたあとの黒い男靴だけが、階段に向かって開放されたドアの陰に転がっていた。

八代の連絡から約三十分後には、埼玉県警捜査一課、鑑識課、所轄朝霞署刑事課から、係官が現場に勢揃いした。

検証の結果、男の死因は、自動車の排気ガスによる一酸化炭素中毒と判断された。客室の真下に当たる車庫には、彼が乗ってきた二年前の年式の黒のセドリック二〇〇〇CCが駐めてあり、発見時にはエンジンがかけっ放しになっていた。車庫には軽金属のシャッターが完全に閉まり、一方、階段の上のルームのドアは全開されていた。そこで、車のエキゾーストパイプから排出されたガスは、まず煙突の役目を果たす階段をのぼり、二階のルームに充満したと見てまちがいない。このような条件だと、ルーム内の人間は、ガレージの内部でガスが排出されはじめてから二十分ぐらいで昏睡状態に陥り、三、四十分で死に至ったと想像される。死体も、口唇部、胸、腹など下になっていた部分に鮮紅色の死斑が浮かび、一酸化炭素中毒の特徴を呈していた。

解剖の結果を見なければ断定できないが、外様所見による死亡推定時刻は、昨十月十四日午後十時から十二時の間と考えられた。

死体の身許は、ベッドの横の椅子にかけてあった焦茶のジャンパーのポケットに運転免許証が入っていたため、まもなく判明した。東京都中野区本町八丁目、中谷浩司、二十六歳。それが、八日前の十月七日、杉並区善福寺で

発生した金融業者強殺事件の重要参考人として手配されていた人物であるとわかると、現場は一段と緊張した空気に包まれた。

昨夜中谷と連れの女がチェックインしたさい、フロント係を勤めていた杉岡順一、四十四歳に対して、埼玉県警捜査一課長がモーテルのフロントルームで行なった事情聴取は、次のようなものだった。

「二人がここへ来たのは、正確には何時ごろでしたか」

「表の自動シャッターが開いて、セドリックがフロントの窓の下へ入ってきたのが、ちょうど十時半だったと思います」

「それからどうしたのですか」

「シャッターの上には、点灯したガレージへ入っていただくようにという表示が出ています。当時は五つほど空室があったと思いますが、このお客様は十四号を選んでお入りになったのです。私は、ここにあるテレビでそれを確認したあと、五分ほどして十四号室へお電話したわけです」

「ちょっと待って。——入口のシャッターをくぐった客の車は、次にこのフロントの窓の下を通る。その時、あなたは客の顔を見たのですね」

「はい、まあ……」

「その時の印象を話してください」

「それが、この茶色いレースのカーテンと窓ガラス越しなので、細かいことまではわからないのですが……運転していた男は、焦茶のジャンパーを着て、サングラスをかけていましたね。腰かけているわけですから、背丈などはわかりません。年齢も……そう若くもなく、年寄りでもなしといった程度で、特に印象にも残らなかったのですが……」

「死体と見比べて、どうです？　チェックインのさいの運転者と同一人といえますか」

捜査課長が念を押すと、杉岡は、一見堅い企業のビジネスマンという感じの四角い顔をしかめて、首をかしげた。

「さあ……改めてそうおっしゃられると……」

だが、彼らは毎日何十人もの客を扱うのだし、客はフロント係と話を交わすわけではない。通過する車の内部をカーテン越しに観察するだけなのだから、細かく確認しきれないのも無理ないかもしれない。

「連れの女性については、何か憶えていますか」

「助手席にすわっていてあまりよく見えませんでしたか

ら……ただ、パーマをかけた茶色っぽい髪と、首にピンク系の色あいのスカーフをまいていたような気がするんですが……」
「年齢や顔立ちなどはわからないでしょうか」
「そこまでは、とても」
杉岡はまた困ったように口をすぼめた。
「ふむ。――それで、彼らは十四号のガレージへはいった。その後はどんなふうになるわけですか」
「ガレージの右奥に、二階のルームへ行く階段があるのですが、その二段目にマットスイッチという装置がついてまして、そこを踏むと自動的にガレージのシャッターがおります。もちろん、そのほかにも内部にスイッチがあって、シャッターの開閉は自由にできるのですが」
「シャッターが閉まれば、ガレージの三方はコンクリートの壁だから、二階の客室も含めて、一種の密室状態になるわけですね」
「まあ、そういうことでしょうか」
杉岡は、これまでとは別種の、いささか気まずい表情で目を伏せた。
その理由は、捜査課長にも察しられた。四十七年の十月から十二月にかけて、全国的に都道府県条例が出され、この種のモーテルの立地条件と構造設備に関して、新しい規制が設けられた。その中には、ガレージとルームとを別個に切り離すこと、ガレージのシャッターを開閉が容易で見通しのきくものにする、などの点が盛りこまれ、現存のモーテルも一年以内に改造するよう求められているのだ。しかし、実際には、改造したくても用地や資金がないといったケースが続出し、業者側から違憲の訴えが出されているほどで、短期間で徹底施行はまず不可能という現状なのである。
捜査課長はその問題には触れず、
「――客がルームへ入ってしまうと、連絡はいっさい電話で行なうわけですか」
「そのとおりです。二階へあがってちょっと落ち着かれた頃合いを見計らって、フロントから電話をかけ、改めて車のナンバーと予定をうかがいます」
「昨夜十四号の客にも、そうしたわけですね」
「はい。シャッターがおりて、五分ほどたってから、お電話しました。男の方がお出になり、まずカーナンバーを尋ねましたが、それはフロントのテレビで見たナンバーと同じでした。予定については、朝まで泊まるつもりだが、チェックアウトの時間ははっきり決めていないと

いうご返事でしたので、お帰りのさいはあらかじめフロントへ電話を入れていただくようにお願いして、切ったのです」

その男の声や喋り方についても、捜査課長は質問したが、これといって記憶に残るほどの特徴はなかったという。

「それきり、朝十時半に死体が発見されるまで、何の連絡もなかった――？」

「はい。そのようですね。私は今朝六時に八代と交代して、家へ帰ったのですが」

これで、中谷浩司が、昨夜十時半に、セドリックの助手席に女をのせて「サンガーデン」の十四号室に入ったことは、ほぼまちがいないものと考えられた。中谷の死亡は今のところ午前零時までと推定されているから、彼は入室後約一時間半の間に排気ガスによって中毒死したことになる。

まず、過失のケースが想像された。中谷は、ガレージに車を入れ、エンジンを切るのを忘れて二階へあがってしまった。そのうえ、ルームの入口のドアを開けっ放しにしておいたため、充満した排気ガスにやられた。女は何らかの理由で死を免れ、関わりあいになることを恐れて逃げ帰った……。

一年あまり前にも大阪の、ここと似たような構造のモーテルで、客が車のエンジンをかけたままで酒をのんだりしたあと眠りこみ、この時にはルームで二人、車の中で二人、合計四人の男女が中毒死するという事故が起こっている。

次に、自殺、あるいは、無理心中という見方も成り立つ。中谷が一人で自殺を図ったとすれば、先に女を帰したと考えられ、心中なら、女は道連れを拒否し、ガスが充満する前に逃走したのであろう。

だが、過失、自殺のいずれより、他殺の疑いが濃厚に匂った。いうまでもなく、中谷が重要参考人として手配されていた畑山事件との関連を考慮してのことだが、現場の状況からも、過失とするには、エンジンを切り忘れ、ルームのドアを開放しておいたなど、やや不自然が目立つ。捜査課長は杉岡に、フロントから電話したさいの相手の感じをもう一度念入りに尋ねてみたが、応答の口調はごくふつうで、酒に酔っているとも思われなかったと、杉岡は答えた。

自殺の状況としても、腑に落ちない点が多い。中谷が一人で自殺するつもりだったのなら、わざわざモーテル

へ女を連れこむ必要はなかったと思われる。心中を図って女に逃げられたと見る方がむしろ可能性は強いかもしれないが、それにしても、無理心中の設定から結局男一人が死亡するまで、長く見積もっても約一時間半という早さが、首をかしげさせるのである。

では、他殺であったとすれば、どうか——。

やはり女の犯行と見るのが最も自然のようである。中谷は女を同伴して十四号室に入った。この時すでに女は殺意を固めていた。そこで中谷に睡眠薬をのませるかして眠らせ、車のエンジンをかけ、ルームのドアを開放して逃走したのではないか？

いずれにせよ、女は現場から、従業員に気づかれずに姿を消している。

「連れの女の脱出経路ですが」

捜査課長は杉岡に対して質問を続けた。

「ガレージのシャッターは、中のスイッチによっても開け閉めできると言われましたね」

「はい。でもふつうは、お客様から電話でお帰りの連絡を受けますと、フロントのリモコン装置でシャッターを開けるのですが」

「ふむ。しかし今度の場合は、フロントに何の連絡もなかったわけでしょう？」

「はい。それで私もさっきから考えていたのですが……連れの女性は、ガレージのシャッターを開けて出たのではなく、シャッターはいじらずに二階の窓からドライヴウェイにとびおりたのではないかと思うのですが……」

杉岡は律義そうな顔を緊張させて意見をのべた。

「ほう。その理由は——？」

「シャッターのスイッチはガレージの内側についていますが、開閉の速度はゆるやかですから、中から出る場合、いったんシャッターを全開し、次に閉めるボタンを押しておいて外へ出ることは、もちろんできます。ただ、うちのシャッターはもうだいぶ古いものですから、動かすたびに大きな音がするんです。条例もあるので、近々に改造するそうですけど。——それで、シャッターが開閉すれば、必ずフロントに聞こえるんです。お客様の中には、こちらへ電話なさるのを忘れて、自分でシャッターを開けて出ていらっしゃる方もたまにはありますが、そんな時にもフロントではシャッターの音を聞いてチェックアウトの準備をするくらいなんです。ですから、昨夜ももし十四号のシャッターが動いていたら、こちらで気がついていたと思うんですが」

「なるほど。二階からでもあの程度の高さなら、楽にとびおりられますからね」

一階はガレージなので、普通の建物よりずっと天井が低い。また、客室の、従業員用通路とは反対側のドライブウェイに面したガラス窓は、発見当時閉まっていたが鍵はかかっていなかったと、発見者の八代は明言している。

「では、まず二階の窓から外へ出たとして、次にモーテルの外部へ出るのはどうでしょう？　通常の出入りは、フロントルームの前にある入口と出口の二つのシャッターをくぐるわけですね」

「そうです。ただし、ふだんはどちらも閉まっていまして、入口のシャッターは外から車が進入してきた場合に自動的にあがりますが、そのほかはフロントで操作しない限り開閉できませんが」

やはり女が勝手に開けて出たとは考えられないようである。

「すると、芝生の斜面を伝って逃げたのかな」

「そうですね。でなければ、裏の方に従業員の食堂や宿舎になっている一棟があって、そちらの通用門は夜も開いてますから……」

「なるほど」

連れの女の逃走経路についても、これでかなり固まってきた。

捜査側は、念のため、中谷たちがチェックインした当時、杉岡といっしょにフロントにいたもう一人の係や、サンガーデンのほかの職員にも別個に事情聴取を行なったが、杉岡の話と矛盾するところはなかった。

従業員用宿舎に泊まっていたルーム係の女性二人の聴取からは、昨夜通用門や芝生などをあやしい人影が通ったといった話を聞くことはできなかったが、二人ともルームサービス終了の午後十一時以後は、すぐ寝室に引きとり、まもなく寝たというから、何も気がつかなかったとしても不思議とはいえない。

一方、ガレージに入ったままになっていた黒のセドリックは、車検証から「豊島区長崎三丁目、安宅康信」の所有とわかった。

朝霞署の水谷部長刑事が部下一人と共に、西武池袋線東長崎駅そばの「商安土地建物株式会社」を訪れたのはその日の昼すぎである。車のダッシュボードから車検証が発見された時点で、すぐ捜査員が安宅康信に電話をかけた。その結果、安宅は「商安土地建物」の社長で、会

社と自宅が接続しているため昼間電話は会社にかかること、問題のセドリックはナンバーから確かに安宅の所有であるなどが、若い社員の応答によって判明したが、当の安宅は不在で、昼ごろ戻る予定という返事だった。

「商安土地建物」は、駅前の一方通行の商店街の外れにあった。東京近郊の私鉄の駅の周辺などに多くある、細い道路に沿ってマーケットや小さな商店の建ち並ぶ通りで、「商安土地建物」も、そうした町筋の中によく見かける小ぢんまりした不動産屋の構えであった。モルタル二階建ての事務所の裏に、古い木造住宅が見える。その間を利用してコンクリートの車庫が造られていて、今は隅に五〇CC程度の小さな単車が一台突っこんであるだけだった。

水谷刑事らが、ガラスがきれいに磨かれたスイングドアを押した時、ちょうど奥のドアが開いて、四十年配の腭の張った赭ら顔の男が事務所に入ってきた。男は二人連れを認めると、にわかにあわただしい足取りで歩み寄ってきた。

それが安宅康信だった。彼は出先からの電話で、ある程度事情を聞いていた。

だが、水谷から改めて、今朝、朝霞市のモーテルで中谷浩司が死体となって発見され、彼が安宅所有のセドリックを運転してきていたことなどを告げられると、黒縁眼鏡の奥の細い目に、なんともいえず沈痛な光が滲み出た。

「やっぱり、そんなことだったのですか……」

安宅は喉にからんだ声で呟き、一度肩で深い息を吐くと、傍らの椅子に腰を落としてしまった。

「やっぱり」といった意味は、まもなく本人の口から説明された。中谷浩司は彼の異母弟に当たり、中谷は昨日の夜、二、三時間といって安宅の車を借りていったが、今朝になっても音沙汰がないので、事故でも起こしているのではないかと心配になり、心当たりに問い合わせてみようと思っていたやさきだったと、彼は語ったのである。

4

「中谷浩司とは、戸籍上は赤の他人ですが、実は腹異いの弟になりまして、私には、たった一人の兄弟でしたが……」

安宅康信は、少し瞼のたるんだ三角形の小さな目をジ

ッと凝らし、疲れきった、途切れがちな口調で話していた。西荻窪署刑事係長の和栗警部補が、向かいあった位置に膝をおろして、その様子を見守っている。

中谷浩司の遺体が解剖に付された埼玉医科大学法医学教室の、あいた一室である。三時すぎの静かな時間帯で、古い校舎の窓の外には、青桐がまだたくましい緑の葉を繁らせて、こちらに影を落としていた。

解剖の結果、事件は他殺の見解がほとんど決定的となった。体内から少量の睡眠薬が検出されたうえ、現場がモーテルの一室であったにもかかわらず、情交の形跡が認められなかったからである。死因はやはり排気ガスによる一酸化炭素中毒で、死亡時刻も、外様所見による推定と同じく、十月十四日午後十時から十二時ごろまでと判断された。

事件は朝霞署の管轄で、埼玉県警の応援を得て「モーテル殺人事件」捜査本部が設置された。

だが一方、被害者は西荻窪署に本部を置く「金融業者強殺事件」の重要参考人として手配されていた男で、彼の死もおそらく先の事件と無関係ではなかったと考えられる。そこで両本部では、今後密接な連絡をとりあう必要があり、和栗も埼玉医大まで出向いて、そこで弟の遺体を確認したあとの安宅に事情聴取を行なったのである。

「浩司は……ひと言で申せば妾の子で、小さいころから何かにつけて不運な星の下に生まれついたような奴でしたが、最後まで、不憫なことをしました」

安宅は、膝の上の握り拳に視線を落とした。彼はまだ四十ちょうどだと、さっき和栗は聞いている。腹異いとはいえ、二十六歳の中谷の兄ならせいぜいそのくらいにちがいないが、額の生え際が薄いのと、腭が張り、小鼻が横にひらいた無骨な顔立ちのためか、ずっと年配じみたムードが漂っている。腭骨は四角く張り出しているが、頬がひどくこけているので、痩せた河馬のような印象である。黒縁眼鏡だけは思いきってシャープなデザインを選んでいるが、それは風貌と不似合いで、かえって奇妙なだけだった。

その眼鏡の奥の小さな目のふちが、今はうっすらと赤らんで、涙のあとが認められた。

「同じ家で育たれたのですか」

和栗は抑揚の少ない早口で質問する。こちらは相変わらず、無愛想でやや冷たい感じを与える浅黒い顔を向け、きびしい眼差しを注いでいる。

「いえ……浩司と私とは十四ちがいまして、浩司が小学

三年の時まで、私は会ったこともなかったのです」

すでに朝霞署の刑事にも訊かれたことだろうが、安宅は面倒がる気配もなく、むしろ何度も浩司について話すことがせめてもの供養になるとでも考えているような、熱心な口調で語りだした。

「私の親父は、終戦後三鷹の方でやはり不動産の仕事をやっておったのですが、浩司は父が小料理屋の女に産ませた子なのです。ところが、その後まもなく、父が脳溢血で急死してしまったために、浩司は認知もされぬまま、私たちは、それぞれの母親の手で、別々に育ったわけです。まあ、私の家には、多少ながら父が残してくれた土地や借家もありましたから、私はアルバイトもせずに大学を出られたのですが、浩司の方は、小料理屋で働いていた母親も病弱だったらしくて、小さい時から相当な貧乏を味わったようです。そんなことも、私はずっと後になって知ったのですが……」

浩司がはじめて安宅の前に現われたのは、浩司が小学三年生で、安宅が二十三歳、大学四年の秋だったという。父親の死から足かけ九年たっていたが、安宅と彼の母親はまだ三鷹に住んでいて、土地を売った金で増築したアパートの収入で生活していた。

浩司は、母親が病死して、彼女の友だちに付き添われて、安宅の家をたよってきたのである。母親の旧い親友だというその女性が、生前頼みこまれていたらしい。

「私の母は、浩司のことを父から聞いて知っていた様子でしたが、いざ連れてこられると吃驚して、ひどく迷惑そうな顔をしてましたよ。無理のないことかもしれませんが。でも、私がお袋を説き伏せて、浩司を引き取るようにさせたのです。別に、亡くなった父に対してどうこうなどというんじゃなく、ただ、家には浩司を養育するくらいの余裕はあったし、それに私が、母親と二人きりの家庭に、息苦しさを覚える年代だったからでしょうねえ」

安宅の母親もそれから七年後に死に、彼が三十歳で結婚した時には、浩司は商業高校の一年になっていた。そのころには、一家は現在の安宅の住居に転居していて、彼は大学卒業後、三年ほどサラリーマン生活を経験したあと、自分で今の商売をはじめていた。

「ところが、家内の多恵子と浩司とが、どうもソリが合いませんでねえ。それで家が面白くなくなったのか、浩司は高校三年の春ごろから不良仲間と付き合いだして、家をあけたりするようになりましてね。もともとあいつ

は気の弱い性質で、いったん仲間に入ると抜け出せなくて、ズルズル引きずられていたんでしょうが……」

一方そのころ安宅も、事務所を新築した矢先に悪質業者に騙されたりして、仕事の苦労が絶えず、苛立ちまぎれに浩司と口論することも一再ではなかった。それでますます家庭に厭気がさしたのか、浩司は高校卒業直前に家出してしまった。

「あいつがぐれたのには、自分にも責任があると反省しまして、手を尽くして捜したのですが、結局行方知れずで……そのうち私も娘が生まれたり、住宅ブームの波でどうにか回転しだした商売に追われて、いつのまにか浩司のことはあきらめた恰好になっていたのですが……」

その浩司が、突然フラリと姿を見せたのは、一昨年の夏の夜で、家出以来六年ぶりのことだった。二十四歳になった浩司は、顔つきやことば使いなどは齢相応に成長していたが、寂しがり屋で気が弱く、それでいて何か思いこんだら前後の見境いもなく暴走するといった生来の性格は少しも変わっていないと、安宅は一時間も話をしているうちに感じたという。家出後は大阪や神戸で種々な職業を転々としたが、親しくしていた友だちが上京して建設会社で働くようになったのが動機で、急に東京へ舞い戻る気になったらしかった。

「私としては、もう一度家に入れてやりたい気持ちだったんですが、家内に、小学校へ入ったばかりの娘に悪い影響を与えてはと反対されましてね。家内はそのころから身体を悪くしていましたから、私も強いては言わなかったのです。浩司自身も、必ずしも私たちと同居したいと望んでいたようでもなかったですし……でも今にして思えば、無理してでもあの時いっしょに住んでいれば、こんなことにはならなかったのでしょうが……」

安宅は眼鏡をはずし、まるめたハンカチで目頭を押えた。

「すると、中谷さんはどこで暮らしていたのですか」

「東京へ帰ってきた当初は、私が見つけてやった池袋のアパートにいたのですが、今年の春から、同じ会社の仲間が住んでいた中野本町のアパートへ移っていました。その人が郷里へ帰ることになったとかで……」

「お勤めはずっと松岡建設だったのですか」

「ええ」

「別に暮らしていらしても、時々はあなたの家へ来ていたのでしょう？」

和栗は中野のアパートの家主の話を思い浮かべた。中

谷には東長崎に兄がいるらしいが、行くと説教ばかりされるからと、けむたがっていた……。

「半月に一度ぐらいでしたかねえ。仕事を怠けて金に困ったり、日曜日に女の子とドライブに行くから車を貸してくれとか、自分の勝手な時だけ来ていましたが……」

「ここ十日ぐらいの間に、何か変わったことはなかったでしょうか」

畑山事件は、八日前の十月七日に発生している。その重要参考人——本部内ではすでに有力容疑者として、中谷が手配された矢先に彼の死体が発見されたわけだが、そうした事情は、まだ安宅には告げていなかった。こちらの手の内を晒すのは、なるべく先の方がいいと、和栗は踏んでいる。

「さあ……」

安宅は小さな眸を窓の外に凝らした。

「昨夜までは、ひと月ほど顔を見せなかったと思うんですが……念のために会社の者に尋ねてみてもかまいませんが」

「いつも店の方へ来ていたわけですか」

「いえいえ。うちも小さいながらも、社員一人と女の子を置いていますから、浩司も気詰まりだったのか、夜家の方へ来ることが多かったのですが」

「すると、あなたのお留守中に彼が来たかどうかなどは、主に奥さんに訊けばわかるわけですね」

「いえ、家内は今おりません。小学二年の娘がたいてい一人で留守番してまして……」

安宅は小さく溜息をついて、床に視線を落とした。やや たって、和栗の沈黙に促されるように顔をあげて、

「家内は、八月初めから入院しているのです。駅のそばの、井上産婦人科ですが。——子宮癌で、一年前に手術しまして、しばらくはよかったのですが、今度はどうも……」

一段と重苦しい表情で、首を傾げた。

「それはいけませんな」

和栗は、目の前の自分とほぼ同年配のいかつい感じの男の頭には、さまざまな心配事がつまっているのだと察した。が、口に出した声の調子は素っ気ないものになってしまい、それを取り繕うように、かえって急いで話を続けた。

「すると八月以降は、お宅はあなたと子供さんの二人だけだったわけですか」

「ええ。家内の姉が千葉の方から時折り手伝いに来てく

れてましたが……」
「で、浩司さんとは、昨夜ひと月ぶりに会った――？」
「ええ」
「今朝まで連絡がないので心配していたというお話でしたが、一晩車を借りていくようなことは今までなかったわけですか」
「ええ……」と安宅はまた沈痛に口許を引きしめた。説明によれば――
中谷浩司は昨夜八時ごろ、ブラリと安宅の家に姿を見せた。しばらく雑談したあと、車を貸してほしいと言いだした。
不動産業者にとって、車は大事な商売道具で、昼間はなしではすまされない。だからこれまでも、浩司に貸すのは日曜日に限っていた。それをいうと、浩司は、二、三時間で必ず帰ってくるからと約束した。が、用途については、ことばを濁していた。
安宅は気が進まなかったが、浩司に粘られて、仕方なくキイを渡した。彼は九時半ごろ、セドリックを運転して出ていった。
その後安宅は娘を寝させてから、駅のそばの井上産婦人科へ妻の様子を見に行き、十二時ごろまで枕許にいて、家に帰ってきた。
浩司は戻っていなかった。午前二時まで起きて待っていたが、電話連絡もなかった。
「今朝は七時ごろ目を醒まして、すぐ車庫を見にいったのですが、やはり車は戻っていませんので、なんだか胸騒ぎがしたのです。と言いますのは、浩司はあれで気の弱いところがあって、本気で私を怒らすようなことはできないはずなのです。それで、もしや事故でも起こしているんじゃないかと心配になったわけなんですが、本町のアパートには電話がありませんし、私も十時にはお客と約束があったものですから、仕方なく会社の樋口君の軽四輪を借りて出かけたのです。十一時半ごろ外から会社へ電話を入れましたら、私の車が朝霞のモーテルで発見されて、何か事件があったらしいというので、吃驚して引き返してきたわけですが……」
安宅は赤黒い顔面に一段と濃い疲労を滲ませながら、一通り話し終わると、幾度目かの溜息をついた。
しかし、これまで和栗が観察した限りでは、安宅は中谷が畑山事件に関して手配されていたことを、少しも知らなかったように見える。
和栗は西荻窪署員である自分が事情聴取する理由の説

明を、もう少しのばすことにした。その点にも、安宅は深く気を廻す余裕もない様子だった。
「解剖の結果はお聞きになったと思いますが、体内から睡眠薬が検出されたなどで、事件は他殺の疑いが濃くなっているのですよ。しかも連れの女性は姿を消していますし」
「……」
「それで、浩司さんが日ごろ付き合っていた友だちで、男でも女でも、ご存じの人はありませんか」
「はあ……それが皆目わからないのです。女の子を乗せてドライブにいくような話はしていましたから、女友だちもあったんでしょうが、私は会ったこともありませんし……」
「林奈津実という女をご存じないですか」
「いいえ」と安宅は表情を変えずに首を振った。
「名前を聞かれたこともありませんか」
「いえ……思い当たりませんが」
「ふむ。……では、男の友だちはどうですか。最近とくに親しくしていたような人物はいなかったでしょうか」
「最近ですか……」
安宅がはじめてどこか含みのある口調で反復した。それからちょっと額に手をかざして考えこんでいる。
「お心当たりがありますか」
「いえ……実は――」
まだ少し迷うふうだったが、
「実は……私が昨夜から妙に胸騒ぎを覚えたりしたと申しますのが……」
「ええ」
「浩司はどうも夏ごろから競輪に凝っていたらしいのです。大阪から戻ってきて一年あまりは、どうにか真面目にやっていたようで、この分ならと安心しかけたばかりだったのですが……」
「競輪なら仲間がいたのでしょうね」
「そうなのです。それも、競輪場で知り合った木原とかいう男に、賭け方を教えてもらった。その男のいうとおりにやれば絶対に損をする気遣いはないなどと、すっかり心服していた様子で……それにしては、浩司は相変わらずピーピーしていましたが」
「木原……その人物に安宅さんもお会いになったことがあるのですか」
「いえ、九月の初めごろ、一度遠くから見かけただけなのです。夕方私の会社のそばまでいっしょに来て、その

男だけ別れてどこかへ行ったようでしたが」
「どんな男でした？」
「チラッと見た感じでは、五十前後の、ずんぐりした男でしたが……」
「どこに住んでいるのでしょうか」
「さあ……今にして思えば、もっとよく聞いておけばよかったのですが……」
安宅はまた躊躇を含んだ陰鬱な面持ちで口をつぐんでいたが、しばらくして、
「実は最近浩司は、その木原と、何か大きな仕事をはじめるつもりだと匂わせていたのです……」
「最近というと、具体的にいつですか」
「浩司がそれを洩らしたのは、私が木原を見かけた九月初めなのですが。自分もいつまでも土方をやっている気はないし、木原に右腕になってほしいと頼まれたと張り切っているみたいでしたが、肝腎の仕事が、一体何をやる気なのか、もう一つはっきりしませんので、私も大して身を入れて聞かなかったのですが、……浩司がこんなことになってみると、その時の話が妙に気になりまして……なんといっても私が至らなかったばかりに、とんだ迷惑をおかけして、申しわけありません」
安宅はがっくりうなだれるように、和栗に向かって頭をさげた。
このあと和栗は、ようやく、安宅に、中谷浩司が八日前に杉並区善福寺で発生した金融業者強殺事件の重要参考人として手配されていたこと、その理由は、殺人現場に円形脱毛症にかかっている頭髪が落ちていたこと、さらに被害者畑山欣造の情婦であった林奈津実と、中谷が知り合いであった形跡がうかがわれるなどであることを告げた。
案の定、安宅は寝耳に水の驚愕を表わし、浩司が円形脱毛症にかかっていたのは知っていたが、畑山欣造も林奈津実も、そんな名は噂にも聞いた憶えはなく、関わりがあったとは思われない。誰か別人との人ちがいであろうと主張した。とはいえ、つい今しがた安宅自身が口にした「木原」なる人物や、浩司がその男と何か計画していたなどの話が、安宅の胸にも複雑な影をひろげていることが、かすかに気遅れしたような彼の口ぶりから、和栗にも察しられた。
この事情聴取に基づいて、中谷が競輪場で知り合った「木原」という五十年配の男の捜索と、同時に、安宅康

信自身の調査も開始された。これは本来朝霞署の「モーテル殺人事件」捜査本部に任される仕事のはずだが、西荻窪署でも一応別個に活動を進めた。

というのは、中谷浩司の死体が発見され、その身辺調査から、彼が畑山欣造殺害事件の犯人であったことが、ほぼ確実と見られてきたからである。それは、現場で採取された円形脱毛症の頭髪の血液型、毛質などが中谷のそれと一致し、つまり彼の頭髪とほぼ断定されたこと、畑山の家の応接間のテーブルに残っていた指紋の中に、中谷の指紋が発見されたこと、事件の翌々日になる十月九日以後、中野区本町のアパートで彼を見かけた者がおらず、姿をくらましていた形跡が認められること、などの理由によっていた。

また、九日の朝、富士見池で久藤恭太を襲った若い男も、中谷であった可能性が強い。これは恭太がのべている犯人の背恰好が中谷と似ているからだが、犯人はハンチングやサングラスで顔を隠していた様子なので、恭太は中谷の顔写真を見せられても、確かにこの男だと断定することはできなかった。しかしまた、犯人のことば使いにはかすかに関西訛りが感じられたともいうから、やはりほぼまちがいないものと思われる。

したがって、畑山殺しが中谷の単独犯行であれば、事件はこれで一応解決したことになるわけだが、中谷の調査が進むにつれて、共犯者の存在が強く浮きあがってきたのである。

その最大の理由は、中谷の身辺に、畑山の金庫から奪ったと思われる書類や、まとまった金が発見されないことである。書類はすぐ焼いてしまったとも考えられる。また現金も、金庫の中にさほど入っていなかった場合もありうるが、それにしても、全然なかったとは思われない。現に畑山の情婦であった林奈津実は、彼が金庫の中に常時四、五十万円の金を保有していたようだと話している。

ところが、中谷のアパートからは二千円足らずの小銭が出てきただけだし、彼が殺されたモーテルの部屋にあったジャンパーのポケットには、三万円しか入っていなかったのだ。中谷が、金庫から盗んだ金を全部持ち歩いていて、それは中谷を殺した犯人に奪い去られたというケースも想像できるわけだが、すると三万円残っているのが腑に落ちない。

それよりも、畑山殺害には中谷のほかに共犯者がいて、その人物が畑山の金庫の中身を握っていたと考える方が

自然ではないか。ひいては、中谷はその共犯者によって消されたのではないか。

中谷が恭太を殺そうとした可能性が強いことも、共犯者の存在を暗示している。恭太は富士見池の犯人がはじめて会った男だったとのべており、まして畑山事件の朝、現場付近で出遇った男とは別人であると明言している。

すると、なぜ中谷は恭太を襲ったのか?——恭太が中谷の共犯者を目撃しており、恭太の証言によって共犯者が挙がれば、自分も逃れられないと思ったからか。あるいは、共犯者に恭太の口を封じるよう指示されたからではないか。

「木原」および安宅康信の調査が、西荻窪署でも進められたのは、このような事情による。

「木原」の調べは最初から難航が予想された。中谷が主にどこの競輪場に通っていたかもはっきりしないうえ、そこで知り合った五十年配のずんぐりした男というだけでは、あまりにも手懸かりが乏しい。しかしまた、中谷がその男と「何か大きな仕事」を企らんでいたという安宅の話から、「木原」が共犯者であった可能性は濃いので、多数の捜査員を注ぎこんで、地道な聞込み調査が続けられた。

一方、安宅自身については、中谷の死体が発見された翌日ぐらいには、およその調べがついていた。

「商安土地建物は、主に都内と周辺部の宅地の売買とかアパートの周旋などをやっている小さな不動産会社ですが、ほとんど安宅一人で切り廻していたという感じですね」

直接聞込み調査に当たった和栗が、警視庁の平井警部に報告した。

「ほかに樋口という若い社員と女の子を一人雇っていますが、樋口は去年、ノイローゼで三年も休学したあとようやく大学を卒業して、就職も思うに任せず、知人の紹介で安宅の会社へ転がりこんだという男で、彼にはアパートの世話ぐらいの簡単な仕事しかさせていなかったようです。人柄はおとなしそうな青年ですが。女の子もお茶汲み程度ですね。だから、会社の経営内容については、当面安宅から聞く以外にないのですが。彼の話の限りでは、自己資本と信用金庫などの借入れ金を運用して、月平均一千万円ぐらいの商いがあり、まずまずだそうです。昨今の不景気で、どこでも商売がやりにくくなっているが、自分とこは管理いっさいを任されている安アパートが数軒あって、そういうところはかえって借り手の

出入りが頻繁で、そのたびに手数料が入るから、それで結構日銭が稼げるなどとも言ってましたがね」

「畑山との関連はどうなのかね」と平井がいつものやや性急な口調で訊いた。

「安宅自身は名前も聞いたことがないといっています。樋口と、佐々木という女子社員も首を傾けるばかりで、隠しているふうにも見えなかったですね。——ついでに隣り駅の江古田にあった同じくらいの店構えの不動産屋に寄ってみたんですが、やはり安宅のことは知っていました。しかし、同業者間でとくに何か評判があるようではなく、安宅が畑山から金を借りているといった話も出ませんでしたが」

畑山の側のメモにも、安宅や商安土地建物の名は見いだされなかったのだ。

しかし、金庫内の書類がほとんど消えていることでもあり、これだけで安宅と畑山の間に貸借関係がなかったとは断定できない。

「ともかくアリバイを当たる必要はあるね」

「ええ。それも一応調べました」

和栗は淡々と答える。話す時の表情や口調が素っ気ないのは、上司に対しても変わらないのだ。

「まず当人に尋ねたところが、畑山事件については、八日前の午前六時から七時といわれてもすぐにはピンとこないと頭をひねっていたが、ともかく家内が入院してからは、自分は毎朝七時少し前に起きて、朝食の支度をしてから子供を起こし、学校へ送り出すのが習慣になっているので、その日もそうだっただろうというのです。小学二年の娘は学校にいっていて留守だったんですが、訊いたところで、いずれにせよ父親と口を合わせるだけでしょうからね」

「中谷が殺された晩は、奥さんの病院へ出かけていたという話だったね」

「ええ。浩司がセドリックを借りて出ていったあと、子供を寝かせて、十時ごろ病院へ行き、十二時ごろまでいたというわけです。それで井上産婦人科に廻ってみたのですが、夜間は十二時まで通用門を開けていて、病棟の出入りは自由なので、あの晩十時に安宅が来たのを確認した者はいない……」

「奥さんは何といっているのかね」

「いえ、それがもう、家族以外は面会謝絶で、私が行った時も痛み止めの注射で眠っている状態で……」

「そんなに悪いのか」

「ええ……。それで、十月十四日の夜のことは看護婦に訊いたわけですが、十一時十五分ごろには、廊下で安宅を見かけたという者がある。それから十二時に通用門を閉める直前に彼が帰ったことにも証人があります。ですから、中谷がモーテルへ入ってから、死亡推定時刻の終わりまで、つまり十時半から十二時を対象にして考えれば、少なくとも十一時十五分以後は、安宅は確かに東長崎の病院にいたわけですね」

もし、十時半に中谷がサンガーデン十四号室へ入った直後に、安宅が何らかの方法で侵入し、中谷に睡眠薬をのませたうえ排気ガスで中毒死させる状況を設定して逃げたと仮定すれば——犯行に最低限度十五分、朝霞のモーテルの前から東長崎まで車をとばしたとしても三十分と見て、合計四十五分。したがって十一時十五分に彼が病院へ現われたとすれば、ギリギリで不可能ではないともいえるわけだが……。

和栗が思いめぐらしていると、平井が、

「しかし、朝霞署の捜査では、当夜中谷たちが入った十時半から十二時ぐらいの間に、サンガーデンの十四号室へ、外部から人間が侵入したとは考えにくいということだ。中谷の連れの女を共犯と考えても、内側からシャッターを開閉すればフロントにその音が聞こえたはずだし、二階の窓からでは、とび降りることはできても、よじ登るには苦しい高さだ。あまり時間をかけたのでは、人目につく危険が高いわけだし」

「外部からは無理としても、従業員用の廊下があるはずですね。廊下に沿って、各室のドアがついていて、ルームサービスなどはそのドアから受け渡しするという話でした。つまり、廊下が串のように、各ルームを繋いでいた。だから、もし犯人がその辺を心得ていたとすれば、あらかじめ別の部屋に入っていて、中谷たちが十四号室に落ち着いたところで、廊下伝いに忍びこめたはずだと思いますが」

「なるほど、それは可能だろうね」と平井は即座に同意した。

「しかし、あの晩十時半から十二時の間にチェックアウトした客はなかったそうだよ。したがって、犯人が別のルームを利用して犯行したとすれば、十二時以降に素知らぬ顔で表門を通過して帰ったか、もしくは犯人は先に裏の従業員用出入口からひそかに脱出し、そのあと共犯者が、十二時以後にチェックアウトしたか、いずれかということになるね」

「ええ」
「今安宅一人に絞って考えてみるとすれば……先の場合は時間的に問題にならない。彼は十一時十五分は東長崎の病院にいたのだから。後のケースで、裏口から忍び出たとしても、彼は車がないわけだから、十一時十五分までに東長崎の病院へ行っているためには、急いでタクシーを拾わなければ間に合わない。ところが、十時半から十二時ぐらいの間に、サンガーデンの近辺で客を乗せたタクシーは浮かばないらしいのだよ」
「レンタカーを借りてモーテルの近くに駐めてでもおけば別でしょうが……しかし、それは手がこみすぎていますね。セドリックは浩司たちに貸し、別に自分がモーテルへ入る時の車と、またもう一台近くに用意しておくというのも……」
「そうなのだ」
平井は大きな動作で頷いた。
「これはなにも安宅に限らず、中谷の連れの女以外に犯人がいるとすれば、どうせ、その女を共犯に利用するのなら、全部女にやらせればよかったはずだ。自分が危険を冒してまで現場に出入りする必要はない。中谷に睡眠薬をのませて、あとは車のエンジンをかけて自分だけ脱出するのだから、男でも女でも条件は同じだからね」
「そうですね。確かにその方が自然だ……」
今度は和栗が低く呟いた。彼にしても、とくに安宅一人をマークしていたわけではない。一つの可能性として押しつめて考えてみただけなのだが。
「やはり、サンガーデンで中谷を殺したのは、いっしょに入った連れの女しかないんじゃないか。情交の形跡もないというのだから、十四号室に落ち着くなり、中谷にビールをすすめ、何をする暇もなく眠らせてしまったのだろうな」
平井が煙草に火をつけてから応じた。
現場検証によれば、ルームに備えつけの冷蔵庫の中に、半分ほど飲んだあとのビールがあり、グラス二個に使用の形跡が認められたという。が、グラスはきれいに洗われ、ビール壜の指紋も拭きとられていたそうである。
「それにしても、犯人はなかなか落ち着いているね。あらかじめ細かく手順を考えていたのだろうが」
「しかし、女はなぜ中谷を殺したんでしょうかね」
胃をこわしてから煙草を控えている和栗は、大きな薬罐から番茶を注ぎ足した。
「善福寺とは別個な、痴情犯という見方も一応考慮しな



ければならないと思いますが……」
「いや、十中八九、無関係とは考えられないな」
平井は自説を整理する口調で、
「畑山殺しの共犯者が、中谷が手配されたのを知って、女を使って殺させたか。今一つは、サンガーデンの連れの女自身が畑山事件の共犯者で、自分の判断で中谷を消したか……」
それから、
「本来なら、林奈津実が、最有力のコースなんだがねえ……」
ちょっと眉をしかめて煙を吐いた。
その意味は、今さら説明されるまでもなかった。中谷の死体がモーテルで発見されたという連絡がこちらの捜査本部に届いた時には、いったんは誰しも、連れは林奈津実ではないかと連想したものだが、実際は、彼女のアパートが判明して以来、四六時中、刑事が張り込みしていたのである。奈津実が外出すれば、ひそかに尾行していた。その結果、十月八日の夜以後、彼女が中谷とはもちろん、疑わしいような相手とは全然接触していないことを、認めざるを得ないのである。問題の十月十四日夜十時半から十二時の間も、彼女が阿佐谷の寿荘から出ていないことを、張り込みの刑事二人が断言していた。
となると、中谷と共にサンガーデンへ入った女は何者なのか——？
二人がそれぞれ自分の思考を追いながら番茶を啜っていた時、平井の席の電話が鳴り響いた。彼が取ってしばらく応答していたが、やがて受話器を置くと、個性的な目に一段と興奮の色をたたえて和栗を顧みた。
「田口君からだったんだが、サンガーデン周辺の地取り捜査で朝霞署員といっしょになった時、耳寄りな話を聞いたそうだよ……」
事件当夜の十時四十分から五十分ごろ、したがって中谷たちのセドリックがサンガーデンへ入った少しあとくらいに、女性の運転するグレーの小型車が同じモーテルの近辺をしばらくウロウロしてから、東の方向へ走り去った、というのである。
この情報は、たまたま反対側の路上に駐まって客待ちしていたハイヤーの運転手が今朝朝霞署に届け出たもので、それを田口部長刑事が朝霞署員から聞きこんだという恰好らしい。今度の事件では、二つの捜査本部が合同捜査の態勢をとり、当面はテレックスで情報を交換しあっているが、他県だけにそこは微妙な対抗意識も働いて、

あらゆる手懸かりが即刻両本部に伝達されるともいえないのである。

「車の名称やナンバー、あるいは運転していた女性の人相なんかははっきりしないというが、朝霞署でもこの届け出を重視して、是が非でも問題の車を洗い出す気構えでいるらしい……」

和栗は無意識に、湯呑みをデスクの上に押えつけていた。

「やはり、林奈津実以外に、第二の女が動いていますね」

五章　脅迫者

1

九月末から十月半ばぐらいまでの、秋のはじまりのころには、一週間か十日ほどの間に、季節のめぐりがくっきりと目に冴える時期がある。

もっとも近年都心部では、一年中排気ガスの色に被われている感じだが、青梅街道が保谷市に入る手前、練馬区関町のあたりまで来ると、まだ時には畑や空地も目につき、高い木立のたたずまいにも「郊外」の趣きが残っている。

午後四時すぎに、西武新宿線の武蔵関で下車した小暮究は、踏切を渡り、商店街とは反対の、両側に住宅の建ち並んでいる、ゆるい坂道をのぼっていった。在来の木

造家屋の群れに、光沢のあるブルーの屋根やきれいな白壁の新築が時たま混じった、静かな住宅街が続く。

それらの家々の隙間に梢をのぞかせている欅、銀杏、桜、プラタナスなど丈高い樹木の葉が、ちょうど一週間前の朝、剣道の稽古に行く久藤恭太に出くわすためにここを歩いた時より、目に見えて黄色味を濃くしているように感じられた。人通りの少ない路上を流れていく風も冷んやりとして乾いた肌ざわりだった。

しかし——この一週間の変転は、季節ばかりではなかったと、小暮はやや気重く思い返した。

恭太がこの近くの富士見池で危険な目に遇ったのは、小暮と別れて道場へ行った、その帰り途であったようだ。そして昨日の朝には、朝霞のモーテルで中谷浩司の変死体が発見され、彼が畑山殺しの犯人であったことがほぼ断定された。

だが、西荻窪署が捜査本部を解散せず、モーテル事件の捜査に力をそそいでいる緊張した雰囲気は、共犯者の存在を暗示している。

恭太は本当に危ないところだった。小暮が話を聞いた直後の出来事だけに、彼は少なからず責任を感じているが、しかし一方では、あんな事件が起きた後では、当然警察では以前より恭太の身辺を警戒するはずだから、今後はかえって安心だともいえるだろう。

一方、同じ朝、芳鹿荘を発ったアベックについては、業界紙の波多野記者から、ようやくにして男の名前と身許を聞き出すことに成功した。

それで、クラブのキャップや一課担当の記者たちと相談した結果、もうしばらく捜査本部には男の名を伏せておき、小暮が単独で問題の二人の事情を探ってみることに決まった。こんなふうに、記者が潜行して独自の調査を行なうことを、クラブでは「少年探偵団」と呼んでいる。

恭太の家は、坂をのぼりつめ、また少し下った先から細い路地を入った奥の、長屋ふうの一軒である。

路地の角で、小暮はそれとなく辺りに目を配ってみたが、古い家がひっそりと木洩れ陽を受けているだけで、警戒の巡査らしい姿も見えなかった。

恭太の家のドアがなかば開いていて、のぞくと上がり框にランドセルが放りこんである。が、声をかけても、家の中で応答は聞こえなかった。

代わりに、小暮の背後を通りかかった恭太と同じほどの年恰好の女の子が、彼は学校から帰るなり、近所の女

子高校のグラウンドへ野球をしに行ったらしいと教えてくれた。恭太の母親が帰宅するのは、毎日六時すぎだという。

小暮は、坂道を少し逆戻りしてから、教えられた方へ曲がっていった。

広々とした芝生の庭が続いている。そう思いながら、よく見ると、それは家庭の庭ではなくて、芝生を栽培して切り売りしている「芝生屋」のようであった。若々しい緑の芝と、ところどころ長方形に切り取られた地面の土の色が、毎日ほとんどの時間をビル街ですごしている小暮の目に、いかにも新鮮に感じられた。便利なだけが取柄の飯田橋のアパートを引き払って、この辺に転居しようかと彼はいっとき真剣に考えた。

ヒマラヤ杉に縁取りされた私立女子高校のグラウンドの横にはみ出した空地で、なるほど小学生の一団が野球をやっていて、セカンドを守っている恭太の姿がすぐに見つかった。金網の内側では、スマートなユニフォームの女子高校生たちが、テニスやバレーボールに熱中している。それで夕暮れ近いグラウンドの一帯には、絶えずどこかでかん高いかけ声があがっていた。

小暮は空地の柵にもたれて、チェンジになるまで観戦していた。それから恭太が近くまで戻ってきた時、「久藤君」と声をかけた。

恭太は驚いたように振りむいたが、そこに小暮を認めると、小鼻の横に皺をつくってちょっと笑った。その反射的な表情が別段迷惑そうでもなかったので、小暮は内心ホッとした。痩せた身体に洗い晒して白っぽくなった紺色のTシャツを着た恭太は、先日の剣道着姿より少し幼く見える。小学三年生というが、最近の発育のいい子供たちの平均と比べれば、彼は小粒の方にちがいない。

「この間はありがとう」

グローブを外しながら歩み寄ってきた彼に、小暮は会釈した。恭太は味噌歯をのぞかせて、またはにかんだような微笑を浮かべたが、子供にしてはやや神経質な表情だと、小暮には感じられた。それはこのところの一連の出来事——殺人事件の聴取を受けたり、見知らぬ男に襲われたりした異常な体験の投影にもよるだろうが、もともとこの少年独特のもののような気がする。

「今日も、ちょっとの間話が聞きたいんだけれど……今迷惑なら、もうしばらく待ってもいいよ」

「うん……」と恭太は曖昧に頷いてから、仲間のいるホームベースの方を振り返った。

「まだぼくの打順は廻ってこないから」
今度は少し気忙しそうに答えた。
そこで小暮は、
「実は……例の善福寺で事件が起きた朝、君が蕪蔵寺の横の坂道で出遇った女の人のことなんだけどね」
またかという反応を覚悟のうえで、熱心な口調で切りだした。
問題のアベックの男の方は、業界紙の波多野から、群馬医科大学助教授の各務徹夫であると教えられた。各務は三十七、八歳、医大では公衆衛生学の講座を持ち、この五月にはE市の共立電化工場周辺の地下水分析を引き受け、目下の公害紛争の渦中で重要な立場にあるなどの事情は、遊軍の都築記者の話でわかった。
だが、肝腎の相手の女性はどこの誰なのか、それについては波多野と会った時点で調査は足踏みしている。
男が各務と判明している以上、本人に直接尋ねてみる方法があるわけだが、これはキャップもほかの記者たちも賛成しなかった。各務が簡単に告白するとは思われないし、相手に警戒されてしまえば、各務の名を捜査本部に伏せてまで独自に追跡しようとしているもう一つ奥の目的——各務の行動と公害紛争との相関関係について、調査がやりにくくなるのは目に見えているからだ。
では、ほかに考えられる手段といえば——たとえば四六時中各務を尾行すれば、彼らの再度の逢引きを捉えられるかもしれない。しかし、それも警視庁クラブの一課担当記者の立場では無理な相談である。都内には毎日のように大小の事件が発生しているのだから。
それに、各務たちの方でも、善福寺の事件以来、自重してしばらく密会をさし控えることも十分想像される。
すると、残るのは、間接的な調査の輪を縮めていくというやり方だけだった。まず、共立電化の公害問題を通して、比較的各務のプライバシーに接触する機会のある都築や前橋支局の記者に、各務の身辺を洗ってもらい、彼の愛人とおぼしき女性を捜すこと。一方では、その女性をともかくも目撃している久藤恭太と、芳鹿荘の女中に、もう一度なるべくくわしい特徴などを聞き出して、両方から浮かんできた女性像をつき合わせて判断するといった方法である。
この調査があまり手間取るようなら、思いきって各務に直接当たる。これがクラブの仲間で一致した方針だった。
「——あの女性は事件の現場付近をずっと歩いてきた恰

好だからね。ほかでも何か手懸かりになることを見聞きしているかもわからないんだ。それで、顔つきや背恰好なんかを、もう一度、できるだけ思い出してみてもらえないだろうか」

すると、辟易した表情を浮かべるかと思った恭太の丸い澄んだ目の中に、一種の緊張が漂い出し、彼は軽く息をつめた。少しして、

「あのう……」と声を出してから、彼はちょっと眉をしかめて小暮を見あげた。

「うん――？」

「もしかしたら、ぼく、一昨日またその女の人を見たんです」

小暮は、一度ゆっくりと呼吸した。

「どこで？」

「たぶん同じ女じゃないかと思うんだけど……」

小暮が思わず強くのぞきこむと、恭太はうつむいてズックの足許に目を落とした。

「よく似ていたわけだね」

小暮は声の力を抜いた。

「うん。茶色の靴をはいた足の感じなんかも、そっくりだった」

恭太は、蕪蔵寺脇の坂道を上からおりてきた女の脚やスカートの裾が朝露に濡れ、枯れ葉がついていたことを、先日小暮に教えてくれた。それで彼はほとんどストレートに、芳鹿荘へ行き着くことができたのだった……。

「どこで見たの」と彼は再び尋ねた。

「石神井公園の駅前です」

「すると、西武池袋線だね」

「うん。一昨日学校から帰ってから、友だちと石神井池の方までサイクリングに行ったんです。帰りに駅の前を通って、自動販売機の牛乳を買ってたら、先の方をこの間の女の人みたいな感じの人が歩いていった……」

なるほどサイクリングかと、小暮は納得した。石神井公園と武蔵関は、ほとんど平行して東西に走っている二本の西武線の別々の沿線にある駅だが、直線距離にすれば三キロあまりであろう。

「学校から帰って行ったのなら、夕方だね」

「石神井公園の駅前に来たのが、五時くらい……」

五時ではかなりうす暗くなってはいたわけだ。

「その女の人は、どんな服装をしていた？」

「クリーム色みたいなカーデガンを着てたと思います。それに、買物袋をさげてたかも……」

「夕方五時ごろ、カーデガンに買物袋か。それで、君たちの前を通ってから、どっちへ行ったの」
「スーパーなんかのある方へ歩いて行った」
「ああ」
恭太の話から察する限り、その女性は石神井公園駅の近くに住居を持っているようだ。
「しかし……彼女は、この間の女の人と同じだと思うかい？」
小暮はつとめて気軽な口調で、キイポイントを確かめた。あまりこちらが勢いこむと、かえって少年の判断を狂わせる恐れがある。
「うん……チラッと見た時、あっと思って……それから見えなくなるまで、似てるなあって気がしてたけど…」
恭太はズックの先で地面をこすりながら考え考え答えた。
「こんなことなら、この間の朝、もっとちゃんと見ておけばよかった……」
「いや、それだけでも十分だよ。ありがとう」
ちょうどその時、グラウンドの方から大声で恭太を呼ぶ声が聞こえた。打順が廻ってきたがどうするかと訊いているのだ。
「それじゃあ」
軽く手をふって走っていく小さな後ろ姿に、小暮は、身辺に気をつけるようにと声を送りかけて、結局思い留まった。
武蔵関の駅まで戻ると、彼は電話ボックスの扉を押した。コインを三個ばかり用意して、社のダイアルをまわした。
めったにつかまらない遊軍の都築が、運よく間もなく電話口に出た。
「この間聞いた群馬医大の各務助教授の件だけれど―」
「ええ」と答えて、先方がこちらの話を待っている様子では、彼の方に頼んである各務の身辺調査にはまだ目ぼしい収穫がないのであろう。
「各務の付合い範囲に、石神井公園の付近に住む女性はいないだろうか」
「石神井ねえ。彼の自宅は三鷹台の方だったと思うんですが……」
「その女性は、たぶん人妻で、西武池袋線の石神井公園の近くに家があるはずなんだ」
一呼吸置いてから、
「とにかく、調べてみましょう」と彼は快活な声で答え

た。

その都築が、警視庁の記者クラブへ姿を見せたのは、翌日の昼すぎだった。

日本新報の部屋にはキャップの梶原と小暮、それにもう一人、若い記者がいて、畑山事件の続報を検討していた。今の小暮のように「少年探偵団」に携わっている記者は、かえってふだんより小まめにクラブへ顔を出すのが常である。他社の勘ぐりを防ぐポーズだった。

深い意味もない挨拶代わりのやりとりの後で、

「昨日電話でお聞きした件ですが――」

都築は声を低くしながら、小暮の横に、あいていた椅子を引き寄せた。

「さっき前橋支局と、一度ぼくが取材に行った時話を聞いた被害者連絡協議会のおばさんとに電話して、それとなく尋ねてみたんですがね」

「いろいろお手数かけまして」と小暮がなかば笑いながら謝った。

「各務のプライバシーまでは、みんななかなかわからないらしいのですが……ただ、これはもしかしたら関係あるかもしれないと思って……」

都築はツイードの上衣の内ポケットからメモ用紙を取り出し、素早い手つきで小暮の目の前に置いた。

「共立電化の総務部次長の家が石神井にあると、前橋支局の記者がいうんです。そう言われれば、ぼくも聞いたことがありますよ」

「総務部次長か……」

キャップの梶原が呟いて、傍らから紙片をのぞきこんだ。そこには都築の文字で《練馬区石神井町×番……》といった住所と電話番号が走り書きされている。

「会社の機構にもよるだろうが、公害紛争などではたいてい総務部あたりが最初に矢面に立たされるわけだろうな」と梶原が都築に目を移した。

「そうですね。ことにこの桂木謙介という男は、群馬工場の建設段階から現地に赴任して、現在でも工場次長兼任です。技術畑の人で、工場の事実上の責任者といえる立場ですからね」

「その人の住所が、これなんだね」と、小暮が念を押した。

「ええ。去年の十月に本社総務部次長に栄転して、今はここの社宅に住んでいます。子供はなく、家庭は奥さんと二人きりだそうですが」

都築の最後のことばが奇妙な啓示となって、その桂木の妻と各務助教授とを、急に密着させるような気がした。

やがて小暮は、写真部へ扱いやすい望遠カメラを借りにいくために、都築と並んで部屋を出た。

2

十月十七日、午前九時半——。

廊下の角に置かれている電話のベルが、静かな家の中に鋭く鳴り響いた。

一人で茶の間のテーブルにもたれ、このところ手入れもしていない庭先に、キリン草の繁殖に押されながらも白い萩と濃紫の小菊が咲き乱れているさまを眺めていた麻子は、無意識にビクリと肩を慄わせた。三日前の夜以来、麻子の神経は電話のベルに対して異常な恐怖の反応を示す。ベルを聞くたびに、夫の前で冷汗が出るような応酬のあげく、自分を強引に川越街道まで呼び出した正体不明の男の声が、耳底に甦るのである。

あの電話の主は、本当に何者だったのだろうか？

自ら名乗ったように、「西荻窪署の者」でなかったことだけは、今では明らかなのだ……。

ベルは鳴り続けている。心の深部に突き刺さってくる容赦のない響きから逃れるためには、電話に出る以外になかった。

麻子は立っていって、受話器を取りあげた。

「もしもし」という男の声にかぶさって、ブーンと通話開始のサインが鼓膜に響いた。公衆電話からしい。

「もしもし」と、やわらかい男の声がくり返した。その途端、麻子は思わずあっと小さな声を洩らしそうになった。だがそれは、驚きと安堵と、うれしさの混じった叫びなのだ。相手は各務徹夫にちがいなかった。

「はいっ」と麻子は答え返した。語尾にこもった力に、麻子の気持ちのいっさいが託されているかのように。午前中の、それもこんな早い時刻に彼が電話をかけてくるのは、本当にめずらしかった。

「どうしていますか。ちょっと気になったものだから」

彼とは、五日前の夕方、井の頭公園の旅館で別れて以来逢っていない。あの帰り、麻子はほとんど衝動的に西荻窪署へ匿名の投書をしようと決心してしまった。自分の身許は伏せて、目撃した事柄だけを届け出たいという麻子の願いは、しかし結局裏切られた恰好で、翌日一部

の新聞に投書の事実が報道され、その夜麻子は刑事と自称する男の電話によって、川越街道の朝霞市付近までむなしく往復させられた。

十一時すぎに帰宅した時には、麻子の恐れに反して、刑事らしい男の姿も見えず、また出がけに夫が話していた会社関係の来客があった様子もなく、彼は一人茶の間で、不機嫌な顔で専門書を読みふけっていた。

麻子は、書道教室で知り合いの鈴川夫人に、ご主人が釣ってきた魚をもらいに行くという口実で家を出たわけだから、夫人とは行きちがいになってとうとう会えなかったと言い訳するしかなかった。夫はむずかしい横顔を向けたままで、黙っていた。

その場はそれですんだわけだが、麻子の内部にはさまざまな疑惑や心配や、暗い予感に似た恐怖が浮き沈みして、浅い眠りのまま朝を迎えた。

麻子の予感は、その日の夕方には早くも一つの事実となって出現した。昨夜麻子がパトカーの姿を捜した川越街道のモーテル・サンガーデンの一室で、若い男の変死体が発見され、被害者中谷浩司は八日前の金融業者強殺事件に関係していた疑いが濃いと、六時のテレビニュースが報道したのである。

これらの経緯は、その直後に各務の方からかかってきた電話でありのまま彼に伝えてあったが、逢う機会はまだつくれないでいた。

「大丈夫。落ち着いていますわ」

彼はこれから前橋の大学へ行って講義をするのだろうと察して、麻子は自制した声で答えた。

「そう。それなら安心した」

「でも……今朝の新聞には、ちょうどモーテルで事件が起きた前後くらいに、前の道路にグレーの小型車が駐まっていたという届け出があって、その車を捜索しているといった記事がのってましたわ」

大丈夫といったすぐ後から、麻子は心中を露わにした声を出していた。

「ええ」と各務は短く答えただけだが、彼がいつになく忙しいはずの時刻に電話をかけてきたのは、彼も、それが心配になっていたのかもしれないと、麻子は気がついた。

「誰かが私の車を見ていたんですわ。私は三十分ぐらいあの辺にいたし、付近にはハイヤーなんかも駐まっていましたもの」

「しかしその小型車があなたのルーチェと決まったわけ

じゃないでしょう」
　各務は穏やかに制したが、心なしかその口調にも力がなかった。
「いいえ、きっと私ですわ」
　ことばに出して訴えると、いっそう暗い確信が胸に居すわってくるみたいだ。
「それに、新聞には簡単にしか書いてないけど、警察に届けた人は、もっと詳しいことも見憶えていたんじゃないかしら。車のナンバーとか、私の人相なんかも……」
「そんなに物事を悪い方にばかり想像するものではありませんよ。――第一、もしナンバーまで通報していたら、もうとっくに警察から何か問合わせがあるはずでしょう」
「ええ……それもそうだけれど」
　麻子はわずかに気持ちを静めた。が、ふいにまたある直感が脳裡をかすめ、すっと血が退くのを覚えた。
「でも、もしかしたら、私の車のことを警察に届けた人は、私を偽電話であそこまで呼びつけた張本人かもしれないわ。そいつは、私を現場付近にウロウロさせて、殺人の容疑がかかるように仕組んだ。だから、もっともらしく、徐々に手懸かりを出していく気なのではないでしょうか。――そうだわ。それにちがいない。私はみすみす、犯人の罠にはめられて……」
　知らぬまに、麻子は涙声に変わっていた。
「まさか……」
　受話器の底で、各務が重い溜息を吐いた。
「いえ、たとえ車のナンバーまではわからなくても、きっと私のことはもうおよそ警察の耳に入っているにちがいないわ。……ああ、いきなり刑事に踏みこまれるより、いっそもう自分から名乗り出た方が、どれくらい楽になるかわからない……」
　一人で胸に押しこめていた気持ちが、いったん堰を切ると、出勤前の彼の頭を悩ますまいと思った最初の自制などは、たちまち押し流されていた。
「麻子さん、本当に落ち着いてくださいよ」
　わざとかどうか、各務は苦笑をからませて言った。
「あなたの言い方を聞いていると、まるでぼくらが何か――何か犯罪でも犯したみたいだ。刑事に踏みこまれるなんて……ねえ、気持ちをしっかり持ってください。あの中谷浩司なる青年を殺した犯人が、あらかじめ電話であなたを呼び出して、罪を着せようとしたというけれど、そんな考えは突飛すぎますよ。あなたが中谷を殺す動機

なんか何一つありはしないんだから」
「でも彼は畑山事件に関わりがあったらしいから……もしか彼が犯人だったら……」
「それにしても、あなたが直接彼を目撃したわけじゃなし、いや万一彼があなたを狙うことがあったにせよ、あなたが彼を殺す動機にはなりえない。第一警察としては、たとえ車の線からあなたを見つけ出した場合にも、あなたが畑山事件の現場付近を通りかかり、後で投書した女性だとは気づかないわけだから、中谷とあなたとを結びつけようがないはずですよ」
「本当に気がつかないでしょうか」
「こちらが否定すればそれまでしょう。証拠はないんだから」
芳鹿荘の女中には、最初から気を配り、まともに顔を見せずにすんだつもりだが……もし警察が久藤恭太に尋ねたら——？
彼を土手から救いあげた男が、坂の下の木立の先に走り去った直後、なんとはなしに微笑を交わした少年の賢そうに澄んだ目が、一瞬麻子の脳裡をくっきりと横切った。が、そのことは口に出さなかった。
二度目の通話の区切りを予告するサインが鳴ると、「とにかく、会いましょう」と、各務がやや性急に言った。
「ええ。私も、一人でいると、目の前が暗くなるようで……」
「元気を出して。明後日は大泉の大学へ行く日ですから、その帰りに落ち合いましょう。三時に富士見台の例の店でいいですか」
富士見台は、石神井公園より一つ池袋寄りで、ふだんは麻子も各務も下車する用のない駅である。その駅前の商店街の外れに小さなティールームがあって、だいぶ前から時折り待ち合わせに利用していた。
「結構ですわ。三時に、ビクトリアで」
念のために反復すると、うれしさが胸に染みた。どのような状況の中でさえ、各務と会えることの、不埒なまでにせつない歓び——。
麻子はかすかに光がさしたような気持ちで、居間に戻った。
うす曇りの季節外れに肌寒い日で、庭の草花が冷たそうな風に吹かれている。どうにかチューリップの球根だけは埋めこんだ片隅の土の上に、弱い陽が落ちている。
今からこんなふうでは、今年は冬が早いのかもしれな

い。

長い地方暮らしを終えて、この家に越してきてからまる一年がすぎたのだと、麻子は今さらのように思った。東京は生まれ育った土地なのだから、帰ってきたという表現の方がふさわしいのかもしれない。それなのに、なぜかこの石神井の社宅は、いつまでたっても、わが家の感覚で肌に密着してこない。全部で四部屋の家は、夫婦二人には適切な広さだし、古い日本家屋にしては間取りも都合よく配置されていると思うのだが……。

各務との付き合いが、ここへ移ったのとほとんど同時にはじまったからではないだろうか——？

ふと、何か恐ろしい事実に気がついたように、胸を衝かれた。

各務との触れあいが深まるにつれて、麻子の外出が以前よりかなり頻繁になったことも否めない。それから、彼と共にすごす場所と、そうでない日常生活の場とが、まるで次元のちがう世界のように感じられてきた。彼と共有にすることを許されない世界は、麻子の目にはまるで乾いた平面で、情緒に訴えてくる潤いも翳りもなかった。そうした場所は、ただ機能だけだった。

やはり、いつの間にか、家庭は「仮の宿り」になってしまっていたのだろうか……？

この時、玄関のブザーが鳴った。

麻子はわれに返り、それからまた不快な緊張が心を縛ってきたが、今度はさっきの電話よりも早い動作で立ちあがった。各務のことばに、というより、明後日には彼に会える約束で、気持ち全体が上向きになっている。どんなことも、恐れず切り抜けていくしかないのだ……。

ブザーは無遠慮とも感じられる気忙しさで、たて続けに鳴っている。うす暗い廊下を歩きながら、再び淡い恐怖が胸にわきあがった。玄関にはふだん掛け金がおろしてある。場合によっては居留守を使えばいいのだと考えた。

麻子はサンダルをはいて、そっとドアに歩み寄った。目の高さに、指の先ほどの覗き窓がはまっていて、レンズの仕組みで玄関の外側が見えるようになっている。昨年入居のさい、このドアだけは新しく造り換えてもらったものだった。

躑躅の生垣と、その手前に横向きに立っている人影が見えた。

グリーンの服を着た女である。あまり見かけない人だが、訪問者は彼女一人のようだ。

麻子はひとまず安堵しながら、
「どちらさまでしょうか」とはじめて声をかけた。すると、
「ちょっとお願いします」
ハスキーな女の声が、やや強引な調子で答えた。ブザーの鳴らし方といい、セールスの女性でもなさそうだ。
麻子は少し迷ったが、やがて掛け金を外した。
ドアを開けると、二十六、七歳ぐらいの、すらりとした女が立っている。やはり知らぬ相手で、赤茶に染めて垂らした髪や、アイシャドウの濃い化粧など、麻子の交際範囲の主婦たちとは趣きがちがう。グリーンと黒の縞のニットドレスも、あまり上品な好みとはいえない。
怪訝な眼差しに対して、相手は厚い唇を軽く開いた口許にお義理めいた笑いを浮かべ、次にはいきなり麻子のそばをすり抜けて、ドアの内側へ滑りこんだ。自分で素早くドアを閉めた。
「桂木麻子さんでしょ」
今度は微笑もなく、眦のあがった強い目で麻子を見据えた。
「あなたは……？」
「あたしは、林奈津実。といってもご存じないかもしれないけど、説明すればすぐに思い当たるわ。——折り入ってお話があるのよ」
女は抑揚の少ない口調でサラリと言って、ひとわたり玄関の中を眺めた。
麻子はとりあえず、とっつきの応接室へ奈津実を通した。相手の身分を確かめ、用件によっては追い返すこともできると思ったが、何か直感的に、奈津実の「話」を聞かねばならないような弱みを覚えていた。
十畳ほどの応接室に入ってからも、奈津実は好奇心を露わにした眼差しで、飾り棚や庭先を見まわしている。
やがて煙草を取り出した相手に、
「林さんとかおっしゃいましたわね」
麻子の方から促した。
「私にお話というのは——？」
奈津実は二、三服ふかしてから煙草を静かに灰皿に置き、油断のない目になって見返した。
「林奈津実では奥さんにはわからないでしょうけど、畑山欣造さんと懇意にしていた者ですの」
フルネームで言われたためか、麻子は一瞬ピンとこなかった。
「それに……実は中谷浩司とも他人じゃなかったのよ。

二人とも、もうこの世にいませんけどね」
　ああ……と、麻子は自分でも意外なほど落ち着いて受けとめた。中谷の名を聞いた途端に、畑山欣造が何者であったかも思い出した。そして、この女が何か一連の事件にからんだ用件で訪ねてきたことを、最初から見透していたような錯覚をおぼえた。
「畑山殺しの話は、たいてい中谷から聞いていたつもりよ。もちろん、あたしは直接関係ないことだけど。でもそれで、あなたの名前も家も知っていたわけよ」
　それではやはりサンガーデンで殺された中谷浩司は畑山事件の犯人だったわけか。それにしても、なぜこの女が、彼から麻子の名前や住所を聞いたというのか？
　束の間の真空のような落着きは、たちまち麻子から失われていった。
　奈津実は長い爪にマニキュアした指で、煙草をふかした。それをまたそっと灰皿に戻してから、
「中谷はね、事件の朝、善福寺公園の上の道であなたとすれちがったそうね」
「え……？」
「おまけに彼はあなたの苗字も家も知っていた。そのことはあなたにもわかってたでしょうけど」
　麻子はいよいよ混乱を覚えた。谷川に落ちかけてあやうく土手にしがみついていた少年と、手をのばして助けあげたがっしりした男の横顔が、瞼に浮かんだ。だがその光景を、麻子はやや離れた場所から見守っていたにすぎない。ましてあの男とすれちがった憶えはない。第一、あの男と中谷とは、年齢も体格もちがっているようなのに……。
「お話の意味がわかりませんわ」
　奈津実はむしろ無表情に麻子を見返していたが、
「今年の夏、その辺にマンションが建ったんでしょう？」
　道路の方をひょいと顎でしゃくった。
「……？」
　この家のはす向かいに、マンションができたのは事実である。六階建ての相当大きなもので、去年の暮れに着工して、半年ほどで完成したと思う。前面には広い駐車場も設備され、もう半分ぐらいの部屋に人が入居している様子だが……？
「マンションの基礎工事と駐車場は松岡建設の下請けでね。中谷はひところ毎日その現場へ通っていたのよ。それでこの家に出入りする奥さんの顔を憶えていたんですって」

一瞬、麻子は頭の芯に鋭い痛みが走るような感覚を味わった。「落とし穴」ということばを連想した。あまりにも思いがけない、虚をつかれたショックのせいかもしれない。だが——そういわれれば、建設工事の間中、昼どきと三時ごろには、労務者の男たちが何人か、家の前の路上に腰をおろして煙草をふかしたりしていたものだ。そして、買物や各務と逢うために外出する麻子の姿に、無遠慮な観察の視線を浴びせた……。

あの中に中谷浩司がいたのか——？

「中谷は美人の奥さんを見るのが楽しみで、時たま庭をのぞいたりしたなんて言っていたわよ」

確かに、あの中に中谷が混じっていたのなら、彼が麻子の苗字と家を知っていたのは、当然である。だが、それにしても、畑山事件の朝には、いつ、どうして麻子を……？

「だから、あの朝すれちがった時には、中谷も最初はまさかと思ったらしいの。それでつい顔をのぞきこんでしまったので、こっちも見憶えられてしまったかもしれないって、心配もしてたわ」

あの朝すれちがって、顔をのぞきこんだ……？

再び麻子はあっと息をのんだ。記憶の襞の奥に消えかけていた短い光景が、ふいに甦った。そうか。あの男が中谷浩司だったのか！

それまで麻子の注意は、蕪蔵寺横の坂道で見かけた二人だけに絞られていた。だから記憶に残る中年男と中谷のちがいに戸惑っていた。

しかし、中谷は実はそれ以前に、つまりあの坂道にかかる前、芳鹿荘から野原の中の道を歩いてくる途中ですれちがった若い男だったのだ。いったんそれと気がつくと、男の姿は不思議なほど鮮明に脳裡に浮かびあがった。痩せ形の長身を黒っぽい背広に包み、目についた特徴といえば、長目の髪をかなり後ろの方からグッと前にときおろしていたことだ。

あの一見平凡なサラリーマンと見えた男が、実はそのわずか前に、人の首を絞めてきたのだろうか——？

なんともいえず陰惨な恐怖に襲われて、麻子は身体中に冷たい汗を感じた。

奈津実が膝をつき出すようにして、

「あなた、畑山事件のことは、新聞なんかでよく知っていたんでしょう？」

「……」

「それならどうして中谷のこと、ちゃんと警察に届け出

なかったの。警察では必死に目撃者を捜していたのに」
彼女はオレンジ色のルージュが光る唇のあたりに、意地の悪いうす笑いを浮かべている。皮肉で挑発的な口調になっていた。
麻子は顔が歪みそうになるのをこらえながら目を伏せた。もうシラを切り通すのは不可能だろう。といって、うかつな返事をすれば、たちまち言質をとられることになる。
「やっぱり中谷が見抜いていたとおり、秘密な事情がありそうね」
奈津実はまた突きはなすような無表情に戻って、
「彼はね、畑山殺しの翌る日の晩、ちょっとあたしのアパートへ顔を出したのよ。結局それが最後になってしまったけど……その時あなたの話も聞いたのよ。いずれあなたに会わなければならないだろうと言っていたわ。お互いに円満な話合いをするためにね」
「それでは……あの男だったのですね。私に電話をかけてきたのは」
これだけは確かめたい気持ちが、衝動的に麻子の口をついた。
「いつの電話のこと？」と奈津実はチラリと眉をひそめた。
「十月十四日の、あの人が殺された晩の九時すぎ……」
「ああ、やっぱり彼があなたに電話をかけたのね。それで会ったわけね」
麻子はあわてて強く首を振ったが、急に奈津実は目を光らせて、
「これではっきりしたわ。中谷があなたを電話で呼び出して、サンガーデンへ誘いこんだ。それから……」
「ちがいますわ！」
麻子は悲鳴に似た声をあげた。焦りと狼狽にカッと頬が上気した。やはり言質をとられたのか。この女の罠にはめられたのだろうか——？
「私は、中谷さんになど、会っていません！」
「だって、彼はあの晩、あなたに電話をかけた。そのあとで女と二人連れでモーテルへ入ったのよ。それならあなた以外考えられないじゃないの。そして、モーテルを出たのは、あなた一人……」
「ちがうんです。あの晩は——実は確かにサンガーデンの近くまで出向いたんですけど……たぶん何かの行きちがいで……」
「まあ、それはいいわよ」

麻子のうろたえた説明を、奈津実は気のない表情で遮って、

「いざとなれば、警察がちゃんと調べてくれるわ」

「……」

新たな恐怖で、また麻子の頬がすっと蒼ざめた。

「とにかく、中谷は畑山事件の朝、現場近くであなたに出遇った。しかもあなたの住所も名前も知っていた。ところがあなたは、おそらく彼と同じくらいに、警察にそれを知られては困る」

「……」

「その事情を見抜いた中谷は、あなたに電話をかけた。何か話合いをする目的だったにちがいない。でも、やがて彼はモーテルの中で、連れの女に殺された。——今はこれだけで十分だわ」

この時、麻子の中にある想像が生まれた気配を、奈津実は目ざとく見つけると、早口で続けた。

「あたしが疑われる気遣いは、まるきりないのよ。畑山さんが殺されてからは、毎日刑事があたしのアパートを見張っていたんだから。あたしはおちおち買物にも出られなかった。でもおかげで、中谷が殺された晩のあたしのアリバイは、刑事が証明してくれるというわけ。世の中、何が幸いするかわからないものね」

「……」

「今日も尾けられると厄介だと思って、無理して早起きしたのよ。池袋の駅は、まだラッシュで混雑していたから、うまく撒けたはずだわ。もっとも中谷が殺されて、あたしが無関係とわかってからは、刑事たちもちょっと気を許したムードだけど。とにかく苦労してここまで来たんですからね」

最後はまるで恩に着せる口吻だった。

「では……私にお話とおっしゃったのは……？」

「たいてい見当がつくでしょう」

奈津実はなんでもないことのように言って、バッグから新しい煙草をつまみ出した。それから軽い上目使いで麻子を見て、

「中谷とあなたとの関わりを知っているのは、今ではあたし一人なんだから」

3

「うん……この人だと思います。石神井公園の駅前でこの間見た人は」

人通りの少ない道端のベンチに並んで腰をおろし、小暮のさし出した三枚の手札型写真を改めた久藤恭太は、三枚目を見た時、すぐに頷いた。

「洋服もおんなじみたいだ。この間も、こんなカーデガンを着てた」

恭太が手にしている写真には、桂木麻子の上半身が横向きに写っている。昨日の昼すぎ、遊軍の部築に桂木謙介の住所を教えてもらうと、小暮は写真部へ出向いて、比較的取扱いが容易な望遠カメラを借り出した。どういうものか、クラブ詰めの記者は、自分でカメラを扱わぬ者が多い。それから、桂木家の門前に二時間近くも張り込んだあげく、夕方になってようやく買物袋をさげて出てきた麻子を盗み撮りしたのである。

恭太に見せたほかの二枚は、学芸部の女性記者と、クラブのお茶汲みの女の子の、つまり無関係な写真である。麻子の名は、写真を撮ったあとで、共立電化の人事課へ電話をかけ、付け届けの必要から尋ねるふりをして聞き出しておいた。

三枚の中からすぐに麻子を選び出した恭太の様子を見て、小暮はほぼ確信を得たが、念のために別に二枚のやや角度のちがう麻子の写真にも、目を通すようにたのんだ。

恭太の答えは変わらなかった。

「ありがとう」といって、小暮は恭太の手からそれらを受け取り、麻子の一枚にあらためて目を注いだ。

桂木麻子は、小造りで日本的な顔立ちのほっそりとした横顔を見せ、うすい胸を白っぽいカーデガンで包んでいる。自然なウェーブのついたショートヘアの下に、可愛らしい耳朶がのぞいている。背後にぼんやりとうつっている植込みと木の門柱は、桂木家のものである。

筋向かいのマンションのブロック塀に身を寄せてこれを写した時、夢中でシャッターをおろしながらも、小暮は麻子の思いがけぬ美しさに軽い衝撃を覚えていたほどだった。カーデガンにニットスカート、網の買物袋を腕にかけた姿は、一見どこにでもいる主婦の印象で、化粧もうすく、決して人目を惹くタイプではないのだが……知的で上品な光をたたえたくっきりとした眸、すんなりと通った鼻梁、白い項から撫で肩にかかる曲線のやさしい女らしさ。そのうえ、こちらの意識のせいか、麻子はその身についた慎ましい表情の奥に、いいようもない情熱と苦悩を抑えこんでいて、それが女盛りの横顔に不思議なはなやぎをあふれさせているかのようにさえ感じら

れたのだ。

写真をポケットにしまうと、その手で小暮はハイライトを取り出した。二人が腰かけているベンチの後ろには小さな稲荷の赤い鳥居が重なって立ち並んでいて、奥の木立から乾いた風が流れてくる。細い煙が静かな路上に乱れた。午後三時すぎで、恭太は下校の途中だった。

「これで、君がサイクリングの帰りに見かけた女の人の身許はわかったわけだ」

しかし、方程式はまだもう一カ所、大事なところで完全に繋がってはいない。

「残る問題は、この女性が確かにあの金融業者殺しが起きた朝、君が出遇った人と同じかどうかなんだが……」

小暮はわざと振り出しに戻るような言い方をして、恭太が自信ありげな反応をしめすのを期待していた。それで方程式はすっかり整ったと考えていいと思っていたのだが……恭太は黄色い通学帽を膝の上で弄びながら、意外に黙りこくっている。

それで小暮は、

「どうだろうか。もしテストで○×をつけるとしたら、どうする？　同じ人と思えば○、あやふやなら×……」

「テストなら○をつけるよ」と、今度は案外気軽に答えた。

「だって、まちがえたって点を引かれるだけでしょう」

「ああ……」

小暮はちょっとたじろいだ気持ちで、少年の横顔を見守った。恭太はかすかに眉根を寄せ、眉間に小さな皺を刻んだ、例の子供にしてはやや神経質な表情を浮かべていた。自分の返事一つで何か重大な影響が生まれることを察しているのにちがいない。

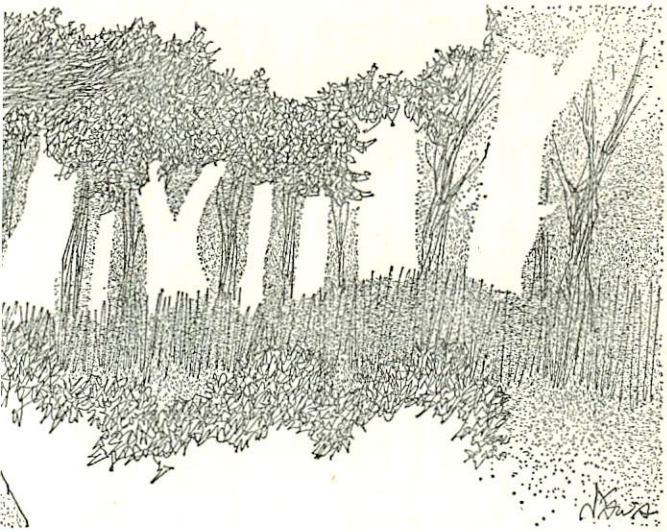
少したってから、小暮は無理に微笑を浮かべて、

「しかし、君が○をつけるというくらいだから、よほど似ていたんだろうな」

「あの時には、そう思ったんだけど……」

「うむ」

これ以上の答えを要求するのは無理というものだろうと、小暮は靴先で煙草を消しながら考え直した。恭太が桂木麻子、あるいは彼女らしき女性を見かけたのは、いずれも短時間にやや遠くからのことで、面と向かって話を交わしたわけではないのだ。この写真にしても、斜め横顔で、写真部では優秀な性能のカメラを貸してくれたにもかかわらず、残念ながらさほど鮮明な出来映えとはいいがたい。



こんな条件で、実際には一度ずつしか見ていない二つの対象を、同一人か否か、断定せよという方が強引な注文に決まっている。

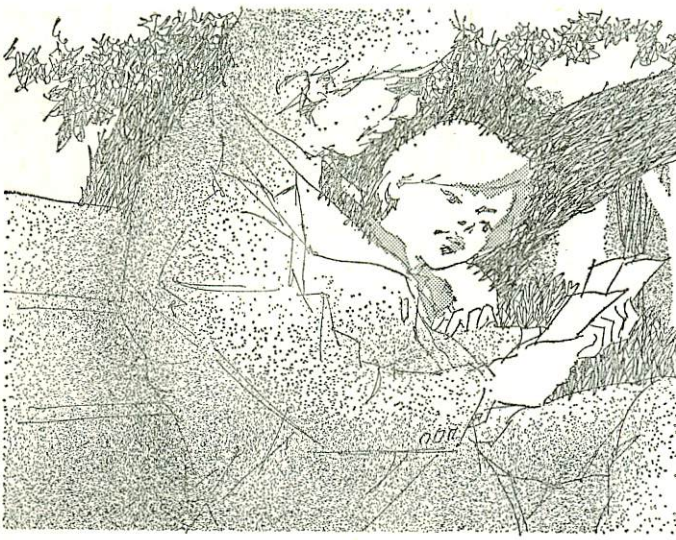
芳鹿荘の女中にも、このあと念のために当たってみるつもりだが、いっそう期待はうすいのではないだろうか。

つまり、これ以上は、こちらの判断にかかっているわけだ。

小暮の率直な印象とすれば、各務徹夫の愛人はやはり桂木麻子ではないかと思われてならない。五分五分よりかなり濃厚に、少なくとも七三ぐらいの可能性が感じられる。

第一の理由は、なんといっても、恭太が石神井公園の駅前で桂木麻子を一目見た瞬間、畑山事件の朝の女性とそっくりだと感じたことに因るのだが、逆にいえば、恭太が似ていると感じた女性が、各務が関わりあっている公害紛争の大もとである共立電化の総務部次長夫人であったという事実が、単なる偶然と考えるにはあまりに重大な意味をはらんでいたからだろう。

では、ひとまず、各務助教授と桂木夫人が愛人関係にあると仮定したら——？



二人は公害問題とは関わりなく、純粋に互いの情熱だけで結ばれているのか。

それとも、背後に麻子の夫桂木謙介の意志が働いていて、各務助教授の見解を少しでも共立電化に有利な方向へ導き、ひいては彼をすっかり会社の味方につけるための、いわば政略的な情事なのか——？

いずれにせよ、二人の関係は断じて外部に洩れてはならない極秘事のはずで、それならば、たとえ麻子が畑山事件の朝、どんな有力な手懸かりを目撃したとしても、警察には届けられない立場であろう。もし捜査本部へ匿名の投書を送ったのも麻子だったとしても、なるほどと納得される。

が、一方では、捜査本部は依然として、信頼できる目撃者を捜し求めているのだ。

では、小暮とすれば、桂木麻子の名を本部に伝えて、捜査に協力すべきか。もうしばらく伏せて、各務と麻子の結びつきの真の意味を内偵するか？

小暮はいっとき、横にいる恭太の存在も忘れて、その選択に思考を凝らした。

どれほどかたってから、——急いでクラブに戻り、キャップらと相談しようと、ひとまず心を決めた。新聞記

者の仕事、ことに遊軍ではなくクラブ詰めなどの場合は、チームプレイの要素が非常に強い。「少年探偵団」にせよ、常にほかの仲間と緊密な連絡を保ち、カバーしてもらわなければ成立しないのだ。しかし一方、記者個人の心中には、誰しも独断専行したい欲求がひそんでいるわけで、したがって常にそんな遠心力と求心力の微妙なバランスの上で仕事をしているともいえるのだった。

一応当面の思案が決まると、小暮は恭太の方に顔を向けた。今はこれ以上尋ねることがなければ、少しでも早く解放してやった方がいい。恭太も家に帰って、遊びにも行きたいだろうし、彼がたびたび刑事や記者らしい男と接触しているのが人目につくのは、決して好ましいことではないのだ。

ところが、小暮が視線を戻した時も、恭太は先刻の、眉間に短い皺を刻んだ表情のまま、道路の向かい側の空地で微風に揺られているコスモスの群れをジッと見つめている。小暮はどれほどか沈黙して、自分の内部の思考に捉われていたわけだが、その間も恭太は我慢して待っていたのではなく、彼は彼なりの物思いに沈んでいたという感じなのである。こんなふとした時、恭太の日灼けした小さな横顔には、九歳の少年にしてはちょっと痛々しいような、複雑な翳りが漂い出るのだった。

「最近でも、刑事に、容疑者の写真を見せられたりするの」と小暮は訊いてみた。中谷浩司が畑山事件の犯人であったことは、ほぼ断定されているが、ほかにも共犯者がいたという見解で捜査本部が活動を続けている以上、中谷の周囲から、新たに容疑線上に浮かぶ者があるはずで、そうすれば本部では、今のところ唯一の目撃者の可能性のある恭太に、彼らの顔を改めさせるのではないかと思われる。

「昨日の夜、係長の人が家へ来て、五枚ぐらいの写真を見せて、尋ねていきました」

案の定、恭太は前を向いたまま、やや憂鬱そうな声で答えた。

「事件の朝の男の顔には、まだ出くわさないのかい？」

今度は小暮はわざと冗談めかした口調で、笑いながらのぞきこんだ。恭太は二、三度瞬きしただけで、黙っている。カサカサした唇が、ちょっと引き締まって、うすく尖った恰好になった。

やはり恭太には、あの朝の男について触れられることに、微妙な拒否反応があるようだ。

小暮はそんなふうに解釈しながら、さっきから指には

さんだままの新しい煙草に、ライターの火を近づけた。

だが——実はこの時、恭太の脳裡には、特定な一つの顔が浮かびあがっていたのである。

昨夜は一人でやってきた西荻窪署の和栗係長に、四枚目にあの写真を見せられた時には、恭太は反射的に首を横に振った。でも、なぜか急に心臓の鼓動が一回転早まったような気がして、その後の若い男の写真などは、上の空で目の先を通過してしまったほどだった。

その四枚目の写真の男は——確かに一目見た瞬間には「ちがう」と思った。「あの男」よりだいぶ痩せて、頬がこけ、写真ではわからないはずなのに、肌の色がどんより濁っているような感じがした。その顔の上に、太縁で大型の眼鏡をかけていた。その点も、恭太の記憶とははっきりくいちがっている。

だから、最初に「見憶えがない」と答え、首を振った恭太の反応は、彼自身不正直なものではなかった。

ところが、奇妙なことに、その写真が視野から消えた直後から、そこに写っていた男の眸が、恭太の瞼の中にありありと浮かびあがってきたのだった。

顔は痩せることもあるだろうが、眸は変わらない。がっしりした眼鏡の奥に落ちくぼんだように鈍く光っていた細い目は、あの朝、土手にしがみついていた恭太をのぞきこんで手をさしのべた男の、底に優しい光をたたえた目と似ていはしなかっただろうか？

それに、あの唇。写真でも、下唇の方が厚くて少し突き出し、縦に粗い皺を刻んだ、乾いた唇……。

上がり框に腰かけていた和栗係長が、期待した反応が得られなかった失望のためか、来た時以上にブスッとした顔で、返された写真を手の中でまとめた時、恭太はよほど言おうかと思った。喉元まで出かかったことばを、でも結局のみこんでしまった。その理由は——確信がなかったことや、いつもながら和栗の怕そうな顔つきがこちらの口を重くしたことや、さまざまあるが、やはり一番強い理由は、あの男を売るような真似をしたくなかったからだろう。あの朝、お父さんの代わりに、絶妙のタイミングで出現し、絶体絶命のピンチから救い出してくれたというのに。それを、完全な自信があるわけでもないのに、似た男の写真を、殺人犯を捜している刑事の前に選び出すなんて、そんなひどい裏切りがあるだろうか……？

しかし、沈黙を守ったことは、それだけ重い負担になって、恭太の胸にのしかかっていた。

ああ、一日も早く、あの人とは似ても似つかない男が、真犯人として捕まってくれればいいのに！

そうすれば、今恭太の心に淡い怯えの影を落としているもう一つのことも、すっきり解決されるわけなのだが。

「何を考えているんだい？」

小暮が、微笑を消した真剣な眼差しになって、改めて尋ねた。

「心配ごとがあるみたいな顔をしているよ」

恭太は、ううんと否定するつもりで、無理に笑った目で見返したが、小暮には、それはかえって逆の意思表示と受け取られてしまったらしい。

「この間の、富士見池でおきたようなことは……もうあんな怖い目にあうことはないんだろうね」

それで恭太は思わずまた、たて続けに瞬きしてしまった。何か吃驚したり、まごついたりした時の癖だった。そして今は——もう一つのことを、図星で言い当てられてしまったからだ。

もっともそれは、富士見池の事件のようにはっきりした出来事ではなく、いわば身辺に漂いはじめたなんとなくうす気味悪い気配というだけである。もしかしたら、気のせいかもしれない。だから、昨夜来た和栗警部補はもちろん、母親にもまだ話していない。自分がとても怖がりか、それともおとなの話によく出てくるノイローゼみたいに思われるのは口惜しいし、それに、恭太は最近とくに、何につけ母親にくどくど訊かれることに、なんともいえぬ苛立ちを覚えるようになっていた。どうしてだか、自分でもわからない。お母さんにはとても感謝しているし、外が暗くなってから仕事を終えて帰ってくる母の「ただいま」という声を聞くと、お腹の中がポッと温かくなるような安心感が湧くのだけれど……それでいて、どことなく愚痴っぽく、まわりくどく喋る母と、五分も話をしていると、どうしようもなく馬鹿馬鹿しいような苛立ちが噴きあげてきて、一刻も早く話を切りあげてしまいたい衝動に捉われるのである。

だが、小暮記者の、いつも若々しい輝きをたたえた率直な眼差しでのぞきこまれると、恭太は母親に対している時とは正反対の、なんとなくさわやかでおとなっぽい気分に浸されてきた。

「はっきりとはわからないんだけれど」

恭太は、精一杯冷静な、わざと他人事を喋るような口調で話しだしていた。

「うん」
「一昨日の夕方、学校から帰って、野球しに行こうとしたら、黒っぽいレインコートを着た男の人が、道の角に立って、ぼくの方を見ていたんです。それでぼくは、また誰かが何かぼくに訊きにきたのかと思って、仕方がないから、その人がこっちへ来るまで、ちょっと待ってたんだ。だのに、その人は、ぼくの顔をジッと見ただけで帰っていってしまった」
「それは誰か知った人ではなかったの。たとえば――」
小暮はちょっと躊躇してから、
「たとえば、君のまわりを警戒してパトロールしている刑事や巡査とか……」
「ああ、その人なら一度家へきたから知っているよ。やっぱり、黒っぽい服を着てたけど、背の低い人で、何か変わったことがあったらすぐ知らせてくださいって、お母さんに名刺を渡してました」
やはり、西荻窪署の私服刑事が恭太の身辺の警戒に当たっているのだろうと、小暮は推察した。
「でも、その人ではなかったんだね」
恭太は前を向いたまま、首を振った。
「木の陰の暗いところに立っていたから、そんなによくは見えなかったけど……知らない人みたいでした」
「うむ。それから、君はどうしたの」
「この間小暮さんが来た女子高校のグラウンドへ野球しに行きました。野球やってるうちは、忘れちゃってたんだけど……帰りに、またその人に会ったんです。ああ、会ったんじゃなくて、その人が後からついてきたんだ」
たぶん五時半ごろ、恭太は同じ方向に家のある三人の友だちと、グラウンドから帰ってきた。途中で何気なく後ろを振り向いたら、さっきの黒いレインコートの男が、二十メートルほど後を歩いてくるのに気がついたという。
「それから、友だちと別れて、家の細い路地に入る時、もう一度振り返ってみたら、さっきよりもっと近くをついてくるんです」
「それで？」
「なんだかイヤな感じだったから、大急ぎで家に入ったら、その人はもうぼくの方を見ずに、表の道路を通りすぎていってしまった……」
「声をかけられたり、つかまえられたりするようなことはなかったんだね？」
「ううん。だからぼくも、あんまり気にしないことにし

たんだけど……」
　まだどこかサッパリしない恭太のうつむいた顔を、小暮は黙って見守った。
「でも、うちの二軒隣りの、ぼくより一つ上の女の子が、その時ちょうど家の前に出てたんだけど、その子が今の男に気がついて、あの人はさっきぼくが学校から帰ってくる少し前にやってきて、ぼくの家のことを尋ねたっていうんです」
　その小学四年の女の子の話によれば、問題の男は、恭太たちの家のある路地へ入ってきて、そこで一人で遊んでいた彼女に、久藤恭太という少年の家はどれかと訊いた。次には、恭太は毎週月水金の朝、善福寺の剣道道場へ通っているのかとも尋ねたというのである。もっとも男は恭太のことばかりでなく、両隣りの家の職業や家族構成などについても質問したらしい。しかし、一時的にせよ「尾けられた」という意識のある恭太には、男が自分一人に照準を当てて行動している印象を抱いたようであった。
「それで、本当に見憶えのない男だったんだね」
　恭太はゆっくり頷く。
「畑山事件の朝、蕪蔵寺の坂道で出遇った男ともちがうんだね」
　すると、恭太はまた少しの間通学帽をいじったりしていたが、
「ちがうと思うけど」
　自分の内部を見つめるような、重い声で呟いた。
　そのまま何も言わないので、
「そのことを、警察の人か誰かに話したの」
「ううん」
　それから恭太はつと顔をあげると、
「だって、別に何でもない人かもしれないでしょう？」
　小暮を見あげる少年の澄んだ目は、「何でもない」ことを、強く希求しているようにも見えた。
　確かに、心配するほどのことではないのかもしれない。恭太の母親に名刺を渡したという刑事のほかにも、警戒を命じられた私服が、一応恭太の身辺調査を行なったとも解釈される。
　だが、小暮の直感は、警鐘を鳴らしはじめていた。
　依然として恭太の命を狙っている者があるのではないか？
　畑山殺害犯人――中谷浩司の共犯者か。いや、可能性はそれだけか？――恭太を危険な証人と恐れている者は、

ほかにもいないだろうか。
いずれにせよ、決断を急がなければならないと、小暮はふいに全身が引き締まるような緊張を覚えた。取材の自由も秘密も、人命という一線が絶対の限界であることを、記者は常に肝に銘じていなければならない。

4

「常々、もう日本はいやになった、姉が嫁いでいるロスアンゼルスへ渡って商売したいと考えていた、なんて奈津実さんは言いだすんです」
ウエートレスが二人分のコーヒーをテーブルに並べ、階段を下っていく足音が聞こえている間、麻子は疲れたようにロをつぐんでいたが、各務の落ち着いた眼差しにはげまされて、また話し続けた。富士見台の駅前商店街の外れにある洋菓子店ビクトリアの二階ティールームは、今は各務と麻子の二人きりだった。久しぶりに晴れた午後の陽射しが、ブロンズ色の窓ガラスを通して、四角な店内を暖かな色あいに染めている。
「――畑山のお妾みたいになった時には、せいぜい貯めこもうと思っていたのに、一年もたたずにあっさり死なれてしまい、自分ほど運のない女はいないなんて、真面目な顔で言うんですの」
各務が思わず苦笑を洩らすと、麻子の口元もかすかに緩みかけたが、すぐまた陰鬱な表情に沈んで、
「奈津実さんは、朝霞のモーテルで殺された中谷浩司とも愛人関係にあって、畑山事件のことは、中谷からくわしく聞いていたらしいんです」
「すると、彼は、やはり畑山殺しの犯人だったわけですか」
「それにまちがいない口ぶりでしたわ。事件の朝、中谷は蕪蔵寺の上で私とすれちがったと言っていた、なんていうんですから」
「すれちがった？」
「ええ。そういわれてはじめて思い出したんですけれど……」
麻子は、芳鹿荘を出て間もなく、野原の道で出会った中谷らしい男のことを各務に話した。
「そのうえ、中谷はこの夏、家の斜向かいのマンションの建築現場で働いていて、私の顔と苗字を憶えていたのだそうです。おまけに、私が目撃者として届け出できない事情をうすうす察していた……。中谷が死んでしまっ

た今では、私と中谷のそういった微妙な関わりを知っているのは、この世で自分一人だと奈津実さんはいうんです」

「うむ、それで？」

「普通なら、中谷がモーテルで殺されれば自分は真っ先に疑われる立場だけれど、幸い事件当夜はアパートに刑事が張り込みしていたので、完璧なアリバイがある。でも警察では、あくまで自分が中谷と昵懇だったと睨んでいて、手懸かりになる話を聞き出そうと、しつこくつきまとっている」

「うむ」

「今までは、中谷など知らなかったの一点張りで突っぱねてきたけれど、今後もしひと言でも自分が桂木麻子の名を喋ったら、たちまち私は中谷殺しの有力容疑者にされるだろうと……」

「そんな馬鹿な――」

各務は一瞬、まるでそこに奈津実本人がいるかのように、ふだんは穏やかな目に怒気をみなぎらせた。

「でも……それは脅しとばかりも言いきれませんわ」

「なぜ？」

「これは奈津実さんと話していてわかったことですが、中谷が殺された晩、私をあのモーテルの前まで呼び出した電話の主は、どうも中谷自身だったらしいのです。くわしい事情まではとうてい量りきれませんけれど、犯人はその電話をいろいろな意味で利用して、中谷をモーテルで殺し、警察には、連れの女イコール私と考えさせようと企んだのではないでしょうか」

「しかし、それにしても、あなたが中谷を殺す動機がないでしょう」

一昨日の電話でも、各務はその点を強調していた。

「林奈津実さんが沈黙している限りはね。でも、中谷が畑山殺しの犯人で、私は証人。しかも私には、どうしても出頭できない事情があったなどが明るみに出れば、動機は想像でいくらでも捻られますわ。たとえば、中谷が逆に私を脅迫し、モーテルへ連れこんで……乱暴しかけたために、私が殺して逃げたとか……」

各務も内心では、そのへんまで察しがついていたようである。手をつけないまま冷めていくコーヒーに視線を落として、小さく溜息をついた。

「一方では、サンガーデンのそばに駐まっていた私のルーチェが目撃されていることですし、当然私にはアリバイもないわけですから……奈津実さんの口から私の名が

洩れたが最後……私はもうとても……」
麻子は声をつまらせた。ふいに絶望的な悲しさが喉をしめつけたのだ。
各務も、麻子以上に苦しそうに、頬を歪めてテーブルの一点を見据えていた。やがて、何かをのみくだしたような、抑えた声で、
「それで、奈津実は警察にあなたの名を隠しておく代わりに、金を要求したわけなんですね」
麻子は頷いた。
「金額は？」
「最初は、五百万円といったんです」
それで麻子と各務は目を見合わせた。
「一口に五百万円なんていっても、給料生活者にはとてもそんな現金が容易に揃えられるものではないと説明したんですけど、あの人は、どうしても納得しないのです。畑山のような金融業者の身近にいたせいか、百万円くらいはまるで端金と考えているみたいな口ぶりで…」
「そんなものかもしれませんねぇ」
「それに何かといっては主人の肩書を引き合いに出して、共立電化の総務部次長さんともあろう人の家庭でとか…私が目撃者として名のり出られない事情は、誰かと逢引きしていたからで、その相手の人はどこか大会社の社長だろうなんて、勝手に決めてかかったり……」
各務の目に複雑な影がさすのを見て、麻子はそんなことまでありのまま訴えてしまったのを後悔した。
「でもとにかく、五百万円、それも今日明日などといわれても、とうていできない相談だと突っぱねましたら、それならば、三百万円まで妥協しようと……」
「そんなに急いでいるのですか」
「本当かどうかはわかりませんけど、刑事が毎日アパートへ押しかけてくるというんです。このうえもし何か別の口実で警察に連行されて攻められでもしたら、無関係でシラを切り通す自信はない。でもさすがに私の様子を見て、早速には無理だと判断したらしく、約一週間待つから、二十三日の水曜日までに三百万円を揃えて渡してほしいと。パスポートは以前から取ってあるので、自分はその間に航空券などを準備して、とにかくひとまずアメリカへ逃げる。警察もアメリカまでは追いかけてこられないだろうから、それで私も安心していいなんて……」
「うーむ」
各務はゆっくりと、うす茶色の細かい砂糖の結晶がつまっている壺へ指をのばし、麻子と自分のカップに一匙

ずつ入れた。目はジッとその指先に注がれ、思考を凝集した熱気さえこもっている。

「でも……私、今お話ししながら気がついたんですけど、中谷と私との複雑な立場を知っているのは、奈津実さんだけとは決められませんわね。中谷を殺した犯人が、中谷が私をサンガーデンまで呼び出した機会を利用して凶行し、私に罪を着せようと謀ったとすれば、当然犯人も私の存在に気がついていたわけですわ。それなら、今どんなに苦労して奈津実さんの口を封じたところで、いつか犯人が逮捕された時には……」

「いや、そうとは限らないでしょう」

意外に強い声で、各務が遮った。

「例の電話の主が中谷だという証拠はまだない。いや、電話は中谷で、犯人がそれを利用したとしても、犯人はただ中谷が誰かを呼び出したということだけしか知らなかったかもしれない。犯人が逮捕されれば、すぐにあなたの名が出るなどと、あきらめてしまうのは早すぎますよ」

「ええ……。でもそれにしても、奈津実さんの要求どおりのお金を支払ったとしても、彼女は本当にアメリカへ飛んでくれるでしょうか。脅迫者は決して一度では満足せず、味をしめれば何度でも要求をくり返すとか言いますし……」

各務はそれには答えず、カップを一度口に運んでから、「三百万円か……」と低く呟いた。窓の外に向けた目は、金策の手立てを思いめぐらす眼差しになっている。

しかし、地方の国立大学の助教授で、老齢の両親を養っている彼にとっても、それが決してたやすいものでないことは、麻子にも痛いほど察しられるのだ。

「私もういっそ、警察に出頭しようかと思いますの。畑山事件以来の経緯をありのまま打ちあけて、それでも何かの容疑をかけられたら、その時はその時ですわ」

いつになく、投げ遣りな苦笑すら滲ませた麻子に、

「昨夜の夕刊の発表を読みましたか」

彼は冷静な語調になって訊いた。

「……？」

「今度のP大学の報告では、共立電化が著しく不利な立場になっていますね」

「ああ……」

麻子は今さらのようにハッと胸を衝かれた。その報道は確かに読み、夫の口からも断片的に聞いていながら、わが身の心配事に気を奪われて、各務に言われてさえす

ぐにはピンとこなかったのだ。

群馬県衛生部の依頼に基づいて、五月に各務の講座が提出した報告は、一口にいえば「複合公害」の判断を示していた。被害者連絡協議会ではそれを不服として、独自に、その種の調査では権威のある東京の私立P大へ、再度地下水と土壌の分析を依頼した。その結果が、昨日の朝、公表されたのである。内容は、責任の所在を、ほぼ共立電化一つと断定していた。

「まあ、われわれとしては、問題のシクロヘキシルアミンのほかにも、地下水からトリクロールエチレンやMOなど、やはり植物や人体の被害が予想される薬品が検出されたことと、シクロは土中で非常に分解が速いなどの点を考慮に入れて、シクロ一つが原因物質とは決められないという結論を出したわけなんですが……」

各務は日ごろの考え深い表情をたたえて、穏やかに話した。

「P大学の見解では、トリクロールなどの検出は少量で、シクロもさほど多量ではなかったのだが、シクロの分解、減衰の率が、ほかの薬品より何倍も速いことから逆算すれば、農作物や人体に被害が発生した時点では、相当量が、土中に蓄積されていたと考えていいというわけですね。被害発生後まもなく、共立電化では、従来のように素掘りの池に排液を流して捨てるというやり方をやめ、焼却処理装置をつくって、ほとんどシクロを土中に流していない。それでも今現在、土中からこれだけ検出されるのは、長期間にわたる蓄積の大きさを物語るものだというのです」

麻子も静かに頷いた。新聞の報道はさほどくわしくはなかったし、昨日は深夜になって帰宅した夫の、ひどく興奮した一方的な話しぶりではのみこめなかった内容が、各務の説明でおよそ理解できた。

「そのうえ、今度の被害が、共立電化のプラント操作ミスをきっかけにして爆発的にひろがった点を重視して、シクロを決定的な原因物質と判断したのでしょうね。——確かに、植物にせよ、人体にせよ、薬物中毒は量と時間の積によるといわれていて、その薬品の分解速度は重大な決め手にもなるわけですね。たとえば、DDTの半減期は十年ですが、シクロは比較にならないほど速い。それが、日本でDDTが生産禁止になって以後も、同様の有害性が認められているシクロがまだ許可されている理由です。しかしまた、薬品が置かれた環境要因によって、分解速度も非常にちがってきますからね。この種の

分析でも、その辺をどんなふうに解釈するかで、見解が分かれてくるんですね」

各務はゆっくりとグラスの水を口に含んだ。

「すると結局、二つの大学の意見は、正面から対立してしまったわけですわね」

麻子は学問的なことよりも、やはり夫と各務の位置関係が気にかかる。

「まあ、そういうことですね。だから今度の発表は、被害者協議会には、わが意を得たものだったはずです。この報告をつきつけて、共立電化に多額の補償金を請求することになるでしょうね」

「では、会社側はどう出るのでしょう？」

「当然、最初の複合公害説を楯にして受けて立つでしょう。被害が広範なだけに、要求額も高いし、将来にも尾を曳く問題だから、そう簡単に妥協するとは思われませんね。いや、それどころか、もし今後も農作物被害が続き、人体へも波及してくるとすれば……現在のところは一部の人が皮膚炎を訴えている程度で、検診の結果もまとまっていませんが、いずれにせよ、これは急性中毒の症状で、もっと長期にわたるシクロの人体被害としては〝催畸型性〟が認められているのですよ。以前アメリカの食料機構でシクロの製品であるチクロの生産が禁止されたのも、染色体の分裂を催して、畸型児を生む原因となるという理由だったのですからね。現にE工場の周辺では、蛸の足みたいに先が分かれた大根とか、結球しないキャベツなどの畸型野菜が出現している。これも悪い想像をすれば、植物は世代の交代が早いので、畸型も早く発生したわけで、いずれ同じ被害が人体に現われる前徴だと受け取れぬこともない。――つまりこんなふうに被害が深刻化し、しかも、その主原因が共立電化の排液と断定された場合には、県知事命令などによって、一時的にせよ工場閉鎖に追いこまれかねませんからね」

昨今の公害防止の設備投資に加えて、もしそんな最悪の事態にでもなれば、全生産高の六割以上を群馬工場に頼っている共立電化は、倒産の危機に瀕するのではないかと、麻子はおぼろげながらも暗い予測を抱いた。

「まあ今後の成り行きは、なんともいえませんが、P大の報告が被害者側に有利と出ただけに、共立電化ではうちの見解を一段と重視せざるをえなくなったことだけは確かでしょう」

それはおのずから、桂木謙介と各務徹夫との微妙な相関関係を暗示している。

しかし、事態の趨勢は、何か抗いがたい力で、桂木にとっては不幸な方向へ傾いていくように、麻子には思われてならない。いやむしろ、そんな予感は、最近の夫の様子から、反映となって麻子の中に生まれてくるものかもわからなかった。

「このごろの主人は、本当に怖いみたい……」

実感が、思わず溜息といっしょに洩れた。

「P大の報告の内容は、正式に発表される以前に、主人たちにはおおよそ予測されていたらしいのです。そのせいか、毎晩夜中に帰ってくる主人の険しい様子といったら……主人があの工場に力を尽くし、事実上の責任者だっただけに、一つまちがえば、それが裏目に出て、紛争の成り行きによっては、社内でも窮地に立たされるのではないかしら。いろいろ複雑な派閥なんかもあるようですから。それに、現地へ行けば行くで、工場誘致の時代にはあれほど歓迎的で、まあ有形無形の利益を得てきた住民たちが、最近は掌を返したように冷ややかなのも、肚に据えかねるといって……」

「ああ……桂木さんの立場では、その変化は一番痛切に感じられるでしょうからねぇ。周辺住民の中には、共立電化で働いている人も相当いるはずですが、近年のように公害に対して人々の意識が高まってくると、その辺も割り切って、たとえば直接勤めている本人はさすがに沈黙していても、その息子などは堂々と攻撃グループに加わるといった状況ですからね」

住民の圧力と社内的な苦境……だが、何よりも夫を絶望的な焦りに駆りたてたり、ある時にはやり場のない空虚に落としこんでいるものは、E工場に打ちこんだ十年間の歳月に対する根本的な疑問ではないのだろうか。

もしあの工場が重大な公害の元凶であり、紛争に敗れて会社の将来をも危うくするものであったとしたら……自分のこの十年の努力はいったい何だったのだろうか？無、というよりも、もっと罪深い徒労だったのか？

長らく心触れあうこともなくすごしてしまった夫の内面が、今だけは麻子にも痛いほど読みとられる。それは彼女自身、ひたすら夫に従ってきた自分の十年間を振り返って、自らの沈みこむ寂しさや虚しさと、大もとは同質であったからにちがいない。

「本当に、ここ一週間ばかり、主人は、とくに異常なほどですわ。何をいっても上の空ですし、そうかと思うと、熱のある病人みたいな目でジーッと私を見つめていたり……そんな時には、なんだか私の心中まで見透かされて

いるみたいで……」

「今ぼくたちが取り乱すことが、一番危険ですよ」

もう一組の男女が階段をあがってきて、後ろの席にすわったので、各務は声をひそめた。代わりに、噛んでふくめるような口調で、

「桂木さんのためにも、そして、もちろんぼくの立場としても、今ぼくらの個人的な関係が明るみに出ることは、やはり絶対に防がなければならないと思います。うちの講座が提出した報告が、P大のものより結果的に会社側に好意的であり、もし裁判になれば、共立電化はそれを論拠にして争う形勢だけに、いよいよ、妙な誤解を受けてはならない。そんなことで、重大な問題の行方が左右されては、それこそ空恐ろしい気がする……」

そのとおりだと、麻子も理解できる。それから、今さらながら踏みこんだ道の闇の深さが思われて、めまいに似た絶望感に襲われた。

麻子の頬に涙がこぼれ落ちるのを見ると、各務は上衣のポケットからハンカチを取り出して差し出しながら、強いて気軽な声で訊いた。

「つまり林奈津実は、いつどんなふうにして金をよこせといっているのです？」

「一週間以内に――遅くとも二十三日水曜日までに、金が揃いしだい、アパートに電話してほしい。連絡がなければ、翌日には刑事に私の名前を教えると脅すんです」

「電話して、それから？」

「私の家まで受け取りに来るそうです。人目につきやすい外で会うより、自分がまた尾行を撒いてここまで来るのが一番確実だろうと……」

「うむ」と各務は頷いて、

「ともかく、その女の強請を受けて立つしかないでしょう。みすみす口惜しい話だが、なんとしても、秘密は守り抜かなければならない。少なくとも、この公害紛争の行方が決まるまではね」

力をこめた最後のことばには、二人の将来に対する彼の強い決意が秘められているようで、麻子はふと温かい腕で両肩を支えられる思いがした。そうだ。今この苦境を切り抜けなければ、どんな将来も望めないだろう。

「でも、水曜日までといえば、今日を入れて五日ですわ。その間に三百万円なんて。――私も、あれこれ心当たりを考えてはみたのですが、私の自由になるお金といったら、お恥ずかしい話ですけど、せいぜい四、五十万円ぐらい……」

子供のない麻子の家庭では、多少の蓄えがないわけでもない。だが、桂木は金銭には無頓着な方で、工場建設のころからずっと、何かと部下たちのために出費を惜しまなかっただけに、彼の年齢や地位から想像されるより資産ははるかに少ないのである。今住んでいる石神井の家は社宅だし、ほかに私有の不動産もない。そのうえ貯蓄の大部分は、一昨年彼の父が死亡したあと、残された母と未亡人になっている妹が住んでいる藤沢の借家を買い取るのに充てられ、残りはほとんど社内預金に入っている。そんなわけで、麻子の手許にあるのは、長い間に少しずつ積み立てていた普通預金だけなのだった。

各務は微笑して、

「ぼくも、できるだけかき集めてみます。三百万円揃うかどうか、自信はありませんが……」

奈津実の強請を受けて以来、麻子は、もうこのうえ各務に金銭的な負担までかけることは、決してすまいと、心を固めていた。彼と逢引きした帰り途とはいえ、いっさいの発端となったあの蕪蔵寺横のささいな出来事は、麻子一人の経験なのだから。自分が作れるだけの金で、とても奈津実が納得しなければ、その時は彼女の口から通報される前に自分で出頭しようと、ややデスペレートに肚を据えた麻子だったが、各務に改めて状況を説明され、説得されると、抗う気力はなかった。

「もし金額が不足で、奈津実さんが承知しなかったら……？」

「いや、承知させるのです。なんとしてでも説き伏せて、早急に警察の追及が届かない場所へ逃げてもらわなければならない」

「私にできるかしら」

「ぼくが話しますよ」

「え……？」

「水曜日の朝、あなたが奈津実に電話をかけて、彼女が来る時刻が決まったら、ぼくもその少し前にお宅へ行きます。こちらが用意した金で納得してもらい、二度と強請を繰り返さないこと。警察に対しては断じて沈黙を守る。それを誓わせなければ、いくら苦労して金を拵えても、なんにもなりませんからね」

「でも、その場では誓っても、本当に約束をまもるかしら。それに……奈津実さんは簡単にアメリカへ飛ぶといっていますけど、警察が重要参考人と見なしている彼女を、むざむざと逃がすでしょうか」

「だから、その辺の事情も、ぼくが直接確かめてみるつ

もりです」
「それでもし、私たちの秘密が守られる保証が得られなかったら――？」
なぜか得体の知れぬ恐怖が募り、たたみかけるように反問する麻子を、各務は一瞬息をつめて凝視した。その眸の奥に、ふとこれまで見たことのない、異常に鋭利な光が漲るのを認めると、麻子は別の何か空恐ろしい予感が、冷水のように身内を走るのを覚えた。
が、各務はすぐ表情をゆるめた。
「またあなたの心配性がはじまりましたね。大丈夫。ぼくがうまく話をつけますよ」
テーブルの上で、二人の手が自然に近づき、しっかりと握りあわされた。麻子の両手を包みこんだ各務の掌は、かすかに汗ばんでいて、熱い力がこもっていた。
いっさいの思念が、麻子の内部で、一つの祈りに変わっていた。

六章　待つ恐怖

1

和栗警部補の脳裡に、モーテル殺人事件に対するまったく新しい着眼が閃いたのは、十月二十一日の朝、常盤台の自宅でのささいな出来事がきっかけであった。
善福寺の金融業者強殺事件からまる二週間、朝霞のモーテル殺人事件からは一週間がすぎたが、捜査はどちらも膠着状態に陥っていた。
畑山殺しについては、中谷浩司が犯行に加わっていたことは、ほぼ確定的と見られている。だが、中谷の身辺に畑山の金庫から奪ったはずの金が発見されないなど、いくつかの点から、共犯者があったという疑いが濃厚なのである。

一方、中谷殺害の最も有力な容疑者は、なんといっても、いっしょにモーテルへ入って、その後姿をくらました女と考えられる。

ところが、中谷の周囲をいくら洗っても、それらしい女が浮かばないのである。林奈津実には、張り込みの刑事によって、不動のアリバイが認められているのだ。

事件当夜、中谷たちがサンガーデンへ入った直後くらいに、女性の運転するグレーの小型車がその前に駐まっていたという届け出は、朝霞署と西荻窪署の両捜査本部を一時は色めき立たせたが、車のナンバーや運転者の身許は、いまだに判明していない。その後の聴取により、車はルーチェだったらしいというところまで浮かんでいるが。

しかし、また、中谷の死を畑山事件との関連において眺めるなら、彼は、共犯者の手で抹殺された可能性が強いのだ。中谷は当時すでに、重要参考人として手配されていた。共犯者はわが身の安全を計って、中谷を消したのではないか。

では畑山事件の共犯者という観点に立つと、現場の状況から推しても、男性と見る方が自然なのである。それも、畑山と金銭的な繋がりのあった者、畑山の融資先の人間が、よりクロいといえる。

「中谷の共犯者」の可能性として、西荻窪署が有力視したのは、彼が競輪場で知りあったという「木原」なる人物と、中谷の異母兄安宅康信であった。

「木原」の捜査は、依然難航している。住所、名前、および人相もほとんど不明のうえ、中谷も木原も、主にどこの競輪場へ通っていたのかさえ、見当がつかないからである。捜査員の中には「木原」などは実在せず、安宅が容疑をほかへそらすための偽情報ではないかと疑う者も出ている。

それとも関連して、安宅については、その後同業者間の噂や、商安土地建物の社員の聞き込みなどによって、いくつか不利な事実が浮かんでいた。

まず、安宅には女があったことが、ほぼ明らかになっている。笹川雪江という三十五歳になる未亡人で、二歳の娘と川崎市生田の借家で洋裁をやって暮らしている。二人が親しくなったのは、一年ほど前、安宅が、雪江に現在の借家を見つけてやったのがきっかけらしい。雪江は、サラリーマンの夫を交通事故で失くしたあと、新宿区のアパートで暮らしていたが、家賃が高いのや育児環境にも適さないため、もっと静かな郊外に移りたいとい

って、安宅の会社に借家の周旋を依頼してきたという。生田に転居してからは、時折り安宅が訪ねて、何かと面倒を見てやっていた模様である。安宅自身は、雪江との肉体関係を否定しているが、彼も妻が病身で、八月以後は入院して、いわばやもめ暮らしだけに、おそらく雪江を愛人にしていたであろうと推察される。

安宅に女があったとわかると、西荻窪署捜査本部では、その女を、中谷といっしょにサンガーデンへ入った謎の女と結びつけた。安宅は雪江を使って、中谷を殺させたのではないか――？

だが、この線は間もなく潰れた。雪江は九月半ばから娘を連れて、山口市の実家へ帰っていたのである。生田の借家はそのままになっているが、実家の方で縁談が持ちあがっているとかで現在も逗留している。中谷が殺された十月十四日も、町を出ていないことが、山口県警に依頼した調査によって確認されたのである。

だから、笹川雪江の存在は結局事件とは無関係とわかったわけだが、もう一つ、安宅に不利な情報というのは、商安土地建物がここ一年間所得税（法人税）を滞納し、それで九月初旬には会社所有の土地を税務署に差し押えられたことである。これは、安宅自身が親しい同業者に苦笑混じりに洩らしていたため、捜査員の耳に入り、税務署に問い合わせて、事実と判明した。そしてその差し押えは、まだ解かれていない。

安宅自身の話によれば、不景気とはいっても月々平均約一千万円の商いがあり、会社は順調に回転しているということだったが、それならばなぜ所得税を滞納して、差し押えを食うような羽目になるのか。安宅のことばに反して、会社の金繰りは逼迫しているのではないか？

しかしながら、たとえばこれが借金で何かを差し押えられたというのであれば、明らかに金詰まりを物語るものだが、税金対策にはさまざまの思惑があって、滞納が必ずしも即経営不振に繋がるとは限らないという見方も出ていて、やや微妙なところでもあった。

安宅と畑山との直接の金融関係は、依然浮かんでいない。したがって安宅が畑山を殺害する動機は、とくに見いだせないといわねばならない。

アリバイについても、畑山事件では早朝であったため、家で寝ていたと本人は申し立てている。中谷事件当夜は十一時十五分には東長崎駅前の井上産婦人科医院にいたことが、看護婦の証言で明らかになっている。だから、十時半にサンガーデンへ入った中谷に、もし安宅が何ら

かの方法で接近し、排気ガスの中毒に陥らせる状況を設定して逃走したとしても、安宅のセドリックは階下のガレージに残されていたわけだから、彼は帰りに別の車を利用しなければならない。ところが、彼を乗せたらしいタクシーも、レンタカーなども、まったく浮かばないのである。つまり、足が取れない。

要するに、安宅康信に対しては、容疑は認められるものの、動機面でも、犯行の手順についても、何一つ決め手が得られないのである。そして、中谷の身辺には、「木原」および安宅以外、彼と組んで畑山を殺害したと疑わしき人物は、見いだされない。

畑山事件には、真実中谷のほかに共犯者がいたのか。それは何者か。

中谷殺害に直接手をくだしたのは、やはりモーテルへ同伴した女か。

とすれば、その女は、畑山事件の共犯者とどのような関係にあったのか。

それとも、女自身が共犯者であったか。

その女は、どこの誰か——？

疑問の堆積を抱えたまま、事件は最初の発生から二週間目を迎えようとしていたのである。

和栗が得た新しい着眼というのは、その朝、息子と交わしたふとしたやりとりに端を発していた。

「おい、道子。何だその真似は。女の子だろう」

茶の間で朝刊に目を通していた和栗は、ドサッと大きな音のした玄関の方へ首をのばして、小言を言った。

高校二年の長女道子が、勉強部屋のある中二階の階段の上から、重そうにふくらんだ通学鞄を下の廊下へ投げ落とし、自分はから手で階段をおりてくる様子なのである。

「勉強の道具は、もっと大切に扱うものだ」

聞こえなかったのか、娘は返事もしないので、彼は一段と太い声をはりあげた。高校二年でも身長は百七十センチ近くあるというから、早くも父親を抜いている。都立高校なので服装は自由らしく、紺のセーターの下には呆れるほど長いジーパンの脚がのびている。

今度は聞こえないはずはないのに、まるで父親を無視するように、何の反応も示さない後ろ姿を見て、和栗は一瞬カッとした。

「道子！」

鋭く呼んだ直後、あっと思ったのは彼自身だった。足許に転がった鞄を持ちあげながら、無関心な表情で振り

向いたのは、娘ではなく、高一の長男だったからである。

「なんだ、利泰だったのか」

「姉さんはまだ寝てるよ。テストのあとで今日は休みなんだって」

「ふん。——それにしても、お前もう少し髪を切ったらどうだ。そんな長たらしい髪を後ろから見たら、まるで女だぞ」

まちがえた照れかくしに、和栗はかえって尖った口調でいったが、利泰はちょっと肩をすくめただけで、母親のいる台所の方へ「行ってきます」と低い声をかけて出ていった。

ふだんの朝は、学校が違い道子の方が、早く二階からおりてくるのだったが、と、和栗は新聞に目を戻しながら、はじめて苦笑を滲ませた。それに、彼の感覚は、まだ最近の若者たちの長髪を、一つの風俗として受け入れていなかった。衿にかかるほど長く、おまけにパーマをかけたようなチリチリ髪をたらした男を見ると、なんとも情けない思いがする。

ほんの三、四メートルの距離で、自分の息子と娘をとりちがえたなどとは、父親として威張れた話ではないが、しかし女が現われると思いこんでいたところへ、長髪の人間が通りかかれば、和栗ぐらいの年代以上の者は、たいていまず女と考えてしまうのではないだろうか……。

そんな慨嘆めいた感想は、やがて家を出て、地下鉄にもまれて西荻窪署へ出勤するまでの間も、なぜとはなしに彼の意識に浮き沈みしていた。

署の正面で、中年の防犯課員と行きあい、挨拶された直後、ふいに一つの発想が生まれたのだった。

サンガーデンで、中谷浩司らがチェックインしたさいフロント係を勤めていた杉岡という男も、今すれちがった防犯課員と、したがって和栗自身とも、同じくらいの年配であったと思う。とすれば……？

本部の部屋に入るなり、和栗はサンガーデンに電話を入れた。折りよく杉岡は今朝六時から勤務していた。和栗は、朝の打合わせ会議を待たずに、捜査用のライトバンを自分で運転して、川越街道へ向かった。

「——先日埼玉県警の方にも申しあげましたが、助手席の女性のほうは、ほとんど顔を見せなかったものですから……」

フロントルームの三点セットで和栗と向かいあった杉

岡順一は、モーテルの従業員というには、やや不似合いにも感じられる几帳面そうな四角い顔に、慇懃な微笑をたたえて応答した。朝霞署の捜査本部からも何度も聴取を受けているにちがいないが、迷惑そうなそぶりも見せないのは、法規スレスレで商売している人間の心理的な弱みかもしれないと、和栗は観察した。

「そこからですので、運転者の顔さえ、あまりはっきりとはわからないのです」

杉岡は、デスクや計器の置かれている横の窓を視線で示した。うす茶のレースのカーテンがさがり、窓ガラスにもだいぶ埃がたまっているようだ。

「連れの特徴は、パーマをかけた茶色っぽい髪をして、首にピンクのスカーフを巻いていた、ということでしたね」

「ええ。ピンク系統の色あいだったと思うのですが。衣服の色などは、いざとなると案外憶えていないものですねぇ」

杉岡は生え際のうすい額を指先でこすりながら苦笑した。

「大柄な感じでしたか。それとも……？」

「そんなに大きな人ではなかったかもしれませんね。頭がシートの背の下の方にもぐりこんだ恰好でしたから……それでよけいこちらでは見えにくかったのです」

「うむ」

モノセックス時代とかいうことばは、和栗も最近耳にした憶えがある。男性の女性化、女性の男性化——長髪族が目立ちはじめたころから、昔は女性専用のカラーだったピンクやバイオレットなどが、男の服飾にもとり入れられるようになった。柄物のシャツの衿に、ピンクのスカーフを巻きつけたスタイルも、昨今の若者には決してめずらしくない。

「その助手席に乗っていた人物は——」

和栗は鋭く冴えた眼差しを、相手の目に据えた。

「長髪の男性だったとは考えられませんか」

「はあ？」と杉岡は広い額に横皺を刻んで首を傾げた。が、やがて考えこむように一度瞬きした。

「あなたは、助手席の人物の顔をしかと確かめてはいない。ただ長い髪とピンク系の着衣を見て、単純に〝連れの女〟と考えてしまったようだが、その髪は、男の長髪とも受け取れる感じではなかったですか」

一つの見方を押しつけるような訊き方は危険だとは、十分承知していながら、和栗は思わずたたみかける語調

になっていた。畑山事件の共犯者は男の可能性が強く、一方殺された中谷のそばには「女」がいたというのなら、その「女」は実は男だったのではないか。息子との偶然のやりとりで、降って湧いた発想とはいえ、その推理は状況の亀裂の隙間から必然的に生まれたものともいえた。

「いや……」

杉岡はゆっくりと、慎重な面持ちで、

「チラッと見ただけですが……そういうんじゃなくて、こう、くるくるカールしてて、スカーフの上まで垂れさがった、だいぶ長い髪だったような気がするんですがねぇ。それに、色も明るい、染めたみたいな茶色で……」

すると鬘か、と和栗は反射的に思った。

男の二人連れがモーテルへ入れば、フロントの目につきやすい。無論、ビジネスの旅行者や、ホモの男たちなど、そのケースも皆無ではないらしいが、なんといっても数が少ないから、印象に残るかもしれない。そこで、中谷の連れ、つまり犯人は、鬘をかぶり、女装をしてフロントを通過したのであろうか。

だが、この想像には大きな疑問が残る。

中谷が、そこまでしてモーテルへ入ることに、不審や抵抗を示さなかったのか、という点である。

犯人と中谷が、本当にホモの間柄であったらどうだろうか。

和栗は「木原」の名を思い出した。

安宅の話によれば、中谷はその人物と競輪場で知り合い、すっかり心服している様子であったという。最近では彼と組んで何か大きな仕事をはじめるつもりだと意気込んでいた……。

中谷と木原が同性愛の関係にあったという可能性は、一考の余地がありそうだ。その性向を持つ男たちの出入りする場所は、おのずと決まっているといわれるから、その方から「木原」を捜すやり方も考えられるのだ。

しかし、先ほどの疑問に対する解決は、それだけだろうか——？

和栗はつと椅子を立ち、フロントとは反対側のキャッシャーの窓口の方へ歩いていった。チェックアウトの車が通過する時以外、そこは無人で、窓はやはり厚地のレースで遮蔽されている。

カーテンのために夕暮れ時のように見える戸外へ目を凝らして、彼は思考を集中した。何かのきっかけで推理が回転しはじめると、次々に新しい視野がひらけてくることがある。

そうだ……。犯人の男が女装して、いっしょにモーテルへ入ったとしても、中谷がまったく不審を抱かないケースは、もう一つある。それは、中谷がすでに死んでいた場合である。

しかし、そんなことはありえない。中谷は義兄に借りたセドリックを運転して、——いや、待てよ……。

和栗は、膝をかけたままでいる杉岡を振り返った。

「杉岡さん。あなたはさっき、そこのカーテン越しのことだから、運転者の顔もはっきりとは見えないと言われましたね」

「ええ。お客さんにとっては、その辺の気楽さがモーテルの魅力なんだと思うんですが。しかし私共の方では、お客さんの人数と全体の感じをざっと観察しておくようにと、条例で指示されているものですから、一応……」

「それなら、あの晩セドリックを運転していた男が、確かに殺された中谷だったとは断言できないわけですね」

「はあ……いや、それは……」

杉岡はややまごついたように、鼻の下をこすりながら、

「その点は、埼玉県警の方も最初ちょっと気にかけておられたようですが……何ぶん、アベックで入られて、男の方一人が残っていれば……」

「だからそんな先入観はいっさい捨ててみてください。助手席にいたのが果たして女かどうかもあやしいんだ」

思考が熟してくると、和栗の口調はどうしても威圧的な響きを帯びてしまう。

「そうだな。もし、あの中谷浩司の死に顔をこのモーテルとは全然無関係な場所で見せられたとしたら、あなたは、彼があの晩セドリックを運転して十四号室へ入った客だとわかっただろうか」

「いえ、それはとても……」

「ではやはり、車を運転していた男と、中谷とは、同一人とは断定できないことになりますね」

「それはまあ、そうですね。とにかく、フロントで見た時には、ほとんど何も印象にのこらなかったものですから」

杉岡はかえってホッとしたような顔で頷いた。たいていの証人は、自分のことば一つで何かが断定されることに不安を覚えるものだ。

和栗はまた彼に背を向けた。

十月十四日夜十時半に、セドリックを運転して十四号室へ入った男が、中谷浩司ではなかったと仮定する。すると運転していたのは、犯人にほかならない。中谷はそ

の時すでに殺されていたか、あるいは睡眠薬で眠らされるかして、髪をかぶせられ、ピンクのスカーフを巻かれて、助手席にすわらされていたのだ。杉岡は、助手席の人物の頭がシートの下の方へもぐりこんだ恰好で、したがって小柄だったのだろうとのべたが、たとえ中谷程度に背の高い男でも、ぐったりした身体をずりさげるようにしてすわらせることは、さほど困難ではなかったと思われる。

十四号室のガレージへ入ると、犯人は中谷を二階のルームへかつぎあげ、ベッドに横たえた。その間、フロントからかかってきた電話に出て、たぶん、朝まで泊まるつもりだが、チェックアウトの時間は決めていないと答えた。これは死体の発見を少しでも遅らせる意図がうかがわれる。

それから彼は、中谷の髪やスカーフを取りのぞき、ジャンパーを椅子にかけ、冷蔵庫からビールを取り出してグラスも二個濡らしておくなど、いかにも中谷が「連れの女」と、そこでいっときをすごした形跡を擬装したうえ、セドリックのエンジンをかけ、ルームのドアを全開してから、二階の窓を開けて脱出したのではないだろうか。

もしこの時中谷がすでに死体となっていたとすれば、彼はサンガーデンへ運びこまれる直前に、別の場所で睡眠薬を飲まされ、一酸化炭素中毒で死亡させられていたと考えられる。中谷の検屍による死亡推定時刻は、当夜十時から十二時までと報告されているのだ。

幻のような「中谷の女」を捜すばかりが解決の道ではない。直接手をくだした犯人が男である場合もありうるのだ！

和栗は熱っぽい眼光に内心の興奮をのぞかせ、かえっておよそ素っ気ない挨拶を残すと、半開きにされたモーテルの鎧戸をくぐり、私道の途中に駐めてあるライトバンへ戻っていった。

2

十月二十三日水曜日午後二時四十分——。

ブザーを聞いた麻子は、念のため小さな覗き窓で相手を確かめ、それから急いで錠を外してドアを開けた。

各務はちょっと会釈してから、暗い玄関の内部へ入った。

「すみません。少し遅刻しましたね。午前中は前橋の大

学へ行っていたものだから」
ふだんの穏やかな調子で言った。
麻子の方は、知らぬ間に男の胸に崩れかかる姿勢になって、深い溜息を洩らしていた。
「今朝から心配で、食事も喉に通らなくて……」
「心配することはありませんよ」
各務は片手を麻子の肩にまわして、静かに囁いた。
「奈津実は、確かに三時にここへ来るといったのでしょう？」
「ええ」
そのことは今朝麻子が各務の自宅へ電話して知らせ、それで彼は二時半に——約十分遅れたが、打合わせどおりこの家へ来たのである。
それ以前の午前九時半に、麻子は奈津実のアパートをダイアルしている。二十三日水曜日までに連絡がなければ麻子の名を警察に通報すると奈津実が脅した、その約束ギリギリになっていた。
夫の出勤を見送ったあと、教えられていた奈津実の部屋のナンバーを廻すと、コールサイン数回ののち、ようやく奈津実らしい女が出た。
「もしもし？」と尻上がりの不機嫌な調子で、ハスキーな声がひときわかすれているのは、まだ床の中にいたのかもしれなかった。
「林奈津実さんですね」
「ええ」
「あの、私……」
「ああ、桂木さんね」
奈津実は麻子と気がつき、さすがにやや緊張した気配だった。
「はい。あの……この間のことですけど、今日家までおいでになれますか」
「行けますよ。だけど、約束のものは大丈夫なの」
例の抑揚の少ない口調でズバリと訊かれると、麻子は胸を小突かれたようなうろたえを覚えたが、
「はい」と懸命に力をこめて答えた。電話ではいっさい細かいことは言わず、ともかく奈津実を家まで呼び寄せること。話し合いは直接自分が会ってすると、各務によく言い含められていたからである。
「ですから、家まで来ていただけば……」
「いいわ。これから？」
「いえ、三時ごろはどうでしょうか」
「いいわよ。じゃ、三時にね」

それで彼女はすぐ電話を切ってしまった。その素早さが、なんとなく先方の室内に誰か人がいたからのような、かすかな不安を誘いもしたが、奈津実にしても、自分のやっていることの性格は十分承知しているはずなのだから、他人に気取られるようなミスは犯さないだろう。

E市で工場と目と鼻の先の社宅で暮らしていたころとはちがい、東京に戻ってからは、夫の桂木は朝出れば暗くなるまで、家に立ち寄るようなことは、まずほとんどなかった。だからその点は、麻子はさほど心配していない。

それでも、麻子は各務を上がらせると、彼の靴を下駄箱へしまった。

各務のうす茶のダストコートの肩に小さな水滴が光っていて、黒い靴も少し濡れていた。

「雨ですか」

「ええ。細かいのが降り出したみたいですね」

麻子はコートを脱がせて胸に抱え、先に立って茶の間へ案内した。奈津実が来たら応接室へ通し、後から各務が入っていく手はずも決めてあった。

「それで、お金のことですけど……」

触れたくない話題だが、まずそこを確認しておかなければならない。奈津実と約束の三時まで、もうあまり間がないのだ。

「私は、昨日銀行からおろしておきました。かき集めたら、どうにか五十万円になりましたわ。大阪の兄にも電話をしてみたんですけど……母はもう齢で少し弱ってきているようでしたし、兄にはやっぱり言えなくて……」

各務は労りをこめて頷いた。

「ぼくの方も、どうしても二百万円しか作れなかった。親しい友人の一人には、わけを言わずに借金もしたが、何ぶん日がないものだから」

「申しわけございません」

麻子は思わず深く頭をさげた。各務はちょっと驚いたように眉をあげたが、やがてかすかに首を横に振った。

麻子はまた、時計を見あげた。三時十分前になっている。

「時間どおりにキチンと来るとは限りませんよ」

各務は苦笑したが、やはりふだんより心なしか頬が蒼い。彼は煙草を喫わないので、麻子は支度しておいた紅茶のセットを引き寄せながら、

「金額のこと、承知するでしょうか」

「それは、なんとしても承知させるしかないですね」

はじめて強い声を出した。

「二百五十万円あれば、当面アメリカへ行くくらい、十分すぎる金でしょう。向こうに姉さんがいるのなら、早速に自活しなけりゃならないわけでもないだろうし」

「でも、彼女は本気でアメリカへ行くつもりでしょうか」

「そこのところも、よく確かめてみましょう。なるべく一日も早く国外へ出てくれた方が、警察との接触が絶たれてこちらも安心なんだが。いずれにしても、なんとしても、固く沈黙を守ることを誓わせなければならない」

なんとしても、と各務はくり返していう。日ごろはどこか茫洋としていて、学者らしい俗離れした気分を漂わせている彼が、奈津実に対する姿勢だけは、最初から決断的だった。それだけ事は重大な問題に繋がっている。それは確かなのだが、それにしても、彼の強硬さが、時折り黒い影が掠めるように麻子を不安にする。その影は何か不穏な予感に似ていた。

他人の沈黙をなんとしても買うことなど、果たしてできるものだろうか。

奈津実が二百五十万円では承服せず、麻子の名を通報すると言い出したら、彼はどうするつもりだろうか。いや、今日は彼自身も奈津実に顔を見られてしまうのだから、その意味では相手の立場はいっそう強くなるわけだ……。

麻子は恐ろしい想念から逃れるように、やや唐突な動作で立ち上がり、鏡台の前に膝をついた。そこに置いてあるハンドバッグを開けて、銀行の封筒を取り出した。

「これ、あなたが持っていらしてください」

各務はさし出された封筒を眺めただけで、自分も背広の内ポケットからハトロン紙の包みを引っぱり出した。彼の方が、だいぶ分厚い。

「まとめてそっちへ置いといてください」

結局、一万円札の束は麻子がひとまとめにして包み直し、鏡台の上に置いた。それからようやく各務のそばへ戻り、ポットの湯を注ぎ分けた。

各務は白い小菊と数本の桔梗が小雨に濡れている庭へ顔を向けた。

が、視線は知らず知らず鏡台の方へ引き寄せられた。黒いバッグの陰から、ハトロン紙の先がのぞいて見える。今日持ってきた二百万円のうち、百八十万は自分の預金、二十万は友人の助教授に借用したものである。

預金は、近い将来にその機会が約束されているドイツ留学に備えて、コツコツ貯めてきたものだった。

二百万、三百万と一口にいうが、日常生活の次元で考えれば、なんとしても大金である。どれほどの書籍を、従来のように細かな神経を使わずに購入できることだろうか……。

各務は無性に腹立たしくなった。麻子の話によればまだ二十五、六の小娘に、むざむざと貴重な金を吸いあげられることも、またその小娘が何の根拠もなく指定した金額のためにキリキリ舞いさせられたことも、なんとも無念だ。

馬鹿馬鹿しい気持ちも湧いてくる。本当に、こんな馬鹿げた話があるだろうか。

しかし……実際問題として、ほかにどうすることができるのか？

一段一段、具体的に考えつめていけば、結局は無理しても金を作り、奈津実に与えて黙らせるだけが、犠牲を最小限にくい止める手立てだと思い知らされるのだ。奈津実の口から麻子の名が洩れたが最後、警察はまちがいなく、各務と麻子の関係まで洗い出すだろう。その事実は、二人がこれまでひたすら隠蔽してきただけに、いっそう意味深長な印象で世間にばら撒かれ、次には各務自身と桂木謙介に斬りかかる刃となって、返ってくるにちがいない。ひいては、公害紛争の帰趨をも左右しかねない。それのみか、麻子に中谷浩司殺害の容疑がかかり、抜きさしならぬ立場に陥るかもしれないのだ。

やはり、なんとしても、秘密は林奈津実までで食い止めなければならない。

二百五十万円で、三人の人間の将来を買うのだ。買物と思えば、腹も立たず、馬鹿馬鹿しくもない。そしてその金を、自分と麻子とが捻出することも、やはり当然の道理かもしれない。そうだ。その程度の負担は、二人が突き進んだ行為に比して、むしろ軽すぎる罰ではないか——。

各務は鏡台から目をそらし、麻子が淹れてくれた熱い紅茶に角砂糖を落とした。

しかし、ではもし、この金によっても奈津実の沈黙が保証されなかった場合は——？

奈津実が金額の不足に不服をとなえたり、あるいは、今後も脅迫を繰り返す気配を匂わせたら、どうすればいいのか？

その想像は、すでにこの家へくる道すがら、時折り発作のように彼を怯えさせていた。

怯えが、急に現実的な恐怖に変わっていることに、彼

は気がついた。脅迫者と対決する時刻が、もう目前に迫っているからだ。

もし相手が承服しなかった場合、最悪の場合には……？

麻子が訝る目で彼を見守った。

この時、廊下で電話が鳴った。二人は一瞬顔を見合わせた。時計は三時二分すぎを指している。

麻子は各務の眼差しにはげまされる気持ちで廊下へ出た。奈津実からかもしれない。

「もしもし……？」

「ああ」

低い男の声が、冷やりとした衝撃で麻子の胸底に響いた。桂木だった。

「会社でちょっと印鑑証明が要ることができたのでね。……もしもし？」

いつも前置きなしで用件を切り出す夫は、すぐに答えない麻子に、苛立った声を出した。

「はい」

「二通取ってもらいたいんだ」

「はい……」

「明日の朝には必要だから、今日じゅうに取っておいてほしい。行けるね？」

「ええ……」

区役所は五時までのはずだから……と思いながら、麻子はともかく返事をした。それで電話は切れた。

一時に早まった動悸がなかなかおさまらないまま、麻子は茶の間へ戻った。

各務は電話の主をおよそ察していた顔つきで、少し心配そうな目を向けただけで黙っている。麻子は、何でもないというふうに、小さく首を振ってみせた。それから彼の身近にすわった。

各務は手をのばして、膝の上の麻子の手をにぎりしめた。そのまま抱き寄せたい衝動を、かろうじて抑えた。もういつ奈津実がブザーを鳴らすかわからないからである。

二人はしばらく無言で、霧雨が降り続いている庭を眺めていた。外の車の音は絶えず伝わってくるが、家の中はひっそりとしている。小粒な雨が軒を打つかすかな響きと、木造家屋がきしむような音が、時たま聞こえた。むらのない雨雲一色に塗りこめられた空は、時間の推移すら止めてしまったかのように感じられる。

この人と、こんなふうに一つ家の中で、心静かな時をすごせる日が、いつかくるだろうか……？

麻子はふと、せつない空想に吸いこまれた。次にはほんの一瞬だけ、意識があらゆる現実をとび超えて、そんな日がきっとくる、と信じた。現在のあまりの心もとなさに、自分で無理に生み出した希望の予感に縋っているみたいな気もした。

三時半になった。

ついにブザーが鳴った。

各務がもう一度麻子の手を軽く握って、

「では、ぼくは後から顔を出しますから……大丈夫ですよ。落ち着いて」

麻子はほとんど無意識で頷き、膝に力をこめて立ちあがった。

一人で玄関へ出た。

覗き窓の円形の中で、女の姿が動き、重ねてブザーを押している。雨降りと、それにおそらく顔を隠したい心理とで、草色の毛糸のストールを頭からかぶっている。

麻子は習慣的に内部から誰何しかけたが、思い留まった。通りがかりの人にでも、声を聞かれない方が望ましい。

「ちょっとお待ちください」と断わって、錠を外し、ドアを開けた。

「ああ、お留守かと思ったわぁ」

目の前で弾んだ声をあげたのは、書道教室で付き合いのある鈴川夫人であった。

「このところずっとお休みなさってたでしょ。どうしてらしたの？」

麻子は咄嗟に言葉を失っていた。相手は麻子の答えなどあまり期待しない様子で、

「うちは今朝から主人が名古屋へ出張なのよ。本当は日帰りで行ってこれるんでしょうけど、どうせまたどこかで釣りをしてくる気でしょ。でも車置いていったものだから、こんな時にと思って、清瀬のお友だちの家まで行ってきたの……」

喋りながら、彼女は独特の大袈裟な身振りでストールを脱いだ。車を門前に駐めて走ってきたらしく、ほとんど濡れていない。

「今日は子供も塾のある日で帰りが遅いもんですから、たまにはあなたともゆっくりお喋りしたいと思ってお寄りしたわけ……」

「まあ、それはどうも……」

奈津実が夫人の姿を見たら警戒して引き返すかもしれないと、麻子は気が急くのを、微笑で紛らしながら、

「あの……せっかくのところを本当に申しわけないんですけれど……」

そのことばで、夫人はもう眉根を引き寄せた。表情の動きも派手な人である。

「あいにく今、主人の会社の方が見えていて……」

「あら、それは残念ねえ……」

彼女はいかにも不満そうに、玄関の内部を見廻し、そこに客らしい靴も脱がれていないのに気がつくと、かすかに不審の色を漂わせた。が、さすがにそれは口に出さない。

「子供の進学のことで、ちょっと相談にのってほしいことがあったんですけど。桂木さんはインテリだから」

「あら、いいえ。——でも、今度のお稽古の帰りにでも……」

「なかなかそうはいかないのよ。うちは主人の帰りがわりと早いでしょ。そのうえ毎晩晩酌だから、おかずの支度が大変なの。出張してくれた時はほんとにホッとするわ」

麻子はなるべく早く話を切りあげるために、黙って頷いていた。

「今日はゆっくりできるチャンスだったんだけど、でもまあ仕方ないわ、先客がおありなら」

もう一度未練そうに廊下の奥をのぞきこんだりしたが、ようやくあきらめ顔で、目許に微笑を浮かべた。

「どうもお邪魔しました。またね」

「本当に失礼いたしました。どうぞお気をつけて」

鈴川夫人のフォルクスワーゲンが動き出すのを見届けてから、麻子はドアを閉めた。

ぐったりした気持ちで、廊下を引き返した。

各務は襖のそばに立っていた。

麻子は時計を見あげた。三時四十五分になっていた。遅い——。

奈津実は来ないのではないだろうか？

一瞬その予感が鋭く胸をかすめた。

なぜ来ないのか？——その理由はわからない。気が変わったのか。それとも刑事の目がきびしくて、出られないのか。

いずれにせよ、この時間まで音沙汰がないのは、来ないという意思表示ではあるまいか。

しかし、その予想は、安堵をもたらすどころか、新たな恐怖を呼びおこした。電話もかけてこないのは、奈津実が何か危険を感じて、麻子の名を素直に警察へ通報す

る気になったからではないだろうか。それとも、もっと悪辣なやり方を思いつきでもしたのか。

自分たちは、さんざん翻弄されたあげく、結局は世間の指弾に晒される運命ではないだろうか……。

知らぬまに、麻子の顔が歪んでいた。

麻子が堰を切ったような嗚咽をあげたのと、各務の腕が彼女を抱きとめたのとは同時だった。

彼は両手で麻子を支えて、そっと膝をつかせた。

麻子は彼の胸の中で身をよじった。口惜しさと惨めさが、苦痛と絶望が、一挙に嵐のように全身を荒れ狂う思いだった。警察の脅威、脅迫者の攻撃、そして夫の無言の圧迫と、その夫に対する身を切られる自責……風雨の吹き荒れる断崖の上で、必死に握りあった二人の手が、しだいに引きはがされていくような幻影が、麻子の脳裡で揺らいでいた。

各務は麻子を落ち着かせようと試みたが、それが無力なことに気がつくと、しばらくはただジッと麻子の肩を抱いていた。それから彼は、泣きじゃくる麻子の歯の間に、黙って自分の人差指をはさんだ。

噴きあがる悲しみをこらえようとして噛みしめる麻子の歯が、各務の指にくいこんだ。

その痛みに耐えることで、彼は少しでも、麻子の慟哭を共有したいと願っていた。

3

「林奈津実が、昨日からアパートに戻っていません」

十月二十四日木曜日。いつもより少し遅く、午前十時に西荻窪署の捜査本部へ出勤した小野木刑事が、平井警部のデスクへ歩み寄るなり、緊張した声で報告した。朝から季節外れに冷えこんだせいもあってか、色白の頬が紅潮していた。

「なに……」

平井が太い眉をグイと寄せて見あげた。

「今朝、こちらへ来る前に、阿佐谷の寿荘をのぞいてみたんです。昨日行かなかったので、なんとなく気になっていたものですから。奈津実の部屋のドアには鍵がかかっていましたが、それは珍しくもないんですが……」

小野木は自宅が高円寺なので、阿佐谷の奈津実のアパートは、西荻窪署へ出勤する途中に当たる。それと、最初に彼女の住所を突きとめたのが、彼と本庁の露口刑事であった。そのさい中谷浩司と疑わしき男を、わずかな

油断で取り逃がしてしまった無念が、若い彼の中にいつまでも尾を曳いていて、中谷の死亡後、ひとまず、寿荘の張り込みが解かれて以後も、彼はたいてい一日に一度は足を運び、外から様子を窺ったり、奈津実に声をかけたりしている。そうやって、あるいはまだ彼女が隠しているかもしれない手懸かりを引き出すチャンスを狙っていたのだ。

「あの女の朝が遅いのはわかっていますから、九時に鍵がかかっていても驚くには足りないのですが、しかし、窓のカーテンは開いていましたから、床からは出ているはずです。でもドアを叩いても応答がありません。窓のそばに寄ってのぞいてみますと、布団も敷いてないし、姿も見えない。手洗いにでも入っているのかと考えて、五分ほど待ってみたのですが……」

小野木の、いつものやや几帳面すぎる報告を要約すれば——

ほとんど毎日彼女を偵察していた彼は、今朝の不在に只事でない予感を覚えた。

次には、二つ隣りのドアをノックした。そこには新宿のバーのホステスが住んでいて、日ごろ奈津実と親しくしていることも、彼は知っていたのである。勤め柄、この女も朝が不規則のようだ。

だが、根気よくノックを続け、ようやく起きてきたその女、舟橋時子の仏頂面を拝んだかいはあった。

「奈っちゃんは、昨日午後からどこかへ出かけたみたいだったけど。夜あたしがお店から帰ってきた時も、まだ電気ついてなかったですね。——おかしいわねえ。善福寺の旦那さんがああなってからは、外泊したことなかったのに」

時子も心から怪訝そうに、花模様のネットをかぶせた頭を傾げた。奈津実の郷里は確か宮崎だったから、実家へ泊まりにいくようなこともないと小野木は思った。

「昨日の午後出かけたというのは、何時ごろです？」

「はっきりとはわからないけど、一時すぎにもう一度寄った時にはいなかったから……」

「もう一度？」

「ああ、昨日は朝の九時半ごろ電話を借りに行ったんですよ。お客さんにドライブ誘われてたんだけど、雨になりそうなもんで、どうするか尋ねてみようと思ったものだから」

「その時には、奈津実さんはいたわけですね」

「ええ。ドアを開けてくれて、ちょっと喋ってたら、電

話がかかってきて、奈っちゃんは何か先方へ出向くような返事をしてましたよ」

「なに？――それは誰からの電話だった？」

こんな具合に小野木が彼女の記憶を引き出した結果、昨日十月二十三日午前九時半ごろ、奈津実の部屋にかかってきた電話の主は「桂」か「桂田」といった苗字で、かすかに聞こえた声の感じでは女性らしく、奈津実は三時に相手とどこかで会う、それもどうも先方の家を訪ねるみたいな口吻だった、などのことが判明した。用件についても、舟橋時子は奈津実から直接何も聞かなかったというが、彼女が「約束のものは大丈夫なのか」といった質問を発していたことも憶えている……。

その日の正午をすぎても、奈津実はアパートへ戻ってこなかった。舟橋時子のほかにも彼女と付き合いのあった二、三人の住人に当たってみたが、誰も昨日の午後から奈津実の姿を見ておらず、行き先の見当もつかなかった。彼女が昨年暮れまで勤めていた荻窪のバー〝ボンボン〟にも問い合わせがなされたが、収穫はなかった。

そのまま夕方になると、西荻窪署では、これを「謎の失踪」と判断し、捜索を開始した。いうまでもなく、畑山と中谷、二人の殺害事件との関連を考慮したからである。

林奈津実は、やはり何らかの手懸かりを握っていて、自ら姿をくらましたのか。

それとも、彼女はどこかで殺されているのではあるまいか。

時間の推移につれて、後者の可能性が重さを増してきた。

とすれば、なぜ、誰に殺されたのか？

「桂」か「桂田」と名乗る女性は何者か？

電話のさい、奈津実は「約束のものは大丈夫なのか」と尋ねていたという。先方の答えは「イエス」で、奈津実はどうもそのものを受け取るために三時に相手を訪問するような印象であったと、舟橋時子はのべている。

林奈津実は、その女性を何かの理由で強請っていたのではあるまいか。すると「約束のもの」は金であり、彼女はその金を受け取りに出たまま、姿を消した……？

この女性の新たな出現によって、捜査本部は改めて、畑山、中谷の両事件の背後に隠見された第二の女性の存在を重視しはじめた。

もちろん、奈津実が電話の相手を脅迫していたとか、

その内容が両事件に絡むなどの点は、まだ仮定の段階で、裏付けはないが、奈津実の性格やこれまでの経緯、それと舟橋時子の話を総合すれば、どうしてもその辺の推測に落ち着くのである。

では、問題の女性に関連したデータを、順に想起してみると——

○十月七日、畑山事件の朝、芳鹿荘を出て蕪蔵寺横の坂道を下り、久藤恭太ともう一人の男に出遇った女。

○十月十二日、捜査本部に匿名の投書をした女。

○十月十四日夜、中谷浩司と共にモーテル・サンガーデンへ入った女。

○そのしばらく後、サンガーデンの近辺からグレーのルーチェを運転して走り去った女。

○十月二十三日朝、奈津実のアパートへ電話をかけ、三時に彼女と会う約束をした「桂」か「桂田」といった苗字の女。

これらのデータの中に出現している女性が、すべて同一人であるという証拠ももちろんないわけだが、といって、同一人ではありえないとする決定的な矛盾も見いだされていない。むしろ、時間的にも、年配や背恰好の点からも、十分同一人と見なしうるし、一連の事件にそう何人もの女が絡んでいたとするより自然だという考え方もできるのだ。

その謎の女が、林奈津実の失踪をきっかけにして、捜査線上に大きくクローズアップされた形である。

中谷殺害はやはり女の犯行であり、畑山事件は案外中谷の単独犯で、共犯者は存在しないのではないかという意見の口火を切ったのは、本庁の平井警部だった。

「中谷浩司は、畑山欣造を殺害して逃走する途中で、問題の女性——仮に桂田としますが、彼女とどこかで出遇ったのではないか。そのさい中谷は久藤恭太少年ともいっしょに会ったのか、あるいは別の場所で桂田とだけ出くわしたのか、この点はどちらとも断定できませんが。いずれにせよ、中谷には何らかの理由で、桂田の身許がわかったとする。それ以前に二人が顔見知りだったという場合もあり得ないとはいえない。すると、中谷としては、自分が見られたのもまずいが、桂田の方もその朝そこを通ったことを人に知られては非常に困るはずだといった事情を見抜いた。そこで彼は、目撃者の口を封じる一石二鳥を狙って、大胆にも彼女を脅迫し、自分のもの

にしようとしたのではないでしょうか。ところが彼女は中谷の意のままになると見せかけて、モーテルへ入るなりビールをすすめ、ひそかに睡眠薬を飲ませたうえ、セドリックの排気ガスを放出させて、自分は窓から脱出したのではないか。その前に、自分のグレーのルーチェをモーテルの近くに駐めておいて、それで逃走したわけです」

平井はその夕刻の会議で、例の陽性な眸に活気を漲らせ、歯切れのいい早口で見解をのべた。

「一方林奈津実は、やはり中谷と懇ろな間柄だった。畑山殺しは彼女の手引きによるものだったとも、大いに考えられると思う。そんなわけで、彼女は中谷から桂田の事情なども聞いていた。中谷がモーテルで殺されると、奈津実は桂田の犯行にちがいないと睨んで彼女を脅迫した。その結果が今度の事態を招いたのではないか……」

「するとその場合には、中谷殺害の犯人は、畑山事件の共犯者ではなかったことになりますね」と質問が出た。

平井は慎重な表情ながら、決断的に頷いて、

「そのとおりです。——しかし、畑山殺しのさい、中谷のほかに共犯者がいたという確証も実はないわけで、被害者は六十すぎの老人なのだから、中谷一人で首を絞めることもさほど困難ではなかったはずです。中谷の身辺から金が発見されないという問題は、なるほど、隠れた共犯者の存在を匂わせもするが、これも絶対とはいえない。畑山の金庫には偶々ほとんど現金が入っていなかったのかもしれないですからね。私は最近、あの事件は案外中谷の単独犯ではなかったかと思われるようになった……」

その後いくつかの意見がのべられ、討論が行なわれたが、根本的には平井の説を真っ向から否定するほどの異論は出なかった。そこで当面は、明二十五日午後まで、つまり奈津実がアパートを出てからまる二日間は表向き静観し、内偵を続ける。それでも行方がつかめない場合には、報道関係にも協力を求めて、奈津実と謎の電話の主の所在を捜索する、との方針に決定した。

電話の女性について、先のデータにつけ加えられる参考事項は——

○三十前後の、ほっそりした体格で、上品な人妻ふう。(芳鹿荘の女中と久藤恭太の証言)

○善福寺の芳鹿荘を利用している点、投書の消印が「石神井」とある点などにより、練馬区から杉並区にかけ

ての一帯に居住している可能性が考慮される。

主だった者約十人で臨時に開かれた捜査会議が、七時まえに終了すると、和栗は若い警官にライトバンを運転させて署を出た。

和栗も、平井らの推測にまったく反対というわけではない。十分筋が通っているし、これで電話の女性が突きとめられれば、中谷殺しも奈津実の失踪の謎も、一挙に解決しないとも限らないだろう。だから和栗は、今の会議でもさほど強い意見はのべなかった。

しかし——彼は、自分で直接サンガーデンのフロントに状況聴取して自信を得た中谷事件の犯人女装説、もしくは逆に犯人が中谷に女装させてセドリックの助手席にすわらせ、自分が運転してフロントを通過したという着想を、簡単にすてることはできなかった。

前者の場合とすれば、犯人は中谷とホモの関係ではなかったかとの見方が生まれ、中谷が競輪場で知り合って心服していたという「木原」を目処に調査を試みたが、結局中谷に同性愛指向があったという形跡は発見されず、「木原」なる人物についても依然実在の影も浮かばないのだ。

すると和栗の推理は、勢い後者に傾いた。

畑山殺害には、やはり中谷の共犯者、いやむしろ主犯と呼ぶべき人物がひそんでいると、彼には思われてならない。中谷は手先に使われただけで、主犯が畑山の金庫から奪った現金などを握っていたのではあるまいか。

平井警部が、畑山事件は中谷の単独犯行との意見をのべたさい、和栗は、それならば中谷はなぜ久藤恭太を殺そうとしたのかという疑問を提出した。そうと断定はしきれないものの、富士見池で恭太を襲った男は十中八九中谷であったと想像され、中谷ならば、その犯行の目的は、畑山事件の重要な証人である恭太の口を封じようとしたとしか考えられない。ところが恭太は、富士見池の犯人ははじめて見た男で、畑山事件の朝、善福寺の坂道で出遇った男とはちがうとのべている。すると——中谷に共犯者がいなかったならば、彼にはなぜ恭太を狙う必要があったのか？

これに対して、平井は、恭太は何ぶんにも九歳の子供で、彼の証言を全面的に信頼するわけにはいかない。したがって、富士見池の犯人と畑山事件の朝恭太が出遇った男とは実は同一人、つまり中谷であったとも考えられるし、逆に富士見池で恭太を襲ったのは中谷ではなく、

畑山事件とは無関係な異常性欲者などの犯行であったという場合もありうると反論した。

しかしながら、何度か直接恭太の話を聞いている和栗の印象では、恭太は身体こそ小さい方だが、年齢のわりにしっかりしていて、時にはむしろ早熟なほど、微妙な心の陰翳をのぞかせる少年である。それだけ扱いにくい相手である代わり、彼が明言することは、なまじっかなおとなの証言以上に信用できるような気がするのだ。

富士見池の犯人は、恭太が善福寺で出遇った相手とは別人で、やはり中谷浩司だったのではないか。そして中谷は、恭太に顔を見られている主犯の指示によってか、あるいは中谷自身の判断で、恭太の口を塞ごうとして失敗したのではなかっただろうか。

ところが、捜査の手がいよいよ中谷に迫ると、主犯は、中谷から芋蔓式にわが身にのびる追及を断つために、彼を殺害した。方法は、おそらく、どこかで睡眠薬を飲ませて眠らせ、車の中に閉じこめて、排気ガスを送りこんで中毒死させた。そのような状況なら、被害者はおよそ十分で死に至ると考えられる。次には死体に鬘やスカーフなどで簡単な女装を施してセドリックの助手席にすわらせ、犯人が運転してモーテルへ入った。そして、排気ガスによる中毒死は、サンガーデン十四号室で発生したごとく擬装したうえ、窓からとび降りて逃走したのではあるまいか。いうまでもなく、あわよくば事件を過失として処理させ、他殺の疑いが生じた場合も、セドリックを運転していたのは中谷で、犯人は助手席にいた女と考えさせるためであろう。

中谷浩司を背後で操っていたのは誰か——？

若い警官の運転するライトバンは、まだラッシュの渋滞が続いている目白通りを横切り、やがて東長崎駅前の一方通行の狭い商店街を抜けたところで停まった。少し戻れば、「商安土地建物」が間口二間ほどの事務所を構えている。

通りすぎた時和栗がのぞくと、会社の暗いガラス戸に「忌中」の貼り紙があり、カーテンがおりてひっそりとしている。代わりに、裏手の住居の方の玄関の外灯が、路地の敷石を青白く光らせているのが見えた。

三日前、和栗はサンガーデンのフロント係杉岡順一に状況聴取したあと、その足で安宅康信を訪れている。中谷浩司と付き合いのあった男について、もっとくわしい情報を求める目的であった。安宅の会社に着いたのは昼まえだったが、彼は駅前の井上産婦人科医院へ行って留

守だった。子宮癌で入院していた妻の多恵子が、その朝から昏睡状態に陥っていたのである。

そこで、和栗は医院まで出向いて安宅に会ったが、そんな状況でもあり、満足な聞き込みは果たせなかった。「木原」については先日話した以上のことは知らないし、ほかの友人のこともほとんど聞いていない。また中谷に同性愛の性向があったなど、とても考えられないという返事であった。

そしてその日の午後、正確には十月二十一日午後二時すぎに、安宅多恵子が他界したことを、和栗は翌朝安宅に見舞いの電話をかけて知った。

二十二日に自宅で行なわれた葬式にも、和栗はちょっと顔を出して、焼香した。親戚は少ないようで、近所の主婦など十人あまりが集まった、質素な葬儀だった。

今日、和栗が再度安宅の家に車を向けたのは、奈津実の失踪について、念のために聞き糺してみることが、一応の理由である。

奈津実は昨二十三日の午後から、行方不明になっている。今朝小野木刑事がその事実に気づき、西荻窪署で行方を捜索しはじめて以後、午後三時ごろ、和栗は安宅に電話をかけてみた。安宅は最初から林奈津実など名前も聞いたことがないとのべているから、彼女の行方について心当たりを尋ねたところで、答えは目に見えている。それでも和栗は、むしろ相手の反応を窺うといった気持ちで、ダイアルしたのだ。

だが安宅は不在だった。電話口には親戚らしい女性が出て、彼は葬儀のお礼廻りに出かけていると答えた。

安宅はもう帰宅しているだろうか……？

警官を車に待たせ、一人で寒々とした外灯に照らされている路地へ足を運びながら、和栗は、疲れきった青黒い顔色をして妻の祭壇の傍らにすわっていた安宅康信の姿を思い浮かべた。本来は腮の張った大きな赤ら顔であったと想像されるのだが、中谷の死体が発見された直後に和栗がはじめて会った時以来、目に見えて頬の肉が殺げ落ちて、四角い腮骨が異様なほど尖って突き出している。少し瞼のたるんだ細い目はいつ見てもひどく充血し、生え際のうすい髪も、張りを失くしてフケを浮かせていた。

和栗は、自分と同年配のあのどこか無骨な男に、心の底に同情とかすかな憐憫の混じりあった奇妙な親近感が芽生えていることに気がついた。

だが、その感情は、刑事が一定の容疑に基づいて、職

業的な嗅覚を働かせながら執拗につけ廻している相手に対して時として抱く、一種陰湿な一体感とも繋がっているのだ。

和栗は、一昨日安宅の妻の葬儀に訪れたあと、豊島税務署に立ち寄っている。商安土地建物がここ一年間所得税を滞納し、そのために九月初めに税務署から会社の土地の差し押えをくったという事実に、どうも拘泥るものを覚え、もう少しくわしい事情を知りたいと考えたからだった。

税務署の担当官の説明によれば、安宅が——正式には商安土地建物株式会社が滞納している法人税の税額は約二百万円にのぼり、それで会社所有の練馬区の北端部にある山林を差し押えたという。

ここまでは、すでに聞いていた話と変わらなかったが、続いてその中年の担当官が、和栗の耳にはやや奇異な事柄を洩らしてくれたのである。

差し押えに当たって、彼はまず登記所へ出向いて、対象となる山林の抵当権の有無を調べた。抵当権の設定はなく、その土地は問題なく商安土地建物の所有と判明したのだが、次に現地をくわしく検分し、不自然な点を発見した。登記面と実質の面積に大差がある。書類上は三千九百六十平方メートル（約千二百坪）と登記されているにもかかわらず、境界線を確認したうえで実測してみると、該当の土地はおよそ五十坪あまりしかなかったのである。

「——しかしまあ、五十坪あれば税金の滞納額には十分充当しますから、そのまま差し押えたわけです。それに、これがどこかの担保にでも入っておれば、不正の疑いも生じるのですが、抵当権は設定されていませんでしたから、このこと自体では当面業者に責任はないわけですがね」

担当官は苦笑混じりでつけ加えた。

「それにしても、どうしてそんな奇妙な事態が発生しているのでしょうか」と和栗は質問した。

「いや、こういったケースは必ずしもめずらしくないのですよ。これはいささか極端な例ですがね。——大体山林みたいなキチンと整地されていない土地の場合には、登記面と実測に多少のズレがあるのが普通です。業者は『縄伸び』とか、『縄縮み』とか呼んでいるようですが。そこでたとえば、最初に業者は登記面一万坪の土地を所有していたが、これに千坪の縄縮みがあり、正味は九千坪しかなかったとします。これを何度かに分筆（分割）

して売却していった。分筆のさいにはキチンと測量しなければならない決まりがあるから、縄縮みや縄伸びは生じない。すると、最後に業者の手許に残った土地に、全体の縄縮みが皺寄せされる結果になり、登記面ではまだ千二百坪残っているはずなのに、実質は五十坪しかないといった現象が発生するわけなんですね」

自宅の土地も借地で、不動産などにはおよそ無縁な和栗だけに、この話は何か新鮮な発見のように心に刻まれた。いや、もっと正確にいえば、そんな畸型な土地を、選りに選って安宅康信が所有していたという事実が、彼のどこかを鮮烈に刺激したのである。

これまで捜査本部が、安宅に対して十分な容疑を認めながら、もう一つ鋭さを欠いていたのは、彼が畑山を殺害するだけの、明白な動機が見いだせなかったからでもある。だが、この事実は、新たな展開を暗示するものではあるまいか——？

モルタル塗りの会社よりだいぶ時代を感じさせる木造の住居は、窓に明かりを点していた。

和栗はブザーを押した。

木のドアが内側から開かれて、無地の着物に黒い帯をしめた四十年配の女が姿を見せた。一昨日の葬儀でも安宅の身近にすわっていた、人の好さそうな女性である。家の内部はシンとしていて、もう客はないのか、土間の履物も少なかった。線香の匂いだけが、うすく漂っている。

「西荻窪署の和栗ですが」

会釈していうと、相手は彼を憶えている表情で、

「先日はどうも——」と、上がり框に両手をついた。

「安宅さんはお帰りになっていますか」

「いえ、それがまだ……」

女はすまなそうにさがり眉を寄せて、

「今日はお葬式でお世話になった方たちにお礼廻りしてくると申しまして……」

「そうですか。——失礼ですが、あなたは？」

「多恵子の姉で、八田久枝と申します」

女はまた軽く頭をさげた。

「あの、もうすぐ戻ると思いますから、よろしかったらお上がりくださいませんか」

久枝は和栗の来訪にほとんど暗い印象を抱いていないふうである。和栗はちょっと考えてから「では」といって靴を脱いだ。

上がったところは四畳半で、その奥の八畳ほどの座敷

に祭壇がつくられている。
座敷には、久枝のほかに、頭髪の真っ白な小柄な老婆と、高校生くらいの少年がおとなしくすわっていた。二人とも面長な輪郭が久枝に似通っている。
和栗は、これも久枝を若くしたような、目許のどこか寂しい女の写真に向かって一礼し、線香を供えた。
さし出された座布団の上に腰をおろすと、
「二十一日は、何時ごろだったのですか」
「午後二時五分でございました。朝から昏睡状態になりまして、そのまま苦しまずに亡くなりましたのがせめてものことで……」
「そうでしたか」
安宅多恵子は、十月二十一日午後二時に癌で死亡した。二十二日に葬儀が行なわれた。林奈津実はその翌日二十三日の午後アパートを出たまま、今日二十四日の夜になっても行方がわからない。
和栗は、自分が無意識のうちにそんなふうに列挙して考え、それで、すでに聞いている多恵子の死亡時刻をなんとなく念を押したのだと気がついた。
「実は、昨日の午後もちょっとお電話したのですがね。安宅さんはお留守ではなかったですか」
和栗は線香の煙が目にしみたような表情で、カマをかけて訊いた。
「昨日は……ああ午後からお墓のある三鷹のお寺に出かけておりましたから。でも夕方には帰っていたと思いますが」
久枝はさすがに少し複雑な眼差しで、和栗を窺うように見返した。すると安宅は、奈津実が失踪した午後も、家をあけていたわけだ。
「火葬場はどこでしたか」
「杉並の堀の内葬祭場に頼みました」
「ああ」
久枝が答えた私営葬祭場は、なるほどここから最寄りと思われる。東京都はほかの市とは例外的に、都営葬祭場が一ヵ所あるだけで、あとは全部私営の焼き場で処理されている。
和栗はつとめて語調をやわらげて、
「多恵子さんは、おいくつでした？」
「三十六でございました」
「まだお若かったんですな」
「はい。それだけに不憫で……」
久枝はふいに声をつまらせた。

「安宅さんもお力落としでしょうね」
「はい。まだ子供も小さいものですから、これからどうしてやっていくつもりか……」
「……」
久枝が口をつぐむと、話題が途切れた。
安宅が帰ってくる様子もない。小学二年と聞いている娘はどうしているのかと考えた時、次の間に急に人の気配がして、その娘かと思われるおカッパ髪の少女と中年の婦人が姿を見せた。少女は胸に抱えていたデパートの紙包みを久枝にしめした。
「ご飯すませてきたもんだから、おそくなってしまって……」
少女を連れてきた婦人がいうと、久枝は和栗の方に会釈して立っていった。
「まあ、山口さん、すみませんでした。すっかりお世話になって……」
次には少女の頭に手を置いて、
「文子ちゃん、よかったわね」
それから二人の女は少し話を交わし、久枝が「山口」と呼んだ婦人を送り出した様子である。見守っていた和栗には、近所の主婦が文子の気持ちを引き立てるために、デパートへでも連れていったことが察しられた。久枝がお礼をいう口ぶりでは、山口夫人は葬式以来何かと手伝っているようだ。
久枝が仏間へ戻る前に、和栗は老婆と少年に軽く挨拶して、立ちあがっていた。
彼が表の道路へ出ると、二、三軒先の衣料品スーパーの前で、やはり主婦らしい女と立ち話している山口夫人の後ろ姿が見えた。紺のパンタロンをはいていて、文子が持っていたと同じデパートの、大きな包みをさげている。
和栗が二、三歩後ろに近づいた時、彼女は相手と別れて歩きだした。彼はすぐ追いついて並んだ。
彼女は横に来た男をチラリと見て、さっき安宅の家で見た男だと思い出した様子である。
「どうも」と和栗がいうと、目許に愛想のいい笑い皺を寄せた。
「安宅さんのところは、今度は大変でしたねえ」
「本当に。文子ちゃんが可哀相ですわ。うちの娘と小学校が同級なんですよ。それだけに身につまされるみたいで……」
「ああ、それでは亡くなった多恵子さんとも親しくされ

ていたのですね」
「ええ、ええ。私、たいてい毎日お見舞いに行ってたんですよ。家がちょうど病院のすぐ裏だもんですからね」
「では、臨終にも立ち会われた？」
「いいえ。それは知らなかったんです。あの日は夕方うかがったら、もう……」
「死に顔はごらんになったのですか」
「はい。すっかりやつれてらしたけど、苦しまれた様子もなくて、とてもきれいな仏様でしたわ」
彼女は指を当てて涙をすすり、そこで足を止めた。商店街の途中の四つ角に来ていた。真っ直ぐ行けば駅だが、彼女はどちらかに曲がるはずらしい。
「お葬式で、出棺のさい――」
急に、和栗の唇からやや大きな声が出た。
「最後のお別れをなさいましたか」
相手は一瞬うるんだ目を見張るようにして、それからゆっくり頷いた。
「ええ。お棺に私の作った小さなお人形を入れさせてもらいましたのよ。あの時が、一番辛いですわねえ……」
彼女の目に涙が盛りあがるのを見守りながら、しかし和栗は自分が奇妙な錯覚を起こしていたことに気がついた。多恵子は二十一日に死亡し、二十二日の夕方火葬に付された。一方奈津実は少なくとも二十三日朝までは確実に生きていたのだ。多恵子の棺に彼女以外の女が納められていたわけはない……。
だが、山口夫人と別れてライトバンの駐めてある方へ戻りながら、和栗はむしろ自分の錯覚に触発されたみたいに、多恵子の死の直後に奈津実が姿を消したことの意味を考え続けていた。

七章　二つの棺

1

十月二十五日、小暮究が警視庁記者クラブの日本新報の部屋へ姿を見せたのは、午後五時を少し廻ったころだった。十月も末になると、すっかり日暮れが早くなって、スモッグに汚れたガラス窓の外は、すでに昏い夕闇に包まれていた。対岸の皇居の木立が、電光にうす赤く染まった空の下で、黒々と重量感を増している。

うすい壁で隣りと仕切られた細長い部屋では、奥でキャップの梶原が一人、新聞の上に頬杖をつき、一方の手では鉛筆をつまんでデスクをコツコツ叩いていたが、小暮を認めるなり、すっと上体を起こした。髯が濃くていつもうす黒く見える顔に、安堵と緊張の混じりあったような、複雑な影がかすめた。

小暮を目で迎えながら、彼はチェリーの袋を手にとって、身体の向きを変えた。

小暮は黙って、前の椅子に腰をおろした。

「ご苦労さん。――どうだった、E市の模様は？」

梶原は煙草に火をつけてから、地声のいがらっぽい声を発した。

「ええ……農作物被害は、予想以上に広範囲でしたね。共立電化の工場周辺は、主に桑畑と菜園、それに梅林もあちこちに散在しているんですが、それが随所で長距離にわたって、真っ黒な帯状に立ち枯れているんです。その状態が、ちょうど工場排液が浸透した地下水の流れと重なっているのだそうで、農民たちは〝死の帯〟と呼んで気味悪がっていましたね……」

話しだすと、彼の瞼には、つい二時間あまり前まで目のあたりに見ていた利根川沿いの風景が、ありありと甦ってきた。

それはほとんど陰惨な景色だった。鈍い銀色に光る無数のパイプを、複雑にからみつかせた数棟の化学工場。タンクと煙突の、灰色の林。どの煙突からも、絶えず粘っこい白煙が湧き立ち、どんよりとした雨雲のたちこめ

た空にも、なかなか溶けこもうとはしなかった。

工場群をとり囲んだ田畑は、いたる所で黒い死の帯に蝕まれ、それは農地の先で利根川の堤防の下をくぐっているらしく、その辺りの川底からは、醤油色の水が泡を噴きながら湧きあがっていた。

対岸の丘の上にのぼって眺めてみても、立ち枯れの帯は、まるで腐った血液の流れる毛細血管のように、幾筋にもひろがっていた。一帯に漂う独特の臭気が、足許から這いあがってきた。前橋からその辺りにかけては、利根川の水量が乏しい区域で、石のごろごろした河川敷が露出し、細い流れの先には上州の山並みが墨絵のようにかすんで、わずかに紅葉の色点を滲ませていた……。

あの無気味な荒廃が、共立電化の排液一つに起因したものにせよ、いくつかの工場の複合公害であるにせよ、いずれにしても、ある害毒が確実に大地を侵し、人間生活を腐蝕しはじめていることだけは、紛れもない事実なのだ。

いや、あの地に限らず、あるいは工場周辺地だけに限らず、日本中の至るところで、想像もつかないほどの多種多様な毒物がばら撒かれている時代なのではあるまいか。それらは徐々に自然と人体に滲透し、その毒物の複合体は、いつか何かを引き金にして、爆発的な被害を現出させるのではないか。しかもその時には、複雑な毒性の経路を追跡し、真因を究明することは、すでに人知の及ばぬ難事になってしまっているのではないだろうか……。

日ごろはとかく観念的にしか把握されにくい公害の問題性を、小暮は一つの現場を目のあたりにして、むしろ素朴な恐怖で実感したような思いだった。

「人体被害の方も、急激というほどではありませんが、皮膚炎や吐き気などを訴える患者が増え続けているようですね」

梶原キャップのどこか性急な眼差しに促されて、小暮は報告を続けた。

「P大の分析結果が住民側に有利に展開しただけに、被害者連絡協議会は強腰になっていますよ。これはおそらく訴訟にまでもつれこんで、全国的な注目を浴びるんじゃないでしょうか」

「うむ。それで――」

梶原は緊張した時の癖で、顔をしかめてくしゃみの後のような小皺をつくりながら、手をのばして窓際のテレビのスイッチをひねった。電話で社へ原稿を送る時や、他社に聞かれたくない密談のさいなどに、テレビのボリ

ュームをあげるのが、記者クラブの常套手段である。
「それで、助教授の一件は、どんなふうなのだ？」
「ええ……」
小暮が昨日からE市へ出張した直接の目的は、群馬医大の各務徹夫助教授と、共立電化総務部次長の妻桂木麻子との愛人関係の有無を突きとめることと、ひいてはその関係には、公害紛争の形勢を左右しようとする桂木謙介の意図が働いていはしないか、逆に、二人の関係が各務の提出した地下水分析の報告に微妙な影響を及ぼしていはしないかといった内部事情を探り出すためだった。
遊軍の都築記者に、共立電化総務部次長の住居が石神井公園にあることを教えられた小暮は、その家の門前に張り込んで、桂木麻子の写真を撮った。それを久藤恭太に見せたところ、彼はその女性が畑山事件の朝、善福寺の坂道で見かけた女と似ていることを認めた。が、断定するだけの自信はなかった。
しかしこの時点で、小暮は、各務助教授の愛人はやはり桂木麻子ではないかとの判断に傾いた。
一方西荻窪署の捜査本部では、事件の朝、恭太と出遇った問題の女性を、有力な目撃者と見て捜し求めている。桂木麻子の存在を本部に通報すべきか。それとも、情報を握ったまま、二人の関係と公害紛争との絡みあいを独自に追及するか？
小暮はクラブに戻って、キャップらに議った。
キャップは社の部長にも電話で相談した。
その結果、今しばらく伏せて、捜査の進展を静観し、一方で隠密の追跡を試みるという方針に決まった。各務と麻子との関係は、まだ疑惑の段階なのだ。疑わしいというだけで個人の名を公表することは、人権問題にも関わる——これは、いわば建て前の理由である。実のところ、部長にしても、当事者の男女の特異な立場に、ジャーナリスティックな関心を惹かれたのにちがいない。
そこで、再び小暮のひそかな調査が開始された。
まず各務と麻子の略歴を手に入れた。各務の方は、区役所と、前橋支局を通じて群馬医大の人事課に問い合わせ、麻子についても区役所で調べた結果、二人の出生地がいずれも「東京都港区芝西久保巴町」であることが判明した。二人はその住所に、各務が十七、八歳、麻子が十三、四歳まで居住していたようだ。つまり、二人は幼馴染みであった可能性が想像される。
いったんは離れ離れになり、それぞれに家庭を持った二人は、近年どこかでめぐり逢い、急速に愛情を深めた

のではあるまいか。各務は妻を失くして現在独身であり、桂木夫婦に子供がないことも、二人を接近させる素地となったにちがいない。

各務と麻子の出生地が同じ町であった事実は、愛人関係を裏付ける一つの決め手とも思われた。

その「切り札」を握って、小暮はまず大手町の共立電化本社を訪れ、桂木謙介に会見を求めた。

群馬工場の紛争に対する見解が聞きたい、というのが表向きの口実である。

桂木の、端整な秀才タイプの印象も、彼が高飛車な姿勢で披瀝した意見も、ほぼ小暮の予想どおりだった。彼は最初、群馬医大の複合公害説すら渋々認めるといった口吻だったが、しだいに鋭利な眼差しに憎悪を募らせて、ともかく今回の紛争は住民側の一方的な言い掛りから生じたもので、こちらとしてもあくまで受けて立つつもりだと、冷徹な口調で言い切った。

短い会見の最後に、小暮はさりげなく、桂木の妻と各務助教授が幼馴染みらしいと匂わせて、反応を窺った。

これに対する桂木の態度だけは、小暮には意外に感じられた。

桂木は一瞬、非常な驚きのために硬直したような表情で小暮を見返したのだ。そのまましばらく、彼はほとんど呆然と小暮の顔に目を当てていたが、ようやく、

「そんな話は、聞いたことがありませんな。第一、各務さんと家内が顔を合わす機会などはないのだから、たとえ二十年昔に近所に住んでいたとしても、二人とも気づくはずもないでしょう」

まだ自分の内部の思考に心を引きずられている虚ろな面持ちで、桂木はゆっくりと呟いた……。

あの何十秒かの彼の反応は、新聞記者に嗅ぎつけられた当惑というより、事実そのものに対する驚愕を露呈していたのではないかと、小暮には思われてならない。

すると桂木謙介は、妻の密通に気づいていなかったのか。麻子と各務の結びつきに、桂木の政略が反映していると見るのは、深読みにすぎるのではあるまいか——？

小暮が群馬県E市へ出向いたのは、その翌日だった。

「各務助教授には昨日の午後、群馬医大の研究室を訪ねて会ってきました。彼には単刀直入に切りこんでみたんですが……」

被害者住民の間には、群馬医大は共立電化と癒着している、各務は会社から金を受け取っているのではないかとの噂も流れているが、どうか？

各務は細面の温和な顔をさすがにきびしく引き締め、やや蒼ざめながら、しかし激さない口調でキッパリと否定した。自分の報告は、紛争の成り行きを度外視して、純粋に学問的な目で対象を検べた結果にすぎないと、自分自身噛みしめるように答えた。

桂木次長から金が出ているのではないかという、暗に麻子の介在を匂わせた質問に対しては、各務は短いことばで、静かに打ち消しただけだった。

「しかし、ぼくの印象としては、やっぱり彼は麻子と何かあるって気がするんですね。比較的落ち着いて見えたのは、いずれあの種の質問を受けるかもしれないと、心の備えを持っていたからではないのか。むしろ、一分の隙もない切れ者という感じの桂木が見せた反応の方が、正直なものだったんじゃないか……」

「すると、つまり、各務と麻子は密通しているが、それと公害紛争とは一応無関係ということか」

「ええ……」

「各務の評判はどんなふうだ？」

「決して悪くありませんね。大学内でも真面目で温厚な助教授という定評だし、連絡協議会の幹部でさえ、彼をあからさまに非難する人はいないくらいですから」

「うむ……」

梶原はいつの間にか灰の長くなった煙草をアルミの灰皿の中で潰し、次にはちょっと改まった目を小暮に向けた。

「実は今日の昼すぎ、一課の平井さんから発表があってね。林奈津実が一昨日の午後以来行方不明になっているというのだ」

「あの、畑山の妾だった――？」

「うむ。しかもその失踪の背景なんだが……」

梶原は、二十三日の朝奈津実の部屋にかかってきた女の電話について、小暮に話した。三十歳前後の人妻ふうで、「桂」か「桂田」といった苗字。グレーのルーチェを運転し、練馬区か杉並区に居住している可能性の女が重要参考人として手配された……。

「それは……十中八九、桂木麻子でしょう」

背後のテレビが流している動画のセリフの下をくぐるような低い声で、小暮は強く呟いた。

「すべての条件が符合している」

「うむ」と梶原も重く頷いて、

「西荻窪署本部では、その女がモーテル事件にも絡んでいた疑いありとして、報道関係者にも協力を求めて捜索

する方針に決まったらしい」

「……」

「それで、午後から君の帰りを待っていたんだよ」

問いかける上目使いで、彼は小暮を見据えた。

小暮は無意識に唇をかんでいたが、

「昼すぎなら、発表の内容はいっせいに夕刊にのるわけですね」

「もう出ているよ。ベタだがね」

梶原は肱の下に敷いていた日本新報の夕刊の早刷りをさし出した。

小暮は一段見出しの短い記事に素早く目を通してから、腕時計をのぞいた。五時二十分。

「石神井のあたりに夕刊が配達されるのは、もう少し後だろうが、テレビを見るかもしれないから、いずれにせよ早晩桂木麻子は警察の手配に気づく。それから、彼女はどう動くと思う？」

と梶原が訊いた。

「逃げるか、逃げるだけならまだしも……」

小暮はなぜか、唐突に久藤恭太を思い浮かべた。次にはまるで自分のことばに刺激されたかのように、にわかに強い不安が湧きあがってきた。先日関町の稲荷のベンチで話をした時、彼は身辺に得体の知れぬ人影がつきまとっていると訴えていたのだ。——束の間、さまざまな群像が彼の脳裡でもつれあい、かすめてすぎた。

残ったものは、やはり、麻子と恭太である。

桂木麻子がどのような形で中谷殺害と林奈津実の失踪に関与していたとしても、見方によっては、彼女はまだどこにも確たる証拠は残していないともいえる。おそらく捜査本部でも、また小暮たちにしても、一連の事件と彼女との関連を、強く疑っている段階なのだ。少なくとも、彼女自身そう思いこんでいる可能性は十分に想像される。

その彼女を、決定的に一連の事件と結びつけるものがあるとすれば、それは金融業者殺しの朝、彼女があの蕪蔵寺横の坂道を通りかかったという「事実」であろう。その事実が明らかにされた暁には、もはや彼女はいっさいに無関係とシラを切り通すことはできないはずだ。いや、厳密にはまだ「事実」かどうかもわからない。それを判定できるのは、今のところ恭太少年一人ではあるまいか。恭太を間近で彼女に会わせれば、彼は相手があの朝の女性かどうか、たぶん、はっきりと答えられるだろう。

いや、これも実際には、恭太は断言できないかもしれないのだ。しかし、あの朝、一度は確かに恭太と顔を見合わせ、微笑すら交わしたという女性は、少年が自分の顔をしっかりと記憶していると思いこんでいるかもわからない。そして、多くの場合、悲劇や犯罪は、その種の「思いこみ」から発生するのだ。

黒っぽいレインコートを着た見知らぬ男に尾けられたみたいだと、精一杯平静な口調で話していた恭太の声が、小暮の耳底に甦った。あのあとクラブへ戻ってから、小暮は〝檀家〟の刑事に、「恭太の身辺をもっと警戒すべきではないか」と、警告しておいたのだが。

「麻子一人なら別だが……背後に男がいるとなると、土壇場で何か狂暴な行動に走らないとも限らない……」

断片的に呟いている小暮を、梶原は瞬きもせず見守っていたが、彼の胸中はおよそ読んでいるのだ。

やがて梶原は、大きく息を吸いこんでから、

「桂木麻子の所在を、そろそろ本部に通報すべきだと、君も思うかね」

「そうですね。もうこれ以上は……」

キャップの目を見返しながら答えた時、深い無念の思いが小暮の胸を貫いた。畑山事件発生以来二週間余りの隠密調査も結局はこれという実を結ばなかったわけだ…。

だが、恭太の顔がまた瞼をかすめ、小暮は反射的に立ちあがった。

それを見ると、梶原も自分で納得したように一度頷いて、電話機へ手をのばした。麻子の存在を捜査側に洩らすまえに、本社の部長に一応意見を求めるつもりであろう。この情報を伏せたことには、部長の意志も加わっていたのだ。

部長の了承を得たうえで、彼はおそらく「桂木麻子」の名をたった今つかんだような顔で、彼と親しい一課長にそれを耳打ちするにちがいない。代わりに、その後の進展は、記者会見の以前にわが社だけに洩らす約束をとりつける。新聞社が捜査側に情報を提供する場合、その見返りを要求しない例など、絶対にないのだから……。

そんな成り行きに意識を走らせながら、小暮は素早い動作で廊下へすべり出た。先日恭太の話を聞いて以来、昨日E市へ出張する前まで、彼は一日一度は必ず関町へ足を運び、それとなく恭太の身辺を見守っていた。私服刑事が時折り彼の家を訪ねている気配も読み取れた。

だが——敵がその気になれば、この種の警戒は隙だらけともいえるのだ。

恭太をいとおしむような思いが、彼を駆りたてていた。

2

「熱いお湯を入れたら、すぐ柔らかくなるからね」

六畳の布団の中から、母の声が聞こえている。

「そしたらザルにあけて、もったいないことしないように食べてしまいなさいよ」

彼女は炊飯器の底にこびりついている飯粒の始末を指図しているのだ。

「朝のおつゆが残っているでしょう。それをガスにかけて。それと冷蔵庫の中に……」

「いいよ。自分でちゃんとやるから」

例によって、くどくど指示されればされるほど、恭太は思わず乱暴な声で遮った。

「冷蔵庫の中に、さっき、買ってきたフライとキンピラ……」

母親の方も、恭太の態度などおかまいなしに言い続ける。

「見ればわかるさ」

それでいて、彼の耳は無意識のうちに母の指示を聞きとり、そのとおりの手順で自分一人の夕食を調えているのだった。

今日、三時半ごろ学校から帰ってくると、どうしてかいつもは鍵がかかっている表の戸が開いて、恭太より帰宅の遅いはずの母親が暗い部屋にすわっていた。

昨夜から風邪気味で寒気がしたのを、今朝は無理して仕事に出たが、午後からは熱も出てきたみたいなので、早退けさせてもらってきたのだという。彼女の仕事は新宿にあるビルの掃除や雑役だから、加減が悪い時にはずいぶんとつらいにちがいない。

恭太が帰ってくると、彼女は安心した様子で、自分で床をのべて横になった。少し赤らんで見える額に掌を当ててみようかと恭太は思ったが、照れくさくなってやめた。

どうにか食事の支度ができたので、恭太はお盆にのせて、テーブルへ運んだ。六畳と三畳の二間きりの家だから、少し大きめのテーブルの前にすわれば、母親のすぐ枕元になった。

熱い味噌汁で胃の腑が温まると恭太は生き返ったような気持ちになった。今日はおやつが抜きだったからだ。

「お母さんは食べないの」

彼は、病気の母親に少し無愛想すぎたという反省が湧いてきた。

「さっき牛乳を飲んだからね」と彼女はやはりあまり元気のない声で答えた。

母親が眠る気配もなく、瞼に細かい横皺の寄った目を開けて見守っているので、恭太はなんとなく気詰まりになって、テレビをひねった。

恭太がヨチヨチ歩きのころ買ったという黒白テレビは、スイッチを入れてから映像が現われるまで、呆れるほど暇がかかる。

六時からの変身漫画が始まっていた。

今のは再放送だが、これが新番組だったころには、毎週楽しみにしていたものだ。それが、今ではどこかしらもの足りない。

それでも、見ていると結構面白い。

科学者に化けた怪獣が正体をあらわし、オートバイで駆けつけた青年がこれも変身して、砂丘の上でわたりあうシーンになると、恭太の意識はすっかり画面の虜になってしまっていた。

「ほら、ご飯が膝にこぼれてるじゃないの」

「うん……」

「あ、お醤油が倒れる、ほら、袖が――」

次にはけたたましい声を聞いて、ようやく恭太が手許に注意を戻した途端、セーターの袖口にひっかかって傾いていた醤油瓶がカタリと倒れた。醤油がテーブルを這って、畳にしたたり落ちた。

「ほら、いってるのに！　だからテレビをつけてご飯を食べるのはいやなのよ」

母親は急に病人らしくもないかん高い声をあげた。

恭太が布巾を持って、流しとテーブルの間を往復している間も、彼女は同じ小言をいくども繰り返していた。だいたい彼女は、恭太の記憶にある限りの昔から、テレビを見ながら食事することをひどく嫌った。どんなに心をこめて拵えた料理でも、上の空で食べるのではまったく甲斐がないというのだ。そしてその抗議すら耳に入らずに画面に気をとられていると、ピシリとスイッチを切られてしまったものだ。

お父さんがいたら、ぼくに味方してくれるのにと、恭太はそんな時しばしば思う。料理屋の板前だった父は、午後二時ごろから勤めに出てしまい、いっしょに夕飯を食べることなどめったになかったが、店が休みの日曜日だけは、並んで漫画を見ながら食事していても、母は黙

認していたのだから。

彼女がいつまでもブツブツ言い続け、恭太がテーブルの始末に立ったりすわったりしている間に、途中から見た変身漫画は「番組のお知らせ」に変わってしまっていた。

それで恭太はひどく面白くない気分になり、残りのご飯を中腰で流しこむと、乱暴に食器を重ねて流しへ運んだ。

水道をいっぱいに出して洗った。

今日は金曜日で、ゴミのポリバケツを路地の角まで出しておく日である。すると夜中にバッカー車というのが廻ってきて、ゴミを持っていってくれるのだ。たいていは母がバケツを運び出し、たまには恭太が頼まれることもあるが、今日はどうしてもやらなければならないだろう。いわれる前にやるのは癪だが、家の外に出る口実にはなるというものだ。この間西荻窪署の刑事という人が来て、恭太の周りに何か変わった様子でもあれば、すぐ届けるようになどと言って母親に名刺を渡していって以来、彼女は恭太が暗くなってから外へ出ることをやかましく咎めるようになった。富士見池の出来事のすぐあとのころもそうだったが、その後とくに何ということも起こらなかったので、彼女はちょっと安心しかけていた矢先だったのに。

恭太は今自分が食べ残した野菜の芯や、流しのザルに溜まっていたゴミをポリ袋に押しこみ、土間のバケツに放りこんだ。バケツをさげて表の戸を開けた。母は眠りかけた目でその方を見ていたが、何も言わなかった。

まだ七時まえだが、外は真っ暗で、路地の人通りは途絶えていた。高い空に星が冷たそうな光をたたえて散らばっている。

母子二人の家庭でも、四日分のゴミを入れたバケツは相当な重さになっている。恭太はわざと無精らしく、バケツの底で地面をこすりながら、路地の出口まで運んでいった。ほの暗い街灯の点った電柱の下には、奥にある何軒かの家庭のポリバケツが、もう集まっていた。

バケツを放してから、恭太は一度深呼吸するような恰好で、空を見あげた。

と、ふいに誰かが近づく気配を感じ、彼は驚いて顔を動かした。

電柱の後ろ側に当たる板塀の前に、一人の男が立っていた。黒っぽい背広を着たかなり背の高い男で、肩幅も広く、がっしりした体格に見える。キリッとした感じの

顔に眼鏡をかけている。この男は今どこから来たのだろうか。人の気配は感じたものの、足音を聞いた憶えはない。すると今までその辺りの暗がりの中に立っていて、急に街灯の下に出てきたわけだろうか。

そんなことを思った途端、恭太の胸を大きな動悸の波が横切った。一週間ほど前、近所の女の子に恭太の家を尋ねたり、野球の帰りに後をつけてきた黒いレインコートの男を思い出した。だが、あれっきりその男は見かけなかったから、やっぱり何かの偶然だったのだと、忘れかけていたのだが。それに、目の前に現われた男が、あの時の男と同じかどうか、判断がつかない……。

「久藤恭太君だね」

男はちょっと啖がからんだような声で問いかけ、同時に背広のポケットに手を入れて、黒い手帳らしいものをチラリと示した。

恭太は頷きながら、急に胸が軽くなるのを感じた。「はい」ともう一度はっきり答えた。やっぱり警察の人だったのだ。善福寺の事件の直後ひところは、やたらに刑事や新聞記者がまわりをウロウロするみたいで、うっとうしい気がしたものだが、今夜ほど相手が示した警察手帳に頼もしさを覚えたことはなかった。

しかし、相手はまだ一度も恭太の家に来たことのない刑事のようだった。

「実は十月七日に善福寺で起きた金融業者殺しの事件についてなんだがね」

刑事はくわしい言い方をして、また一歩恭太に近づいて、上から見おろした。眼鏡が光って、男の顔立ちを一段と厳しく見せた。

「あの事件の主犯にちがいないと考えられる男が、さっき死体となって発見されたんだよ」

「え？」

恭太は思わず息をつめた。事件の朝、谷川の土手から自分を助けあげてくれた男の顔が、咄嗟に脳裡をかすめた。

「死体が……？」

「うむ。しかし、念のため、君に確かめてもらいたいのだ。つまり、その男が、君が善福寺公園の上の坂で出遇った人物と同じなら、それで犯人の足取りがはっきりするわけだからね。——その男の顔を見てくれるね」

彼は、これまで恭太が接した和栗係長らとはどこかがう、噛んで含めるような話し方をした。

「その死体は、どこにあるんですか」

「うむ。ここからわりに近くだよ。すぐすむさ」
「じゃあ、お母さんにそういってきます」
刑事は一瞬何か言いそうな表情を見せたが、結局黙っていた。恭太は走って戻った。
戸を開けて、これから警察に行くと、少しぶっきらぼうに告げると、ウトウトしかけていた母親が、びっくりしたふうに首をあげた。
「なに、また容疑者の写真を見にいくの」
「今度は写真じゃないんだ。刑事さんが迎えに来ているから」
母はなおも何か訊こうとしたらしいが、恭太はそのまま戸を閉めてしまった。
今度は写真じゃないんだ……と喉の奥で繰り返し、すると緊張でキュッと胸が引きしまるのを覚えた。もしかしたら——あの男が、白い死に顔を見せて、叢に横たわっているのかもしれない……。
刑事は、電柱から離れた、闇の濃い場所に立って待っていた。
恭太が近づくと、黙って歩きだした。
路地を出て、チラホラ人の歩いている舗装道路の坂道を少しのぼったところに、車が駐まっていた。恭太はとくに注意して見もしなかったので、刑事がつとその車の助手席のドアに手をかけたときには、ひどく意外な気がした。歩いていくものとばかり思っていたのだ。
「すぐそこだけれど、急ぐからね」
軽く肩を押されて、恭太は助手席にすわった。
刑事は小走りの動作で運転席へ入り、車をスタートさせた。
夜の早い住宅街の静かな道路を、車はかなりのスピードで走り抜けた。
車に乗ってから、恭太は隣りで運転している相当偉そうな刑事の全身に、何か切迫した雰囲気が漲っていることに気がついた。それは、タイアを軋ませてカーブを曲がる時のハンドルさばきや、しばしば聞こえる荒い息づかいなどから伝わってくるのだ。
恭太がそっと刑事の横顔に視線を当てると、それを感じたように、彼はうすく引きしまった唇を動かした。
「君は、あの事件が起きた朝、蕪蔵寺の横の坂道で出遇った男の顔を、はっきりと憶えているのだろう?」
話しかける声だけは、相変わらずゆっくりと、念を押す口調だった。
はっきり憶えていると、恭太はこれまで口に出して答

えたことは一度もなかった。でもそれは、主に恭太の聞き込みに当たった和栗係長に、なんとなく反撥を覚えてしまったせいもあったのだ。

「はい」と恭太は知らぬ間に返事していた。相手の緊迫した気配に圧倒された感じだった。それに、犯人はもう死体になっているという話だから、それなら今さらどう答えたところで、まもなく判明するのだ。金貸しを殺して金庫の金を奪った犯人が、あの朝お父さんの代わりに自分を助けてくれた男かどうか。

「顔を見れば、わかるね」

「わかると思います」

しばらく沈黙が流れ、車は青梅街道に出て、右折のサインを出した。

このあたりは練馬区もいよいよ西の外れで、まもなく保谷市、田無市へと入っていくことを、サイクリングの好きな恭太は知っている。青梅街道は、ひっきりなしの車が、どうにか渋滞せずに流れていた。

「君は、あのとき、もうひとり女の人を見かけたそうだね」

西へ向かう車の列に加わると、刑事は、質問を再開した。混んだ表通りへ出ても、焦りぎみな運転は変わらなかった。

「はい」

「その女のことも、よく憶えているかね」

「はい」

「どんな人だった？」

「色の白い、すらっとした人で、青っぽい服を着て……」

「うむ。顔はどんなだった？」

「どんなって、よくいえないけど……やさしそうな人だったと思います」

「もう一度会えば、わかるか」

恭太は今度はすぐには答えなかった。この間、石神井公園の駅前で、そっくりの人を見かけた。その後、小暮記者に彼女を写してきたらしい写真を見せられた時、その女性が、蕪蔵寺の坂の途中で行き遇った相手と同じだと、言い切る自信がなかった。

でも、小暮が持ってきた写真は、斜め横から撮ったものだったし、画面全体が少しうす暗かった。

同じようにうす暗くても、あの湿った朝の空気を通して、一度だけなんとはなしに微笑を交わした相手の、ほっそりとした白い笑顔の方が、まだずっと恭太の瞼に鮮やかなのだ。

「どうかね。その女の顔をまた見たら、わかるか」
低い力のこもった声で重ねて訊かれると、
「近くで本当の顔を見たら、わかると思います」
恭太は心を決めて答えた。本当の、といったのは、写真でない生きている人の顔、という意味だったが、通じただろうかと、恭太は刑事の方を窺った。その時、何か重苦しい影が、ゆっくりとその横顔をかすめてすぎたように、恭太には感じられた。
それから刑事は、一度長い息を吐いた。
青梅街道を走っていたのは、ごく短い間で、車は左に曲がり、三叉路へ出た。道路の先に、私立の学校の高い煉瓦塀や、神社らしい黒い木立が姿を見せている。
三叉路を左へ渡った。五日市街道へ入ったと、恭太にはわかった。この辺もサイクリングの縄張りなのだ。
道幅が狭まり、道路の両側には、商店や住宅より、畑や樹木が多くなっている。前後の車の間隔もいつのまにかひらいていた。
真っ直ぐな道路を、恭太をのせた車は、いよいよスピードをあげて疾走した。
右手に玉川上水が続く。それに沿った木々の梢が、黒黒と遠い山並みのようなシルエットで流れすぎていく。
左手にも畑の区域が広くなった。それで近くの灯火はごく疎らになっている。
玉川上水を両側から縁取りしている桜や雑木の帯は、走るにつれて厚みを増して、一見小さな林が続いているみたいだが、その下では、上水の水が流れているのだ。恭太はわりに最近友だちと来た時、賭けをしていっしょにのぞいてみたら、繁みの奥に埋もれたように落ちこんだ土手の底に、枯れ葉をのせた水がゆっくりと動いているのを見つけた……。
その暗緑色に濁った水面をふと思い浮かべた時、はじめて、かすかな不安が恭太の胸に忍びこんだ。すぐ近くだと聞いたのに、どこまで走るのだろうか。五日市街道の入口付近で武蔵野市が終わり、次は小金井市だっただろうか……？
恭太はいくどめか、傍らの男に視線を注いだ。彼はもう、一言も喋らなくなっていた。車内に流れこむ光がほとんどないので、横顔の表情もわからない。ただ、うすく尖った鼻と引き結んだ唇の線が、なぜか恭太の気持ちのいっさいをはねつけているみたいに感じられた。
やがて上水をはさんで道路が左右に分かれたので、道幅はいっそう狭くなった。暗い道は、まだ真っ直ぐにの

びている。

突然車が左へ寄り、急ブレーキを効かせて停止した。恭太は前にのめって、ダッシュボードに手をついた。

刑事はエンジンを切り、ライトを消した。それがいかにも気ぜわしい手つきだった。次に素早く前後を振り返りドアをうすく開けた。恭太の顔は見ずに、

「おりて！」と強く囁いた。その声はすこしかすれていた。

恭太はちょっと手間どったが、どうにか自分でドアを開けて出た。

道路の左手は、広々とした野菜畑だった。ずっと先で家々の明かりが間隔を置いて光っている。その方から冷えこんだ夜風が渡ってきた。

右手には金網がはりめぐらされ、向こう側は深い木立が繁っている。まだ上水が続いているのだ。

ほぼ規則的に車が走り抜けるほかは、あたりはうら寂しい静けさに包まれていた。

恭太は刑事について、狭い道路を金網の方へ渡った。

「現場は、そこなんだよ」

木立の先を指さすので、恭太は黙って頷いた。でも、死体が発見されたというのに、こんなに静かなものなのかと、不思議に感じた。パトカーも見当たらない。

「もう現場検証は終わったようだ」と、刑事が恭太の心を読んだふうに呟いた。

「しかし、死体は君に見てもらうために、残してあるんだよ」

喋りながら、彼の手はいつか恭太の右腕をしっかりと握っていた。後ろへ廻り、もう一方の手で背中を押すようにして、金網に沿った土の上を歩かせた。

まもなく小さな石橋に出て、その手前で金網が一部途切れていた。

二人は金網の隙間から、木立の内部へ入った。

上水を挟んで両側から雑木がトンネルのようにかぶさっている。それで内側はほとんど真っ暗だった。足許は灌木と雑草の繁みで、湿った枯れ葉が散り敷いてすべりやすい。そしてその奥の深みに、上水の水が淀みがちに流れているはずなのだが、今は暗くて見えなかった。

死体はどこに置いてあるのだろうか？——だが、木立の内部へ一歩踏みこんだ時から、恭太はある種の予感に身を縛られていた。でも、もう引き返せない。現場が本当にどこなのか、尋ねようにも、喉が強張って声が出なかった。それを尋ねれば、この刑事に何かのきっかけを

与えることが、本能的に、わかっていたからかもしれない。

男の手が恭太のセーターの腕をしめつけ、なお十メートルほど歩かせた。

ついに彼の足が止まった。腕を引きつけられて、恭太は思わず反射的に身体を離そうとし、相手と向かいあった。

外の道路を、時折り車が走りすぎた。ライトが木々の葉を白っぽく照らし出し、眼前の男の頭と肩を、巨大な怪物のように浮きあがらせた。恭太は全身でふるえていた。

男の両手が恭太の首にかかった。車の中で聞いた荒い息づかいが、いよいよ切迫して耳に響いた。恭太は男の手首を握り、ふりほどこうとした。石のように硬い手首だ。こいつは蕪蔵寺の横で会った男じゃない。でもこいつこそ、本当の犯人なんだ。一番凶悪なやつなんだ。畑山を殺して金を盗み、富士見池で恭太を襲った仲間も消してしまった。そして今度こそ、本当にぼくを殺る気でいる！

恭太は足をばたつかせて、男の腹を蹴ろうとした。だが、そう考えただけだった。恭太の喉はたちまち絞めあげられ、奇妙な音に似た呻きが洩れた。息がつまり、顔中にどっと血がのぼった。何も見えなくなった。

それからどれほどたったのか——本当は一、二秒だったのかもしれない——ふいに喉が緩み、大きく喘いだ直後、いきなり胸を突きとばされた。恭太は斜めに倒れながら、上水の土手を転がり落ちた。

身体がすべっていく。夢中で草をつかんだようだ。が、すぐにはなれかけた。上水の底へ向かって落ちこんでいく身体の重みは、とてもそんなことで支えようもない。頬が土をこすり、掌の中からつかんだ草が抜けていく。

この時、その右手首が強く握られた。続いて左の二の腕もしっかりとつかまれ、咄嗟に足場をつくった恭太は、両手を引かれてグッと踏み留まった。誰かが土手の上で腹這いになって、恭太をつかまえてくれている。

胸を土手に密着させ、二度ほど途中に足をかけて、恭太はようやく這いあがった。

ふらつく両足をふんばって、枯れ葉の上に立った。

「大丈夫か？」とせきこんだ声が訊いた。小幕記者の声だった。

恭太はなぜか急に唇が歪んでくるのを覚えながら、精



一杯で頷いだ。

小暮はさっき恭太たちが入った金網の隙間の方を睨んでいた。

「畜生、逃げられたな」と呟いた。だがその口調は、なぜか恭太には、さほど地団駄踏むようにも聞こえなかった。

小暮は、キャップと打合わせを終えて記者クラブを出たあと、一人で恭太の家へハイヤーを走らせたのだ。キャップが桂木麻子の所在を捜査一課長に通報し、同時に久藤恭太の身辺の警戒強化を促せば、その時点で即座にしかるべき処置がとられるだろう。だが、それまでの時間差——もっと正確にいえば、麻子の背後にいるかもしれぬ敵が、捜査の手がすでに麻子の直前までのびていることを報道で知り、それから現実の手配が麻子や恭太に届くまでのわずかな間隙が、小暮に直観的な危険を訴えたからだった。

警視庁クラブ詰めの記者は、常時自由にハイヤーを使うことが許されている。時にはハイヤーに社旗をつけて走るが、今夜は無論人目に立たぬことが肝要である。

ハイヤーが恭太の家の路地の角が見える地点まで来た時、少し手前の広い坂の途中から、車種に憶えのある乗用車が反対方向へ走り出すのを認めた。中に恭太がいることまで見届けたわけではないが、無関係な車とは思えなかった。といって警察ではなさそうだし、他社はもう恭太に関心を失っているはずだ。——小暮は自分の勘に賭けた。ハイヤーにその車の追跡をたのんだ。

先行車が青梅街道に入ると、密着した追尾は不可能だった。が、幸い間もなく五日市街道へ渡るのを確認できた。そのころまでには、小暮は先方の助手席に少年の小さな頭を発見していた。

九十キロのスピードで直進した先行車は、やがて路上に停まり、案の定、運転していた男と恭太らしい影が降りたった。

小暮は一つ手前の橋で停車をたのみ、前方の二人が消えた上水の木立へ走りこんだ。その後は手さぐりの接近だった。もつれあう人影を目撃し、何か叫んだ途端、男は一度振り向いたようだ。次の瞬間、彼は恭太を土手へ突き落として走り出していた……。

小暮は、男が逃げ去った方から、恭太の上へ視線を戻した。

「間にあって、よかった……」

肚の底から、声が洩れた。それから、少年の手首をま

だ懸命に握り続けていたのに気がついた。
左手首の強い圧迫の感覚が、ふいに恭太の中に、もう二週間以上前になる早朝の出来事をありありと甦らせた。うすい朝靄のわきたつ谷川に落ちかけていた自分を、たくましい掌で握りとめてくれた男の面影が、あれ以後のいつよりも鮮やかに、なつかしく恭太の眼前に浮かびあがった。
「あの人じゃなかったんです」
突然彼は奇妙に弾んだ声を出した。
「え？」
「犯人は、やっぱりあの人じゃなかったんだ……」

3

同じころ、和栗警部補は、部下の長谷川刑事の運転する署の中型車で、小田急線生田駅から南へ、暗い傾斜地の道路をのぼっていた。
川崎市多摩区に含まれるこの広い一帯は、登戸、百合丘などを中心に新興住宅地として近年めざましく発展している。だが、ちょうどその中間ぐらいに位置する生田の近辺は、やや開発が遅れた恰好で、目下は随所で宅地造成が進められている段階のようだ。今和栗たちが走っている道路の右手にも、山腹が大規模に切り崩されて、雛段の土留めが途中までできあがっている。左手はまだ自然林で残され、その先のずいぶん高いところに、これはやや古そうな団地の棟々が夜空に突き出して見えた。
造成中の区域を通りすぎた辺りで、長谷川が、通勤者ふうの数人の人影が佇んでいるバス停の手前で車を停めた。
「この高台の、裏側になるんですがね」
右手の藪になった斜面を指さした。
「車は入れないのかね」
「いや、行かれないことはありません。道はわるいですが」
和栗が少し考えていると、長谷川はギアを切り換えて、藪の間の石ころ道に車を乗り入れた。急勾配のジグザグ道で、ところどころに古びた石垣や、小屋みたいなものが建っている。
「えらく寂しいところだね」
「そうなんですよ。家主はこの辺一帯の地主なんですが、まだ値上がりすると睨んで、土地を手放す気はないらしい。——その家は、以前大きな屋敷があって、その離れ

だったそうですが、母屋が火事で焼けて、離れだけ残った。家主たちは別に新築して移ったが、離れはまださほど老朽しているわけでもないので、空けておくのも勿体ないということで、人に貸したのだそうです」

「安宅が借り手の斡旋をたのまれて、笹川雪江に世話したというわけか」

「ええ。家主――手塚という人ですが、彼と安宅とは、土地の売買を通して十年来の付き合いとかいうことでしたね」

安宅康信に女があるらしいと、同業者間の噂から最初に聞きこんできたのは、長谷川刑事だった。相手は三十五歳の未亡人笹川雪江で、二歳の娘と川崎市生田の借家で暮らしている。二人が知り合ったのは、約一年前、安宅がその借家を世話してやったのがきっかけらしいなどの事情も間もなく調べがついた。

だが、笹川雪江は、畑山、中谷殺害の両事件とは直接関係ないことが間もなく判明した。彼女は九月半ばから娘を連れて山口市の実家へ帰っており、事件当時もそこを動いていないことが確認されたからである。

それらの調査中、長谷川刑事は一度雪江の留守宅や家主を訪れている。

藪の間の石ころ道をのぼっていくと、やがて視界がひらけた。星明かりに鈍く照らされたススキの原がひろがり、先ほど見た造成地の雛段が、眼下に重なっている。螢光灯を点した小田急の電車が通過している線路の向こう側にも、小高い山の間にいくつかの新しい集落が灯火を光らせていた。

その家は、道からまだ高い竹林を背にしてひっそりと建っていた。暗い場所のうえ、外灯もついてないので、和栗は長谷川に教えられるまで気づかなかったほどである。

原っぱに車を駐めて、二人は家に歩み寄った。

灰色の瓦屋根の、ごく小ぢんまりした平屋で、雨戸が閉まっている。玄関の格子戸も堅く施錠され、内部から明かりも洩れていない。

長谷川が呼鈴を押したが、応答はなかった。

「やはりまだ山口から帰ってないみたいですね」と、彼が呟いた。三十すぎで背が高く、おとなしい感じだが、堅実な調べをやる刑事である。

「うむ」

和栗は無人らしい家を一わたり見廻してから、ゆっくりと歩いて道まで戻った。造成地とは反対側になる道の

下には、三軒ばかり、藁葺きや古い瓦屋根がならんでいた。
「家主の家は近いのかね」
家の裏手をまわって戻ってきた長谷川に、和栗は尋ねた。
「車で五、六分はかかりますね。百合丘の駅の手前ですから」
「行ってみようか」
今日ここへ来ることは、家主の手塚にも連絡しておらず、したがって笹川雪江がもう山口の実家からこちらへ戻っているかどうかも、確かめてなかったのだ。
二人は車に入った。
「笹川雪江ってのは、どんな女なんだろうか」
車がバス道路を下りはじめてから、和栗が訊いた。
「家主の話では、よく見れば整った顔立ちをしているが、あまり色気のあるタイプではないとかいうことです。交通事故で亡くなったご亭主は、自動車部品をつくる会社のサラリーマンだったそうですが、その前から雪江は洋裁の内職をやって地道に貯金を拵えていたらしく、死なれてたちまち食うに困るって感じでもなかった……」
「しっかりした女なんだな」
「そうらしいですね」
「安宅と関係があったとしても、金銭的な援助まで受けていたのだろうか」
「さあ。家主は、二人のことはくわしく知らないといってましたがね。だいたい安宅もそれほど懐ろが豊かだったかどうか」
「うむ」
和栗はそれで、安宅が税務署の差し押えを食っていた事実を、また頭に浮かべた。それにしても、長谷川のまた聞きとして伝えられたその女のイメージは、あの勤勉で客嗇そうにも感じられる安宅の相手として、ふさわしいようにも思われる。
家主手塚千吉の住居は、百合丘の新興住宅地にかかる手前の畑の中に孤立していた。赤瓦をのせた入母屋の二階家で、堅牢だがどこか垢抜けしない、田舎の金持ちの家といった趣きである。
八時すぎには、二人は、小田急線の線路を見おろすその家の広い応接室で手塚千吉と対座していた。
手塚は五十前後、細面の案外都会的な容貌だったが、喋ると三、四本の銀歯が光るのが、目ざわりな感じがする。

「笹川さんは、まだ実家から戻っておられませんよ」
手塚は刑事たちに観察的な視線を注ぎながら、和栗の質問に答えた。和栗は、すでに雪江の家を下見してきたことには触れずにおいた。
「九月の十日すぎでしたかね。ひと月ほど山口へ里帰りしてくると断わりに見えまして。なんかそちらで縁談が持ち上がっているような口ぶりでしたよ」
手塚は銀歯をのぞかせてちょっと笑った。雪江に関して上機嫌に喋っている様子では、留守中の家賃などもキチンと払って帰郷したものと思われる。
「縁談といえば、笹川さんを世話した安宅さんは、その後もたびたび通っていたらしいという噂ですが、何か笹川さんからそんな話を聞かれたことはありませんか」
和栗の方はニコリともせずに尋ねる。
「いえ、べつに」と手塚はやや神経質に目を細めて和栗を見返し、その視線を長谷川に移した。
「先日もそんな問合わせを受けたと思いますが、何ぶんあの家とは離れてますんでね。笹川さんとも、家賃を届けにきてくれる時だけ顔を合わす程度で、暮らしぶりまではわからないのですよ。——しかし、何かあの人か、それとも安宅さんにでも疑いがかかっているのですか」
「いや、参考までにうかがっているのです」と和栗はあっさり答え、
「すると、九月十日すぎに笹川さんが帰省して以後、あの家は閉めたままで全然使われていないわけですか」
「もちろんですよ。笹川さんは十月中には帰ってくるといってましたし、家財道具なんかもそのまま置いてあるんですからね」
「誰かが来て、かってに開けたようなこともないんですね」
手塚はまた上下の瞼を寄せて、今度は少し黙っていたが、
「そんなことは、できるはずがありませんよ」
不快そうな響きがからんでいた。
「あそこに電話は——？」
「ないです」
「鍵はどうなっていますか」
「入居のさい笹川さんに一つ渡したのと、彼女に断わったうえでわたしが一個保管していますが」
和栗はいっとき思案の面持ちを、大きな飾り皿の置いてある棚の方へ向けていた。やがて、
「あの家の中を、ちょっと見させてもらえませんか」

予想どおり、相手は眉をしかめた。
「家宅捜索ですか」
「いや、それほど重大なことではないのです。ただ、内部の様子をザッと見るだけでいいんだが」
「しかし、それは笹川さんに断わってからでないと…」
「ああ、その方は、山口県警を通じて、今夜中に了解をとる手はずになっています」
手塚は苦い顔つきのまま、卓上のシガレットケースに手をのばした。和栗は返事を促す視線をジッと相手に当てている。捜索令状を持たない以上、あまり強いことはいえないのだ。それでも彼の凝視は威力を発揮したらしく、手塚は二、三服吸った煙草を苛立たしげな手つきで灰皿に潰し、
「まあ、刑事さんが是非にといわれるなら」
呟くような声で答えた。
後部シートに手塚をのせて、車は線路沿いの道路を引き返した。そろそろラッシュをすぎるころで、造成地に沿ったバス道路は、一段と暗さを深めていた。
雪江の家の玄関前に立つと、和栗は懐中電灯で格子戸を照らし、
「開けてください」
鋭い口調で促した。あとは唇を引き結んだ厳しい表情で見守っている。
手塚は無言で、カーデガンのポケットから小さな鍵を取り出して、鍵穴にさしこんだ。鍵を外すと、滑りの悪そうな格子戸を、力をこめて開けた。
その瞬間に、和栗は自分の嗅覚に何かを期待していた。何か——具体的にいえば、ある特殊な腐臭が、小さな家にこもる空気の底に溶けこんでいはしないか——？
だが……玄関を開けただけでは、べつだん異臭は匂ってこなかった。日当たりのいい家なのか、ひと月以上も無人ということだが、黴臭さもさほど感じられない。
まず手塚が三和土へ入り、サンダルを脱いで上がり框にあがった。電灯をつけた。
小さな絨毯を置いた玄関は、一見きれいに掃除されていた。和栗の目は、注意深く床の上を這った。さすがに多少埃っぽい感じだが、目につくほどの足跡も、そして血痕らしいものも見当たらない。
和栗と長谷川が、続いて靴を脱いだ。
左手に三畳と六畳の日本間が続いている。その右奥に台所が見える。ごく狭いもので、水屋と呼んだ方がふさわしいかもしれない。もっともこの建物は、本来ここで

炊事するようには造られてないのであろう。

手塚が次々に電灯を点し、和栗は踏みこんだ。

二間続きの座敷も、きちんと片づいていた。箪笥、ベビー箪笥、ベビーベッド、カバーをかけたミシン……それらが壁に寄せて並んでいる。

腐臭も血の匂いも、やはり感じられなかった。代わりに、かすかに線香の匂いが残っているようだ。

和栗は台所へ入った。銅を張った流しは乾いている。ゴキブリが足許を走った。

茶箪笥をのぞきこむと、皿小鉢や子供用の食器の間に厚焼きの男物の湯呑みが伏せてある。和栗は傍らに立っている手塚を顧みた。彼は無表情に視線を外して、

「こんなところでいいでしょうか」

その口調は、刑事たちがさしたる収穫も得られなかったらしいのを小気味よく感じているふうでもあり、また、どこか安堵の響きもこもっていた。

「いや、まだです」

和栗は不機嫌に答えて、座敷へ戻った。

二つの部屋には、どちらも押入れがついている。

彼の手が、まず六畳の一間幅の押入れの襖にかけられた。まるで気合いをこめるように、サッと開けた。中は……幾組かの夜具の堆積。今度は多少湿気臭い。反対側にはボール箱が積まれ、衣類がキチンとたたんでしまってあった。女物と子供の服に混じって、比較的新品の男物の浴衣が一枚——。

続いて長谷川が三畳の片開きの襖を開けた。そこは、ちり紙、救急箱、紐類など雑多な物入れになっていた。どれもきれいに納まっているのは、雪江の性格を物語るようだ。

和栗が、かすかに溜息をついた。

「この家に、物置きはないのかな」

「そんなものあるわけないですよ。もともとここは離れだったんですから」

手塚がせきたてるような早口で答えた。

和栗はもう一度、ゆっくりと畳の上に目を配った。まだ天井裏や床下もある……。しかし、林奈津実の失踪以来まる二日半、もしこの家の内部に何かが隠されたとすれば、どこかにそれらしい痕跡が残っているはずだし、まだ日中は気温が上がるから、腐臭が匂ってくるはずとも思われるのだ。

彼の目は、最後に、六畳と三畳との境いの襖の溝に落ちているごく小さなものを発見して、はじめて淡い光を

帯びた。
　拾いあげると、やはり、三センチほどに折れた線香であった。
　この緑色の線香の折れ端は、部屋の空気の底にかすかに残っている匂いと符合する……。
「仏壇はどこにあるのかな」
「さあ」と長谷川が首を傾げ、二人は再びザッと見廻ったが、それらしいものは発見できなかった。雪江が夫を失くしたのは一年余り前と聞いたから、仏壇はなくても位牌に線香を供えるくらいはしていたにちがいない。だから線香の破片が落ちていても不思議はないわけだが……しかし、すでに約ひと月半無人であったはずの家に、なぜまだ線香の匂いが残っているのか？
　だが和栗は、拾った線香をちり紙に包んでポケットへしまうと、黙って玄関へ出た。
　手塚が電灯を全部消し、最後に外へ出て、格子戸に鍵をかけた。
「何のための捜索か知りませんが、問題になるようなものはなかったんでしょう？」
　さっきと同様に後部シートに膠かけてから、手塚が少し不安をのぞかせた声で訊いた。和栗は「ええ」と短く答えた。
　手塚を自宅の前まで送り、畑の間の道を彼が背をまるめて歩いていくのを見守りながら、「戻ろう」と和栗が呟いた。長谷川は最初、署へ戻るものと解釈したが、ふとその口調に別のニュアンスを感じて、
「あの家に戻るんですか」
「うむ」
「……？」
　車がともかくターンしてから、和栗が口を開いた。
「手塚は本当に知らないのか、知らぬふりをしているのかはわからないが、奈津実の失踪以後、あの家で何かが行なわれた。どうしてもそう思われるんでね」
　和栗がこんなふうに、内心の考えをことばに出すことはめずらしい。連れの刑事をよほど信頼している時に限られていた。
「しかし、さっき見た限りでは……」
「うむ。あの家の中に奈津実の死体が隠されているとは考えられないようだ。だが、やはり何かある。少なくとも、この二日以内に、誰かが出入りしたことはまちがいないと思う」
「すると……聞き込みですか」

「ああ、あんな場所だけに通行人は期待できないが、道の下に三軒ばかり家があったね」

そこを訪ねるには、雪江の家までのぼる途中から岐れ出ている細い道を歩いていくのが適当のようだった。

やがて、二人は、さっき上から屋根だけを見ていた三軒の小さな家の前に出た。一軒は農家の感じで、どれも古い住宅のようである。

そこから見あげると、逆に雪江の家の前の道と、屋根の一部が、うす闇の中にぼんやりと認められる。

和栗が農家の前庭へ入っていき、長谷川は隣りの家のベルを押した。

幸運な収穫を得たのは、長谷川の方であった。

ベルに応えて現われた四十前後のしっかり者らしい主婦が、ここ二、三日の間に上の家に誰か出入りした気配はなかったかという長谷川の問いに対して、すぐに心当たりの表情を浮かべたのだ。

「あの、家主さんの手塚さんから何かお聞きになりませんでした？」

「いえ、まだ行ってないんです。これからお訪ねするつもりなんですが」と長谷川は咄嗟に答えた。

「そうですか。じゃあ、あちらでお聞きになればくわしくわかるんじゃないかしら……」

「何かあったんですか」

「いえね、昨日の午後、四時ごろかしら、上の道に霊柩車が停まっているのを見かけたんですよ。あそこなら笹川さんとこしかないでしょう。でも笹川さんはずっとお留守のはずですものね。なんだか気持ちが悪いんで、手塚さんにお電話して尋ねてみようと思いながら、今日は一日出かけたりしていたものだから……」

「上の家に、昨日霊柩車が停まっていた……？」

その話は、あの家にこもっていた線香の匂いを、彼の鼻腔に刺激的に甦らせた。

八章　決断のとき

1

「やむを得ないでしょう。事ここに至っては」

夜の静寂に包まれた部屋で、長い沈黙の末、各務の口から絞り出すような呟きを聞いた時、すでに覚悟はしてきたものの、麻子はすっと視界が暗くなるような思いがした。同時に、樹林を通した夜風がガラス窓を打ち、その響きが一瞬生理的な恐怖を身内に走らせた。

思わずかたく目をつぶった麻子の肩を、各務は両手で支えるように抱いた。

「もう、この先、警察は時間の問題であなたを見つけ出すでしょう。サンガーデンの前でもあなたの車は目撃されているのだし、今度の林奈津実の失踪については、同じアパートの住人などから、だいぶくわしい事情を聞いている様子ですからね」

二人がすわっている傍らのテーブルには、先刻麻子の家に配達されたばかりの日本新報の夕刊がひろげられていた。その社会面に、一段の小さな記事だが、林奈津実が十月二十三日午後から行方不明になっていることが報じられている。彼女は先に発生した善福寺の金融業者強殺事件の被害者と関わりのある女性で、謎の失踪と見て捜索が開始された。そして最後に、奈津実は失踪した日の朝、練馬区に住むと思われるある女性から電話を受け、午後三時に相手と会う約束でアパートを出たまま行方不明になった模様なので、その女性が奈津実失踪の鍵を握るものと見て、捜査をはじめたと付記されているのだ。

この記事を読み終えた瞬間、麻子は絶望的な危険を直感した。電話の主が麻子自身を指していることは、疑いの余地もない。やはり奈津実は電話で打合わせたとおり、三時に麻子の家へ金を受け取りにくるつもりでアパートを出たのであろう。その後で、彼女の身に何かが起きた――？

だが、こんな状況なら、警察では「電話の女性」にさまざまな容疑を想定するにちがいない。いや、新聞記事

はこれだけだが、彼らはすでにその女性が「桂木麻子」であることまでつかんでいるのではないだろうか――？

もう次の瞬間にも、刑事たちが、この家に踏みこんでくるのではないかと思うと、麻子は生きた心地もなかった。夢中で各務の自宅をダイアルした。

六時半だったが、各務は折りよく前橋から帰ったばかりで在宅していた。そして彼も夕刊を読んだところだと答えた。

二人はとにかく会うことにして、この井の頭公園に隣接した旅館を選んだ。石神井公園の麻子の家と、三鷹台の各務の自宅との間に当たり、これまでも何度か利用したことのある地味な構えの和風旅館だった。

麻子は駅前まで夕食の買物に行ってきたばかりで、普段着の古いジャージーのワンピースを着ていたが、上にコートを羽織っただけで家をとび出した。今ほんのわずかでもぐずぐずしていたら、それでもう二度と各務に会えなくなるような、悲痛な切迫感が麻子を駆りたてていた……。

各務の手は、小刻みに慄えはじめた麻子の腕や背を、絶えず愛撫し続けていた。

「これ以上身をひそめていれば、発見された時、いっそう心証が不利になるでしょう。あるいは、林奈津実はすでに殺されているかもしれませんからね。いや勿論、中谷にせよ、今度の場合にしても、身に覚えのない罪をかぶるわけはない。警察だって、そんな盲じゃないはずです。調べれば早晩わかることだとは思いますが、それにしても……これ以上逃げ隠れするのは、厄介な誤解を招かぬとも限らない……」

各務は麻子をデスペレートな気持ちに陥らせないように、ことばを選んでいた。

麻子はようやく、小さく頷いた。

「でも、奈津実さんは本当に殺されたのでしょうか」

「無論ぼくにも確信はないが、とにかく彼女はあの日石神井の家へ来るつもりでアパートを出たようだ。ところがついに現われなかった。あなたは電話で彼女に、要求の金を用意したから受け取りに来るようにと告げたのでしたね。それなら、彼女が途中で気を変えたとは考えにくい。みすみす三百万円もの金が手に入るチャンスを、ちょっとやそっとで放棄するような女とは思われませんからね。脅迫の危険も、最初から承知していたはずだし。とすれば……何者かによって、取りにこられない状態にされたからではないだろうか」

「何者かによって……？」
「これも想像にすぎませんが、奈津実は中谷浩司の口から、畑山事件の主犯の名を聞いていたのではないか。それで、そいつも脅迫していた。彼女はあなたの家へ来る前にそいつに会って殺され、どこかで死体になっているのかもしれない」
「では、サンガーデンで中谷を殺したのも、畑山事件の……」
「あの事件にはもう一人謎の女がからんでいて、その女が中谷をモーテルへ誘いこんで殺したと見られているようですが、いずれにせよ、背後で糸を引いていたのは、畑山事件の主犯ではないだろうか」
　すると……その主犯とは、やはりあの十月七日早朝、蕪蔵寺の境内からとび出してきて、谷川に落ちかけていた少年を救けあげて走り去った中年男だったのだろうかと、麻子はぼんやりと思いめぐらした。
「こんなことになるのだったら、最初あなたに相談された時、届け出るのをとめなければよかった。あの時点で出頭していたら……ぼくらの立場は、さまざまな意味で一変していたかもしれない。しかし代わりに、中谷や奈津実の事件は防がれ、そしてわれわれも、世間の非難はともかく、これほど警察に追いつめられるような羽目にはならなかったでしょう。その点、深く責任を感じています」
　各務は麻子に向かって頭をさげた。麻子はいっそうせつなく胸をしめつけられた。
「いいえ、私が独断で投書などしたのがいけなかったんですわ。あれのために、結局は中谷につけ入られ、サンガーデンへ呼び寄せられて……犯人はそのチャンスを利用して中谷を殺したのでしょう。それで今度は私があやしまれ、いっそう弱みを握られた形になって……」
　いや、場合によっては、それだけではすまなかったかもしれないのだ。もし、奈津実が行方不明にならず、約束どおり麻子の家に現われていたら――？
　あの日、こちらは奈津実の要求どおりの金額を準備していたわけではなかった。どうにか集めただけの金で、奈津実を説得するつもりでいた。なんとしても沈黙を誓わせると、各務は日ごろの彼にも似ぬ強い語調でくり返していた。
　しかし、もし奈津実があくまで譲らず、脅迫を重ねたとしたら？――最悪の場合には……二人の胸の奥底には、奈津実への淡い殺意が、芽生えていはしなかっただろう

か……？

麻子は、恋人の頬に指を触れた。各務のもともと痩せた柔和な顔は、いつの間にかまたひと廻りも細くなったようで、肌が少しザラザラしている。焦茶色の太縁眼鏡の奥の、下瞼に小さな皺の寄ったやさしい目。寡黙そうな心持ち受け唇の形。この人の心にも、あのとき、己れの秘密を守るために、人を殺す意志が生まれかけていたのだろうか。——いや、もしかしたら、「殺意」を意識したのは、麻子一人だったかもしれない。各務の上にも自分の心の投影を見ていただけだったのかもしれない。

「私なんか、どんな報いを受けても、当然なのかもしれませんわ……」

かすれた呟きが洩れた。

そのことばに引きこまれるように、各務の顔にもすっと失意の翳がさしたが、彼はすぐに眉をあげて、

「今こそ、一番冷静にならなければいけない時ですよ。——とにかく、これから西荻窪署へ出向いて、最初からの事情を話そう。あなたはくわしい事情聴取や何かでしばらく身体を縛られるでしょうが、担当官の心証によっては、あるいはそれほどあからさまにプライバシーが公表されたり、ご主人にまで迷惑が及ぶ事態は避けられるかもしれない。まあ、これは成り行き次第で、なんとも言えないが」

最後のことばは、さすがに暗澹としていた。

麻子は、しばらく、息をつめて、男の眸を見つめていた。

やがて、

「各務さん」

心を決めて、やや改まって呼びかけた。取り乱さないために、喉元に力をこめた。

「私ね、さっき家を出る時から、ずっと考えていましたの。あなたにお目にかかって、相談してからですけど、でも結局、出頭するしかないだろうと、覚悟もしていました。でも、それはあなたとごいっしょにではありません。警察へは、私一人で行きますわ」

各務は息を吸いこむようにした。

「どうして？」

「もともと、犯人らしい男を目撃したのは、私一人なんですもの。あなたには関係のないことでした」

話しだすと、麻子は思いのほか静かな気持ちが満ちてくるのを覚えた。

「警察では、最初からを、ありのままに告白するつもり

です。今さら曖昧な供述ではすまされないでしょうし。——私が、金融業者殺し発生直後のあの時刻、蕪蔵寺横の坂道を通りかかったについては、前夜から芳鹿荘に泊まっていたこと、同伴者のあった事実、そのために今まで出頭を延ばしていた事情なども、たぶん隠すことはできませんでしょう」

「うむ、それで？」

「主人の名誉は傷つきます。——本当に、主人に対しては取り返しのつかないことをしてしまいましたけれど、でもだからといって、あなたのお名前まで公表したところで、主人の気持ちが償われるわけでもないでしょう。いいえ、それどころか、私がひそかに……ひそかに情を通じていた方が、ほかでもない群馬医大の各務助教授だと世間に知れれば、主人は、ただ妻に裏切られた恥だけではすまされない、社会的な糾弾を受けなければなりません。群馬工場の被害は人体にまでひろがる兆候が見えていますし、P大の報告が共立電化を元凶と断定しただけに、対立は深刻化する一方ですわね。そんな矢先、私たちの関係が知れたら、どんな誤解を受けても主人としても申し開きのしようもないでしょうし、裁判になった場合にも、ずいぶん不利でしょう。そしてもし、この公害紛争に敗れたら、主人のこの十年間の努力は水の泡になります。社内的にも、将来は望めない。つまり主人は自分の人生に敗れたも同然なのですわ。——もちろん、私たちの間が明るみに出た時、あなたの受ける傷も、主人より重くても軽いことはないはずですわね」

「だからそれは、いわれるまでもなく承知している。そのために——言い訳に聞こえるかもしれないが、桂木さんの立場も考えて、今まで沈黙を守ることを、ぼくは主張してきた。しかし、その結果は、事態をますます悪化させた。ぼくはもう、いっさいの将来をすてたつもりで……」

「いいえ。私、口がさけてもあなたのお名前は出さないつもりです。警察だって、そこまで知る権利も必要もないはずだわ。主人にも、勿論秘密を守ります。——私が警察にも主人にも、あなたの名を隠し抜き、そして……」

ここで麻子の声が乱れた。が、彼女は懸命に気持ちを張った。

「そして今後、私たちが決して二度と逢わなければ、二人の関係が外に洩れる気遣いはないでしょう」

とうとう大粒の涙が、続けて膝の上にこぼれ落ちた。

各務がホッと溜息をついた。

「そんなことはできない。ぼくらがもう二度と逢わないなんて。第一、あなたを一人で警察に行かせるなどとは……」

「いいえ」

麻子は涙で洗われた眸で彼を見あげた。

「それは大丈夫。私、もう心の準備はできているんですから。それに、二人揃って出頭したところで、私たちの将来が明るくなるわけではありませんもの。それはもう考えないで。今はむしろ、犠牲を最小限度にくいとめる努力をすべきではないでしょうか」

ふだんは弱々しく見える麻子の、華奢な身体全体に漲っている一途な気迫に、各務は思わず押されたように目を伏せた。無口でおとなしいが、時たま驚くほど頑固な気性をのぞかせた麻子の少女のころの姿が、ふと瞼をよぎった。

犠牲を最小限にくいとめる——確かに、彼女のことばは理屈に適っている。今各務が顔を出し、二人の関係をあえて明るみに出せば、傷は深くなるばかりで、結局は誰一人救われる者はいないのだ。麻子自身の立場すら、むしろ悪化するかもわからない。なぜなら、麻子が抱えていた恋愛の秘密が深刻であればあるほど、彼女がそれを隠し抜くために、中谷や奈津実の口を封じたという疑いが濃くなるわけだから。

ここへタクシーを走らせる道すがら、彼も、麻子に付き添って出頭し、いっさいを白日に晒す決意を固めていた。しかし、麻子のことばによって、あるいはまだ彼自身と、そして桂木の立場を守る道が残されているかもしれないと思い直すと、気持ちが揺らぐのをどうすることもできなかった。

もし自分が麻子の立場でも、やはり同じことを主張したにちがいないと、各務は信じた。いや、本当に信じたのか、信じようと努力しているのか、定かでなかった。定かでないという思いも、心の隅で意識していた。

沈黙した彼を、麻子が濡れた頬に微笑をのぼらせて、のぞきこんだ。

「わかってくださるわね」

「しかし……」

「もう何もおっしゃらないで」

麻子の指が各務の唇を封じ、その指を彼が握った。目を閉じて、静かに頬を重ねた。しだいに強く、彼はいつか折れるほど麻子を抱きしめていた。そうすることで、彼は無意識に、自分自身の何かにも目をつぶろうとして

いた。

西荻窪署へ出頭するため、麻子が一人でその旅館を出たのは、午後九時を少しすぎるころだった。

各務は座敷に残った。芳鹿荘の朝と同じに、三十分後に、彼もここを出るのである。だがその前に、彼は友人の信頼できる弁護士に連絡をとり、麻子に依頼されたという恰好で西荻窪署へ出向き彼女に付き添ってくれるように頼むつもりである。もちろん真実は、麻子は偶然の目撃者であり、どの事件にも第三者にすぎなかったわけだが、それらの真相が判然となるまで、専門の弁護士がそばにいれば何かと心丈夫であろうし、この種の出頭に弁護士が同行する例もめずらしくないと各務は聞いていた。この提案には、麻子も素直に同意した。

麻子が旅館の玄関を出て、井の頭公園の西の端に当たる疎い林の中の道を歩いていく姿が、二階の窓から見えた。桜、椿、栗、欅などの木々がひろい間隔をおいて立ち並び、落葉が散り敷いているどこか西欧ふうの林間の散歩道で、この秋のはじめには、黄昏時に二人で散策したこともあった。

今、樹林もその道の先も、うす闇の奥に沈んでいるが、やがてその道は、吉祥寺駅に通じる公園の外周の道路にぶつかるはずだ。駅の近くでタクシーを拾うと麻子は言っていた。

白いコートに包まれたか細い後ろ姿が遠ざかるにつれて、各務は逆に自分の内部に何か苦い塊が生まれ、それが急速に膨れあがって胸を圧してくるのを覚えた。それは、麻子とこんなふうに訣別していくことの哀しみとは、どこか異質なものだった。それは——たぶん、彼がさっき自分で目をつぶろうとした何かだったかもしれない。

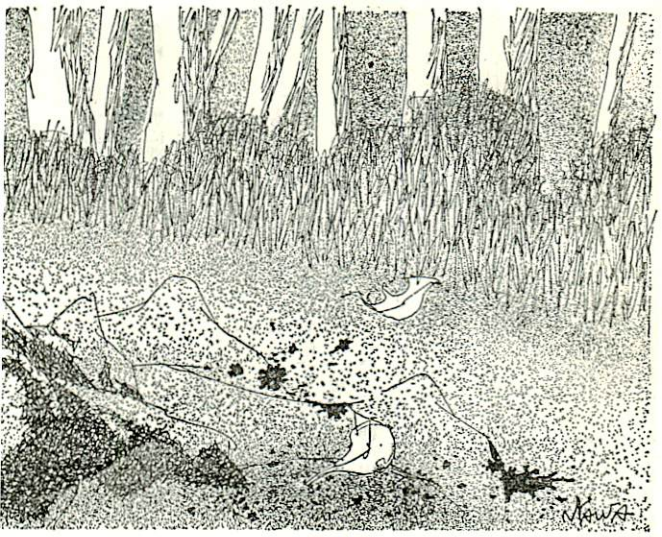
(卑怯者！)

突然、彼は耳の中に声を聞いた。

(卑怯者……卑怯者……)

そうだ。苦い塊の中身にはこの声が詰まっていたのだ。

——それから彼は、頭の中の霧が晴れるように、徐々に、だが明確に悟った。自分は麻子といっしょに行かなければならない。たとえ何の役にも立たない、常識的には愚かな行動であるとしても、いやむしろ、犠牲を深め、ただ失うためだけの出頭であるとしても、今はそれをやるべきなのだ。自分は麻子と並んで立ち、屈辱や損失や、社会の譴責や、あらゆるものを、彼女と共にすべきなのだ。結局はその方が、心安らかでもあるだろう。なぜ？



——なぜなら、自分は麻子を愛しているのだから。

彼は逡巡を恐れるような素早い動作で立ちあがり、畳の上に脱ぎすててあった上衣に腕を通しながら、階段を駆けおりた。いそいで勘定をすませ、公園の中へ走り出た。

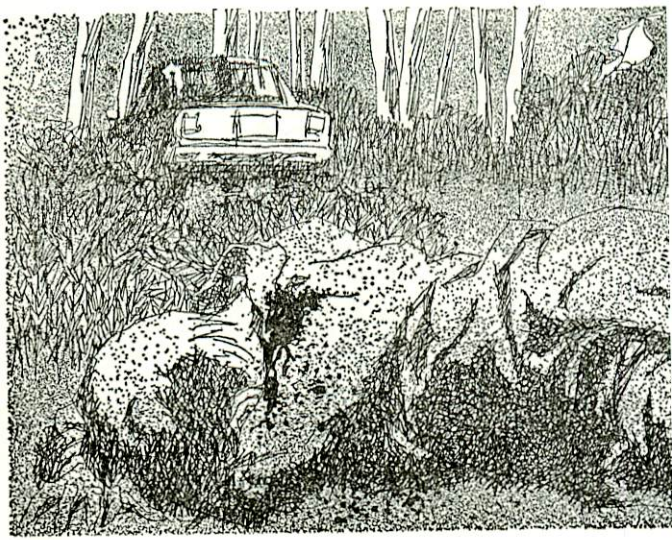
麻子の姿が、暗い道の先に小さく見えた。林の外側にはたえず車の光芒が動いているが、この公園内の散歩道はすっかり人通りが途絶えていた。夕暮時に見かけるアベックも、たいていは東側の池のある方へ行くようだ。

各務は十メートルほどの間隔に追いついた。麻子は、外周の道路へ出る一つ手前の、公園内の道が交差する地点を歩いていた。各務は呼吸を鎮めてから声をかけようとした。その時——。

突然、右手の道に一台の小型車が姿を現わし……車は速度を落とす気配もなく、あっという間に麻子に接近した。かすかな悲鳴が流れ、麻子の身体がダミーのように斜め先へ跳んだ。その姿を断ち切るように、車は散歩道を横切った。

各務は声もなく、その方へ突進した。

車はそのまま走り去ろうとしている。が、道はすぐにカーブを描いて外の道路へ通じているため、車はそこで



やや速度を落とした。

立木の根元に投げ出されている麻子に向かって走りながら、曲がり角でかすかに傾いだ車の内部に、運転席の男の後頭部と、ナンバープレートの「練馬」の文字が、各務の網膜をかすめた。

2

先刻までの騒然とした人の動きが途絶え、青白い電光を浴びた廊下の先で閉ざされたドアを見守りながら、ジッと待っている時間は、各務徹夫にとって、このうえもない業苦だった。

白い壁の上の電気時計の針が、十一時を何分かすぎてから動きをやめてしまったかにさえ感じられる。

下半身血にまみれ、落葉の中にぐったりと顔を伏せた麻子を、公園の外まで抱え出し、通りかかった大型乗用車に乗せてもらって、井の頭道路沿いのこの救急病院へ運びこんだのが、約二時間前である。

精力的な感じの中年の院長が、すぐ処置に当たってくれた。大腿部の複雑骨折と腹部の裂傷から出血が激しいので、体液の補充と輸血が急がれること、および手術に

よる骨折の治療が必要であると、院長から各務に簡単な説明があった後、麻子は運搬車に横たえられて、手術室へ運ばれていった。ワンピースの腹から下を染めたおびただしい出血と、彼女が石膏のような肌色で蘇生する気配も見せないことが、各務を目がかすむほどの不安に陥れていた。

「助かるでしょうか」と思わず尋ねると、

「頭蓋部の損傷は軽症だと思われるのですが――」

院長は、各務には答えにならないことばを呟いて、大股に手術室へ立ち去った。

こうした間にも、各務は病院の事務員に番号を聞いて、所轄三鷹署へ電話をかけ、事件を通報している。国道沿いの救急病院だけに、事務員は警察署のナンバーを暗記していた。

二人の係官が病院へ駆けつけたのは、手術室の赤ランプが点ってから五分ほどたった時だった。

各務は彼らに事故の経緯を詳細に話し、轢き逃げ車――一五〇〇CC程度の国産小型車。グレーかシルバー。練馬ナンバー。運転者は男、などの事柄を伝えた。その後、彼らの車に同乗して、事故現場へ引き返し、現場検証に立ち会った。栗の木の根元と辺りの枯れ葉にとび散った濃密な血痕が、ライトの照射を浴びて陰惨な色に光っていた。

各務が再び病院へ戻った時、看護婦が麻子の手術が終わったことを教えてくれた。が、全身の失血が著しいので、輸血で辛うじて血圧を保ちながら酸素吸入を続けている状態とのことで、各務が麻子に近づくことは許されなかった。

彼は、明かりを落とした待合室の、麻子の病室の扉が見える場所に膝をおろした。

突然一人になると、恐慌にも近い孤独と焦慮が襲いかかってきた。その心理は、無論さまざまの要素から発していたが、何を措いても麻子の生命が案じられた。そのために自分がどうすることもできないのなら、いっそ捜査員と話をしていたり、現場検証を手伝っていた方がましだったと思われた。

それだけに――午前零時を廻ったころ、待合室の入口に、これまで現場で話を交わした三鷹署の係官ではなく、小柄でちょっと血色の冴えない四十年配の男が姿を見せて歩み寄ってきた時、各務は奇妙なことに、一瞬救われたような安堵を覚えたものである。

彼は各務のそばまで来てから、

「西荻窪署部長刑事の田口です」と穏やかな表情で名乗り、名刺をさし出した。彼に続いてあと一人、もう少し若い男も入ってきて、やはり「西荻窪署刑事課――」と印刷のある名刺を渡した。

ついに来たるべき時が来たという、冷んやりとした戦慄が各務の胸内を走ったのは、二人の刑事が前の椅子に腰をおろし、彼に観察的な視線を注いでからだった。

「先ほど、三鷹署から連絡を受けましたので」

各務の名刺を少し時間をかけて確認し、田口は視線を戻して口を開いた。わりに高い声だが、もの静かな話しぶりである。

田口のことばは、すでに各務にも予想がついていた。彼は轢き逃げ現場の検証を終えて病院へ帰る時、三鷹署の係官に西荻窪署への連絡を依頼した。被害者は石神井町に住む桂木麻子という女性で、彼女は善福寺の金融業者強殺事件に関する目撃者であり、彼女に代わって話したいことがあると伝えてほしいと頼んだのだ。係官は、すでに彼女について何らかの連絡を受けていたと察しられる鋭敏な反応を見せ、すぐ伝達すると約束してくれたのだった。

「轢き逃げ事件の被害者は、桂木麻子さんだそうですね」

「そうです」

「住所は練馬区石神井町。共立電化総務部次長の奥さんの、桂木麻子さんなのですね」

「そのとおりです」

田口は吐息をつくように、ちょっと沈黙した。それから、

「容態はどんなふうです？」

「手術は無事にすんだのですが、その後のことはなんとも……」

そう答えた時、各務は不覚にも喉がつまり、熱い涙が目の中に盛りあがるのを覚えた。

「そうですか。――実は今夕七時まえの時点で、われわれも桂木麻子さんの所在をつかみ、重要参考人として手配しておったのです。しかし、捜査員が石神井町へ赴いた時には、家は無人で、捜査員は張り込みの態勢で彼女の帰宅を待っていたのですよ」

「彼女は、六時四十分ごろ自宅を出て、井の頭公園のそばの〝翠月〟という旅館で私と落ち合いました。そして西荻窪署へ出頭する決心でそこを出た直後に、轢き逃げに遇ったのです」

話しだすと、各務は少し落着きを取り戻した。

急激なショックのあとの、かえって奇妙に冴々とした感覚があり、それに、これまで胸の内に押しこめ、抑え続けてきた秘密を吐露する、かすかな解放感すら生まれていた。

彼は二人が親しくなった経緯から事件との関わりまで、順を追って、なるべく正確な表現を選びながら告白した。

各務が一通り話し終えてからも、二人の刑事は、それに対してすぐに意見をのべようとはしなかった。

各務は息苦しい沈黙に耐えていた。

ようやく田口が、

「改めて任意出頭をお願いして、もう一度くわしくうかがうことになると思います。もちろん、桂木麻子さんが回復し次第、彼女にも事情聴取します」

あまり感情をまじえない口調で答えたが、少し疲れの見える丸い顔は、あんがい、好意的な表情を浮かべていた。

「朝までここにおられますか」

「ええ……」

「轢き逃げした車は、車種や色など、およそわかっているのだそうですね」

「ええ」

「ではおそらく、時間の問題でしょう」

それから彼は、細い目にどこか複雑な光をたたえて、しばらく各務を見守り、連れと視線を交わして立ちあがった。

二人が署に帰っていくと、各務は再び一人でとり残された。

長時間の緊張や興奮のあとで、虚脱状態に陥りかけていた。レザー張りの長椅子がならんだ待合室や、リノリウムの床に、蛍光灯が寒そうにふり注いでいる廊下の風景が、ふと存在感を失い、奥行きのない絵を眺めているような気持ちになった。自分がここに腰かけている事実すら、不確かな感じがした。知覚が肉体を離れて、別の空間を浮遊しだしたような、虚な意識に浸っていた。

どれほどかして、胸に「主任」の名札をつけた年配の看護婦が歩み寄ってきたので、彼はわずかに我を取り戻した。彼女は、麻子の家族に連絡する必要はないのかと尋ねた。各務が麻子の「家族」ではないことを、院長からでも聞いたのであろう。

各務はまた別種の緊張に捉えられて、心を硬くした。麻子の自宅に知らせることは、三鷹署に電話をかけた

直後に考え、その時は夢中でダイアルしたのだが、先方は出なかった。そのまま、忘れるとも避けるともなく、意識から遠のいていた。

三鷹署か西荻窪署が連絡をとっているかもしれないが、定かではない。やはり、自分の方から、一度は報告するのが務めだと思われる。

彼は、カーテンを閉めた受付の窓口に置いてあるピンクの電話機に近づいた。麻子の家は夫婦二人暮らしのはずだから、桂木が出るのだろうか。こちらの立場をどんな表現で説明すればいいのか？——呼吸が圧迫されるような抵抗感を無理矢理抑えて、暗記している番号を廻した。

コールサインは鳴り続けているが、今度も受話器は取られない。彼は救われた気持ちで、長く待たずに指でフックを押えてしまった。すると思いがけず、何かシンとした、運命的な感情が胸を満たしてきた。今、麻子の生命の危機に立ち会い、共にそれと立ち向かっているのは、この世に自分一人なのだ……。

やがて彼は、自宅にダイアルした。こちらもなかなか出ない。が、今が午前三時半であるのに気がつくと、あわてて受話器を戻した。家にはもう七十歳を越す両親がいるが、息子の常にない「無断外泊」にだいぶ心配したにちがいない。が、結局今夜は休んだのであろう。

彼は再び、待合室の固い長椅子に腰をおろした。

石膏のような顔で運搬車に横たえられていた麻子の姿が、瞼に浮かんだ。今はあの小さな鼻孔に、酸素吸入の管を通されているのだろうか……。

これまで麻子と逢引きしたいくつかの場所や会話の端が、つぎつぎに甦ってきた。それから、最初にE市の工場で紹介され、前橋でも二度ほど見かけたことのある桂木謙介の上背のある姿が思い出された。農作物の被害状況を訴えにきた連絡協議会の代表や大学の講座の学生、麻子の付き添いを依頼するはずだった友人の弁護士の顔などが、脈絡もなく脳裡を去来した。これで麻子との関係が明るみに出れば、いずれあの大学を去らなければならないだろう。その後は、どんな場所が自分を受け入れてくれるのだろうか……？

各務は冷静に思いめぐらしているつもりだった。疲労も自覚していなかった。だが、気がつくと、彼はしばし長椅子の背にもたれてうたた寝していた。さっきの看護婦がやってきて、あいている病室のベッドで横になったらと勧めてくれたが、とても身体をのばして眠る気に

はなれなかった。というより、自分を隔絶された一室に閉じこめることが、なんとなく不安なのだ。

先刻の田口刑事が、一人で現われたのは、待合室の木綿のカーテンを通して、うっすらと暁の光がさしはじめたころであった。

田口も寝不足らしく瞼をたるませていたが、各務の姿を認めると、足早に歩み寄ってきた。

「どうも」と目顔で挨拶してから、

「轢き逃げ犯人が挙がったのですよ」といって、疲れた動作で前の椅子に腰をおろした。

「……？」

「実は、桂木麻子さんが轢き逃げにあう約二時間前、小金井市の五日市街道で、練馬区関町に住む少年を車で連れ出して殺そうとし、追跡していた新聞記者に発見されて逃げ去った男があったのです。その少年と記者の話、それに追跡に使ったハイヤーの運転手が犯人の車をよく憶えていたなどのことで、犯人はおよそ見当がつき、緊急配備を敷いていたのですよ」

「……」

「次には井の頭公園であの事件が発生し、状況からほぼ同一犯人と断定して行方を捜した。まもなく、国立市のあたりを走っている手配車を発見し、運転していた男を逮捕しました。今ようやく一通りの供述が取れたところなんです」

「それで、犯人は――？」

「被害者の夫、桂木謙介……」

各務は一瞬、聞きちがいではなかったかと思った。

田口はまるい肩で息をつきながら一度ゆっくりと頷いた。

「自供のあらましによれば――桂木は今年の夏ごろから妻の素振りに漠然とした疑惑を抱いていたらしいが、それがはっきりした不審に変わったのは、畑山欣造が殺された前夜、彼女がどこかへ外泊した形跡によるそうです。その日彼はE市の工場へ出張しており、麻子さんは短大の友だちの家へ遊びに行くといっていたそうだが、彼は夜遅くなって用を思い出し、たびたび自宅へ電話をかけた。最後は午前三時だったが、ついに出なかった。いくら友だちの家といっても、女一人がそんな時刻まで戻らないというのは普通じゃない……疑惑の蓄積があったために、すぐにピンときたという。東京へ帰ると彼は私立探偵社に依頼して、妻を尾行させた。その直後に、彼女は井の頭公園の旅館で男と密会し、その相手が、こ

ともあろうに群馬医大助教授のあなたであることが判明した。相手を突きとめた時点で、桂木は直ちに探偵社を解約したそうです。あまり詳細なデータを握られては、私立探偵すら危険だと判断したらしい。あの男らしい用心深さですが」

こともあろうに……と言われて、各務は顔を伏せるしかなかった。

「桂木はすぐにも妻の衿髪をつかんで面罵したいところだったが、それを躊躇う気持ちもあった。もし、不貞の発覚がかえって彼女を踏み切らせ、離婚を希望したり、最悪の場合には無断で独身のあなたの許へ走ったりすれば、公害紛争がからんでいる時だけに、さまざまな誤解や臆測を生むだろう。会社に対しても、釈明のしようがない。今いたずらに妻を刺激するより、もっと賢明な方法はないか？……思案するうちに、朝霞のモーテルで中谷浩司が殺され、畑山事件について匿名の投書をした女、中谷と共にモーテルへ入った女、その後グレーの小型車に乗って現場付近をうろついていた女、といった具合に、麻子ではないかと疑われる女の影が次々に捜査線上に浮かんできた。確かに、中谷事件の夜の妻の行動はいかにも不可解である。あやしげな電話がかかり、押問答のあげく、桂木には不自然な口実を設けてあわただしく出ていった。その時、彼は尾行するつもりで外出を許したのだが、彼女が自分の車を運転していってしまったので、断念したと言います。——桂木は狼狽した。自分の妻が群馬医大の助教授と密通したうえ、まさか彼女が殺ったとは思えないが、どんな形にせよ殺人事件に関係したとなれば、彼自身の社会的地位も失墜する。一方、E市の紛争はいよいよ激化し、被害者側が独自に分析を依頼したP大では、共立電化を主要な発生源とする見解を出す公算が強いという情報も入っていた。となれば、いずれ裁判にもつれこむ。その場合にも、自分自身がこんな泥沼に立っていたのでは……このころから、桂木はしだいに精神の均衡を失っていたと思われますね」

「……」

「彼は、妻に対する懲罰は二の次にしても、妻の不貞と、犯罪事件に関わりあった事実を、なんとしても隠蔽しなければならないと決心した。偶々学生時代の友人でテレビ会社の報道部長をしている男と飯を食う機会があり、それとなく聞き出したところでは、モーテル事件では麻子さんは面を取られてない——要するに誰にもはっきり顔を見られてはいないようだ。問題のグレーの小型車も

ナンバーまでは判明していない。つまり麻子さんはのっぴきならぬ証拠を残してはいないらしい。むしろ問題は畑山事件の方ではないか。捜査本部では、剣道稽古へ行く途中だった少年の話に出てくる中年男と、人妻ふうの女性を捜している。男が犯人で、女性が彼の人相などをはっきりと証言できる可能性が、期待できるからです。またその女性が、例の投書の主とも考えられる。ところが桂木にしてみれば、もしその女性が麻子さんであったとなれば、そこから各務助教授との関係が明るみに出るし、ひいては彼女の中谷殺害容疑を裏付けるようなものだ。では、問題の女性イコール麻子さんであると、断定する証拠は何か？——桂木は報道部長の話から、それは久藤恭太少年の証言一つと判断した。その女性が前夜から投宿したと思われる旅館の女中は、彼女の顔はよく見なかったとのべているのに対し、少年は、もう一度会えばきっとわかると答えているという。少年の姓名や住所なども、事件に第三者的興味をそそられた態度を装って聞き出した。それから一度少年の家を検分し、顔も憶えたが、その時にはまだはっきりした犯意はなかったと、桂木はのべている……」

「すると、畑山事件の直後に、富士見池で彼を襲ったのは？……あの出来事を知って、麻子さんは投書を決意したんですが」

「いや、あの犯人は中谷浩司だったと、ほぼ断定されています。桂木が久藤少年の家を確かめたのは一週間あまり前のことで、直接手を下したのは、今夜が最初だったようですね」

「今夜……？」

「それがさっき話した五日市街道の事件なのです。この間約一週間のうちに、桂木にとって事態は急角度に悪化した。三日ほど前、彼は会社に日本新報の社会部記者の訪問をうけたそうですが、その記者は共立電化と群馬医大の癒着を探ろうとする取材の中で、麻子さんの名を出し、各務助教授と彼女が幼馴染みだったなど、桂木自身にも初耳な話を、暗示的にほのめかした。桂木は内心にわかにあわてた。すると麻子さんたちの密通は、ジャーナリズムにも嗅ぎつけられているのか？——続いて林奈津実が失踪した。さっきスタンド売りの夕刊を見て、今度こそ捜査の照準がはっきりと麻子さんに当てられているのを悟った。まだ住所やフルネームまでは発表されてないが、これも報道の段階で伏せてあるだけかもしれない。いずれにせよ、警察の組織網は時間の問題で『桂木

麻子』をキャッチするだろう。その前に、彼はついにわが手で妻を抹殺する決心を固めた」

「……」

「彼は今日は車で出勤していたので、夕方六時すぎに出先から石神井の自宅へ直行した。しかし家は無人だった。さっき各務さんにうかがった話から推せば、その時はまだ家には夕刊は届いておらず、麻子さんは買物にでも出かけていたのでしょうが、桂木にしてみれば、すでに警察の手が廻ったか、それとも逃げたのかと考える。刑事が踏みこんだ形跡も感じられない。麻子さんは危険を直感して、いち早く姿をくらましたのにちがいないと彼は思いこんだ」

「……」

「それから桂木は、自分の車に戻って、思案をめぐらした。すると、麻子さんが林奈津実を殺して逃げたと決めてかかるのは早計だと気がついた。奈津実の死体が出たわけではないし、何よりも、麻子さんが殺人のできる女だとはどうしても思えない。報道によれば、奈津実は一昨日の二十三日、朝電話をかけてきた女と三時に会う約束をし、午後からアパートを出たまま、行方不明になった。それで、電話の女が謎を握る存在として手配されているわけだが……桂木は問題の二十三日午後三時少しすぎごろ、自宅へ電話をかけたことを思い出した。印鑑証明を取る必要が生じたからだそうですが、そのさいの麻子さんの応答は——少しぼんやりして、沈んでいる感じもしたが、しかし、もし殺人という大事に直面していたとしたら、麻子さんの性格として、もっと取り乱した、異常な気配を示したはずではないだろうか。そして、夕刻帰宅した時、桂木の指示どおり、二通の印鑑証明が準備されていた。——いや、こんなことは、決定的な反証とはなりえない。麻子さん自身は手を下さず、男がやって死体を処理したのかもしれない。それでもやはり、さすがに十二年間連れ添った夫婦の直感として、麻子さんが殺人に加担するとは信じられなかったと、桂木はのべています。そして、殺ってないならば、まだ活路は残されているかもしれないと考えたという」

「活路？……それがつまり、久藤恭太君を——？」

「そうなのです。麻子さんには、捕まった場合にも、徹底的に否認させる。偶然からさまざまな誤解が生じたわけで、いっさい無関係だと押し通す。一方、一連の事件と麻子さんとを繋ぐ唯一の証人である恭太少年の口を封じてしまえば、逃げきれるのではないか。そこで桂木は

恭太の家へ廻った。七時前ごろで、周囲はすっかり暗く人影が途絶えていた。しばらく様子をうかがっていたら、恭太君が折りよく路地の角まで出てきたので、刑事だと偽って車に乗せ、小金井まで連れていった。玉川上水沿いの繁みの中で扼殺しかけたが、もう少しのところで、追跡してきた新聞記者に発見され、子供を突きとばして逃げたのです」

「子供は怪我をしたのですか」

「いや。ショックも心配したほどではなく、元気にしているそうですよ」

麻子は畑山事件の当初から、久藤少年の身を気遣い、自分が沈黙していることの呵責に苦しんでいた。彼女の最初の直感は、結果的に当たっていたといえる。しかし恭太は無傷ですんだのだ……。

田口刑事も、眉と目尻のさがった素朴な顔にちょっと和んだ表情をたたえて沈黙していたが、

「しかし、この失敗で、桂木はすっかり逆上してしまったんですね。車のナンバーや人相を通報されれば、その時から自分自身が追われる立場になる。もう家へ帰ることも危険だ。彼は絶望的な怒りに駆られ、自棄的な衝動に走った。真面目に働いてきた自分の人生を無残に踏みにじったのは、妻の裏切りにほかならぬ。自分が逮捕される前に、麻子さんとあなたとに、わが手で復讐しようと決意したそうです」

「……」

「自宅に電話をかけたが、誰も出ない。やはり麻子さんは逃げて、あなたと逢っているのだと確信した。そこで、今度は三鷹台のあなたの家にかけた。例の地下水分析のさい、前橋の大学と各務さんの自宅は手帳にメモしてあったそうですよ。お宅ではお母さんらしい人が出て、あなたは六時ごろ出かけたという。行先も聞いてないといわれたが、急用だからとくいさがると、そういえば外出する直前に電話がかかってきて、あなたが、『井の頭公園』といっていたように思うと話してくれた。井の頭公園なら、連想は〝翠月〟しかなかった。私立探偵社から、あなた方が密会したという報告を受けた旅館です。――彼は八時すぎから、公園内の林の暗がりに車を駐めて待っていた。自分自身警察の配備を逃れるためにも、ジッとしている方が安全だと計算したらしい」

「そこへ、麻子さんが一人で歩いていったのですね」

「そうなのです。彼女が一人なのを見て、彼は一瞬、もう一度自分の活路がひらけるかもしれないと考えたとい

う。つまり、彼女が偶発的な事故によって死亡すれば、あなたとの関係も、畑山事件や中谷、奈津実らとの関わりあいも、いっさいが疑いのまま闇に埋もれ、自分自身が致命傷を受けるには至らないかもしれない。先に恭太君を殺そうとしたことも、自分の顔や車のナンバーが憶えられているとは限らないわけだし、ここで麻子さんが死んでしまえば、彼女が恭太君と出遇った事実も曖昧になり、あわよくば追及を逃れきれるかもわからない。裏切った妻への復讐と、保身の打算が瞬間的に相乗され、一気に轢いて逃げたというのが真相のようです」

各務は無言で目を伏せた。自分に桂木を責める資格はないだろう。憎しみすら、不思議に湧いてこなかった。ただ、いいようもなく無残な思いが、やがて鋭い慙愧にも似た痛みになって、彼の胸底を抉るようだった。

「桂木の供述を聞いていると、最後までわが身を守る冷たい計算で動いていたみたいですが、わたしには、彼はもうだいぶ前から狂っていたんじゃないかと思われるんですね。恭太少年や麻子さんの口を塞げば自分は無傷ですむと思いこむところが、すでに正常な判断を欠いている。——おそらく桂木は、工場の公害紛争が発生した時点から、狂いはじめていたのではないだろうか……」

もしこの紛争に敗れたら、主人の十年間の努力は水の泡になる。自分の人生に敗れたも同然です、といった麻子のことばが、各務の胸に沈痛な響きで甦った。工場周辺では、農作物ばかりか、人体被害が無気味な確実さでひろがりはじめている。今日、公害に対する社会の糾弾はきびしい。桂木の脳裡には、被害者たちに詰め寄られ、土下座する自分の姿が彷彿としていたのではなかったろうか。

彼を狂走させる引き金となったのは、確かに、各務と麻子の密通であっただろう。しかし、その背後で、もっと深く彼を狂わせていたのは、人知の及びがたいところにひそむ、非情の害毒だったかもしれない……。

「桂木は、自供のあとで、やはり気になるのか、奥さんの容態を尋ねていましたよ。重体でなんともいえないと伝えたところ、彼ははじめて悲痛な面持ちになり、勝手な言い方だが、自分はあの轢き逃げによって、妻への復讐心はふっきれるかもしれない。しかし……相手の男に対する憎しみだけは、終生すてることはできないだろうと、語っていましたよ」

田口刑事は、徹夜勤務を終えて、今自宅へ帰るところだという。その途中で、一応事件の成り行きを知らせて

おくつもりで立ち寄ったとつけ加えた。
だが、各務は、この実直そうな刑事が、実は桂木のその最後のことばを彼に伝えるために、ここへ現われたように感じられた。
自分もまた、生きている限り、そのことばから逃れることはできないだろう。
この時、さっきから何度か各務の様子を見にきてくれている主任看護婦が、待合室の入口に姿を見せた。
「患者さんは、まだ眠っておられますけど、状態が安定しているので、少しの間なら病室へお入りになってもかまわないと、院長が言っておられますが」
各務は立ちあがり、ふと田口を顧みた。
「モーテル事件や、林奈津実の失踪に関して、麻子さんはまだ容疑を受けているのでしょうか」
「もちろん、回復次第、重要参考人として事情聴取しなければなりません。ただ……」
刑事は少し躊躇ってから、
「実は、一つ有力な筋が浮かんでましてね。そちらの成り行きによっては、一連の真相がはっきりするかもしれません」
各務は彼に会釈して、廊下へ出た。と、窓から射しこんでいる陽光の眩しさに、一瞬眩暈を覚えて立ちすくんだ。カーテンを閉めた西向きの待合室にいると、いつまでも夜のような気がしていたが、外界ではすでに新たな一日が開始されていたのである。
早く、一刻も早く、麻子が目醒めてほしい！
各務は自らの叫びを聞いた。麻子が蘇ったとき、そのときから二人の上にも新しい日日が始まるのだ。たとえそれがどれほどの困難に満ちているとしても！
麻子の病室へ向かって歩きだしながら、各務は懼れと恍惚を同時に感じた。

九章　再会

1

川崎市立葬祭場は、高津区下作延、東名高速道路と田園都市線の間に当たる、閑静な丘陵地帯の一画に位置していた。

十月二十六日午前八時に、和栗警部補と長谷川刑事が車を乗り入れた時には、丘の中腹にある広い構内にはまだ人影もなく、正面の古ぼけた鉄筋の建物がいかにも陰鬱なたたずまいを見せていた。

降りたつと、建物の背後にある高い林から、冷たく澄んだ風が吹き流れてきた。

「なかなか広いもんですねえ」

砂利を踏みながら、長谷川が呟いた。

「うむ」

左手にある天井の高い平屋建てが本館、つまり焼場らしいことは、一目でわかる。開放された広い間口の内部に、黄味がかった白いタイル張りの土間が見え、その奥にいくつか鋼鉄のドアが並んでいる。重油炉の扉であろう。そしてその建物の裏手には、火葬場のシンボルのような長いコンクリートの煙突が、うす青い朝の空に向かってそびえ立っているのだ。

今そこから煙はたちのぼっていない。火葬の執行は午前九時から開始されるのである。

反対側の車庫に、出動前の霊柩車が数台、こちらに鼻先を向けて並んでいるさまは、壮観でさえある。

奥まった鉄筋の二階建ては、主に休憩所に使われており、その右端に事務室があるとは、今朝早く場長の自宅へ電話して聞いてあった。

休憩所のホールもガランとしていて、ゴムのエプロンに長靴姿の掃除婦が一人、黙々とモップをうごかしていた。

長谷川が事務室をノックすると、小柄な初老の男がドアを開けてくれた。内部には二、三脚のデスクと古びた応接セットが置かれていて、窓の外に繁っている林の緑

のために、狭い部屋がうすい暗緑色の空気に染まっていた。

和栗の名刺を、小柄な男が、窓際の席からこちらを見守っていた肥満体の人物のところへ持っていった。室内にいるのは、その二人だけである。

窓際の男が名刺を見て立ちあがり、

「どうぞこちらへ」と低い声でいって、二人をセットの方へ請じ入れた。自分も名刺を出して、一人ずつに渡した。

《川崎市立葬祭場場長、姉川均》と印刷されていた。

「今朝ほどは電話で失礼しました」と和栗が挨拶した。

「いえ」と姉川は喉奥でつまったような声で答え、客と向かいあって腰をおろした。ゴマ塩の坊主刈。毛穴の粗い頬。少しとび出した眸が、警戒的な光を帯びている。

「それで、ご用件は？」と促した。

和栗は、広い敷地を見返りながら、

「川崎市の葬祭場はここ一カ所とうかがいましたが、市内の火葬は全部こちらで扱われるわけですか」

「そうですね。東京には私立の火葬場が十カ所ほどありますが、川崎はここだけですから。しかし、仏さんは市内の方ばかりとは限りませんが」

「すると、東京などからも頼まれるわけですか」

「ええ。七、八十パーセントは川崎市民ですが、東京や他県から運ばれてくることもあります」

場長は聞きとりにくい声で質問に答えた。

「埋葬許可証——正しくは死体埋火葬許可証というらしいが、これさえあれば、どこの火葬場でも焼いてもらえるんですね」

「そうです」

「埋葬許可証も、以前は死者の本籍地か住所地の役所に申請すると定められていたものが、現在は、死亡地でも、どこででももらえるようになったそうですね」

和栗は昨夜豊島区役所に問い合わせて得た知識を確認した。

「四十五年の四月一日から改正になりました。だから、自宅から遠い旅行先なんかで急死した場合にも、そこの市役所で埋葬許可証をもらい、最寄りの火葬場で焼いて、お骨にして持ち帰れるようになったから、まあ便利にはなったわけでしょうな」

「なるほど」

和栗は一度頷いてから、

「遺体は、もちろん霊柩車で運びこまれるんですね」

「小さな子供さんの場合なんかは、自家用車で来られることもありますし、死体の運搬許可を取っていれば必ずしも霊柩車とは限らないわけなんですが、通常はほとんど霊柩車が使われますね」

「火葬の時間などは、あらかじめ予約しておくわけですか」

「まあそうですね。死亡後二十四時間以後ならいつでも焼いていいわけですが、ここでも一日平均十体はありますから、一応執行時刻を予約する形になる。普通は、前の日くらいに家族か葬儀社の人が埋葬許可証を持って申しこみに見えるようですが」

姉川はチラリと壁の時計を見あげて、

「八時半から受付けがはじまります」とつけ加えた。

「すると、霊柩車は、葬儀社のものが多くくるのですか」

「半々ですね。希望があれば、こちらの霊柩車をさし向けます。その場合には別に輸送料をいただくわけですがね。前の晩からここで通夜をしたり、告別式もできる斎場の設備もありますが……」

姉川は、刑事の来意がどこにあるのかと、しだいに苛立った眼差しになって二人を見比べた。それからまた時計を見あげたりした。

和栗はかまわず、

「なるほどね。盛大な告別式のあと、車を連らねて運びこまれる仏さんもあれば、焼場で通夜をしてそのまま荼毘に付されるケースもあるわけですな。——遺体に付き添ってくる人数なども、まちまちでしょうね」

「それはそうですね。さっきも申したように、遠くから旅行で来ていてポックリ亡くなり、お骨にして自宅へ持ち帰りたいといった場合には、火葬の立会いは、連れあいの方とお子さんだけとか、寂しいこともありますよ」

「うむ」

和栗は唇を両端に引きしめるようにして頷いたが、それは彼の満足の表情だった。

昨夜——笹川雪江の留守宅の斜め下に当たる住宅の主婦から、長谷川刑事が、前日十月二十四日の午後四時ごろ、上の道に霊柩車が駐まっていたという聞き込みを得てから、二人は再度、家主手塚千吉の家を襲った。

手塚をきびしく問い糺すと、さすがに彼は気まずい表情になって頭をさげた。

告白したところによれば——

二十三日夕刻、手塚は突然安宅康信の訪問を受けた。安宅とは、以前土地の買い手を斡旋してもらったことか

ら知り合い、十年来の付き合いがあった。それで笹川雪江も安宅の世話で入居したわけである。

安宅の用件とは——彼の妻が一昨日入院先の病院で癌で死亡した。

本来なら、遺体を自宅へ運び、葬式をして最寄りの葬祭場で火葬するところだが、実は自宅には高校生の娘がおり、これがノイローゼで休学して、通院治療を受けている。娘には、母親の死は隠してある。それを知れば、落胆のあまり、ますます状態が悪化するからと、医師の注意を受けたからである。

そんな事情で、自宅で葬式をするわけにいかない。といって、遺体をいつまでもそのままにしておくこともできないので、ひとまず火葬にし、お骨にしておいて、娘がよくなってから打ちあけるようにしたいと思う。

ついては、雪江に貸している離れを使わせてほしいと、頼みこんだというのである。

つまり、医院から遺体をあの家へ移し、そこから霊柩車で葬祭場へ運びこむという手順である。医院へ直接霊柩車を出入りさせるわけにはいかないからだ。また、いったんは妻の遺体を安置し、自分が通夜をし、葬儀社の人間も出入りするのだから、ホテルや旅館などは使えないし、適当な親戚もない。友人の家といっても、家人が生活しているところでは、いかにも迷惑な話だ。その点、雪江は長く留守のようだから、一晩利用させてもらえまいかと、手をつかんばかりに頼まれた。

「安宅さんとは、付き合いは古いものの、家庭の事情は知りませんでしたが、話を聞けば、気の毒になりましてね。あなた方に隠しておったのは悪かったが、安宅さんから、別に悪いことをやるわけではないが、近所の噂にでもなり、あとで笹川さんの耳に入ってもなんだから、なるべく内々にと頼まれたもんですからね」

手塚は銀歯のちらつく口許をすぼめて横を向いた。彼はよほど多額な謝礼を握らされて、承諾したのではないかと、和栗は推察した。

「すると——安宅さんは二十三日の夕方、あなたに頼みにきて、許可を得ると、その日のうちに遺体を運びこんだのですか」

十月二十三日は、安宅の妻の葬式が東長崎の自宅で行なわれた翌日であり、奈津実が午後阿佐谷のアパートを出たまま失踪した日である。

「そうでしょうな。家の鍵を貸してあげた時、今夜にでも病院の車で移し、一晩自分が通夜をして、明日の午後

葬儀社に頼んで、川崎葬祭場へ運ぶと話してましたからね。霊柩車はなるべく人目につきにくい夕方に来てもらうといっていたが、それを下の奥さんが見かけたのでしょう」

「あなたは立ち会わなかったのですか」

「別にそんな必要もありませんからね。昨日はほかの用もあったし。お通夜の晩には、安宅さん一人ではあんまり寂しかろうから、線香でもあげさせてもらおうといったのですが、いや、それには及ばない、娘の状態がよくなり次第、自宅で形ばかりの葬式をやるつもりだから、その時にでも来てやってほしいといわれるものだから、かえって、そっとしておいた方がいいだろうと思いましてね」

「やっぱり、彼と笹川雪江とは普通じゃなかったんですね」

長谷川が低い声をはさんだ。責めるような響きがこもっていた。

「いや、わたしも確かなことは聞いてませんよ。安宅さんもことばを濁すふうでしたからね。しかしまあ、笹川さんが郷里へ帰って留守だなんてことまで知ってたのを見れば、何もなかったってはずはないと、今は思ってるんですがね」

手塚は長谷川を見返して、うすく笑った。

「それにしても、妙な話だな。安宅に頼まれた時、おかしいとは思わなかったのですか」

和栗が持ち前の、冷ややかに響く声で訊いた。

「でも、川崎市役所の埋葬許可証もちゃんと見せてもらったんですからね。死者の名前は安宅多恵子さんだし、住所や続柄なんかもまちがいなかったのだから、疑いようがないじゃありませんか」

手塚は開き直るように言い返した。

しかし——安宅が、妻多恵子の葬式を十月二十二日に東長崎の自宅で行ない、同じ日に、杉並区堀の内の葬祭場で火葬に付したことは、すでに確認ずみだった。近所の主婦は出棺のさい、多恵子の死に顔に別れを告げたとものべている。また、堀の内葬祭場には、死者の住所地の豊島区役所発行の埋火葬許可証が提出されている。これは多恵子が死亡した十月二十一日の夜九時ごろ、安宅自身が区役所へ出向いて交付を受けたものだ。埋火葬許可証は、夜間でも、宿直員が申請に応じて交付するのである。

すると——手塚の話から推せば、同じ安宅多恵子の名

で、もう一枚、川崎市役所の埋火葬許可証が発行されていたことになる。それに基づいて、笹川雪江の留守宅から霊柩車で川崎葬祭場へ運びこまれた遺体は誰だったのか？

すでにおよその推測がついた。

林奈津実の他殺死体にちがいあるまい。

だが、昨夜の時点で手塚をいくら追及しても、これ以上の進展は望めなかった。手塚は本当に遺体を見なかったようだし、出入りした葬儀社の名も知らないというのも、嘘ではないらしかった。時刻もすでに午前零時を廻っていたので、とりあえず川崎葬祭場の場長へ電話を入れ、今朝八時にここを訪れる旨連絡しておいた……。

「話は戻りますが――」

和栗は、もう一人の職員と私語を交わしている姉川場長の太り肉の横顔を見返った。場長はなお少し、業務の指示らしい話を続けてから、渋々のように顔を戻した。

「埋火葬許可証を申請するのは、死者の本籍地や住所地に限らず、どこの役所でもかまわないということですが、申請に必要な書類はどんなものでしたかな」

「死亡届と死亡診断書ですよ」

「それだけですか」

「それで十分じゃないですか」

姉川は苛立った返事をしたが、ちょっとそれを反省した口調になって、

「普通、死亡届と死亡診断書とが横に連結した用紙が、区役所や病院に備えてあるんです。それをもらって、死亡診断書は医師に書いてもらい、死亡届は届出人が記入する。それを提出すれば、役所では両方に書きこまれた死亡者の姓名、年齢、死亡の原因などにくいちがいのないことを改めたうえで、引きかえに埋火葬許可証を交付してくれます。それで、死亡後二十四時間以後なら、いつでも焼けるわけです」

「つまり、死亡届と死亡診断書があって、両方の記入にくいちがいがない限り、どこの役所でも、その場で埋火葬許可証を出してくれる。そして、埋火葬許可証さえあれば、どこの火葬場でも焼いてもらえる……」

場長の目に強い視線を当てたまま、和栗は復習し、それからふいに息をつめて黙りこんだ。

埋葬の法的手続きには、実に簡単な盲点があった！

医師は、同一人の死亡診断書を、遺族の需めに応じて何枚でも書く。これは、近親者の死を処理した経験のある者なら誰でも知っている。死亡診断書も死亡届も、役

所に届けるほか、勤務先や保険会社などに提出する必要のある場合が多いからである。会社や保険などに関わりのない死者の場合にも、たとえば——和栗の母は三年前老衰で死んだが、彼女の本籍地は福島県にあり、和栗が住所地の板橋区役所、つまり死者の本籍地ではない役所に届け出たところ、死亡届と死亡診断書を二組要求された。一組は区役所に一定期間保管し、あと一組は本籍地へ送るためだという。それで、和栗は、医師に確か最初の一通は二千円、二枚目からは千円余りの手数料を払って、二通の死亡診断書を作ってもらったことを憶えている。

つまり、死亡診断書は、同一のものなら何通でも手に入るのだ。

死亡届は遺族が記入するものだから、これももちろん数に制限はない。

要するに、埋火葬許可証を取得するための書類は、簡単に複数用意することが可能なわけだ。

これを安宅康信の犯罪に当てはめて想定してみる。

彼は、二通かそれ以上の死亡診断書を、妻の入院先の院長に書いてもらった。横の死亡届は自分で書きこむ。

その一組を、妻の死亡した日の夜、豊島区役所に提出して、埋火葬許可証の交付を受けた。これを堀の内葬祭場に示し、翌十月二十二日妻多恵子の遺体を火葬に付した。

ここまでは、法的に問題ない行為である。

ところが、彼は次の日の午後、おそらくどこかで林奈津実と会い、人目につかぬ場所で彼女を殺害した。その方法は、死体の外見では病死と区別しにくいような、たとえば気を失わせたうえで心臓発作を誘発する薬剤を注射するなどの方法を選んだと想像される。

死体を生田の笹川雪江の家の近くまで運んでおいてから、手塚千吉を訪ね、多額の謝礼を握らせて、首尾よくあの家を利用する承諾を得た。安宅はあの家の勝手を心得ていたであろうし、古い日本家屋だけに必ずしも鍵を借りなくても侵入できたかもしれない。また手塚の自宅とも離れているのだから、わざわざ断わらなくてもよかったとも思われるが、もし霊柩車が近所の人の目にふれ、噂になったり、それが手塚の耳に入った場合、無断であれば問題になり、都合の悪い臆測を誘う恐れもある。それよりは、事前に手塚を懐柔しておいた方が得策だと踏んだのであろう。

次に彼は、もう一組の安宅多恵子の死亡診断書と死亡

届を川崎市役所に提出し、埋火葬許可証を取った。許可証には、葬祭場の場所が記入されるから、これには川崎市立葬祭場を指定したのだ。

その後、どこかの葬儀社に依頼して、十月二十四日午後四時に、霊柩車を笹川雪江の家にさし向けてもらった。できれば人目につかぬ夜を選びたいところだったろうが、火葬の執行時間は午後五時までなので、輸送は午後四時ぐらいがギリギリの時刻だったのだ。それが下の家の主婦の目に触れた。

葬儀社の霊柩車が雪江の家に来た時には、安宅は経帷子に着替えさせた奈津実の死体を床に安置し、線香を炷いていたであろう。葬儀社にも手塚に告げたと同様の事情を話し、付き添いが安宅一人という不自然を糊塗したのにちがいない。そこで奈津実の死体は、安宅多恵子の遺体として納棺され、この葬祭場へはこばれて火葬された。

つまり安宅は、妻の病死を利用して、林奈津実の他殺死体をも、公立葬祭場で堂々と荼毘に付したのだ！

「十月二十四日に執行された火葬の記録を見せてくれませんか」

和栗が突然そういって立ちあがったので、姉川はとび出した目を一段と強く見張った。ちょっと不愉快そうに、

「どういう必要でごらんになるのですか」

「当日ここで火葬された遺体の中に、殺人事件の被害者が含まれている可能性があるからです」

「そんな馬鹿な。わたしどもは埋火葬許可証をちゃんと改めてから受け付けているんですからね。運ばれてくる遺体をやたらに焼いているわけではありませんよ」

「それはわかっていますが、とにかくその日の埋火葬許可証を全部見せてもらえませんか」

「許可証はここにはありませんよ。火葬がすめば裏に印を捺して、埋葬書としてお骨といっしょに遺族に渡す。遺族はそれを持って墓へ納骨にいくんですから」

「それなら、許可証の写しでも日誌でもなんでもいい。とにかく、十月二十四日の執行の記録を見せてもらいたい」

和栗が冷然と響く声で決めつけるようにいうと、姉川はようやくのろい動作で窓際のデスクの方へ戻り、ステンレスのロッカーを開けて、分厚いファイルを取り出した。

「二十四日といわれると、これだけです」

十数枚のページをつまんでみせた。

それは埋火葬許可証とほとんど同じ書式で、最後に執行時刻と担当者の名が記入され、捺印されている。

和栗は一枚ずつ、性急な速度で目を通していった。

「安宅多恵子」の火葬の記録は、その日のほとんど最後に挟みこまれていた。

死亡者の本籍　和歌山県新宮市相賀×番地
死亡者の住所　東京都豊島区長崎三丁目×番
死亡者の氏名　安宅多恵子
死亡者の性別　女
出生年月日　昭和××年五月四日
死因　法定伝染病　〇その他
死亡年月日　昭和××年十月二十一日
死亡場所　東京都豊島区長崎二丁目×番　井上産婦人科医院
埋火葬場所　川崎市立葬祭場
申請者住所氏名及び死亡者との続柄　東京都豊島区長崎三丁目×番、安宅康信（夫）

……

火葬の執行は、午後五時と記入されていた。

和栗はかすかな吐息を洩らした。杉並の堀の内葬祭場にも、これと同様の記録が保管されているはずである。ちがうのは、執行日時だけであろう。堀の内では、十月二十二日午後三時に、本当の「安宅多恵子」が火葬に付された。

いや……。

念のため、もう一度記録の最初に戻った和栗の目が、再び緊張を帯びた。

堀の内の記録とちがっているのは、執行日時だけであろうか。

安宅多恵子の本籍地が「和歌山県新宮市――」と記入されていることに、彼の意識がひっかかったのだ。多恵子が安宅の許に嫁いだのは、約十年前で、当時安宅は生まれて以来ずっと暮らしていた三鷹市から現在の豊島区長崎へ移転したばかりであったように聞いている。したがって、安宅の妻となった多恵子の本籍も、三鷹か豊島区長崎に入籍されているはずではあるまいか。昨日の朝、和栗は堀の内葬祭場に電話をかけ、多恵子の姉に聞いたとおり十月二十二日午後三時に安宅多恵子の火葬がそこで執行されたことを確認したが、その時点ではまだ、安

宅が二重の火葬を行なったとまで具体的な疑惑は生じていなかったので、堀の内葬祭場に提出された埋火葬許可証まで改めたわけではなかった。したがって、そちらには多恵子の本籍がどのように記入されているのかはわからない。

これは早急に確かめてみる必要があると、和栗は内心で考えた。

「この仏さんには、どんな人が付き添ってきたのでしょうか。それから、霊柩車はどこの葬儀社のものだったかなど、わかりますか」

「わたしは直接立ち会ったわけではないですが、一昨日のことなら、係の者が憶えているかもしれませんな」

さすがに姉川はやや不安げに太い眉を寄せて、和栗の表情を見守っている。

和栗は頷いた。ほぼまちがいなく、付き添いの遺族は安宅一人で、それに葬儀社の人間が二、三人で棺を運びこんだのであろう。それは間もなく、係の口から確認されるはずだ。

「ところで、市立葬祭場は、市役所の出先機関になるわけですね」

「そうです。衛生局の管理ですが」

「すると、同じ市役所の仕事だから、おわかりになるんじゃないかと思うが、どこの役所にしても、死亡届と死亡診断書を受け取って、埋火葬許可証を交付したあと、その死亡届と死亡診断書は、どんなふうに処理しているのですか」

「ああ、それはですね。死者の本籍地の役所へ届けた場合は、その場で戸籍簿と比較審査し、誤りがなければ埋火葬許可証を渡すわけです。また、本籍地以外の役所へ届けを出した場合には、……この時には、死亡届と死亡診断書を二通用意してもらって、ひとまず埋火葬許可証を交付したうえで、翌日一組を本籍地の役所へ郵送して審査します。もう一組は受け付けた役所で一年間保管しておく。本籍地の役所では、除籍などの処理をしたあと、一カ月後に法務省へ送り、マイクロフィルムにして保管されるはずです」

「なるほど」

すると安宅の場合——多恵子の本籍地は一応ここに記入されているとおり、和歌山県新宮市とする。まず十月二十一日夜、安宅は豊島区役所に死亡届と死亡診断書を提出しているから、それらは遅くとも二十四日ぐらいには新宮市役所に届き、多恵子は戸籍簿から除籍される。

ここまでは問題ない。ところが、二、三日後には、再び安宅多恵子の死亡届等が、川崎市役所から新宮市役所に到着することになる。ここで二重火葬のカラクリが露顕するのではないか？

和栗はあっと思って、再び本籍地の記載に鋭い視線を注いだ。

安宅多恵子の本籍は、やはり三鷹あたりにあるのではあるまいか。

川崎市役所に提出する死亡届には、安宅はわざと遠隔地のでたらめの地名を記入したのではないか？　いや、あるいは新宮市は多恵子の出生地か、ともかく多恵子が安宅の妻として入籍する以前の本籍地であったのかもしれない。とすれば、よりもっともらしいまちがいということになる。

すなわち、安宅は最初豊島区役所へ提出した書類には、三鷹市の正しい本籍地を記入する。書類は翌日そこの役所へ郵送され、問題なく処理される。

次に、川崎市役所には、本籍地を新宮市と書きこんで出す。川崎市役所ではすぐにはその誤りには気づかないはずだから、その場で埋火葬許可証は交付される。そして、死亡届と死亡診断書が新宮市役所へ到着する以前に、安宅が速達郵便か、あるいは電話で、川崎市役所の係員だと偽り、まもなく「安宅多恵子」の死亡に関する書類がそちらへ届くと思うが、発送したあとで本籍地がちがっていたことがわかり、正しい本籍地の役所で処理したから、そちらに届いた書類は破棄してもらいたいと連絡したとすれば……？

役所には、おそらく毎日何枚か何十枚かの死亡届が提出されたり、送られてくるにちがいない。その中には、悪意の有無に関わらず、記入事項に誤りのあるものもいくつか混じっているはずだ。それだけに、まちがいが連絡されれば、いちいち問題にもならず、事務的に処理されるのではあるまいか。

和栗は閲覧したあとのファイルをひとまず場長に返し、次には「安宅多恵子」の火葬を直接取り扱った係員に会わせてくれるようにたのんだ。

事務室と休憩所の建物は、渡り廊下で重油炉のある本館と繋がっていた。場長の後から和栗と長谷川が歩いていった時、ちょうど一台の霊柩車が、黒塗りの大型乗用車に先導されて、広い砂利敷の前庭へゆっくりと進入してくるのが見えた。さっき数台の霊柩車が整列していた車庫からは、すでに二台が姿を消している。火葬執行の

開始時刻午前九時をもうだいぶ廻っているのだ。

こんなふうに、一月一日と友引日の休みをのぞく毎日、どこの葬祭場にも十体から二十体の遺体が運びこまれ、それからはベルトコンベアにのせられたように、能率的、機械的に処理されていくのだ。ここでは、死者は単なる物体、極端にいえば商品としてしか受け取られていないのではあるまいか。

一つの死体をめぐって、何十人から時には何千人の捜査員が活動する警察と、それを書類や物体として処理する役所や火葬場とでは、人間の死に対する感覚もずいぶんちがっているにちがいない。

犯人は、いわばそのズレを利用したのかもしれない。厳密と考えられる公的制度の中にも、思わぬ盲点はあるものだ……。

和栗は、独特の臭気が漂ううす暗い本館の、冷んやりとしたタイル張りに足を踏み入れながら、安宅康信の顔を思い浮かべていた。下膊が張り出し、鼻肉の厚い、河馬を連想させるいかつい中年男の顔。肥満した緒ら顔の容貌が、会うごとに頬の肉を失い、皺の深まった瞼の奥で、小さな濁った目が、疲れきったもの悲しい光を帯びて和栗を見つめた……。

東京で生まれ育っていながら、どこか野暮ったく、無骨にすら感じられた自分と同年配のあの男に、和栗はやはり心の底に奇妙な親近感を抱いているのを覚えた。彼が三つの殺人事件の犯人と確信される今ですら、その感覚が消えずにあることは、和栗にはしかし、さほど意外ではなかった。

それは、いつも捜査に深く没入すればするほど、その対象に向かって陥る、和栗警部補の一種の心の癖かもしれなかった。

2

久藤恭太が、家の戸口のそばにそっとランドセルを置き、黒ずんだベニヤ板のドアを眺めただけでノブには手をかけず、踵を返して歩きだしたのは、午後一時をすぎるころだった。

昼下がりの暖かい陽射しのふりそそいでいる路地や密集した小さな家々のあたりは、ひっそりとしていて、昼食のお菜を煮る匂いがどこからか流れている。でも、それで恭太のお腹が鳴り出すようなことはなかった。今学校で給食を食べて帰ってきたばかりなのだから。

今日は母親の学習参観日で、午後からは懇談会が開かれるので、授業は午前中で終わりだった。だが、恭太の母は欠席している。昨日風邪気味で勤めを早退きしてきたところへ、昨夜はまたまた恭太が襲われる騒ぎで西荻窪署へ呼び出され、恭太といっしょに警察の車で家に帰ってきたのが十時すぎだった。その疲れとショックで、今朝も床についたままだった。

でも、朝学校へ行く時には、熱などあろうとも思われない勢いだったから、今時分はもう起きだしているかもしれない。

そう思うと、恭太は路地の角で一度家の方を振り返っただけで、のんびりとした足どりで広い坂道へ出た。夕方時には近所の友だちや、もっと小さな子供たちの遊ぶ声に満たされる道路の辺りも、今はひっそりとして、時折り車が風を切って走りすぎるだけである。上級生はいつもどおり午後まで授業があるし、同じ学年の友だちは、たいてい懇談会が終わるまで学校で遊んでいて、母親といっしょに帰るのが常だった。

仲間がいなければ野球もやれないし、一人ではサイクリングも気が進まない。それでも狭い家の中に閉じこめられるよりはずっとましだ。母は今朝恭太が登校するこ

とさえなかなか承知しなかったほどだから、いったんランドセルを置きに寄ったりしようものなら、今度こそもっとすごい金切声をはりあげて、一歩も外に出してはくれないだろう。ぼくをつけ狙っていたやつは昨夜逮捕されて、もう決して襲われる心配はないと、どんなに説明しても納得しないのだから。今朝はそれでだいぶ口争いしてしまったが、彼女は「昨夜の犯人は捕まったって、ほかにもお前を殺したいと考えている人間がいるかもわからない。畑山事件の犯人はまだ挙がっていないのだから」と言い張った。

確かに、昨夜のニセ刑事は、善福寺の事件とは直接関係なかったらしい……。

母親のことばが今さらのように脳裡に浮きあがり、恭太のぶらりとした足どりが自然にのろくなった。

昨夜、玉川上水沿いの暗い繁みの中で、いつかの善福寺公園の朝みたいに、逞しい男の腕で救けあげられて土手に立った時、恭太の胸に、自分でも戸惑うほどの、何かすがすがしい喜びと安堵が湧きあがった。

自分をつけ狙っていたのは、あの人ではなかった。だから、あの人は殺人事件の犯人ではなかったのだ……。

ところが、後から少しずつわかってきた様子では、そ

ういう理屈にはならないらしい。つまり、一週間ほど前恭太の家を窺ったり、野球の帰り途をつけてきたりした男と、昨夜恭太を欺して連れ出したのは、桂木という男だったが、彼は金融業者殺しの犯人ではなく、恭太を襲ったのは別の理由、何かあの十月七日の朝蕪蔵寺横の坂道で出遇った女の人と関係のある事情によってらしいのだ。そして、畑山事件の犯人は、依然として、別にいる。

「犯人は別にいたって、ぼくはもう二度とあんなことにはならないさ」と、恭太は母に言い返した。そんな保証があるわけではないが、といって外へ出たいための強がりばかりでもなかったと思う。理屈抜きで、そんな気がしたのだ。

今でも、その自信みたいなものは、変わっていない。昨夜あのニセ刑事に首を絞められた時には、息がつまっていよいよダメかと思ったが、すぎてしまえば、本当に恐ろしい思いをした時間が短かったせいか、夢の中で崖から落ちそうになって目がさめたあとのように、いっさいの出来事に現実感がなく、さほど生々しい恐怖の傷跡を刻みつけられてはいないのだった。

代わりに……恭太は昨夜以来のいつごろからか、胸底に何か重苦しくて、どこかもの寂しい気持ちが湧き溜まってきているのに気がついていた。

あの人は自分を襲ったりはしなかった。でも、金融業者殺しが別にいるというのなら、もしかしたら、彼はやっぱり犯人だったのではないだろうか……？

崖縁から引きあげてくれた時、彼は青黒い顔中に汗をかいていた。「ありがとう」といったのに、振り向きもせず、まるで逃げるように駆けおりていった……。

「久藤さーん」とかん高い声で苗字を呼ばれて、恭太はあわててその方を振りむいた。道路の反対側を同じクラスの女の子が二人、腕を組んで歩いていた。どちらも学習参観にお母さんが来ていたけれど、懇談会が終わるのを待たずに先に帰ってきたのだろう。恭太は無意識に通学コースの道路を歩いていたのだった。左手に、いつか小暮記者と腰かけて話をしたお稲荷さんの赤鳥居が見えていた。

恭太はちょっと笑ってクラスメートをやりすごすと、鳥居の先から細い杉の木がかたまっている方へ岐かれ出ている土道へ曲がった。また友だちと顔を合わせるのが今はなんとなくうっとうしい。

その木立の中の道は、富士見池におりる早道だった。

剣道稽古の行き帰りに通るから、馴染みの道である。畑山事件の翌々日、犯人の一人だったという若い男に乱暴されたのも富士見池でだったが、もうずっと遠い出来事のように思われて怖い記憶もうすれている。あのあとでも、道場へはやはりこのコースで通っているし、それにちょっと暗くて寂しいのは、池の周りとこの木立のある短い区間だけで、あとは住宅で埋まっている。今は真昼の陽光がさしこんでいるので、疎い杉木立の中も野原みたいに明るかった。

恭太が乾いた土道を歩きだした時、池の方からのぼってきた一人の男が、ゆっくりとこちらへやってくるのが見えた。

背はそう高くないが、太り気味のがっしりした体格の男で、茶色っぽい背広を着ている。少しうつむきかげんに歩いてくる足どりは、ゆっくりというより、まるで靴といっしょに重い錘を引きずっているみたいで、足を踏み出す拍子に時折り広い肩がその足の方へ傾いたりしている。

まもなく彼は恭太とすれちがうところまで来た。そこで彼ははじめて恭太に気づいたらしく、端が少し垂れさがった眉をあげ、小さな眸をチラリと動かした。

突然足をとめたのは、恭太だった。

あまり意外だったので、思わず二、三度瞬きし、それでもまだ自分の目を疑ったほどだ。——でも……生え際がうすく、三本ほど横皺が刻まれた広い額、四角く張り出した腮、記憶の中ではもう少し頬の肉づきがよかったみたいだが、何よりもその目が……ちょっとたるんだ瞼の下に今にももぐりこんでしまいそうな、細い三角形の目、底の方に優しい光をたたえた茶色い眸は、まちがいなくあの人のものだ。なぜか、少しも似ていない父親の面影とだぶるように、恭太の心底深く刻まれた懐かしい男の顔……！

男も立ち止まっていた。力なく恭太に注がれていた目の中に驚愕の光があふれ、たるんだ瞼がかすかに痙攣した。彼は前に傾いていた肩を少しあげた。

二メートルほどの地面を挟んで、二人はしばらくジッと視線を合わせていた。

知らぬまに、恭太の頬には笑いが浮かんでいた。恭太は本当に吃驚したが、とっさの心の反応には、不思議なほど恐れも警戒もなく、むしろ何か素晴らしいと言いたいほど、胸が高鳴ってくるのを覚えた。

恭太の微笑を見ると、つられたように、男の表情も緩

んでいった。わずかに唇を歪めたが、はっきりした笑顔にはならなかった。

「こんにちは」と恭太は挨拶して会釈した。

男はゆっくりと彼の全身に視線を移しながら、

「やあ」と喉奥にこもった声で答えた。視線が恭太の顔に戻ると、

「学校は、もうすんだの」

「はい」

それで二人はまた黙って、少し見つめあった。いつかは助けてくれてありがとうと、恭太は言いかけたが、なかなかことばにならなかった。恥ずかしいのと、それになんとなく男がその話題を好まないような気遅れが、唇を強張らせている。

「君の家は、この近所なんだね」

「はい。駅の手前を左に曲がったところ」

恭太が指で教えると、男はうん、うんというふうに、小さく幾度も頷いた。

「おじさんの家もこの近くなんですか」

「いや……池袋の方だよ」

「池袋か」

池袋なら、母に連れられて二、三度行った憶えがある。武蔵関から西武新宿線に乗って高田馬場まで行き、そこで山手線に乗り換えれば、確かに二つ目のはずだ。

「じゃあ、これから池袋へ帰るんですか」

「……」

なぜか、恭太を見おろしている四角な顔が縮むように歪み、鼻と目尻に幾筋も皺が寄った。だが、次には彼はその顔を恭太の背後の空に向け、一度深く息を吸いこんだ。

「いや、今日はいいお天気だから、散歩に出かけようかと思ってね。——ちょっと遠くまでだ」

「ふーん」

恭太の丸い目が好奇心に輝くのを見て、男のカサカサした唇がはじめてほころびた。

「いっしょに行くか」

「うん」と恭太は反射的に頷いた。頷いてしまってから床についている母の姿が心をかすめた。自分で夕飯を拵える時間までに帰れば、そんなに怒らないだろう。

恭太が大きく頷くと、男はかえってやや当惑した表情になった。が、黙って、恭太の来た方へ歩き出した。恭太は半歩ほど遅れて、後に続いた。

「君は、何という名だ?」

「久藤恭太です」
「ああ、そうだったな」と男は呟いた。
「おじさんは？」
なお二、三歩歩いたあとで、
「安宅康信というんだよ」
彼はまた喉にからんだ声で、低く答えた。
ふいに恭太の瞼に、十日ほど前、西荻窪署の和栗係長が訪ねてきて、恭太に見せた写真の一枚が浮かびあがった。その写真の男は、黒縁の端がつりあがった、テレビのガードマンか何かのような洒落た眼鏡をかけていた。それですぐ「見憶えがない」と答えたのだが……あの写真の男は、やっぱりこの安宅ではなかっただろうか？—急にそれを思い出したのは、たぶん、いつどこでかは忘れたが、刑事たちの低い会話の中に「安宅」の名を聞いた憶えがあったからかもしれなかった。
武蔵関の駅前も、昼下がりののんびりとしたムードに包まれていた。空のタクシーが二台駐まっていて、運転手たちは外の広告板にもたれて煙草をふかしていた。
が、駅の近辺まで来ると、安宅は心持ち気忙しげな足どりになり、素早く周囲に首を廻らせてから階段をずんずんのぼっていく。
のぼりきったところが切符売場と改札口になっている。
安宅は遅れてくる恭太を振り返り、少しの間その顔に視線を止めていたが、背広のポケットからコインを取り出して、自動販売機に入れた。
二枚の切符がすべり出てきた時、恭太ははじめてかすかな不安を覚えた。でも、その販売機は高田馬場行のものだ。高田馬場なら、二年の時外耳炎の治療に一人で通ったこともある。あそこまでなら二十分あまりだし、駅の勝手もわかっている……。
安宅が促すように軽く恭太の肩を叩き、二人は続いて改札口を通った。
フォームもすいていて、胸に名札をつけた幼稚園児が数人、女の先生に連れられて電車を待っていた。駅の柵の向こうには、野菜畑と、ゴルフ練習場のネットがぼうっと緑にかすんで見え、その方から澄んだ風が渡ってくる。本当に、散歩にふさわしい午後だ。
安宅はフォームの外れまで歩いていき、ジッと佇んでいる。急行電車が停まらずに通過した時、苛立ったようにちょっと前歯をこすりあわせた。
ようやく、濃いピンクとクリーム色に塗り分けられた電車が入ってきた。彼はさっきみたいに素早く前後に首

を動かしてから、大股に乗りこんだ。座席は半分ぐらいあいていたが、反対側のドアに寄りかかって立った。恭太もそれに従った。

ドアが閉まって電車が動きだすと、安宅はそれとなく車内を見廻していた顔を窓外に向けて、疲れたように息を吐いた。

そんな安宅の様子が、また恭太に、和栗に見せられた写真の、不似合いな眼鏡をかけた陰鬱な表情を連想させた。和栗には「知らない」と答え、その翌日、学校帰りに日本新報の小暮記者と出会い、あのお稲荷さんの前で話をした時にも、とうとうその写真のことは口に出さなかったものだが……。

次には、小暮記者の、いつもどこかおおらかな輝きをたたえた明るい眸が浮かびあがった。すると急に、胸の中にさわやかでおとなっぽい気分が満ちてくるのを覚えた。それはまた、なんとなく勇気をふるいたたせるような軽い興奮の波だった。

恭太は安宅の横顔を真っ直ぐに見あげた。

「おじさんは、警察に追いかけられているの」

ことばに出してしまってから、恭太は急に足がすくむような緊張に捉われた。

いきなり少年にそう訊かれると、安宅康信は一瞬鳩尾に冷たい衝撃を覚えた。思わず周囲を見廻し、そばに人のいないことを確かめてから、

「いや」と首を横に振った。

「警察に追われて、逃げているんじゃないんですね？」

恭太は子供特有の青いほど澄んだ目で、たじろがず見上げてくる。安宅は不安定に視線をそらしながら、ふと、この子を人質にしたら……という意外な考えが意識をかすめた。今こうしている間も、どこかから私服刑事の目が自分を観察しているかもしれない。尾行されていないつもりでも、苛酷な追跡者たちが、ジリジリと包囲の輪を縮めているかもわからないのだ。

追及の手がもう身近まで迫っていると直感したのは、一昨日の夜、川崎から疲れきって帰宅した矢先、留守番をたのんでいた多恵子の姉に、和栗警部補の再度の来訪を告げられた時だった。人の好い姉の久枝は、葬式にも顔を見せた刑事がまた様子を尋ねにきてくれたと単純に感謝していたが、あの冷徹そうな男が、思惑もなしに二度も東長崎まで足を運ぶとはとうてい考えられない。帰りがけは、娘の文子を送り届けてくれた近所の山口という主婦の後を追うようにして辞去したとの話なので、昨

日はちょうど朝から文子の世話をやきにきてくれた山口夫人にそれとなく探りを入れてみた。案の定、和栗は表通りで彼女を呼びとめ、多恵子の出棺の模様などを妙にしつこく聞いていったというのである。

和栗は、「安宅多恵子」の二つの棺について、すでにおよその真相を洞察しているのではあるまいか？

昨日の午後から、安宅は外出がちになった。出先から会社へ電話を入れ、気が弱くて正直者の若い社員の樋口の応答の様子から、異変のないのを確かめてから帰るようにした。

昨夜は一晩考えた末、今朝早く車で文子を千葉の久枝の家へ連れていき、当分預かってもらうことにした。文子は学校を休むのを気にしていたが、最悪の事態になれば、結局文子は久枝に頼むしか道はないのだ。

十一時前に東京へ戻り、田無で以前から約束のあった地あげ業者と会い、用談をすませて青梅街道を引き返した。東伏見の辺で昼をすぎ、空腹は覚えていなかったが、朝もろくに食べてなかったので、ドライブインに入って休憩した。カレーライスをジュースで流しこみ、それでも食べたおかげで少し疲れがとれたような気がしたところで、会社へ電話を入れた。

警察の気配を感じたのは、電話が通じた直後だった。応答した樋口は、安宅とわかった途端、「あっ、社長……」と呟いたまま絶句した。続いて背後に聞き慣れぬ男の声を感じ、安宅は反射的に赤電話の受話器を置いた。ついに刑事に踏みこまれたのだと直感した。すでに逮捕状も出ているのかもしれない。

ドライブインを出ると青梅街道を外れ、住宅街の空地の塀の陰に車を駐めた。このセドリックで自分が外出したことは、とっくに警察に知れているだろう。逃げたと悟れば、彼らはすぐこの車をマークするにちがいない。もう車は乗てなければならないと思った。

穏やかな秋の陽射しがふり注いでいる静かな道路を、あてもなく歩きだした。重く冷たい鉛の塊をのみこんだような絶望感の反面、昨夜ほとんど眠っていないところへ膨らんだ胃袋を抱え、あたたかい陽光に照らされて歩いていると、ふと快い睡魔が全身にひろがってくるのを覚えた。時折り彼はよろめいたが、強いて自分の身体をしゃんと立て直そうともしなかった。いっそ道端のやわらかそうな叢の中に倒れこみ、何もかも投げ出して眠りたかった。富士見池のそばに出ても、だからほとんど何も感じずに通りすぎてしまった。

思いもかけず、久藤恭太に出くわしたのは、また住宅街の道路に戻りかけていた時だった。

選りに選ってこんな時、妙に人なつこいこの少年と再会し、いっしょに散歩に出かけることになるなんて……この子を人質にして逃げろという天佑かもしれない……。

「おじさん」

恭太の声が、ふいに遠くから聞こえた。意識は緊張しているつもりでも、安宅は電車のドアに上体を預け、脚をつっぱってどうにか身体を支えている恰好だった。恭太が少し心配そうにのぞきこんでいた。

「おじさんは……本当に人殺しとは関係なかったんですね？」

先刻の、真っ直ぐに問い糺す口調とはちがい、その声には、そしてちょっと眉をしかめて鼻の上に縦皺を寄せた表情にも、かすかな労りともつかぬ優しさがこもっているように感じられた。子供の目にも、安宅が疲れきって見えたからかもしれない。

さっき、警察に追われているのではないかと訊かれて、それに対してキッパリした答えをしていなかったことに、安宅は気がついた。だが、結局今度も、

「ああ」とわずかに首を振るだけしかできなかった。

「それなら、もっと早く警察に行ってやればよかったのに。警察では、ずいぶんおじさんのこと捜していたよ」

「ああ……」

そうだったのだ。もっと早く——せめて浩司が富士見池でこの少年を殺しそこなった直後にでも自首していたら……いや、そもそも畑山欣造に不正な担保で三千万円融資させようと計画を練りはじめた当初から、何度か思い留まりながら、金繰りの苦しさと浩司に尻押しされた恰好で、ずるずると踏みこんでしまった。金を借りてしまうと、後はどうしようもない不運な展開が、われながらいまだに信じられないほどの大それた犯罪へ、次々に自分を駆りたてていった。まったく、いったん犯罪者の傾斜を転がりはじめたら、人間はその加速度に巻きこまれ、ひたすら転落していくほかないのだろうか……。

「どうしようもなかったんだ」

安宅は知らぬまに呟いていた。が、次にはそのことばの無力と無様さが、苦汁のように胸にひろがった。

電車が高田馬場のフォームに入って停まった。ドアが開き、踏み出す前に、恭太が安宅を振り返った。

「それじゃあ、おじさんのこと、やっぱり警察に言わなくてよかったんだね」

「うむ……」
「それなら、これからも黙っておくよ」
安宅は子供の肩に手をかけた。
「それより、今からどこへ行こうか。どこへ行きたい？」
自分の声に、子供に媚びるような不自然な弾みがついているのを安宅は感じた。
「そうだなあ……」
恭太は迷った目で、フォームの上に吊るされた時計を見あげている。針は二時十五分をさそうとしている。彼は、行先に迷うというより、もっと遠くへ出かけることを躊躇しているふうに見えた。
「海を見にいこうか」
安宅は急いで言った。
「海と大きな船の見える、東京港の方にでも行くか」
当時はまだ山深い趣きすら残っていた三鷹で生まれ育った安宅は、東京近郊に住む子供にとって、「海」がどんなに胸弾ませる対象であるかを知っている。
案の定、恭太は反射的に振り向き、軽く口を開けた。
安宅は黙って子供の肩を軽くひき寄せながら、乗り換え階段の方へ歩き出した。

十章　港へ

1

内廻りの山手線は、思いのほか混雑していた。そろそろ、中学や高校の下校時間にかかるのか、膨らんだ鞄をさげた女子高校生や、運動用具を抱えた中学生のグループなどが、声高に話しあいながら出入口の前を占領している。
駅ごとに乗降客が多いので、二人はさっきのようにドアに凭れているわけにはいかず、奥へ押しこまれて、安宅は吊皮につかまった。恭太はその横で、座席の端のパイプを握って立った。
新宿ではだいぶ降りたが、また乗ってきたので、混雑は同じだった。押されても、身体が傾いても、恭太はま

るでそれすら気づかないような顔で、熱心に窓の外に見入っている。高田馬場までは慣れた様子だったが、山手線に乗る機会は、めったにないのかもしれないと思いながら、安宅はいっとき、日灼けした子供らしい横顔を見守っていた。

この子を人質にして逃げるとすれば……何か武器が必要なのではあるまいか。とりあえずナイフをどこかで買って、警官に囲まれた時には、それを子供の胸に突きつけるのだ。俺に手出しをすれば、この子の命がないぞ。——だが、相手が大勢で、後からとびかかられたら……いや、時々新聞にのる事件のように、公衆便所とか、どこか狭い場所にたてこもらなければならない。

しかし、その先はどうなるのだろうか……？

安宅はふいにズーンと後頭部に鈍い震動を覚え、眩暈に襲われて吊皮をきつく握りしめた。

そんなことは無理だ。今さらそんな真似をしたって、もうとうてい逃げきれはしない。これまで通りがかりの若い女性や主婦を人質に取ってたてこもった犯人たちが、結局その砦から脱出できた例など一度もなかったではないか。

いや、たとえほかの人間にはやれたとしても、自分のどこにそんな度胸や機敏さがあるというのか……？

まったく、自分は生来臆病者だったはずなのに、それがどうしてあんな恐ろしい罪を重ねてしまったのだろう——？

安宅はまた陰湿な思いにひきこまれた。

最初はとにかく三千万円手に入れたかったのだ。警察には取り繕った話でごまかしておいたが、近年の不景気続きで「商安土地建物」は実はもうどうにもならないところまで来ていた。不況の波は、まず株や不動産に押し寄せる。商いが成立しない。物件が動かないから、利益がまったくあがらない。運悪く、景気が下降する直前に、都内と田無にとびつくような売り地を見つけ、それで手持ちの物件を担保にして銀行や信用金庫から約一億円借りて買い取った。その土地にいっこうに買い手がつかず、金利はかさむ一方で、小さなアパートの管理費ぐらいでは焼け石に水の役目も果たさなかった。おまけに、これは小さな宅地だが、五百万円手金を打ったままになっている物件がある。期限の九月三十日までに残金二千万円を支払わなければ、みすみす五百万円が手金流れになってしまうのだ。

その二千万と、金利と分割返済の元本とが約一千万円

溜まっており、当面三千万円、なんとしても工面しなければならなかった。そのうちには、景気が持ち直すか、どれかの土地に買い手がつくだろう。

しかし新たに金を借りようにも、家や会社の土地はもとより、手持ちの物件はすでに全部抵当に入ってしまっているから、この金詰まりに加えて担保なしでは話にならない。

いや、あの土地を利用できないものだろうか？

三鷹の地つきの業者だった亡父から譲りうけ、すでに大部分分筆して形ばかりの本筆が残っている練馬区の北端部にある山林が、安宅の脳裡にぼっかり浮かびあがったのは、九月中旬のことだった。

その山林は、父が戦前から三町歩五反（一万五百坪）ほど所有していたが、少しずつ切り売りして、安宅が相続した時点では、約五千坪に減っていた。いや、それも登記面のことで、彼がサラリーマンをやめて自分も不動産業者として独立する決心をし、資金に充てるため分筆するつもりで念のため実測してみたら、実質は四千坪強しかなかった。登記面より約千坪少ない。つまり千坪の「縄縮み」があったのである。

が、山林や畑などでは、こんなケースもめずらしくないので、ともかく実質四千坪の山林を、約千坪ずつ四回に分けて売却した。そのさいは正確に実測して分筆せざるを得ないから、結局安宅の手許には、登記面三千九百平方メートル（約千二百坪）、実質約五十坪の本筆が残っていただけだった。

坪当たり何百万もする宅地ならいざ知らず、五十坪の山林では大した財産価値もないので、経営が順調な時にはほとんど忘れた恰好で、放置してあったのだ。

しかし、こうした不動産の事情にうとい相手なら、ともかくも三千九百平方メートルと明記された土地の権利書が物をいうのではあるまいか？

幸い、すでに売却したその土地の周囲は、まだ山林のままで残されていて、境界線などは一見しただけではほとんど見分けられず、隣接地の持ち主の立会いを求めて実測しなければ、判別できない状態になっていた。

とはいえ、取引先の銀行や信用金庫ではすでに枠一杯に借入れしているから相手は市中金融業者が望ましい。

安宅の内情を知らず、権利書の記載に疑いをさしはさむこともなく、それを担保に預かって融資してくれる業者はいないものか。山林といっても練馬区内だから、安く見積もって坪十五万円は下らない。それが千二百坪な

ら、三千万円の担保としては十分すぎるくらいである。

いったん心に芽生えた誘惑は、どうにも消し去ることができなかった。いや、不動産は不景気の煽りを受けやすい代わり、商いの額が大きいだけに、立ち直りも早いのだ。それがこの商売の魅力である。だから、いずれ損失を挽回して、元金を返済し、担保物件をそのまま回収すれば、融資元には結局何の実害も与えずにすむわけではないか。

安宅はふと、異母弟の浩司が、杉並区善福寺に住む金融業者の妾になっている女と付き合っていると洩らしていたことを思い出した。浩司は中野区本町のアパートに住んでいて、半月に一度ぐらいの割で小遣銭の無心や車を借りにきたりしていたが、ソリの合わなかった嫂の多恵子が八月初めに入院してからは、週に二、三度、たいてい会社を閉めた後の夕方か夜に住居の方へ顔を出し、自分で夕食を拵えて食べていったりしていた。高校時代に不良仲間に加わって家出した浩司だが、根は寂しがり屋で、小学三年の時引き取られてから約八年間、少年時代を同じ屋根の下ですごした安宅を、やはり心の底ではただ一人の兄と慕っていたふうだ。口ではけむたそうに言いながらも、本心ではまたいっしょに住みたいのではないかと、安宅は小まめに立ち寄るようになった浩司を見ながら思っていたものだ。浩司に、最初はそれとなく善福寺の金融業者のことを尋ねてみると、一人暮らしの変屈な老人だが、相当な資産家らしい。融資を頼むには恰好な相手のように思われた。

結局、浩司を通じて林奈津実に、安宅を彼女のバー勤めのころの古い馴染みというふれこみで畑山に紹介してもらい、安宅は九月半ばに一人で善福寺の畑山の家を訪問した。浩司には、担保の内容は話さなかった。

融資の依頼は成功した。畑山欣造は、想像どおり口が重く、やや冷たい印象を持つ老人だったが、安宅が持参した登記書を改めたうえで、三千万円の貸付けを承諾してくれた。登記書には書類上の誤りや不正はないわけだから、土地の実在を疑う素振りもなかった。

二日後、安宅はもう一度訪れ、土地の権利書と印鑑証明と委任状を担保として差し出した。その三つが揃っていれば、いつでも登記所に登録して、抵当権を設定できるのである。引き換えに、畑山は三千万円から一ヵ月分の利子を差し引いた額の現金を安宅に渡した。

期限は半年、利子は月五分の契約で、安宅は借用証書を書いた。

ところが、「幻の土地」の実状は、わずか半月後に畑山に看破されてしまったのである。これには、安宅にとって不運な偶然が作用した。畑山は偶々別の筋から、やはり不動産担保で融資の依頼を受け、その商談の途中で、登記面と実質に大きなズレがある土地のケースを、雑談として耳に入れたらしい。畑山は虫が知らせたのか、その日のうちに専門の業者に安宅の山林を実測させ、たちまち担保の不正を発見したのである。

安宅は電話で畑山の家へ呼びつけられ、それからは苛酷な請求が始まった。即刻元本を返すか、さもなければ詐欺で訴える。同時に民事訴訟を起こして、商安土地建物のほかの物件を差し押えるというのだ。だが、金はすでに右から左へ支払いに充ててしまったし、いずれの訴えを起こされても、不動産業者として致命的である。

担保の不正が発覚すると、奈津実も当然畑山に妙な客を紹介したと責められ、その事実は浩司の耳にもとどいた。それで安宅は、浩司に、細かい事情を打ちあけざるを得なかった。

追いつめられた安宅を見て、「畑山殺害」を先に口に出したのは、浩司であった。浩司は根は気が弱く、それでかえって、何か問題にぶつかると短絡的な行動に走ろうとする性向があった。しかも、いったん思いこむと前後の見境もなく暴走する。奈津実の口ぶりでは、畑山は常時金庫にまとまった現金を保管しているらしい。彼を襲い、現金といっしょに、担保物件の権利書や印鑑証明などを奪い去れば、証拠も消えてしまうのではないか？

安宅も、考えるほどに、この計画は好条件に恵まれているような気がしてきた。

第一に、畑山は一人暮らしの老人で、人付合いも少ないらしいこと。

第二に、担保の不正が発覚してからも、彼は出不精なのか、安宅との交渉はもっぱら畑山が電話してきて、安宅が善福寺へ出向くという形で行なわれており、したがって、商安土地建物の二人の社員は、畑山と安宅との関わりあいをまったく知らないこと。

第三に、これは借用証書を渡す時打ち合わせて心得ていたのだが、畑山が安宅に貸した三千万円は、税務署に届けないいわゆる裏金で、したがって彼は土地の権利書と印鑑証明を預かったものの、すぐには抵当権設定を行なっていないこと。（安宅も会社が赤字で費用の計上は差し当たり関係なく、借り入れを申告しない約束であった）となれば、浩司は深い知識もなく言ったことだが、

確かに、畑山の手許にある権利書や、借用証書など一切を奪ってしまえば、安宅が畑山に借金していた事実は、痕跡を留めないわけである。

やがて、自分でも不思議なほどすらすらと、安宅の中に綿密な犯行計画が練り上がっていった。

その計画には、どうしても共犯者が一人必要だった。そうなれば浩司しかいない。

安宅を踏み切らせた最後の理由は——彼は本気で、あの時はそう考えたのだと思っていた。つまり、今度の畑山殺しに浩司を加担させ、彼を共犯者にしておけば、今後彼は、自分に背いて勝手に暴走するような生き方はしないだろう。何でも自分に打ちあけ、相談せずにはいられなくなるにちがいない。とすれば、今自分がこの窮地を切り抜けさえしたら、今後浩司も決して人生を誤ることはないのだ！

十月七日午前五時四十五分に、安宅は蕪蔵寺のまだ暗い境内で、浩司と落ち合った。浩司は中野本町のアパートから、安宅は自分のセドリックを運転して東長崎の家を出てきており、車は善福寺公園内の木立の陰に駐めておいた。

六時ちょうどに二人は畑山の家を訪れた。

安宅がブザーを押すと、ほどなく、大島の着物を着た畑山が玄関の錠を外して二人を迎え入れてくれた。

これにも無論事前に手はずが整っていたのだ。安宅はその二日前、畑山に、問題の山林は折りよく買い手がついたので、売却して、その金で元金の一部を返済したいと伝えた。買い手は神戸に本社のある食品会社で、今度東京進出が決定し、あの辺一帯の山林を買収して、工場を建設する計画である。その中に安宅の土地も含まれたわけだが、抵当に入っているなどの事情を話したところ、先方は正式契約の前に一応書類を確認したいといっている。そこで担当の社員を連れていくから、権利書と借用証書を見せてやってほしいと告げた。

また、先方は坪二十万円で買い取る意向なので、五十坪なら一千万円になる。まずその一千万を畑山に返し、残りの二千万円も早急に工面する。もし多少でも長びくようなら、代わりの担保を用意するからとなだめた。

畑山としても、当面山林を売却させて、一千万円でも回収しておいた方が得策だと踏んだらしく、すぐ承諾した。食品会社の社員を連れていく時刻についても、その日正午から本社で重要な会議があり、それに間にあうよう帰らなければならないからと理由をつけて、午前六時

を指定した。畑山も日ごろから早起きのたちで、朝なら何時でも平気だといっていたし、安宅の口実も怪しまなかったようである。そこで、その朝の浩司は、チャコールグレーの地味な背広で、食品会社の総務課次長を装い、安宅が用意した偽の名刺を持参していた。

二人は玄関前の応接室へ通された。

そこで安宅が畑山に浩司を紹介し、権利書と借用証書を持ってきてほしいと頼んだ。

畑山の足音が廊下の先に消えたと同時に、二人は立ち上がった。暗い真っ直ぐな廊下を、浩司が先に立って、畑山の後を追った。家の大体の間取りは、浩司がそれとなく奈津実から聞き出していた。安宅は、家から自分の胴に巻きつけてきた丈夫そうな腰紐を、後ろ手に隠し持っていた。二人とも息をひそめ、足音を殺した。畑山に金庫を開ける前に気づかれれば、たとえ彼を殺しても、金庫のダイアルナンバーがわからず、みすみす重大な手懸かりを残していかなければならない。

突き当たりの八畳間にだけ電灯がついていた。そこが畑山の寝室で、貴重品も同じ部屋に集められているらしいのだ。

二人が、入口の柱からのり出してのぞきこんだ時、畑山は金庫の前に屈み、蓬髪の後頭部をちょっと傾けるようにして、鍵をさしこんだところだった。次に、ダイアルを廻した。右と左の両方へ何回か廻している。これが安宅には耐えがたいほど長い時間に感じられた。ようやくその手順を終えて、鍵を直角に倒すと、カチリと重い扉が外へ向かって開いた。

その直後に、畑山はゆっくりとこちらへ顔を向けた。かすかに人の気配を感じ、まだ半信半疑で振りむいたという印象だった。その表情が硬直するのと、二人が躍りこんだのとは同時だった。畑山は床の間の方へ逃げたが、安宅に組みつかれて倒れた。そのうえに浩司が馬乗りになった。抵抗する両手を、安宅が頭の側からおさえつけた。そのまま安宅が腰紐で首を絞めようとしたが、うまくいかず、結局浩司が紐を受け取り、安宅が両手を押えている間に、二重に巻きつけて、喉仏で力一杯絞めた。畑山はほとんど声もたてられなかった。

ぐったりとなった身体を、最後に俯せの姿勢にしたのは、安宅の仕業である。

金庫の中には種々な証書類がそれぞれ封筒に納めて保管されていた。予想どおり、問題の権利書、印鑑証明、委任状、および借用証書が、まとめて封筒に入っていた。

現金は思いのほか少なく、あとで数えたら四十万円足らずしかなかった。

現金と書類のほとんどを、浩司が出張中の社員らしく携帯してきた鞄につめこんだ。

畑山の家を出た時は、六時二十六分になっていた。

蕪蔵寺の本堂の裏で、二人は左右に別れた。浩司は坂の上の野原の道を通って青梅街道へ出る。安宅は下の公園内に駐めてきた車へ戻る。

鞄は安宅が預かり、一人で寺の生垣をくぐって坂道へ出たところで、谷川に落ちかけていた恭太と行き遇ってしまったのだった。

あんな際、なぜわざわざ助けあげたりしたのか……。

安宅は、今傍らで電車の震動に身を任せながら、相変わらず車窓に見入っている少年の横顔を眺めて、不可解というより、いっさいがふと非現実的な事柄にさえ感じられた。——とにかく、土手にしがみついている子供に気がついた途端、女の子だと思った。あとから考えれば、剣道着の黒い袴が、女児の襞スカートに見えたのかもしれない。反射的に、まだ家で寝ているはずの娘の文子を思い出した。するとたまらなく痛々しい思いに胸を衝かれた。目の前の子供がではない。父親の所業も知らず、一人で眠っている文子がである。土手にいる子供は、文子よりまだ小さいようだった。いや、実際には恭太は文子より一級上の小学三年生だったのだが、小柄なうえ、少しだぶついた稽古着の筒袖から細い腕を出して、必死に草を握っている姿が、ごく幼い子供のように見えた。そしてその下では、一両日の雨で増水した谷川が底力のある響きをたて、落ちたらとても助からないと感じた。文子より幼少な子供と思いこんでいたから、「目撃者」になる危険性など考えもしなかった。ただ、一刻も早く現場から遠ざかりたい本能が、一瞬だけ彼を躊躇させたのだったが……。

翌日の夜十時すぎ、犯行後はじめて安宅の家に現われた浩司は、動揺の色を帯びていた。林奈津実が事件をどんなふうに見ているか、気になるので、先刻阿佐谷のアパートを訪ねてみたという。奈津実はやはり安宅と浩司の仕業と見透かしているふうだった。担保の不正で畑山が激怒していた経緯も知っていたし、浩司が畑山の家の間取りを尋ねたりした直後なのである。さすがにことばには出さなかったが、こちらも口先で否定しても無意味だと悟らされた。代わりに浩司は、万一警察の容疑を受ける羽目になれば、奈津実が手引きしたことにするとい

った脅しを匂わせて、他言無用を誓わせてきたという。

ところがその帰りに、どうやら刑事に尾けられたようだ。あやうくタクシーにとび乗り、まともに顔を見られずにすんだが、捜査の手は早くも奈津実におよんでいる……。

安宅にしても、警察がそれほど早く奈津実をキャッチするとは思っていなかっただけに、心が寒くなった。

逃走経路の話になり、安宅が剣道着姿の少年を、最初は幼い女の子と錯覚して土手から助けあげた一件を話すと、浩司は唇を引きつらせて彼を責めた。どうしてわざわざ「目撃者」をつくるような愚を犯したのか。黙殺して走りすぎていれば、その子は安宅が通ったことさえ気づかなかったかもしれないのに。奈津実には固く口止めしたものの、もし彼女が執拗な追及に耐えきれず、浩司なり安宅なりの名を洩らせば、二人とも芋蔓式に容疑を受けるだろう。その時、その少年の「安宅に会った」という証言は、決定的な証拠になってしまうではないか。現に、捜査本部では現場付近の目撃者を捜し求めて、聞き込みに歩いている様子だ。

そして浩司も、現場からの帰り、上の野原の道で、ある女に出遇ったと、不安そうに呟いた。

「なんといっても小さな子供だから、彼の話を警察がそれほど重視するとは考えられない。それに、あの子はきっと何も喋らないだろう」

安宅はあまり根拠のないことばで浩司をなだめ、畑山の金庫から奪った四十万円のうち、二十万円を彼に分け与えた。

しかし——翌日の夕刊で、安宅は浩司がその朝富士見池で例の少年を襲ったことを知った。いや新聞記事には、その未遂事件は善福寺の金融業者強殺事件とは無関係な形で小さく報道され、少年の名もK君としか出ていなかったが、現場の位置や犯人の年恰好、そして前夜の浩司の様子などから、彼の仕業にちがいないと直感した。

翌日の夜再び顔を見せた浩司に詰問すると、案の定、池畔の林の中で子供の口を封じてしまおうと思ったが、折り悪しくパトロールの巡査が道を通りかかり、気配に気づいたので、子供を放して逃げたと、ふてくされたように答えた。その前に、剣道道場に当たりをつけ、そこへあの蕪蔵寺の坂道から通ってくる子を見張っていたところ、それらしい少年が私服刑事か新聞記者らしい男と話しながらのぼってくるのが見えた。やはり捜査側はあの子をマークしている。急がなければ危険だと感じた。

別の道から来た子供たちに尋ねてみると、少年は久藤恭太という名で、一昨日の事件以来、彼の家には警察官や新聞記者が出入りしているという。それでいよいよ決行に踏みきった。恭太が帰宅する道順も聞き出し、富士見池の林の中で待ち伏せして、人目につかぬ場所へ連れこむまでは首尾よく運んだが、警官に只ならぬ空気を感知されて、惜しいところで未遂に終わったという顚末であった。

この話を聞いた時、安宅は一足とびに絶望の淵に突き落とされたような思いがした。

畑山殺害も、すんだあとでは暗澹たる悔恨と恐怖の連続だったが、ともかく犯行後はジッと息をひそめ、ひたすら警察の目を避けて、時間の推移を待つこと、これが安宅の防犯本能から生まれた信条だった。

ところが、浩司の反応は逆に出ていた。彼は追われる者の恐怖のあまり、犯罪に犯罪を重ねて窮地を脱しようとしている。いや、そうやって逃げのびられると、狂った信念に押し流されている。これこそ、犯罪者を自ら破滅に導く最も危険な陥穽ではあるまいか。

いずれにせよ、恭太の事件は命取りにならずにすんだとしても、捜査本部では現場に落ちていた「円形脱毛症の頭髪」を重要な手懸かりと認めていると報道されているから、その線から浩司に追及がのびる危険性も出てきた。

もう中野本町のアパートへは寄りつかぬ方がいいかもしれない。といって、急に安宅の家に転がりこんだのでは、人目につく。——結局、浩司はしばらく簡易旅館を泊まり歩くことにして、安宅は再び彼に金を与えた。

それからまた四日して、十月十四日の午後七時ごろ、安宅の家にぬっと入ってきた浩司は、それまでのいつよりも殺気立った気配を身につけていた。

彼はその日の日本新報の夕刊を尻ポケットから引き出して、一つの記事を示した。安宅の家では、日本新報は購読していなかった。

記事によれば、十三日昼ごろ、西荻窪署に匿名の投書が届き、事件の朝現場付近で犯人らしい男を目撃したと伝えてきたという。またその投書によって、九日に剣道帰りの小学生が富士見池で襲われた事件も、金融業者殺しと関連がある疑いが出ており、捜査本部が女性と思われる投書の主を捜す意向が匂わせてあった。

「この投書をした女は、兄さんが恭太と同じ時に見かけたという女で、たぶんその前に俺が上の野原の道ですれ

ちがった女といっしょだ。時間的にも合うからな。——俺はあの女の身許を知ってるんだ……」

浩司は安宅と文子と三人で、ありあわせの夕食を摂る間も目を凝らすようにして考えこんでいたが、九時をすぎ、文子が寝んでしまうと、ふいに何も説明しないまま電話機を取りあげた。

傍らで聞いていると、浩司は西荻窪署の者だと偽り、相手はその問題の女性らしい。問答のあげく、川越街道の先まで先方が出てくることで、話がついた様子である。安宅の問いに促されて、彼はようやく説明した。

自分は問題の女の苗字と住所を知っている。今年の夏、石神井町のマンション工事に通ったさい、筋向かいの家に出入りするのを見かけ、自分の好みのタイプだったので印象に残っていた。

どう考えてもあの家の主婦であるはずの彼女が、なぜあんな早朝、一人で善福寺の寂しい道を、しかもどこか人目を憚る様子で歩いていたのか。その後、何か警察に届け出た様子もないと思っていたら、こんな匿名の投書を送っている。

察するに、彼女も、何か世間に知られては困る事情を抱えていたのではないか。秘密は守りたい反面、目撃した事実を伏せておくに忍びず、こんな形の届け出をしたのではあるまいか。

しかし、この投書を手懸かりにして、警察はやがて彼女の身許を突きとめるにちがいない。善福寺近辺の聞き込みも十分行なわれているはずだし、この投書によって彼女が有力な目撃者であることがはっきりしただけに、探索にも一段と力が入ると予想される。

そしていったん彼女が見つけ出され、くわしい聴取を受ければ、彼女は安宅の人相などはもとより、その前に浩司とすれちがったことにも思い当たるにちがいない。もちろん彼女の方でも浩司の名前や身許を知っているとは考えられないが、すでに浩司はアパートを張り込みされている立場だから、彼女のことばは決定的な証拠となってしまうだろう。

直接わが身に及ぶ危険だけに、浩司は恭太の場合以上に、一種の恐慌状態に陥りかけていた。

今彼女に電話をかけてみた反応では、彼女があの朝の出来事を家人にもひた隠しにしている気配がはっきりとうかがわれた。

そこで先方の弱みを利用して、奈津実などと何度か行って勝手を知っている朝霞のモーテル・サンガーデンの

前まで彼女を呼び出した。これから自分も出向き、強引に彼女をモーテル内に連れこんで、肉体関係を結ぶ。それによって、彼女に絶対の沈黙を誓わせるためだ。

もし彼女が強硬に抵抗し、いっさいが明るみに出るのを覚悟で人を呼ぶなどしたら？——安宅が反問すると、その時は、人に気取られる前に彼女を殺して逃走する。最悪の場合にはそれもやむを得ないと、浩司は憑かれたように目を光らせて答えた。

安宅のセドリックを借りてすぐにも出かけようとする浩司に、安宅は、「元気づけに一杯のんでいけ」と水割りをつくってやり、素早く睡眠薬を混入した。睡眠薬は妻の入院先からもらってきて、安宅自身が服用していたものである。

浩司の青黒く憔悴した寝顔を見守りながら、安宅は思いあぐねた。

たとえ今夜はこんな形で思い留まらせたとしても、浩司は早晩、その桂木という女に接近するだろう。証人の口を封じる保身の目的とほとんど表裏一体に、浩司の内部には、好みのタイプだというその女に対して、残酷でしかもどこか自棄的な欲望が燃えさかっているのが、ありありと見てとれるからである。

そんな行動によって、みすみす浩司は自滅の道を辿るにちがいない。いや、やがては必然的に、安宅自身をも破滅させるのだ。

殺意が固まったのは、時間にすれば驚くほど短い間のことだった。最初の犯行で、浩司を共犯に巻きこめば、それ以後は自分に背いて暴走しないだろうという、思えば理不尽な安心感が、見事に裏切られた怒りと焦燥も、決断に拍車をかけたのだ。

安宅は自宅車庫内のセドリックの助手席へ浩司をひきずりこんだ。シャッターを閉めたうえでエンジンをかけ、エギゾーストパイプから吐き出される排気ガスを、ゴムホースで車内に送りこんだ。

十分もすると、浩司の顔はまったく血の気を失い、仮死状態に陥っていた。

そこでいったんエンジンを切り、車内の空気を交換した。次には、浩司のジャンパーを脱がせ、妻の多恵子が元気なころ使っていた長髪の鬘を頭にかぶせ、やはり多恵子のピンクのスカーフを、スポーツシャツの上から巻きつけた。

十時ごろ、安宅は、自分が浩司の焦茶のジャンパーを羽織り、彼を乗せたセドリックを運転して、東長崎の家

を出た。出発の直前に、同じ車庫に入れてあった五〇CCの古いミニオートバイが目につき、急に思いついて、それをトランクにつんだ。

サンガーデンへ浩司を運びこんだのには、彼が欺して呼び出した桂木なる女性に罪を着せようという、確たる目論見があったわけではない。ただ、その直前に浩司からサンガーデンのシステムを説明されたのと、浩司が利用したことのあるモーテルなら、それだけ「痴情犯」の線が濃くなるだろうと計算したからである。

サンガーデンの手前で、いったん車を脇道へ入れ、トランクから単車を出して、空き地の暗がりへ隠した。

十時半にフロントの前を通過し、十四号室へ入った。

二階のルームのベッドに浩司を寝かせ、ジャンパーを脱いで椅子にかけ、グラス二個出してビールを飲んだ形跡をつくるなどした。車庫内のセドリックのエンジンをかけ、ルームのドアを全開すると、二階の窓からドライブウェイへとびおりた。

現場へ自分のセドリックを残しておくことには抵抗があったが、いずれにせよ、浩司の死体が発見され、身許が割れれば、戸籍上の繋がりはないとはいえ、ただ一人の兄である安宅の存在を警察が見つけ出さぬわけはない。万一それが手間取ったとしても、商安土地建物の社員たちは多少浩司を知っているから、彼の死体が発見されても安宅が素知らぬふりをしているというわけにはいかないのだ。

つまり、いずれ自分が捜査の目に晒されずにはすまないのなら、いっそ浩司に車を貸したことにして、最初から堂々と姿を見せておいた方が、かえって心証は有利かもしれない……。

帰りは単車でとばし、十一時十五分には東長崎駅前の井上産婦人科へ顔を出すことができた。浩司の死亡推定時刻が割り出された場合、これは無論完璧なアリバイとはいえないが、少なくとも、当夜自分が朝霞のモーテルから東長崎まで、タクシーなどに乗った形跡がないことは、かなり有利なシロの印象を作るだろうと考えた。

予想どおり、翌十月十五日の昼前には、朝霞署員が会社へ現われた。セドリックの車検証から、安宅の氏名、住所が判明したのだ。その午後には、浩司の遺体が解剖に付された埼玉医科大学で、西荻窪署和栗係長の聴取を受けたが、浩司が金融業者殺しで手配されていたなど夢にも知らなかったと答え、なお疑いを脇へそらすために、「木原」なる架空の人物を持ち出し、でたらめな話を告げ

ておいた。

それでも西荻窪署では、安宅を畑山事件の容疑者の一人に数えていたようだが、決定的な動機が見いだせなかった。ただ安宅は内心で恭太の証言を恐れていた。刑事が彼の顔写真を撮り、恭太に見せるかもしれないと考え、犯行当日はかけてなかった軽い近眼鏡を、それもことさらシャープなデザインを選んでかけるなどして、ひそかに自衛した。畑山事件以後、心労と過労でわれながら人相が変わったと思うほど痩せていたから、その点も皮肉な幸いといえた。

二日ほどが、どうやら平穏にすぎた。

いや、世間的に見れば、平穏などという表現とはおよそ正反対であろう。入院中の妻の容態が、いよいよ末期的な症状を呈していたからである。昨年の夏、多恵子は子宮癌の手術を受け、その後しばらくは健康を取り戻したかに見えたが、今年の初夏、卵巣と胃に転移が認められた。すぐ再手術したが、手遅れと宣告された。

十月に入ってからは、多恵子は痛み止めの注射でほとんどの時間眠ってすごし、ただわずかばかり寿命を延長しているにすぎなかった。

それでも安宅は、できるだけ長い時間、枕頭に付き添っていた。ひたすら妻の生命を見守ることで犯罪の恐怖から逃れようとし、同時に、面会謝絶の病室では、なんとなく捜査の鋒先が及びがたい場所に身を置いているような安心感を得られたのだ。

しかし——。

自分にとって、犯罪者の傾斜はまだ続いていたのだ。犯罪者が新たな犯罪によって身を防ごうとする、その無残な陥穽に、自分も知らぬ間に落ちこんでしまっていたのだろうか……？

軽く唇をかんだ真剣な表情で、風景に気をとられている少年の横顔に、安宅は蹌踉とした視線を注いだ。こうして黙って電車に揺られている限りは素直でおとなしそうな、この九歳の少年を眺めていると、彼を人質にして警官の包囲をくぐり抜けようとする自分の姿が、再び網膜をかすめた。

自分にそれがやれるだろうか？

案外やるかもしれぬ。ある瞬間が来た時、突然——。

犯罪とは、そんなものかもしれない。

あの時も——伏兵ともいうべき林奈津実の恐喝を持てあましていた矢先、多恵子の死を迎え、やがてある瞬間に、まるで天啓のように、妻の病死を利用して奈津実を

葬むる方法を思いついたのだ。

その着想が浮かんだ一瞬の、なぜか足許が揺らぎ、胸が押し潰される鈍痛にも似た不可解なショックが、安宅の身内に甦った。明るいフォームにすべりこんだ電車が、オーバーランしたのか、急制動をかけて停まった。〝浜松町〟の標示が、窓の外にさがっていた。

「降りよう」

まるで父親が連れの息子に呼びかけるような、さりげない声が出たことに、安宅は自分でたじろいだ。

2

浜松町の山手線フォームは、新幹線とモノレールに挟まれている。

二人が電車から吐き出された時には、ちょうど、ずっと高いビルの途中から発車したばかりのモノレールの赤い車輛が、ゆっくりとフォームの上を横切っていくところで、一方超特急の白い蛇のような車体も、離れた高架線の上を走り抜けていた。

首を廻らせてそれらを見守っているうちに、恭太の眸がなんともいえず輝き出し、さっきまでその横顔をうすく被っていた不安の影がたちまち消え去るのを安宅は認めた。

「モノレール、はじめてかい？」

「見たのは今日が二度めです。乗ったことはないけど」

恭太は安宅がはじめて聞くほどの、子供らしいうきうきした声で答えた。自分もこんな年ごろには、汽船とか飛行機とか、何か珍しい乗物を見るだけで無性に興奮したものだった。時代が変わったというが、男の子に共通のそんな特徴だけは、昔も今もちがわないらしい。

安宅もビルの間に遠ざかっていく赤い函をしばらく見送っていたが、

「海の方へ行こうか。約束だからね」

恭太は元気よく頷いた。

駅の前は、ガードや高速道路の橋脚に囲まれた広い道路で、車が混みあい、騒音が激しかった。この辺りは竹芝桟橋のすぐ近くになるはずで、大型トラックが多く目につく。車の流れは絶え間がなく、そのわりに歩行者が少ない。都会の機械的なエネルギーみたいなものを感じさせる区域である。

痩せた街路樹の植わった歩道の端を、恭太と並んで歩き出しながら、安宅の目は漫然と、ナイフを売っている

店を捜していたが、ビルの間に時たま喫茶店があるくらいで、商店らしいものはほとんど見当たらなかった。

五分もしないうちに、船積荷物を運ぶ貨物線のレールにぶつかり、その辺りから、一帯は港湾特有の、なんとなく雑然とした雰囲気に包まれてきた。道路の先に、うす青い海面が顔を見せた。そこまでは、運輸会社や倉庫の、新旧大小さまざまな建物が、不規則に建ち並んでいる。

くすんだクリーム色の無愛想なビルの一つが、豊島区役所の建物に似ていると、安宅は感じた。いや、本当は別にそれほど似てもいなかったのかもしれないが、林奈津実の記憶が妙な連想を生んだのだ。

林奈津実は、白けたような眼差しで相手を見つめ、ハスキーな声で喋る女だった。それが、いかにも現代的でドライな印象をつくり、また奇妙な色気をかもし出してもいた。

奈津実が突然安宅の家に現われたのは、浩司の死の三日後、十月十七日の夜十時すぎだった。安宅はそれまで浩司から間接的に彼女の話を聞いていただけで、会うのははじめてだったが、三和土へすべりこんで後ろ手にドアを閉めた女の顔を見た時、なぜか奈津実にちがいないと、名乗られる前に確信していた。

奈津実の来意も、ほぼ予測されたものだった。畑山殺害の経緯は、浩司からくわしく打ちあけられていたと、彼女は断定的に言った。その前に畑山が担保の不正で安宅を責めていた事情も、直接畑山から聞いて知っていた。それらいっさいを秘密にしておく代わり、奈津実は一千万円要求した。期限も急いでいた。警察の追及がきびしいので、金を受け取りしだい、アメリカへ逃げるというのだ。

一方、妻の多恵子は、十月二十一日午後二時に他界した。その日の夕方、多恵子の死亡診断書と死亡届を住所地の豊島区役所に提出した直後から、奈津実殺害計画が、彼の内部で急速に固まった。

そのキッカケは、区役所の窓口で、多恵子の本籍は三鷹市にあり、そちらへ送る必要上、死亡届と死亡診断書を二組用意してほしいと言われたことである。安宅はその時まで、死亡診断書は必要に応じて医師に何枚でも書いてもらえるということをはっきりとは認識していなかったし、続いて職員に教えられるまで、現在では住所地や死亡地にかぎらず、どこの区役所でも埋火葬許可証を交付してくれることなど、まったく知らなかったのであ

る。

同じ日の夜九時に、安宅は豊島区役所に二組の死亡届と死亡診断書を提出して、多恵子の埋火葬許可証を受け取った。翌朝葬儀社を通じて堀の内葬祭場に依頼し、午後三時に火葬が執行された。

十月二十三日午前十時、安宅は阿佐谷の奈津実のアパートへ電話をかけた。ちょうど大きな商談がまとまり、一千万円の金ができたので、今日渡したい。だが、自宅では妻の葬式の翌日で人目もあるので、外で会いたいと申し入れた。結局、新宿駅西口構内のタクシー乗り場のそばを指定し、安宅が十二時半にセドリックで奈津実を拾うことになった。馬蹄形のドライブウェイに絶え間なく車が循環しているその場所なら、奈津実が安宅の車に乗った事実を証言する人間が後から出てくるとは考えられない。十二時半という時刻は、奈津実の希望だった。

奈津実を助手席に乗せると、川崎の取引先の銀行で小切手をつくらせるからと偽り、車を生田の方向へ走らせた。三時に石神井へ行く用があるといって奈津実は不服そうな顔をしたが、十分間にあうとなだめた。

一時ごろから小雨が降り出し、視界が暗くなったのは、いろいろな意味で好都合だった。

世田谷通りを西へ走り、登戸の手前で右側の雑木林へ車を入れて停めた。一瞬危険を直感して硬直した奈津実の顔へ、麻酔用のエーテルを染ませたハンカチを押しつけて失神させた。続いて、準備してきた医療器具を取り出した。ゴム紐で奈津実の左腕をくくり、静脈を浮き出させた。次に、注射器に空気を一杯含ませ、それをゆっくりと静脈に注入した。

それだけである。静脈に空気を注射すると、心臓が空気栓塞を起こして即死するという話は、数年前、何かの戦記で読んで、記憶していたのだ。奈津実の死顔は妻と同様に蒼白で、一見して異常な死因を想像させるような特殊な様相は、少しも現われていなかった。

助手席のシートを傾けて奈津実の身体をもたせかけ、世田谷通りへ戻った。

生田の、笹川雪江の家の裏手に車を駐めた。雪江とは、約一年前にその借家を世話してやって以来、時折り訪れて関係を持っていたから、彼女が九月の半ばから山口市の実家へ帰って留守のことも知っていた。

歩いて家主の手塚千吉を訪れ、十万円の謝礼を握らせて、一時雪江の留守宅に妻の遺体を安置することを承諾させ、鍵を借りた。それから手早く奈津実の死体を運び

こんで布団に横たえ、線香を供えるなどして形をととのえた。

その足で川崎市役所へ向かい、別に用意しておいた多恵子の死亡届と死亡診断書を提出して、埋火葬許可証を受け取った。豊島区役所に出したものとだぶって本籍地の三鷹市役所へ送付される事態を避けるために、これには多恵子の出生地である和歌山県新宮市の所番地を、本籍地として記入しておいた。火葬が終わってから、新宮市役所に電話を入れ、本籍地のまちがいを伝えて、到着した書類を破棄してもらうつもりだった。

葬儀社は、生田からはだいぶ離れた高津区内の、あまり繁盛していない感じの店を選んで依頼し、川崎市立葬祭場へ火葬の申しこみと、遺体の輸送をまかせた。

十月二十四日午後四時に、葬儀社は約束どおり霊柩車を雪江の家の門前にさし向けてくれた。手塚に告げたと同じ理由を話してあったから、疑う様子もなく、二人の職員が経帷子に包まれた奈津実の死体を棺に納め、川崎葬祭場へ運んだ。

もちろん、安宅は棺に付き添っていく。

火葬が終了したのは、六時半すぎであった。

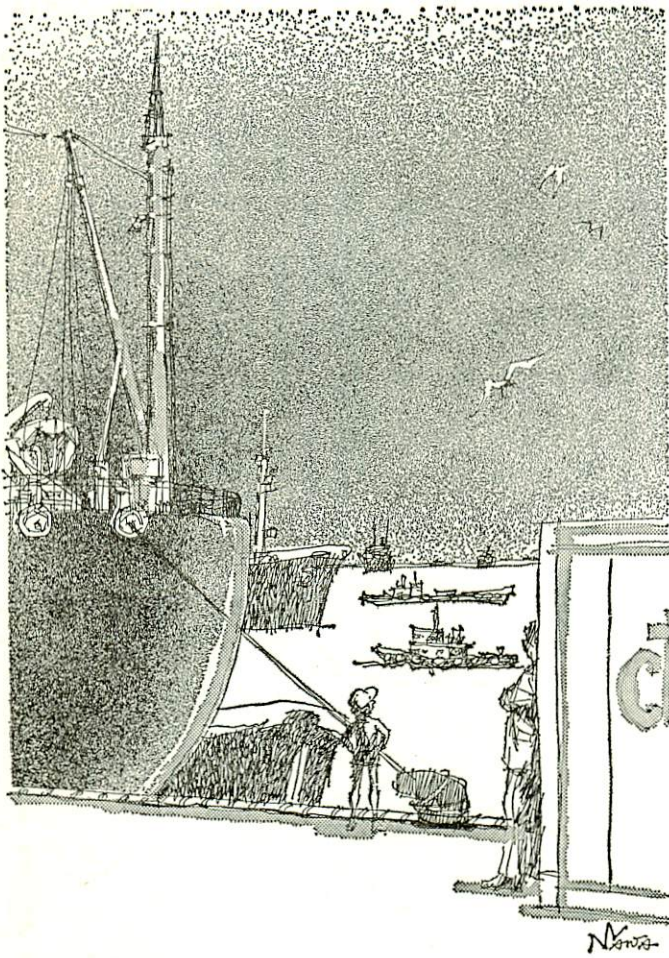
受け取った骨壺は、ひとまずセドリックのトランクに隠し、後で処分するつもりで、東長崎の自宅へ急いだ。妻の葬儀の翌日から二日間、安宅は大半の時間、家を留守にしていたことになる。社員や近所の人たちに不審を抱かれているかもわからない。

九時に家に帰り着いた彼は、その不安がもっと具体的な脅威となって姿を現わしているのを知った。

二時間ほど前、西荻窪署の和栗警部補が再度訪ねてきたことを、義姉の久枝に聞かされたのである。

和栗刑事の、骨張った浅黒い顔と精悍な眼差しが脳裡に浮かぶと、安宅は思わず立ちすくんだように足を停め、背後の道路を振り返った。港へ入る貨物線の向こう側は、相変わらず車のラッシュと、妙に緩慢に見えるちらほらとした人々の歩み。明るい陽光を浴びた真昼の東京の一画——。

だが、自分はすでに追跡されている。ジリジリと、四方から囲まれている——本能的な直感が、冷たい閃光のように胸をよぎった。東伏見のドライブインで会社へ電話を入れた、たぶんあの直後から、緊急配備が敷かれたのではあるまいか。刑事は社員から安宅の出先を聞き出しているだろう。まさしくその方角から、こんなふうに



ブラブラと歩きはじめた自分は、おそらくどこかで警官の目に触れ、それからは、確実に追いつめられているのにちがいないのだ。案外、こちらの意志とは関わりなく、連れの恭太が人質の役目を果たし、彼らはすぐに手が出せないでいるのかもわからない……。

安宅は、わざと苦笑してみたが、鳩尾に鈍痛を覚え、代わりにかすれた呻き声を洩らしていた。恭太がちょっと眩しげに見あげてきたので、まぎらすように右手を動かして前方の海を指さし、再び歩きだした。

岸壁にはかなりの人が動いていたが、暖かい陽射しがここにもさんさんと降り注いでいて、全体にのどかな雰囲気に包まれていた。足許のコンクリートが温もりを含んでいる。海面から流れてくる風にも棘がなかった。

左手の縞模様の日除けを張りめぐらした発着所から、ちょうど今、港内見物の海上バスが出航したところだった。船の甲板に立った人たちは、掌をかざしながら、勝鬨橋や、海面の先で白く光っているビルや煙突の群れを眺めている。

右手の先には、もっと大きな船が停泊していた。大島航路の客船のようだが、これはまだ出航まで間があるのか、乗務員や作業員がいそがない足取りで出入りしていた。その船の先で、岸壁は一度途切れ、水面で浚渫船が動いているのが見えた。

とうとう、行き止まりまで来てしまった。

安宅は、今ではもうどこか鈍い気持ちで思い、岸壁の縁に積んである、木材で梱包された貨物のそばへ歩み寄った。両肱をついて、寄りかかった。

恭太もそれにならい、小さな身体を前へのり出した。恭太が胸を弾ませているのは、無理もなかった。海を見るのなんか、何カ月ぶりだろう。今年の夏休みのはじめ、近所の子供会で江の島へ海水浴に連れていってもらったけれど……でも、この港の風景は、芋の子を洗うような海水浴場なんかとは段ちがいだ。水面がうす青い金属板みたいに反射している港内には、外国の貨物船や、タンカーや、大小さまざまの船が、泊まったり、低速で動いたりしている。煙突から煙を吐いているのもある。こんなに、数えきれないほどの船が目の前で眺められるなんて、本当に、夢の中みたいだ。一隻のタグボートが海面を割って進入してきて、沖に向かって敏捷に走り出すのを見つけた時、恭太は思わず「ああ」と小さな嘆声を洩らした。

安宅も、肚の底から深い息を吐き出した。ずいぶん長

い時間歩き続けてきたような気がする足を休め、こうして暖かい光に照らされ、やさしい風に吹かれていると、疲労がまるで快い睡魔になって全身にひろがってくるのを感じた。先刻、富士見池の辺りを歩きながら覚えた、何もかも忘れて果てしない眠りに身を任せたい誘惑が、再び襲ってきた。

「あんな船に乗って、どこかへ行きたいなあ」

「うん」と恭太は頷いた。

「本当に、どこかへ行こうか」

「うん……」

しかしこの時、恭太はすぐ背後で、妙に神経に刺さる靴音を聞いたように感じた。

思わず振り返ってみると、岸壁の後ろ側の、ベンチと植込みのあるちょっとした公園みたいな砂利敷の端に、黒い中型車が一台駐まっているのが見えた。ついさっき、自分たちがここへ入ってきた時には、いなかったと思うのに。

黒塗りの中型車は、恭太の内部に、まだ生々しいいくつかの記憶を甦らせた。和栗係長や小暮記者の顔、あるいはあの蕪蔵寺の坂道で出遇ったほっそりとした女性の姿が、次々に胸をよぎった。だが、恭太は、その黒い車から、自分が正確に何を連想したのかは、まだ気づいていなかった。

恭太が海の方へ向き直ってから、今度は安宅がゆっくりと首をめぐらした。小公園の外れの倉庫らしいビルの陰に、背広姿の男が立っていて、こちらを窺っている。公園を挟んだ反対側には黒の中型車が駐まり、中には三人の男が乗っていた。安宅はやはり自分が、すでにずっと、秘かな追跡者たちの足音を聞き取っていたような気がした。それは彼がもう、絶望の感覚に慣れた証拠かもしれなかった。

「帰りの道順、わかるかい？」と安宅は恭太に顔を向けて訊いた。

「今来た道を戻って、浜松町から、さっきとは反対の電車に乗るんだ。いや、どっち向きに乗っても、高田馬場に戻れるけどね」

恭太は丸い目を見張っていた。

「でも、電車賃は持ってないだろう？」

やがて恭太は、躊躇いがちに頷いた。

安宅は上衣のポケットから百円玉を三個取り出し、もう一方の手で恭太の手をとって、少し汗ばんだ掌の中に握らせた。一人で電車のドアに凭れて帰っていく恭太

の姿が、安宅の瞼を流れた。自分はついにこの少年に、指一本触れはしなかった。今はそれだけが、わずかに心を支え、足を前へ押し出す力になっていた。

「さよなら」

安宅は低い声で囁くと、緩い動作で身体の向きを変えた。足を踏みしめながら、刑事たちの方へ歩きだした。

恭太は急に一人にされてドギマギしたが、なんとなく「さよなら」と言い返すことができた。

少し猫背で肩幅の広い後ろ姿が、あまり似ていないはずなのに、彼に父親の姿を思い出させた。

たぶんお父さんにも、何かどうしようもないことがあったのかもしれないと、恭太はぼんやりと想像していた。

同じころ、穏やかな陽光のさしこむ病室のベッドで、桂木麻子は静かに、重い瞼を開いた。

白っぽい空間の中に、やがて各務徹夫のかすかに眉をひそめた懐かしい顔が浮かびあがり、真っ直ぐにのぞきこんでくる深い眸を、いつか麻子もしっかりと見返していた。

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編推理小説　目　撃　ある愛のはじまり

昭和50年4月30日　初版発行
昭和59年10月20日　35刷発行
定価680円

著者　夏樹静子（なつきしずこ）
名古屋市名東区高社1-95
発行者　大坪昌夫
印刷者　萩原崇男
東京都文京区後楽2—21—12
萩原印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替東京115347
株式会社光文社
電話　東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（明泉堂製本）
表紙の模様・意匠登録　116613
© Sizuko Natuki 1975

ISBN4-334-02269-3
Printed in Japan



KAPPA NOVELS

「カッパ・ノベルス」誕生のことば

カッパ・ブックス Kappa Books の姉妹シリーズが生まれた。カッパ・ブックスは書下ろしのノン・フィクション（非小説）を主体としたが、カッパ・ノベルス Kappa Novels は、その名のごとく長編小説を主体として出版される。

もともとノベルとは、ニューとか、ニューズと語源を同じくしている。新しいもの、新奇なもの、はやりもの、つまりは、新しい事実の物語というところから出ている。今日われわれが生活している時代の「詩と真実」を描き出す——そういう長編小説を編集していきたい。これがカッパ・ノベルスの念願である。

したがって、小説のジャンルは、一方に片寄らず、日本的風土の上に生まれた、いろいろの傾向、さまざまな種類を包蔵したものでありたい。かくて、カッパ・ノベルスは、文学を一部の愛好家だけのものから開放して、より広く、より多くの同時代人に愛され、親しまれるものとなるように努力したい。読み終えて、人それぞれに「ああ、おもしろかった」と感じられれば、私どもの喜び、これにすぎるものはない。

昭和三十四年十二月二十五日

光文社

〈カッパ・ノベルス〉出版目録

注・この目録は、各著者別にまとめました。なお、順序は、発行順です。
・＊印は昭和59年10月現在品切れ中です。

長編推理小説
ゼロの焦点
松本清張

長編推理小説
眼の壁
松本清張

長編小説
波の塔
松本清張

長編推理小説
点と線
松本清張

長編推理小説
蒼い描点
松本清張

推理小説(全一冊決定版)
黒い画集
松本清張

長編推理小説
影の地帯
松本清張

長編推理小説
砂の器
松本清張

長編推理小説
高校殺人事件
松本清張

長編推理小説
考える葉
松本清張

推理小説
危険な斜面
松本清張

長編小説
風の視線
松本清張

長編推理小説
黄色い風土
松本清張

長編推理小説
黒い樹海
松本清張

長編推理小説
時間の習俗
松本清張

長編小説
水の炎
松本清張

カッパ版 全11巻
松本清張短編全集
松本清張

長編推理小説
花実のない森
松本清張

長編推理小説
山峡の章
松本清張

長編小説
連環
松本清張

長編推理小説
蒼ざめた礼服
松本清張

連作推理小説
黒の様式
松本清張

長編推理小説
二重葉脈
松本清張

長編推理小説
D の複合
松本清張

長編推理小説
内海の輪
松本清張

長編推理小説
分離の時間
松本清張

長編推理小説(全一冊決定版)
わるいやつら
松本清張

長編推理小説
鷗外の婢
松本清張

長編推理小説(全一冊決定版)
けものみち
松本清張

長編推理小説
球形の荒野
松本清張

長編推理小説
梅雨と西洋風呂
松本清張

長編推理小説
聞かなかった場所
松本清張

長編推理小説
生けるパスカル
松本清張

長編推理小説
遠い接近
松本清張

長編推理小説
不安な演奏
松本清張

長編小説
告訴せず
松本清張

推理小説
強き蟻
松本清張

推理小説
高台の家
松本清張

長編推理小説
黒の回廊
松本清張

長編小説
混声の森
松本清張

長編小説
火の路（上・下）
松本 清張

長編小説
雑草群落（上・下）
松本 清張

推理小説
馬を売る女
松本 清張

長編推理小説
黒い白の虹
高木 彬光

長編推理小説
刺青殺人事件
高木 彬光

長編推理小説
炎の女
高木 彬光

長編推理小説
大東京四谷怪談
高木 彬光

長編推理小説
不倫
笹沢 左保
岬

長編推理小説
誘拐（ゆうかい）
高木 彬光

長編推理小説
白昼の死角
高木 彬光

長編推理小説
轢き逃げ
佐野 洋

長編推理小説
盗まれた嘘
佐野 洋

長編推理小説
検事霧島三郎
高木 彬光

長編推理小説
捜査検事
高木 彬光

長編推理小説
最後の自白
高木 彬光

長編推理小説
乗取り
城山 三郎

長編推理小説
逃亡
笹沢 左保
岬

長編推理小説
追跡（ついせき）
高木 彬光

長編推理小説
密告者
高木 彬光

長編推理小説
破戒裁判
高木 彬光

長編推理小説
ゼロの蜜月
高木 彬光

長編推理小説
霧の罠
高木 彬光

長編推理小説
無情
笹沢 左保
岬

長編推理小説
肌色の仮面
高木 彬光

長編推理小説
都会の狼
高木 彬光

連作推理小説
波止場の捜査検事
高木 彬光

長編推理小説
灰の女
高木 彬光

長編推理小説
追われる刑事
高木 彬光

長編推理小説
黒い白の囮
高木 彬光

長編推理小説
一、二、三——死
高木 彬光

長編推理小説
幻の悪魔
高木 彬光

長編推理小説
能面殺人事件
高木 彬光

長編推理小説
求婚の密室
笹沢 左保

長編推理小説
眠れ、わが愛よ
笹沢 左保

長編推理小説
愛人関係
笹沢 左保

長編推理小説
轢き逃げ家族
笹沢 左保

長編推理小説
悪魔の湖畔
笹沢 左保

長編推理小説
悪魔の関係
笹沢 左保

長編推理小説
他殺岬
笹沢 左保

長編推理小説
裸の家族
笹沢 左保

長編推理小説
地下水脈
笹沢 左保

長編サスペンス小説
悪魔の部屋
笹沢 左保

長編推理小説
愛人
笹沢 左保
岬

長編サスペンス小説
悪魔の人質
笹沢 左保

長編サスペンス小説
悪魔の沈黙
笹沢 左保

長編サスペンス小説
悪魔の誘惑
笹沢 左保

長編推理小説
コンピュータの身代金
三好 徹

長編推理小説
モナ・リザの身代金
三好 徹

長編推理小説
黒の試走車
梶山 季之

長編小説
悪女の条件
梶山 季之

長編推理小説
非常階段
梶山 季之

長編小説
人妻だから
梶山 季之

長編推理小説
廃虚の唇
黒岩 重吾

長編小説
女の小箱
黒岩 重吾

長編小説
夜間飛行
黒岩 重吾

長編推理小説
女の氷河
黒岩 重吾

長編推理小説
闇の航跡
黒岩 重吾

長編推理小説
詐欺師の旅
黒岩 重吾

長編小説
夜の駐車場
黒岩 重吾

長編サスペンス小説
茜雲の渦
黒岩 重吾

長編サスペンス小説
贅沢な被葬者
黒岩 重吾

長編小説
夜なき亀裂
黒岩 重吾

SF長編小説
日本沈没（上・下）
小松 左京

長編サスペンス小説
武器商社
邦光 史郎

長編推理小説
日本海大海戦
邦光 史郎

長編推理小説
追いつめる
生島 治郎

長編連作アクション小説
破壊指令 No. 1
大藪 春彦

長編アクション小説
復讐の弾道
大藪 春彦

長編連作アクション小説
偽装諜報員
大藪 春彦

長編アクション小説
非情の標的
大藪 春彦

カー情報小説
全開で飛ばせ
大藪 春彦

長編アクション小説
俺に墓はいらない
大藪 春彦

長編アクション小説
裁くのは俺だ
大藪 春彦

長編アクション小説
日銀ダイヤ作戦
大藪 春彦

連作アクション小説
曠野に死す
大藪 春彦

長編アクション小説
暴力列島
大藪 春彦

長編アクション小説
狼は嘘を駆ける
大藪 春彦

長編アクション小説
マンハッタン核作戦
大藪 春彦

長編アクション小説
処刑軍団
大藪 春彦

長編アクション小説
処刑戦士
大藪 春彦

連作アクション小説
傭われ探偵
大藪 春彦

長編推理小説
科学捜査官
島田 一男

長編推理小説
迷宮捜査官
島田 一男

連作推理小説
継続捜査官
島田 一男

長編推理小説
国際捜査官
島田 一男

連作推理小説
現場捜査官
島田 一男

長編推理小説
女捜査官
島田 一男

長編推理小説
検視捜査官
島田 一男

長編推理小説
沈黙の函
鮎川 哲也

長編推理小説
新幹線殺人事件
森村 誠一

長編推理小説
東京空港殺人事件
森村誠一

長編推理小説
超高層ホテル殺人事件
森村誠一

長編推理小説
日本アルプス殺人事件
森村誠一

連作推理小説
精神分析殺人事件
森村誠一

長編推理小説
人間の証明
森村誠一

長編推理小説
青春の証明
森村誠一

長編推理小説
野性の証明
森村誠一

長編推理小説
火の十字架
森村誠一

長編サスペンス小説
大都会
清水一行

長編推理小説
動脈列島
清水一行

長編企業クライム・ノベル
冷血集団
清水一行

長編推理小説
指名手配
森村誠一

長編推理小説
黒魔術の女
森村誠一

長編推理小説
悪夢の設計者（デザイナー）
森村誠一

長編推理小説
真昼の誘拐（ゆうかい）
森村誠一

長編推理小説
致死海流
森村誠一

長編推理小説
悪しき星座（あ）
森村誠一

長編推理小説
異型の白昼
森村誠一

長編推理小説
致死連盟
森村誠一

長編推理小説
花の骸（むくろ）
森村誠一

長編推理小説
日蝕の断層
森村誠一

長編推理小説
白の十字架
清水一行

長編推理小説
動機（どうき）
清水一行

長編痛快ビジネス小説
大（おおもの）物（第一部）
清水一行

長編推理小説
黒い墜落機（ファントム）
森村誠一

長編推理小説
凶通項
森村誠一

長編推理小説
同族企業
清水一行

長編推理小説
謎の幽霊探偵
斎藤栄

長編推理小説
謎の人命（ホット）・電話（ライン）
斎藤栄

長編推理小説
方丈記殺人事件
斎藤栄

長編推理小説
死定席
森村誠一

長編企業小説
副社長
清水一行

長編推理小説
女教師（おんな）
清水一行

長編推理小説
伊豆七島殺人事件
西村京太郎

長編推理小説
消えたタンカー
西村京太郎

長編企業推理
憤死（ふんし）（死ぬ外に抗議の術なし）
清水一行

長編社会小説
医大理事
清水一行

長編推理小説
女患者
清水一行

長編推理小説
処刑教師
清水一行

長編推理小説
夜間飛行殺人事件
西村京太郎

長編推理小説
寝台特急殺人事件
西村京太郎

長編推理小説
発信人は死者
西村京太郎

長編推理小説
消えた乗組員（クルー）
西村京太郎

長編推理小説
終着駅（ターミナル）殺人事件
西村京太郎

長編推理小説（ミッドナイト・トレイン）
夜行列車殺人事件
西村京太郎

長編推理小説（ほっき）
北帰行殺人事件
西村京太郎

トラベル・ミステリー傑作集（ホテル・トレイン）
蜜月列車殺人事件
西村京太郎

長編推理小説（ステーション・トレイン）
日本一周「旅号」殺人事件
西村京太郎

長編推理小説（スーパー・エクスプレス）
東北新幹線殺人事件
西村京太郎

長編推理小説（ブルー・トレイン）
下り特急「富士」殺人事件
西村京太郎

トラベル・ミステリー傑作集（サスペンス・トレイン）
雷鳥九号殺人事件
西村京太郎

長編アクション小説（ダカ）
やさぐれ刑事
藤本義一

長編推理小説
はぐれ刑事
藤本義一

長編推理小説
蒸発ある愛の終わり
夏樹静子

長編推理小説
喪失ある殺意のゆくえ
夏樹静子

長編推理小説
目撃ある愛のはじまり
夏樹静子

長編推理小説
霧（むひょう）氷
夏樹静子

長編推理小説
光る崖（がけ）
夏樹静子

交通推理小説
77便に何が起きたか
夏樹静子

長編推理小説
遠い約束
夏樹静子

交通推理小説
密室航路
夏樹静子

長編推理小説
Wの悲劇
夏樹静子

長編推理小説
妻に捧げる犯罪
土屋隆夫

長編推理小説
盲目の鴉（からす）
土屋隆夫

長編推理小説
軽井沢夫人
嵯峨島昭

連作推理小説
デリシャス殺人事件
嵯峨島昭

長編推理小説
21人の視点
石沢英太郎

長編推理小説
退職刑事官
石沢英太郎

長編推理小説
九州殺人行
石沢英太郎

長編推理小説
複合誘拐（ゆうかい）
大谷羊太郎

長編推理小説
女相続人
草野唯雄

長編推理小説
もう一人の乗客
草野唯雄

長編推理小説
解明旅行
草野唯雄

長編推理小説
見知らぬ顔の女
草野唯雄

長編推理小説
火刑の女
草野唯雄

長編推理小説（エレガンス・トレイン）
山口線〝貴婦人号〟
草野唯雄

長編推理小説（フルムーン）
満月殺人旅行
草野唯雄

長編推理小説
街は狙われた
草野唯雄

長編推理小説
六人目の女
川上宗薫

長編推理小説
狙われた女
川上宗薫

長編推理小説（ベッド・ディテクティブ）
寝室探偵
川上宗薫

長編官能ミステリー
木曜日の女
川上宗薫

長編推理小説
花の棺（ひつぎ）
山村美紗

長編推理小説
百人一首殺人事件
山村美紗

長編推理小説
エジプト女王の棺
山村美紗

長編推理小説
燃えた花嫁
山村美紗

長編推理小説
消えた相続人
山村美紗

名探偵キャサリン傑作集
京友禅の秘密
山村美紗

長編推理小説（ピラニア）
謎の巨人機
福本和也

長編推理小説
成田空港殺人事件
福本 和也

長編推理小説
暴力株式会社
福本 和也

長編推理小説
浮世絵殺人事件
福本 和也

長編ハード・ロマン
狼よ、逆潮を翔べ
福本 和也

長編推理小説
謎の水上機
福本 和也

長編推理小説
裁判官の陰謀
和久 峻三

長編近未来サスペンス小説
宇宙からの衝撃
田中 光二

長編推理小説
蒋介石の黄金
伴野 朗

長編アドベンチャー推理小説
必殺者
伴野 朗

長編推理小説
ひまつぶしの殺人
赤川 次郎

長編推理小説
顔のない十字架
赤川 次郎

長編ユーモア・サスペンス小説
おやすみ、テディ・ベア
赤川 次郎

長編推理小説
三毛猫ホームズの推理
赤川 次郎

長編推理小説
三毛猫ホームズの追跡
赤川 次郎

長編推理小説
三毛猫ホームズの怪談
赤川 次郎

長編推理小説
三毛猫ホームズの狂死曲
赤川 次郎

長編推理小説
三毛猫ホームズの転落
赤川 次郎

長編推理小説
三毛猫ホームズの恐怖館
赤川 次郎

ユーモア・ミステリー傑作集
三毛猫ホームズの運動会
赤川 次郎

長編推理小説
三毛猫ホームズの騎士道
赤川 次郎

長編推理小説
病院坂の首縊りの家
横溝 正史

長編アクション小説
梓弓執りて
西村 寿行

長編サスペンス小説
滅びの笛
西村 寿行

長編サスペンス小説
遠い渚
西村 寿行

長編サスペンス小説
風は悽愴
西村 寿行

長編バイオレンス・ロマン
昏き日輪
西村 寿行

長編ハード・ロマン
汝は日輪に背く
西村 寿行

長編ハード・アクション小説
無頼船
西村 寿行

ハード・アクション傑作集
二万時間の男
西村 寿行

長編ハード・バイオレンス
妖獣の村
西村 寿行

長編警鐘小説
滅びの宴
西村 寿行

ハード・サスペンス傑作集
闇の法廷
西村 寿行

小説 長島茂雄
五味 康祐

長編推理小説
化石の弔鐘
小林 久三

長編推理小説
スーパーゴリラ
小林 久三

長編推理小説
濡れて探る
宇能鴻一郎

長編医学サスペンス小説
癌病棟のメス
門田 泰明

長編サスペンス小説
大病院が震える日
門田 泰明

長編スペクタクル小説
日本本土決戦
檜山 良昭

長編スペクタクル小説
アメリカ本土決戦
檜山 良昭

長編スペクタクル小説
ソ連本土決戦
檜山 良昭

長編近未来スペクタクル小説
日本潰滅
檜山 良昭

長編推理小説
夕映え天使
高橋 玄洋

長編企業ドキュメント・ノベル
対決
高杉 良

長編ドキュメンタリー・ノベル
拉致
中薗 英助

長編小説
親と子の氷河
三好京三

長編推理小説
熱い眼
大西赤人

長編推理小説
遠野殺人事件
内田康夫

長編ハード・アクション小説
血の狩人
勝目梓

長編ユーモア推理小説
迷犬ルパンの名推理
辻真先

長編推理小説
過去からの狙撃者
鷲尾三郎

長編推理小説
北アルプス殺人組曲
長井彬

◎フォーリンシリーズ

長編推理小説
わが子が消えた
C・ボール
夏樹静子訳

長編推理小説
息子殺し
R・ウインザー
新庄哲夫訳

長編推理小説
寝室に鍵を
R・ウインザー
加島祥造訳

長編ハード・サスペンス小説
核ジャック部隊
J・ロウ
新庄哲夫訳

長編ハード・アクション小説
暗号名は「北海の殺し屋」
N・スタール
高木三郎訳

長編ハード・アクション小説
女王陛下が捕われた日
W・ネルソン
新庄哲夫訳

長編本格トラベル・ミステリー
鉄路のオベリスト
C・D・キング
鮎川哲也訳

長編本格ミステリー
殺人者はまだ来ない
I・B・マイヤーズ
山村美紗訳

◎アンソロジーシリーズ

鉄道ミステリー傑作選
下り〝はつかり〟
鮎川哲也編

鉄道ミステリー傑作選
急行出雲
鮎川哲也編

鉄道ミステリー傑作選
見えない機関車
鮎川哲也編

日本推理作家協会編
日本傑作推理12選
第1・2・3集
エラリー・クイーン編

日本文芸推理12選&ONE
エラリー・クイーン編

世界傑作推理12選&ONE
エラリー・クイーン編
新庄哲夫訳

新世界傑作推理12選
エラリー・クイーン編

最新ベストミステリー①
犯罪展示会
日本推理作家協会編

最新ベストミステリー②
殺人博物館
日本推理作家協会編

最新ベストミステリー③
事件標本室
日本推理作家協会編

現代ベストミステリー①
犯罪計画書
日本推理作家協会編

現代ベストミステリー②
事件記録帳
日本推理作家協会編

現代ベストミステリー③
殺人貸借表
日本推理作家協会編

日本掌編小説秀作選
〔I〕雪・月編 〔II〕花・鳥篇
大西巨人編

ニッポンの〝黒い哄笑〟
ブラック・ユーモア傑作選
阿刀田高編

医学推理小説傑作選
ミステリー総合病院
佐野洋編

◎ノンフィクションシリーズ

トキワ荘青春日記
藤子不二雄

落ちこぼれ軍団の奇跡
馬場信浩

誰がこの子らを救うのか
神一行

悪魔の飽食
森村誠一*

狙われた教科書
鎌田慧

従軍慰安婦・慶子
千田夏光

野獣の刺青
福田洋

新編 三光
中国帰還者連絡会編*

人間の旗
岩川隆

奇跡の対話教育
磯村毅

日本が叩き潰される日
落合信彦

ホームランだけが人生だ
田淵幸一

日本の地下人脈
岩川隆

⊙最新刊シリーズ（昭和59年9月現在）

長編推理小説
超特急「つばめ号」殺人事件
西村京太郎

長編ユーモア推理小説
迷犬パンの大活劇
辻　真先

長編企業小説
闘いへの執着
清水　一行

長編推理小説
首
菊村　到

長編推理小説
同行者
笹沢　左保

長編推理小説
広域捜査官
島田　一男

長編推理小説
倉敷殺人事件
内田　康夫

現代ミステリー傑作選(下)
白骨ハンティング
日本推理作家協会編

トラベル・ミステリー傑作集
高原鉄道殺人事件
西村京太郎

長編企業ピカレスク
乗取り屋
広瀬　仁紀

現代ミステリー傑作選(上)
生首コンテスト
日本推理作家協会編

長編推理小説
寝台特急「はやぶさ」1/60秒の壁
島田　荘司

長編サスペンス・アクション小説
戦士の挽歌（上・下）
大藪　春彦

長編推理小説
悪名集団
清水　一行

現代ミステリー傑作選(中)
鮮血ラブコール
日本推理作家協会編

長編ハード・ロマン
ふたたび渚に
西村　寿行

長編推理小説
蘭菊の狐
西村　寿行

長編復讐小説
視聴率ハンター
大下　英治

長編推理小説
花嫁は二度眠る
泡坂　妻夫

長編ユーモア・ミステリー傑作選
三毛猫ホームズのびっくり箱
赤川　次郎

長編推理小説
出雲伝説7/8の殺人
島田　荘司

長編推理小説
北能登殺人事件
西村京太郎

長編推理小説
黒百合の棺
山村　美紗

長編推理小説
美食倶楽部
鮫島　昭

長編ハード・アクション小説
犬たちと殺人と
佐野　洋

長編推理小説
地獄の狩人
勝目　梓

長編推理小説
偽証法廷
和久　峻三

長編推理小説
十五階の地獄
笹沢　左保

長編恐怖小説
オロロンの呪縛
西村　寿行

長編推理小説
夏が殺した
川上　宗薫

長編スーパー痛快小説
風紋の街
西村　寿行

長編サスペンス小説
背信の詩集
笹沢　左保

ユーモア・ミステリー
ズベ刑事
胡桃沢耕史

長編推理小説
血文字「アカシア」の惨劇
谷　恒生

ギャンブル小説傑作集[1]
黄金の指
石川喬司　結城信孝編

長編ユーモア推理小説
迷犬パンの檜舞台
辻　真先

長編アクション小説
大阪極道戦争
福本　和也

長編推理小説
奥穂高殺人事件
長井　彬